北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

（本文編）

62年 3 月

中国電力株式会社島根支店
島 根 県 教 育 委 員 会

序

本書は，島根県教育委員会が中国電力株式会社島根支店から依頼を受けて実施した，北松江幹線松江連絡線新設工事建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査報告書です。この発掘調査は，主として山陽方面に電気を送るための送電線建設工事に起因するもので，松江市，東出雲町，八雲村，伯太町をまたぐ地域の鉄塔31基分について昭和58年度から行ないました。

調査の結果，各種の遺物，遺構が検出され大きな成果を上げることができました。なかでも，八雲村の小深原遺跡，西ノ谷遺跡では黒曜石片が出土した縄文時代の遺構，松江市意宇平野の上小紋遺跡，向小紋遺跡では弥生時代後期の水田跡，天満谷遺跡では平安時代から鎌倉時代にかけての建物址の検出などが注意を引きました。今後，この調査結果が，地域の歴史の解明と文化財の活用の一助となれば幸いです。

最後になりましたが，調査に対して多大な理解と協力をいただいた中国電力株式会社島根支店をはじめとする関係各位，および地元の方々に深く感謝し，お礼申し上げます。

昭和62年 3 月

島根県教育委員会

教育長　栗　栖　理　知

例　　言

1．本書は，中国電力株式会社島根支店の委託を受けて，島根県教育委員会が昭和58年・59年・60年度にわたって実施した北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡及び地番は下記のとおりである。

間内遺跡	松江市矢田町字大平376－2
大平遺跡	松江市矢田町字大平368--2・378－1
上小紋遺跡	松江市竹矢町39－1
向小紋遺跡	松江市竹矢町55--2・56－4
四配田遺跡	松江市竹矢町77－2・81－2・76－1　外
神田遺跡	松江市竹矢町652－1・652－3・650--2　外
大屋敷遺跡	松江市大草町437－4・438--1
才台垣遺跡	松江市大草町437－4・438－1
天満谷遺跡	松江市大草町天満谷263－1　外
湯谷遺跡	八束郡東出雲町春日字湯谷359－3・360－1
春日シヌン谷遺跡	八束郡東出雲町春日シヌン谷365　外
小深原遺跡	八束郡八雲村大字東岩坂3260--2　外
西ノ谷遺跡	八束郡八雲村大字東岩坂2429--2　外

なお各遺跡の呼称については小字名を付すことを原則としたが，間内遺跡については昭和55年松江市教育委員会編『松江市の埋蔵文化財』に小字名を付さないかたちで周知の遺跡として記されている。今回小字名を付すものに変更すると新に混乱が生じると予想されたので，市教育委員会の命名に従うことにした。

3．3ヶ年度にわたった調査の関係者は下記のとおりである。

昭和58年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員），池田満雄（同），町田　章（同），三浦　清（同），田中義昭（島根大学法文学部教授），西上一義（同理学部教授）秋村喜則（同講師），藤原宏志（宮崎大学農学部助教授）

事務局　福田治夫・美多定秀（文化課課長），長谷川行雄（文化課課長補佐），蓮岡法暲（同），石井　悠（埋蔵文化財第二係係長），岩崎況一朗（文化係係長）

宮沢明久（文化課主事），卜部吉博（同）

調査員　三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事），広江耕史（同文化財主事）

遺物整理　吉冨恭子，伊藤令子，菅井一弘，菅井招雄，長岡祥子，岩田　靖

昭和59年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員），池田満雄（同），町田　章（同），勝部正郊（同），田中義昭（島根大学法文学部教授），時枝克己（同理学部助教授），黒崎　直（文化庁記念物課文化財調査官），宮原晋一（日向市教育委員会）

事務局　美多定秀（文化課課長），長谷川行雄・長瀬忠治（文化課課長補佐），蓮岡法暲（同），岩崎況一朗（文化係係長），石井　悠（埋蔵文化財第二係係長）
宮沢明久（文化財保護課主事）

調査員　浅沼政志（文化課主事（兼）），三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事）
広江耕史（同文化財主事），片岡詩子（同嘱託）

遺物整理　吉冨恭子，横山知子，三島千富美，長岡祥子，松本美和子，浪花芳明

昭和60年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員），池田満雄（同），三浦　清（同），田中義昭（島根大学法文学部教授），林　正久（同教育学部助教授），伊藤晴明（同理学部教授），時枝克己（同理学部助教授），橋本久和（高槻市立埋蔵文化財調査研究センター），宮本長二郎（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室長）

事務局　美多定秀（文化課課長），長瀬忠治（文化課課長補佐），蓮岡法暲（同）
矢内高太郎（同文化係係長），石井　悠（埋蔵文化財第二係係長），川原和人（文化財保護主事），陶山　彰（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　板垣　旭（文化課主事（兼）），三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事）
広江耕史（同文化財主事），大谷祐二（同嘱託），片岡詩子（同）

遺物整理　吉冨恭子，横山知子，長岡祥子，浪花芳明，橋本修二，石川　良

昭和61年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員），池田満雄（同），町田　章（同），三浦　清（同），勝部正郊（同），田中義昭（島根大学法文学部教授）
宮本長二郎（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室長）

事務局　熊谷正弘（文化課課長），安達富治（文化課課長補佐），蓮岡法暲（同），矢内高太郎（同文化係係長），石井　悠（埋蔵文化財第二係係長），川原和人（文化

財保護主事），陶山　彰（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　板垣　旭（文化課主事（兼）），三宅博士（島根県教育文化財団学芸主事）

広江耕史（同文化財主事）

遺物整理　吉冨恭子，長岡祥子，岡村千恵美

なお，この4カ年をとおして次の方々から有益な指導，助言を受けた。

西谷　正，石野博信，大村俊夫，小原貴樹，杉谷愛像，工楽善通，榎本義譲，伊藤久嗣
中村　浩，小田富士雄，津金沢吉茂，前沢和之，松田　猛，中野　宥，亀山雅弘
長谷川秀厚，原　茂光，森本朝子，松本道博，森田　勉，亀井明徳，松田直則，森田尚宏
大村敬通，森内秀造，森田　稔，仲野泰裕，藤澤良祐，岡田博，堤　安信，賀川光男
正林　護，立平　進，村上泰樹，石倉一弘

4．発掘調査に際しては，

小川　宏，菅井勝美，菅井　登，菅井芳実，菅井淳一，石川春一，石川　修一，石川恒春
高倉　登，三島吉永，佐草正人，周藤佳美，石本真毅雄，引野繁雄，水野邦久，周藤隆義
石本　誠，川上昭男，川上佳雄，市西生産森林組合，石倉兵二，石原　誠，各氏など土地所有者をはじめ，小川維穂，小川一好，三島末吉，川津保男，小川善右エ門，三島　茂，小笹卓実氏など地元の方々から終始多大な協力を得た。

5．調査区内遺物出土地点等の表示は1m方眼を設定し，調査区西壁をNライン，南壁をEラインとし両者の交点である調査区南西隅を0とした。この0を起点としてNラインは北へ1m間隔で1．2．3……20と番号を付し，Eラインも東へ向って同様に1．2．3……20とし，両ラインから直行して出た遺物までの距離の交点を出土地点N－E－と表示することとした。

6．挿図中の地形測量図，遺構実測図の矢印は国土調査法による第Ⅲ座表系X軸の方向を指す。したがって，磁北より7°12′真北より0°32′東の方向を示している。

7．本書で使用した遺構記号は，SB……建物跡，SK……土壙，SD……溝，SA……柵，p……柱穴状落ち込みとして表示した。

8．本書に記した樹種鑑定は財団法人元興寺文化財研究所松田隆嗣氏に依頼して行ったものである。

9．天満谷・小深原・西ノ谷遺跡の焼土の考古地磁気測定結果について時枝克安・伊藤晴明先生から，また上小紋遺跡出土の建築材に関しては宮本長二郎先生から原稿をいただいた。

10．本書の執筆，編集は上記調査指導の方々の助言を得ながら三宅，広江が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 宮沢・卜部 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 三宅 …… 3

Ⅲ　調査位置と歴史的環境 …… 〃 …… 10

Ⅳ　問内遺跡・大平遺跡

1　遺跡の概要 …… 広江 …… 17

2　問内遺跡　検出した遺構 …… 〃 …… 22

3　出土遺物 …… 〃 …… 36

4　大平遺跡　検出した遺構 …… 〃 …… 45

5　出土遺物 …… 〃 …… 52

6　ま と め …… 〃 …… 53

Ⅴ　上小紋遺跡・向小紋遺跡

1　遺跡の概要 …… 三宅 …… 57

2　上小紋遺跡　検出した遺構 …… 広江・三宅 …… 58

3　出土遺物 …… 〃 …… 75

4　向小紋遺跡　検出した遺構 …… 〃 …… 104

5　出土遺物 …… 〃 …… 108

6　ま と め …… 〃 …… 111

Ⅵ　四配田遺跡

1　遺跡の概要 …… 広江 …… 119

2　四配田遺跡Ⅰ区　検出した遺構 …… 〃 …… 120

3　出土遺物 …… 〃 …… 123

4　四配田遺跡Ⅱ区　検出した遺構 …… 〃 …… 124

5　ま と め …… 〃 …… 124

Ⅶ　神田遺跡Ⅰ区・神田遺跡Ⅱ区

1　遺跡の概要 …… 三宅 …… 129

2　神田遺跡Ⅰ区　検出した遺構 …… 〃 …… 133

3　出土遺物 …… 〃 …… 134

4　神田遺跡Ⅱ区　検出した遺構 …… 〃 …… 143

5　SD01出土遺物 …… 三宅 …… 145
6　ま と め …… 〃 …… 160
Ⅷ　大屋敷遺跡・才台垣遺跡
1　遺跡の概要 …… 広江 …… 171
2　大屋敷遺跡　検出した遺構 …… 〃 …… 175
3　出土遺物 …… 〃 …… 179
4　才台垣遺跡　検出した遺構 …… 〃 …… 189
5　出土遺物 …… 〃 …… 189
6　ま と め …… 〃 …… 190
Ⅸ　進 入 道 路
1　遺跡の概要 …… 広江 …… 197
2　大屋敷遺跡 …… 〃 …… 198
3　神田遺跡試掘溝 …… 〃 …… 201
4　神田遺跡出土遺物 …… 〃 …… 201
5　ま と め …… 〃 …… 202
Ⅹ　天 満 谷 遺 跡
1　遺跡の概要 …… 〃 …… 207
2　検出した遺構と遺物 …… 〃 …… 208
3　遺構外出土遺物 …… 〃 …… 230
4　ま と め …… 〃 …… 257
Ⅺ　湯 谷 遺 跡
1　遺跡の概要 …… 広江 …… 283
2　検出した遺構 …… 〃 …… 285
3　出土遺物 …… 〃 …… 288
4　ま と め …… 〃 …… 289
Ⅻ　春日シヌン谷遺跡
1　遺跡の概要 …… 三宅 …… 293
2　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区　検出した遺構と遺物 …… 〃 …… 294
3　ま と め …… 三宅 …… 310
ⅩⅢ　小深原遺跡・西ノ谷遺跡
1　小深原遺跡　遺跡の概要 …… 三宅 …… 320

2　検出した遺構 …… 板垣 …… 322
3　出土遺物 …… 〃 …… 327
4　西ノ谷遺跡　遺跡の概要 …… 三宅 …… 332
5　検出した遺構 …… 〃 …… 334
6　出土遺物 …… 〃 …… 338
7　ま と め …… 〃 …… 338

特別寄稿

天満谷・小深原・西ノ谷遺跡の焼土の考古地磁気法による年代測定 …… 時枝・伊藤 …… 340
上小紋遺跡出土建築部材について …… 宮本 …… 343

挿　図　目　次

第 1 図　北松江幹線・連絡線ルート記入図 …… 1
第 2 図　意宇川下流平野内鉄塔建設予定地配置図 …… 3
第 3 図　調査位置と周辺の主要遺跡 …… 11
第 4 図　意宇平野の地形分類図 …… 13
第 5 図　意宇平野地割図 …… 14
第 6 図　間内遺跡・大平遺跡調査区配置図 …… 17
第 7 図　間内遺跡遺構配置図 …… 18
第 8 図　間内遺跡調査区土層図 …… 19～20
第 9 図　間内遺跡SK－01．02．03．04．05実測図 …… 21
第10図　間内遺跡SK－06．07．08．09．10実測図 …… 23
第11図　間内遺跡SK－11．12実測図 …… 24
第12図　間内遺跡SK－13．14実測図 …… 26
第13図　間内遺跡SK－15実測図 …… 27
第14図　間内遺跡SK－17．18．19実測図 …… 28
第15図　間内遺跡SK－20．21．39実測図 …… 29
第16図　間内遺跡SK－16．22．23．24．25．26．27実測図 …… 31
第17図　間内遺跡SK－28実測図 …… 32
第18図　間内遺跡SK－29．32実測図 …… 33
第19図　間内遺跡SK－30．31実測図 …… 34
第20図　間内遺跡SK－33．34実測図 …… 35
第21図　間内遺跡SK－35実測図 …… 36
第22図　間内遺跡SK－36．40実測図 …… 37
第23図　間内遺跡SK－37．38実測図 …… 38
第24図　間内遺跡SK－41．42．43実測図 …… 39
第25図　間内遺跡出土遺物実測図(1) …… 41
第26図　間内遺跡出土遺物実測図(2) …… 42
第27図　大平遺跡遺構配置図 …… 45
第28図　大平遺跡SK－01．02実測図 …… 46

第29図　大平遺跡調査区土層図 …… 47～48
第30図　大平遺跡SK－01遺物出土状態 …… 49
第31図　大平遺跡出土遺物実測図 …… 50
第32図　大平遺跡出土遺物実測図 …… 51
第33図　大平遺跡出土遺物実測図 …… 52
第34図　蟹穴遺跡出土遺物実測図 …… 52
第35図　上小紋・向小紋遺跡調査区配置図 …… 57
第36図　上小紋遺跡遺構配置図 …… 58
第37図　上小紋遺跡調査区土層図 …… 59～60
第38図　上小紋遺跡上層検出水田址実測図 …… 62
第39図　上小紋遺跡中層検出水田址実測図 …… 63
第40図　上小紋遺跡中層検出遺構実測図 …… 64
第41図　上小紋遺跡中層検出遺構（部分）実測図 …… 65
第42図　上小紋遺跡下層検出水田址実測図 …… 67
第43図　上小紋遺跡SK01実測図 …… 69
第44図　上小紋遺跡SK01しがらみ（西側）実測図 …… 70
第45図　上小紋遺跡SK01しがらみ（東側）実測図 …… 72
第46図　上小紋遺跡出土遺物実測図 …… 76
第47図　上小紋遺跡出土遺物実測図 …… 77
第48図　上小紋遺跡むしろ状遺物出土状態 …… 79
第49図　上小紋遺跡むしろ状遺物模式図 …… 79
第50図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 80
第51図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 81
第52図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 82
第53図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 84
第54図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 86
第55図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 87
第56図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 88
第57図　上小紋遺跡出土天秤棒使用例 …… 89
第58図　上小紋遺跡建築材58模式図 …… 90
第59図　上小紋遺跡建築材57模式図 …… 90

第60図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 91～92
第61図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 93
第62図　上小紋遺跡建築材59模式図 …… 94
第63図　上小紋遺跡建築材61模式図 …… 94
第64図　上小紋遺跡建築材62模式図 …… 94
第65図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 95
第66図　上小紋遺跡建築材64模式図 …… 96
第67図　上小紋遺跡建築材65模式図 …… 96
第68図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 97
第69図　上小紋遺跡建築材66模式図 …… 98
第70図　上小紋遺跡建築材67模式図 …… 98
第71図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 99
第72図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 101
第73図　向小紋遺跡調査区土層図 …… 105～106
第74図　向小紋遺跡遺構配置図 …… 107
第75図　向小紋遺跡SK－02実測図 …… 108
第76図　向小紋遺跡出土遺物実測図 …… 109
第77図　向小紋遺跡出土木器実測図 …… 110
第78図　向小紋遺跡出土木器実測図 …… 111
第79図　四配田遺跡調査区配置図 …… 119
第80図　四配田遺跡Ⅰ区SD－01．02実測図 …… 120
第81図　四配田遺跡調査区土層図 …… 121～122
第82図　四配田遺跡Ⅰ区SD－03実測図 …… 123
第83図　四配田遺跡Ⅰ区出土遺物実測図 …… 123
第84図　四配田遺跡Ⅱ区SD－01実測図 …… 124
第85図　四配田遺跡Ⅱ区SB－01実測図 …… 125
第86図　神田遺跡調査区配置図 …… 129
第87図　神田遺跡調査区遺構配置図 …… 130
第88図　神田遺跡Ⅰ区土層図 …… 131～132
第89図　神田遺跡Ⅰ区SK－01遺物出土状態 …… 133
第90図　神田遺跡Ⅰ区SK－01出土遺物実測図 …… 134

第29図　大平遺跡調査区土層図 …… 47～48
第30図　大平遺跡SK－01遺物出土状態 …… 49
第31図　大平遺跡出土遺物実測図 …… 50
第32図　大平遺跡出土遺物実測図 …… 51
第33図　大平遺跡出土遺物実測図 …… 52
第34図　蟹穴遺跡出土遺物実測図 …… 52
第35図　上小紋・向小紋遺跡調査区配置図 …… 57
第36図　上小紋遺跡遺構配置図 …… 58
第37図　上小紋遺跡調査区土層図 …… 59～60
第38図　上小紋遺跡上層検出水田址実測図 …… 62
第39図　上小紋遺跡中層検出水田址実測図 …… 63
第40図　上小紋遺跡中層検出遺構実測図 …… 64
第41図　上小紋遺跡中層検出遺構（部分）実測図 …… 65
第42図　上小紋遺跡下層検出水田址実測図 …… 67
第43図　上小紋遺跡SK01実測図 …… 69
第44図　上小紋遺跡SK01しがらみ（西側）実測図 …… 70
第45図　上小紋遺跡SK01しがらみ（東側）実測図 …… 72
第46図　上小紋遺跡出土遺物実測図 …… 76
第47図　上小紋遺跡出土遺物実測図 …… 77
第48図　上小紋遺跡むしろ状遺物出土状態 …… 79
第49図　上小紋遺跡むしろ状遺物模式図 …… 79
第50図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 80
第51図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 81
第52図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 82
第53図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 84
第54図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 86
第55図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 87
第56図　上小紋遺跡出土木器実測図 …… 88
第57図　上小紋遺跡出土天秤棒使用例 …… 89
第58図　上小紋遺跡建築材58模式図 …… 90
第59図　上小紋遺跡建築材57模式図 …… 90

第91図　神田遺跡Ⅰ区SK－01出土遺物実測図 …… 135
第92図　神田遺跡Ⅰ区SK－01出土遺物実測図 …… 136
第93図　神田遺跡Ⅰ区SK－01出土遺物実測図 …… 137
第94図　神田遺跡Ⅱ区調査区全体図 …… 138
第95図　神田遺Ⅱ区跡土層図 …… 139～140
第96図　神田遺跡Ⅱ区SD－01遺物出土状態 …… 141～142
第97図　神田遺跡Ⅱ区上層出土遺物実測図 …… 143
第98図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内杭列実測図 …… 144
第99図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 145
第100図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 146
第101図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 147
第102図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 148
第103図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 149
第104図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 150
第105図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 152
第106図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 153
第107図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 154
第108図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 156
第109図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 157
第110図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 159
第111図　神田遺跡Ⅱ区SD－01内出土遺物実測図 …… 161～162
第112図　大屋敷遺跡・才台垣遺跡調査区配置図 …… 171
第113図　大屋敷遺跡遺構全体図 …… 172
第114図　大屋敷遺跡調査区土層図 …… 173～174
第115図　大屋敷遺跡SB－01実測図 …… 176
第116図　大屋敷遺跡SB－02実測図 …… 177
第117図　大屋敷遺跡SA－01．02実測図 …… 177
第118図　大屋敷遺跡SK－01．02．03．04．05実測図 …… 178
第119図　大屋敷遺跡出土遺物実測図 …… 181
第120図　大屋敷遺跡出土遺物実測図 …… 182
第121図　大屋敷遺跡出土遺物実測図 …… 183

第122図　大屋敷遺跡出土遺物実測図 …… 184
第123図　才台垣遺跡出土遺物実測図 …… 189
第124図　才台垣遺跡調査区土層図 …… 191～192
第125図　進入道路調査地点図（大屋敷遺跡・神田遺跡） …… 197
第126図　大屋敷遺跡検出遺構図 …… 198
第127図　大屋敷遺跡西壁調査区土層図 …… 199～200
第128図　大屋敷遺跡南壁調査区土層図 …… 201
第129図　神田遺跡西壁調査区土層図 …… 201
第130図　神田遺跡出土遺物実測図 …… 202
第131図　天満谷・湯谷・春日シヌン谷遺跡周辺の遺跡と地形図 …… 207
第132図　天満谷遺跡地形測量図 …… 208
第133図　天満谷遺跡検出遺構全体図 …… 209
第134図　天満谷遺跡調査区土層図 …… 211～212
第135図　天満谷遺跡SD－01実測図 …… 213
第136図　天満谷遺跡SD－01出土遺物実測図 …… 214
第137図　天満谷遺跡SB－01．SD－02．SA－01実測図 …… 215～216
第138図　天満谷遺跡SB－01出土遺物実測図 …… 217
第139図　天満谷遺跡SK－01．02．P10．P11実測図 …… 217
第140図　天満谷遺跡SB－02実測図 …… 218
第141図　天満谷遺跡SB－02出土遺物実測図 …… 219
第142図　天満谷遺跡SB－02東側出土遺物実測図 …… 219
第143図　天満谷遺跡SB－03実測図 …… 220
第144図　天満谷遺跡SB－03出土遺物実測図 …… 221
第145図　天満谷遺跡P，出土遺物実測図 …… 221
第146図　天満谷遺跡SB－04実測図 …… 223
第147図　天満谷遺跡SB－05実測図 …… 224
第148図　天満谷遺跡SB－06実測図 …… 225
第149図　天満谷遺跡SA－02実測図 …… 225
第150図　天満谷遺跡SD－05実測図 …… 226
第151図　天満谷遺跡SD－06．07．08実測図 …… 228
第152図　天満谷遺跡SD－03出土遺物実測図 …… 229

第153図　天満谷遺跡SD－03付近土器出土状態 …… 229
第154図　天満谷遺跡SD－03付近出土遺物実測図 …… 229
第155図　天満谷遺跡出土柱実測図 …… 230
第156図　天満谷遺跡Ｐ₁実測図 …… 230
第157図　天満谷遺跡Ｐ₁出土遺物実測図 …… 230
第158図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 232
第159図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 233
第160図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 234
第161図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 236
第162図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 237
第163図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 238
第164図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 239
第165図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 240
第166図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 242
第167図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 244
第168図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 245
第169図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 246
第170図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 248
第171図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 249
第172図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 250
第173図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 251
第174図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 252
第175図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 253
第176図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 254
第177図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 255
第178図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 255
第179図　天満谷遺跡遺構外出土遺物実測図 …… 256
第180図　湯谷遺跡地形測量図 …… 283
第181図　湯谷遺跡土層図 …… 284
第182図　湯谷遺跡検出遺構実測図 …… 285
第183図　湯谷遺跡遺構実測図 …… 286

第184図　湯谷遺跡遺構実測図 …… 287
第185図　湯谷遺跡遺構実測図 …… 288
第186図　湯谷遺跡出土遺物実測図 …… 288
第187図　春日シヌン谷遺跡地形測量図 …… 293
第188図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区検出遺構全体図 …… 294
第189図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区調査区土層図 …… 295
第190図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区巨石付近手捏土器出土状態 …… 296
第191図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区SK－01実測図 …… 297
第192図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区１号テラス実測図 …… 298
第193図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区SB02西側隣接平坦面実測図 …… 299
第194図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区１号テラス出土遺物実測図 …… 300
第195図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区２号テラス実測図 …… 301
第196図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区２号テラス出土遺物実測図 …… 302
第197図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区３号テラス実測図 …… 303
第198図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区３号テラス出土遺物実測図 …… 304
第199図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区４号テラス実測図 …… 305
第200図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区４号テラス竈出土状態実測図 …… 306
第201図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区４号テラス出土竈実測図 …… 307
第202図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区４号テラス出土遺物実測図 …… 308
第203図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区４号テラス出土遺物実測図 …… 309
第204図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区４号テラス上方斜面出土遺物実測図 …… 309
第205図　春日シヌン谷遺跡Ⅱ区出土遺物実測図 …… 310
第206図　八雲村及び意宇川流域主要遺跡分布図 …… 320
第207図　小深原遺跡・西ノ谷遺跡周辺地形図 …… 321
第208図　小深原遺跡遺構配置図 …… 322
第209図　小深原遺跡遺物出土状態実測図 …… 323
第210図　小深原遺跡遺物出土状態実測図 …… 324
第211図　小深原遺跡遺物出土状態実測図 …… 325
第212図　小深原遺跡SK01実測図 …… 326
第213図　小深原遺跡SK02実測図 …… 327
第214図　小深原遺跡SK02実測図 …… 328

第215図　小深原遺跡出土遺物実測図 …… 328
第216図　小深原遺跡出土遺物実測図 …… 329
第217図　小深原遺跡出土遺物実測図 …… 330
第218図　西ノ谷遺跡検出遺構実測図 …… 332
第219図　西ノ谷遺跡SB01実測図 …… 334
第220図　西ノ谷遺跡調査区土層図 …… 335～336
第221図　西ノ谷遺跡SK01実測図 …… 337
第222図　西ノ谷遺跡出土遺物実測図 …… 338
第223図　熱残留磁気の方向 …… 341
第224図　熱残留磁気の平均方向と西南日本における過去200年間の地磁気永年変化曲線 …… 341
第225図　高床建築軸部構造模式図 …… 345

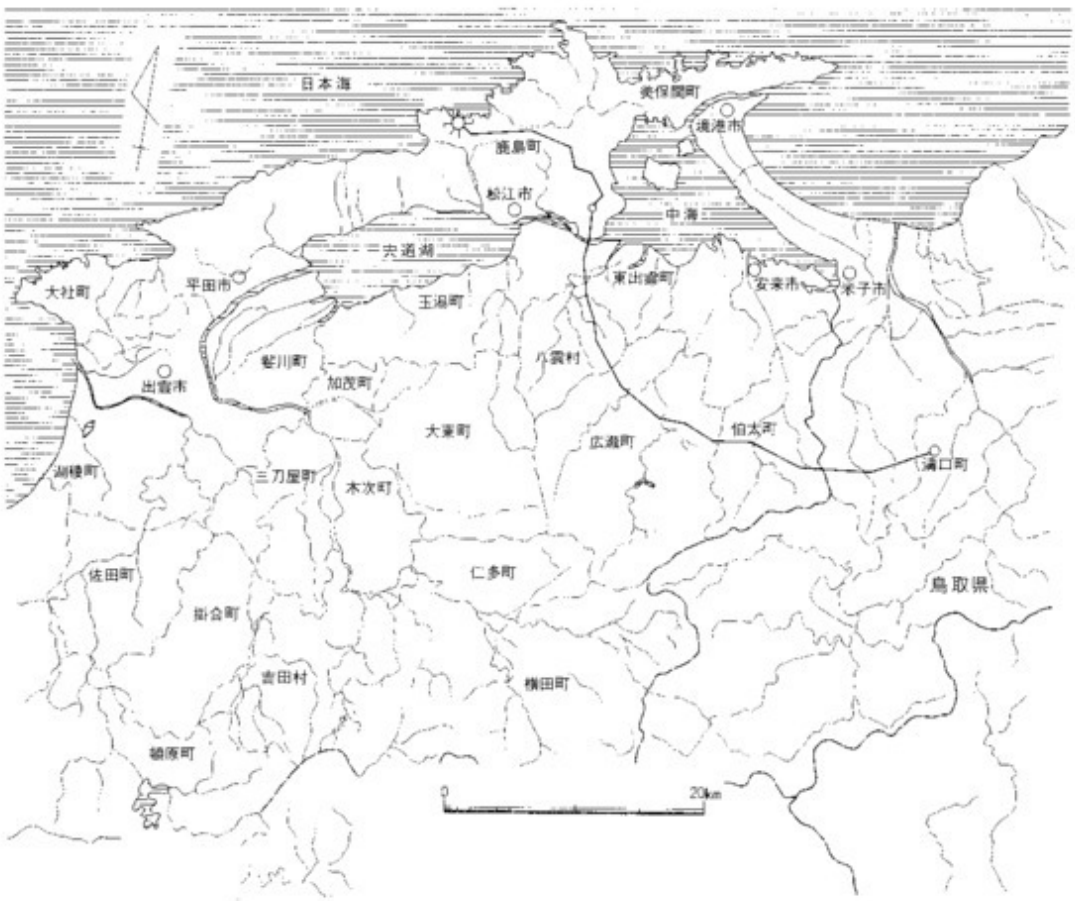
表　目　次

第１表(1)　間内遺跡出土遺物観察表 …… 43
(2)　石器計測表 …… 44
第２表　大平遺跡、蟹穴遺跡出土石器計測表 …… 54
第３表　しがらみ状遺構西列構成材樹種鑑定一覧表 …… 71
第４表　しがらみ状遺構東列構成材樹種鑑定一覧表 …… 73
第５表　上小紋遺跡出土遺物観察表 …… 102
第６表(1)　向小紋遺跡出土遺物観察表 …… 114
(2)　石器計測表 …… 115
第７表(1)　神田遺跡出土遺物観察表 …… 164
(2)　石器計測表 …… 168
第８表　大屋敷遺跡出土遺物観察表 …… 185
第９表(1)　才台垣遺跡出土遺物観察表 …… 194
(2)　石器計測表 …… 194
第10表　天満谷遺跡P₃出土土錘計測表 …… 222
第11表(1)　天満谷遺跡出土遺物観察表 …… 263
(2)　石器計測表 …… 279

第12表　春日シヌン谷遺跡出土遺物観察表 …… 312
第13表(1)　小深原遺跡出土石器観察表 …… 331
(2)　小深原・西ノ谷遺跡出土石器計測表 …… 331
第14表　西ノ谷遺跡検出柱穴状落ち込み計測値表 …… 333

I　調査に至る経緯

近年の電力需要の増加により，電力輸送設備を整備拡充する必要が生じたため，昭和57年１月中国電力㈱から松江市大井町・朝酌町地区に北松江変電所を新設する工事計画が島根県教育委員会へ提示された。この席上これに伴ない広島変電所から松江変電所へ連系する送電線では昭和60年夏には供給力の不足が予想されるため，昭和61年２月までに新岡山変電所と松江変電所及び北松江変電所間に送電線を新設する北松江幹線新設工事計画が明らかになった。これは現在の22万ボルト送電線に対して50万ボルトの送電線を新設しようとするもので，北松江変電所と松江変電所間だけでも



第１図　北松江幹線・連絡線ルート記入図

約25基の鉄塔建設が計画されている。昭和60年11月に着工し，昭和62年９月竣工するという工事計画であった。また島根県東部地区へ安定した電力を供給するため，北松江変電所から松江変電所間に送電線を新設する松江連絡幹線新設工事も併せて計画されていることがわかった。これは現在の22万ボルト１回線に対して22万ボルト２回線を新設しようとするもので，北松江変電所と松江変電所に約11基の鉄塔新設が計画されている。昭和58年11月に着工し，昭和61年２月に竣工するという工期計画であった。

この北松江幹線は松江変電所から八束郡東出雲町・八雲村，能義郡伯太町を経て新岡山変電所へ至る送電線であり，島根県東部を広域にわたるものであるため市町村では対応仕切れない面も出てくるようであった。また，事業との調整を図る必要もあるため，昭和57年６月島根県教育委員会は，関係市町村教育委員会および中国電力㈱島根支店に出席を求めて事情聴取を行った。すでに一部町村では個別に対応しているところもあったが，北松江幹線及び松江連絡線新設工事については，以後は県教育委員会が，中国電力㈱島根支店に対する窓口となって調整を図ることになった。

基本的には分布調査は市町村が対応することになり，工事計画図面を基にして現地踏査を行い，埋蔵文化財包蔵地と鉄塔建設計画との調整を進めた。この結果，工事計画の対象となる遺跡についての発掘調査依頼が昭和57年12月中国電力㈱から県教育委員会にあった。翌58年２月にも重ねて調査依頼があり具体的な協議が進められた。４月１日島根県教育委員会と中国電力㈱島根支店の間で発掘調査委託契約書を交し，昭和58年の発掘調査を始めることになった。

さらに４月22日には，新たに工事用道路の計画が呈示された。これは意宇平野地内の鉄塔工事予定地へ大型トラックが出入りできるように既設の道路を拡幅しようとするもので，工事終了時には原状に復するという計画であった。出雲国府跡の隣接地でもあり一部で発掘調査を実施することで協議が整い，昭和58年度調査計画に組み入れて実施することになった。

Ⅱ　調 査 の 経 過

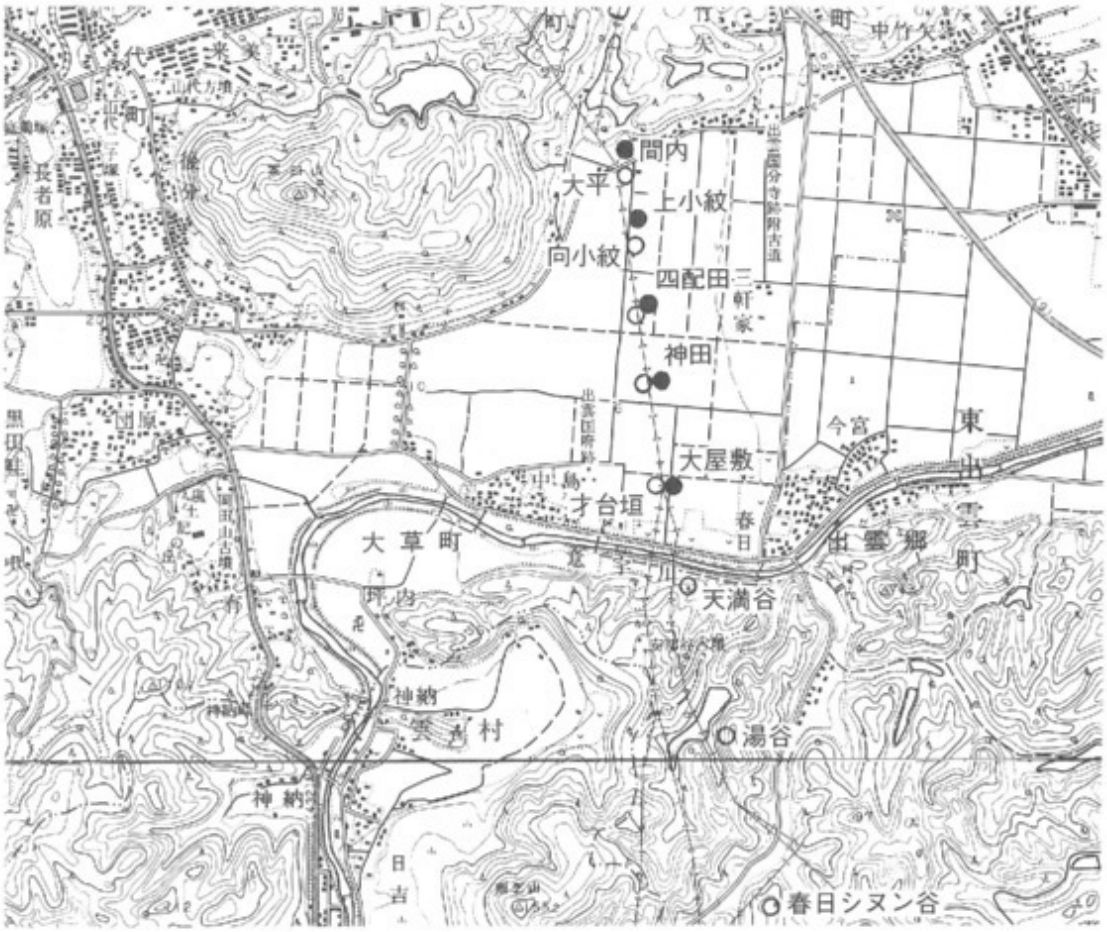
はじめに　鉄塔新設にともなう一連の調査は昭和58年５月から同昭和60年10月までの３ヶ年をかけて実施した。

初年度の調査は松江市南郊に展開する意宇川下流平野内の松江市大草町・竹矢町で実施した。

調査は東西横長の形態を示す平野の中央を縦断する形で，約300m間隔に調査区を設けて行った。調査区の大きさは幹線用鉄塔20m×20mと連絡線用鉄塔17m×17mの２者があり，この年度は前者のみ５ヶ所について実施した。

調査の順序は対象地区が水田であるため休耕あるいは農作物の収穫が終了し，地権者の同意が得られたところから行うこととした。

２年度の調査は初年度実施した調査地区西側にそれぞれわずかな距離を隔て，平行して並ぶ連絡



第２図　意宇川下流平野内鉄塔建設予定地配置図　(1：25000)

線にかかわるもの６ヶ所，幹線にかかわるもの２ヶ所について実施した。

３年度の調査は意宇川下流平野の南辺に連なる丘陵から南の八束郡東出雲町。同八雲村・能義郡広瀬町・伯太町へと移動した。この年度の調査は幹線にかかわる本調査１ケ所の他，取扱いが保留となっている18ケ所について，まず試掘調査を行った。試掘段階で遺物や遺構を確認したものについては後に本調査を実施する方針で進めたが，実際に本調査が必要となったのは八雲村２ケ所であった。以下，初年度調査から順を追って概要を記することとする。

昭和58年度調査　調査は昭和58年度５月18日から意宇川下流平野の南辺，ほぼ中央に位置する大屋敷遺跡から着手することとした。しかしここは現在は畑地となっているが，周囲は水田であり調査を実施すればかなりの湧水が予想された。その汲み上げた水の排水について水利関係者の同意が必要と考えられ，文化課・中国電力株式会社担当者・地区水利管理関係代表者を含む三者が協議を行うこととなった，当初の協議内容は①田植え時期で水の微妙な調整が必要な時に排水が水田に流入しては困る。②発掘調査時の機械オイル等が混入した濁水が水田に流入しては困る。③発掘時の排水が多量に流入することによって除草剤等の農薬の効果が薄れる。④汲み上げられるのは地下水であるため水温も低く，それが水田に流入すれば稲の発育に大きな影響を及ぼす可能性がある。⑤湧水を汲み出すことにより周辺の水田水位が下がる可能性がある。⑥農道を発掘調査用の車両が往来することにより，農作業のさまたげとなるなどの理由から発掘調査は稲の刈り入れの終了した10月以降にしてほしいと言うものであった。つまり鉄塔建設予定地の地権者からは発掘調査の同意は得ているものの，発掘調査そのものが周囲に及ぼす影響がかなり大きいものであることが確認されるに至った。そこで調査を実施した場合に影響があると考えられる松江市大草町地区関係者との間で会議を開き，事業計画の説明を行い協力と理解を求めることとした。

その説明内容は，①調査目的，②発掘調査を行う場所と面積，③調査の方法，④期間の４点であった。特に問題となる協議事項は，③調査の方法にも大きくかかわる排水の方法であった。この点については水利委員指導のもとで，農業用排水路の清掃を実施し，そこへ湧水を流す。調査にかかる期間の各月を上・中・下に分け発掘作業工程を水利委員へ提出することで協議が整った。

大屋敷遺跡　本遺跡は６月１日から水利委員の代表者が定期的に見回り，指導・助言をし，調査区内の湧水汲み上げに際しては溜ますをつくり，その上澄を流すということで了承が得られ，６月１日から松江市大草町大屋敷遺跡及び平野の中央に位置する神田遺跡の調査を平行して行なうこととした。６月24日まで調査を実施し，SB01（２間×３間），SB02（２間×４間）計２棟の掘立柱建物遺構とSA01，SA02，計２条の柵状遺構を検出した。

この他性格不明の不整形な土壙SA01～５と多数の柱穴状落ち込みを検出した。

出土遺物については古いものは古墳時代の土師器・須恵器片が若干認められたが他は12～13世紀

の輸入陶磁器で占められていた。

神田遺跡Ⅰ区　本遺跡は6月1日から6月29日まで調査を実施し，調査区中央やや東よりで長径4m，短径2.7mを測る不整形な土壙SK01を検出した。ここで検出した遺構はSK01のみであったが，小さな土壙内に玉磨き砥石や須恵器坏26個体分が集中して出土した。これらの坏はいずれも完形に復し得るものが多く，内には数個が入子の状態で出土した。この状態からすると遠くから流れてきたとは考えられず，きわめて短時間に埋没したものと判断された。SK01の下層はかなりの深さまで砂礫層となっており，かつてこのあたりが旧河道であったことをよく示していた。

上小紋遺跡　本遺跡は7月4日から12月25日まで調査を実施し，耕作土直下から水田跡7区画，その下層8区画，さらにその下層2区画の計17区画の他，溜枡状の施設1ヶ所を検出した。また各所から田下駄・ナスビ形鋤先・木槌などの農具類が出土した。

ここの調査は水田の畦が細い上に隆起が顕著ではなく，その検出に苦慮した。また溜枡状遺構の東西両岸には長さ1.5～2mを測る杭が打ち込まれたり，複雑に組み合わされたりしており精査に際してはかなりの時間を要した。島根県文化財保護審議会委員山本清先生・島根大学教授田中義昭先生・奈良国立文化財研究所工楽善通先生・島根大学松村喜則先生の調査指導を得た。また12月6日には宮崎大学助教授藤原宏志先生にプラント・オパール分析のサンプリングをおねがいした。

調査は晩秋から初冬の天候不順な時期に入ったこと，多量の湧水によって難渋することが多々あった。溜枡状遺構両岸の杭等については全て取りあげ，室内で刃物痕の観察を行うこととした。両岸の杭には当初から杭として作られたものと建築材を縦割りにして杭とした転用杭とに分けられ，後者は接合可能なものがあることは興味深いことであった。この遺跡は農耕具の形態などから弥生時代末から古墳時代初頭に属すと考えられた。

工事用進入道路に関する調査　工事用進入道路に関して松江市竹矢町神田665・同大草町435－1の2ヶ所を10月20日から26日，11月22から23日にかけて試掘調査を行った。

間内遺跡　この遺跡は今回調査する各遺跡中，平野の最も北に位置するもので，調査は11月28日から翌年2月22日まで実施した。ここはかつて池であり蓮が栽培されていたが，その後埋め立てられ今日に至っているもので，埋め土である真土はかなり水を含んでおり，その量は800m³に及んだ。埋め土の下は粘性の強い青灰色土がベースとなっていた。検出した大小44個からなる土壙はいずれもこの青灰色土に掘り込まれており，大きいものは長径3m，短径2m，深さ2m前後を測るものであった。中から若干の弥生土器片等が出土したにとどまった。

当遺跡の調査は冬期にかかったとともに，土が水分を多量に含みかつ粘性が強いことも関係し，埋めもどし時には重機が土沼に落ち込み，自力では脱出不可能の状態になるなど難渋をきわめた。

四配田遺跡Ⅰ区　この遺跡は平野の中央やや北よりに位置するもので，1月8日から2月22日

まで調査を行った。検出した遺構は調査区北辺沿いで東西に走る溝状遺構２条，調査区南西隅で溝状遺構の一端を検出した。遺物はいずれも溝内から出土し，古墳時代中期ごろの土師器高坏等であった。

昭和59年度の調査

調査は５月９日から昨年度調査を実施した間内遺跡の南方約30mに位置する太平遺跡を起点に，四配田遺跡，向小紋遺跡・神田遺跡，才台垣遺跡さらに大草丘陵の一隅にある天満谷遺跡・春日シヌン谷遺跡へと順次南へ移動することとした。また６月～７月にかけて八雲村・広瀬町・伯太町の鉄塔建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての査察を行い，断定しかねるものは試掘調査を後日実施することとした。

太平遺跡　本遺跡の調査は５月９日から６月７日まで実施した。この調査区周辺は良質の瓦製造用粘土が地下にあることが知られていたため，戦前戦後を通じ，たびたび粘土掘削が行われたところであった，それに関係して調査区北西及び北東隅にかなり大きな粘土取り壙が認められ，調査対象地面積のほぼ1/2を占めるほどであった。ここで遺構らしいものは調査区東側調査区北辺に沿って認められた土壙で，完掘はしていないもののその規模は径4.4m，深さ1.5mを測り，上面からは若干の碧玉剝片が出土したにとどまった。

四配田遺跡Ⅱ区　調査を実施したのは四配田遺跡南西約９mの位置である。調査は５月９日～５月18日まで実施し，ここでは調査区北西隅で浅い溝１条と柱穴状落ち込み５個を検出した。溝については性格は不明であるが四配田遺跡Ⅰ調査区北辺で検出した溝のいずれかに続くものと考えられた。

向小紋遺跡　調査を実施したのは上小紋遺跡の南方約50mの位置である。調査は５月21日～７月12日まで実施し計10区画の水田跡と不整形な土壙SK01・SK02を検出した。遺物にはSK01から出土したえぶりと考えられる木製品や，SK02から出土した弥生時代後期の甕片等がある。検出された水田跡もその頃を中心とする時期のものと考えられた。

神田遺跡Ⅱ区　調査を実施したのは神田遺跡Ⅰ区の西方８mの位置である。調査は６月21日～10月４日まで実施し，調査区南西隅から北東隅へ向う，検出長22m，上幅4.5m，下幅2.2mを測るSD01の他，SD02・03・04を検出した。

この調査区で得られた遺物はほとんどSD01内から出土したものである。遺物は溝底付近で土師器小形丸底壺・同甕形土器・同高坏が出土し，いずれも完形に復し得るもので，所属時期は古墳時代中期ごろと考えられ，溝の上限を示す資料と判断された。この他多量の流木とともに田下駄・鋤先等農耕具の他，梯子等の建築材の一部や調度品の一部とみられるものが出土した。

SD01は人工的なものか否かは断定しえないが土層の状況から下層では比較的長時間を経て埋っ

ていったものと断定された。

天満谷遺跡試掘調査　8月23日～9月4日まで神田遺跡の調査と平行して大草丘陵の一隅にある天満谷遺跡の試掘調査を実施し，若干の中世遺物と柱穴状落ち込みを検出した。これをふまえ，いつ調査を実施するか地権者も含め協議することとなった。

才台垣遺跡　調査を実施したのは大屋敷遺跡西方10mの位置である。調査は6月21日～8月20日まで実施したが，耕作土を除去すると下は礫層となっており，顕著な遺物や遺構を検出するに至らなかった。

天満谷遺跡　本遺跡については8月23日から9月4日にかけて実施した試掘調査の結果をふまえ，本調査を計画した。

調査は10月8日から12月22日にかけて実施し，掘立柱建物跡SB01～SB07，柵状遺構SA01・02，溝状遺構SD01～03等の他大小240個からなる柱穴状落ち込み，敷石状遺構等を検出した。

出土遺物については奈良時代を上限とするものが認められたが，大半は平安時代末から鎌倉時代の輸入陶磁器や各種土師質土器であった。遺構や遺物の構成を見ると大屋敷遺跡や出雲国府跡の上層でみられるものと類似していることが注意された。

なお，SB01とSA01の間に2.0m×1.7mを測るかなりの高熱を受けたとみられる部分があり島根大学理学部時枝克安先生に考古地磁気測定をおねがいした。

春日シヌン谷遺跡　本遺跡は八束郡東出雲町春日シヌン谷の丘陵にあって松江連絡第20号鉄塔建設予定地は丘陵頂部に，北松江幹線19号鉄塔建設予定地はその斜面に位置し，前者を春日シヌン谷遺跡Ⅰ区，後者を同遺跡Ⅱ区と称することとし，調査は9月18日～1月9日にかけて実施した。春日シヌン谷遺跡Ⅰ区では調査区北西壁に沿って地山の露頭とみられる巨岩があり，この岩陰から手捏土器が出土した。このことから同遺跡Ⅰ区においても各所に同様な岩が散見されたため，その周囲を精査したが，遺物・遺構を検出するには至らなかった。よって調査の主力をⅡ区に注ぐこととした。検出した遺構は25～45度を測る斜面を約60～70度の角度を持って削り込み，幅3m，長さ4～10mのテラスを形成するものである。これらについては上方から第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳテラスと呼称することとした。各テラスは平面がいずれも不整形なものではあるがⅠ・Ⅲ・Ⅳテラスの一部には柱穴状落ち込みが認められた。また各テラス及び，テラス間の斜面にはおびただしい量の土器片が出土した。これらの点から最近検出例の増加している丘陵斜面に構築されたところの住居跡群の一部を思わわせる物であった。しかし，先述した柱穴状落ち込みの並びはまとまりを欠くものであった。

昭和60年度の調査

本年度調査は，2月～10月にかけて意宇川下流平野南側の八束郡東出雲町から同八雲村に広がる

丘陵と，鳥取県境いに近い能義郡伯太町地内の鉄塔建設予定地につき，分布調査を実施した。この分布調査は昭和57年来，当該町村の教育委員会に鉄塔建設予定地内の埋蔵文化財の有無について調査を依頼していたが立地や周辺遺跡などの関係から回答が保留されていたものを対象とした。この解答が保留されているものについてはまず試掘調査を実施し，本調査が必要か否かを決定することが先決と考えられた。そこでこれら一連の試掘調査はA・Bの2班に分け，2遺跡を平行して実施することとした。

水越山遺跡・善三郎谷遺跡　この調査はA・B班合同で4月23日～5月18日まで実施した。両遺跡は八束郡東出雲町と同八雲村の境をなす丘陵上にあって昨年調査を実施した春日シヌン谷遺跡の南方約250mに位置している。

古墳の一部と目された水越山遺跡は表土下数cmが地山となっており遺構の検出には至らなかった。一方善三郎谷遺跡では横穴の一部を検出した。これは30m×50mの範囲に穿たれている1単位5穴からなる横穴群中の1穴で，この南西約60mの位置にも一群が認められた。これらは未発見のものであり，盗掘を受けた形跡もなく良好な状態で残っているであろうと判断された。そこで中国電力㈱の担当者と協議を行い鉄塔建設については横穴群に直接影響のない位置へ移動することとなった。これを受けて横穴群の北側斜面の一部で試掘調査を実施した。調査の結果顕著な遺物や遺構は認められなかったので，この位置に計画を変更し，前述の横穴群については現状保存されることとなった。

湯谷遺跡　本遺跡は昨年度調査を実施した天満谷遺跡の南辺約30mの丘陵上に位置する遺跡である。この調査は5月24日～7月17日にかけてB班が行った。当初古墳と思われる高まりがあったが，埋葬施設等は認められなかった。ただ尾根の東側で斜面の一部をカットした住居跡の一隅を思わせる遺構を検出した。

西ノ谷遺跡・小深原遺跡　両遺跡は八束郡八雲村の南端にあるもので，6月3日～6月22日までA班が試掘調査を行った。

西ノ谷遺跡出は柱穴状落ち込みの他，サヌカイト製ポイント形石器と若干の黒曜石片を検出した。

小深原遺跡では縄文土器片と石錘を検出した。このため両遺跡については一連の試掘調査が終了した時点で本調査を実施することとした。

伯太町における試掘調査

6月26日からA班は能義郡伯太町内の試掘調査を実施することとした。

A班が担当したのは伯太町でも東南部に位置する部分で白掘遺跡（大字赤屋782－2），荒ヶ田塔遺跡（大字赤屋819－9他），文尻遺跡（大字峠の内887－57），上山（大字738－4～887－4），鑓塔遺跡（上小竹1440－，438），境ヶ谷遺跡（上小竹1440－2，1438－2），馬落谷遺跡（大字赤

犀819－9他），カツラギ遺跡（大字他小竹1228－他）の試掘調査を実施し，8月20日に終了した。

一方，B班は7月18日湯谷遺跡の調査を終了した後，八束郡八雲村大谷遺跡の試掘調査を実施した。その後7月29日から能義郡伯太町内古屋敷遺跡（大字峠之内822－2，815－2），岩穴遺跡（大字した小竹1440－2，1438－2），日向遺跡（大字峠之内789－19），魚地遺跡（大字峠之内804－2，798－2）の試掘調査を実施し，8月9日に終了した。

これらのうち遺構らしきものが検出されたのは文尻遺跡のみであった。ここでは細長い尾根を横断するきわめて浅い溝状遺構1と平面小判形を呈す，長径1.45m，短径0.95m，深さ0.9mを測る土壙1であった。周囲を調査したが，これらに関連する遺物は得ることが出来なかった。

A班は伯太町内の試掘調査を終了した後，八雲村所在の小深原遺跡・西ノ谷遺跡の本調査を実施した。

小深原遺跡・西ノ谷遺跡　両遺跡の本調査は9月2日から10月30日までの間行った。小深原遺跡では顕著な遺構は検出しえなかったが用途不明の土壙1の他，遺物としては石鏃5点，黒曜石原石1点，黒曜石剥片7点，縄文土器片6点を得た。

一方西ノ谷遺跡でも多数の柱穴状落ち込みを検出するとともに若干の黒曜石片を得た。検出した柱穴状落ち込みは一部で円形に周るかに見えるものがあり，あるいは縄文時代の住居跡である可能性を示すものであった。

Ⅲ　調査位置と歴史的環境

(1)　遺跡の分布

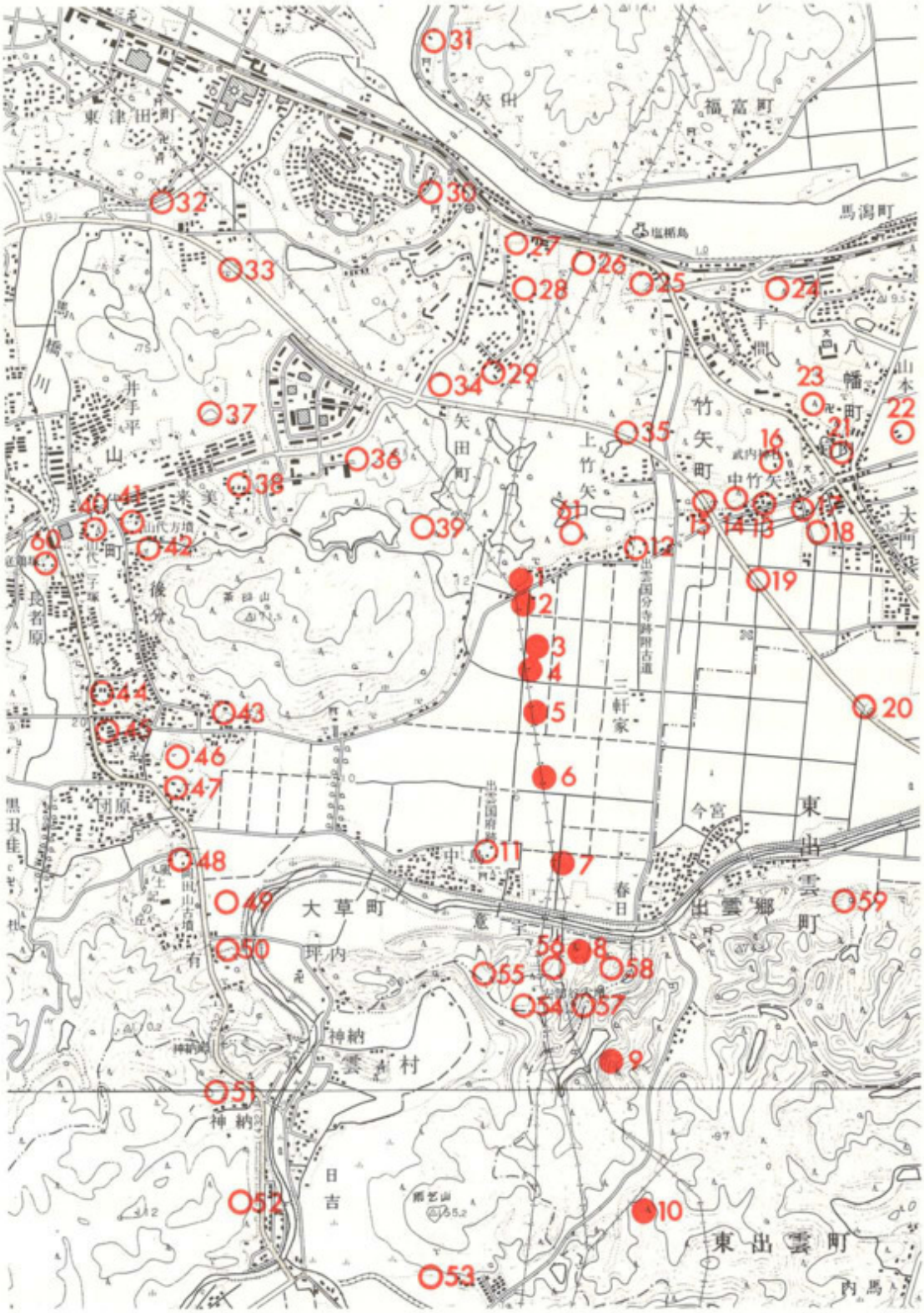
今回調査を実施した一連の遺跡が残存するのは松江市の南郊に展開する意宇川下流平野及びその南に連なる丘陵である。この平野には奈良時代出雲国府(11)や官寺の国分寺(12)，国分尼寺(13)がおかれ，天平5(733)年成立の『出雲国風土記』にもかなり重要な記載が見られる。

つまり先年国指定史跡となった山代郷正倉跡(44)は意宇郡山代の条に「山代郷　郡家の西北三里一百二十歩なり。所造天下大神大穴持命の御子，山代日子命坐せり。故山代と云ふ。すなわち正倉あり。」とみえるものである。最近調査が行われている下黒田遺跡(45)も検出された建物の主軸が正倉建物と同方向を示すものがあり，両者は有機的な関連を持つ遺跡であると推定される。

この他私寺に関する記事もみえている。すなわち「新造院一所。山代郷の中にあり。郡家の西北四里二百歩なり。厳堂を建立つ。〔僧なし〕日置き君日烈が造りし所なり〔出雲神戸の日置君鹿麻呂が租なり。〕」さらに「新造院一所。山代郷の中にあり。郡家の西北七里なり。厳堂を建立つ。〔住める僧。一軀あり。〕飯石郡の少領出雲臣弟山が造りし所なり。」と記されており，前者はその一部について調査が実施された茶臼山南麓に位置する四王寺跡(43)で，後者は茶臼山北麓に位置する来美廃寺(37)であろうとされている。なお正確な位置は不明であるが「黒田駅，郡家と同じ処なり。郡家の西北二里に黒田村あり。土の体色黒し。故，くろだと云ふ。旧，こ処に是の駅あり。即ち号けて黒田駅と曰ふ。今は東，郡に属けり。今猶旧の号を追へるのみ。」とみえており，黒田駅は天平5年当時出雲国庁に付設されていた意宇郡家に付属していたが，それ以前は西方の黒田村にあったことを伝えている。

意宇川下流平野周辺の主要遺跡

1．間内遺跡　2．太平遺跡　3．上小紋遺跡　4．向小紋遺跡　5．四配田遺跡　6．神田遺跡
7．大屋敷・才台垣遺跡　8．天満台遺跡　9．湯谷遺跡　10．春日シヌン谷遺跡　11．出雲国府跡
12．出雲国分寺跡　13．出雲国分尼寺跡　14．中竹矢瓦窯跡　15．中竹矢遺跡　16．代宮家後横穴群
17．平浜八幡宮前遺跡　18．宮内遺跡　19．布田遺跡　20．夫敷遺跡　21．的場遺跡　22．さっぺい遺跡
23．遍照寺山古墳群　24．灘山古墳　25．竹矢岩船古墳　26．手間古墳　27．荒神畑古墳
28．井ノ奥1号墳　29．井ノ奥4号墳　30．石屋古墳　31．魚見塚古墳　32．石台遺跡　33．勝負遺跡
34．平所遺跡　35．才ノ峠遺跡　36．十王免横穴群　37．来美廃寺　38．狐谷横穴群　39．廻田古墳
40．山代二子塚古墳　41．山代方墳　42．山代円墳　43．四王寺跡　44．山代郷正倉跡　45．下黒田遺跡
46．小無田遺跡　47．団原遺跡　48．岡田山古墳　49．岩屋後古墳　50．御崎山古墳　51．神納古墳群
52．勝負谷古墳群　53．雨乞山古墳　54．東百塚山古墳群　55．西百塚山古墳群　56．古天神古墳
57．大草岩船古墳　58．安部谷横穴群　59．姫津古墳群　60．大庭鶏塚　61．上竹矢7号墳



第３図　調査位置と周辺の主要遺跡　（1：25000）

このように奈良時代の出雲国の政治的中枢機構等が，意宇川下流平野の一隅にあったことが知られる。

ところで，これらの前史を語る遺跡もかなりの密度で認められる。茶臼山西麓に位置する山代・大庭古墳群は山代二子塚(40)全長92mの前方後方墳を中心に，一辺42mの方墳である大庭鶏塚(60)，一辺45mの方墳である山代方墳(41)，山代円墳(42)等で構成されている。

一方，茶臼山の南方には全長24mを測る前方後方墳の岡田山1号墳。径43mの円墳，岡田山2号墳(48)がある。前者は先年，出土大刀に銀象嵌の銘文「各田卩臣□□□□素□大利□」が確認され，一躍衆目を集めることとなった古墳である。これらの東南には墳形は不明であるが形象埴輪が多数出土したことで知られる岩屋後古墳(49)や，全長40mを測る前方後方墳の御崎山古墳(50)がある。

出雲国庁の南に連なる大草丘陵には全長27mを測る前方後方墳の吉天神古墳，墳丘は不明であるが地山の露頭とみられる岩に船形石棺を掘り込んでいる大草岩舟古墳(57)を中心に，安部谷横穴群(58)東百塚山古墳群(54)，西百塚山古墳群(55)が営まれている。

平野の北方，つまり茶臼山東北麓に位置する丘陵上には大形の前方後円墳が点在している。全長70mの手間古墳(26)，全長57mの廻田古墳(39)，全長57.5mの井ノ奥4号墳，全長62mの上竹矢7号墳(61)等がそれである。さらに大形の方墳で一辺40mの石屋古墳(30)，前方後方墳としては全長50mの竹矢岩舟古墳や迎接寺山3号墳(23)等が知られている。

以上列記した諸墳はいずれも古墳時代中期から後期に属す出雲地方の中でも著名大形古墳である。このように意宇川下流平野の周辺に上記の古墳が分布している現状をみると，このころすでに政治的中心となるべき素地が形成されつつあったということができよう。

上記した時代をさかのぼる弥生時代の遺物としてはこの平野内から出土したとされる細形銅剣が著名であるが，最近の調査では布田遺跡(19)から弥生時代前期から中期・後期にわたる遺物が検出されている。なかでも中期の資料の中に玉作関係の遺物があることは特筆すべきであろう。

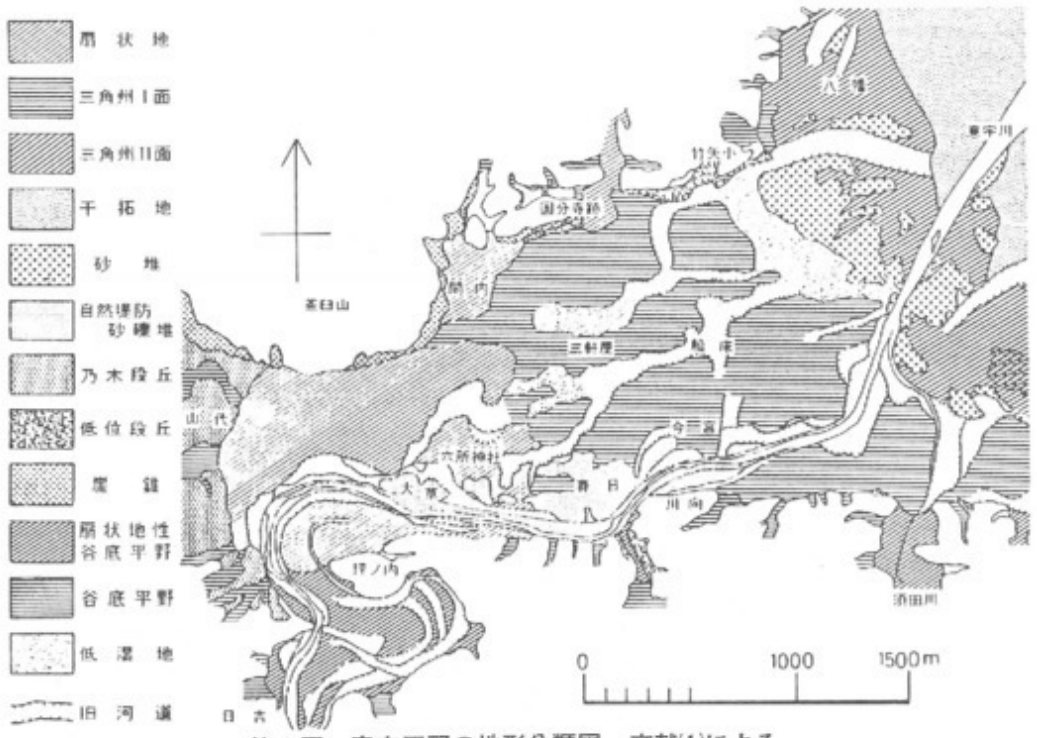
上記の時代をさらにさかのぼる遺跡としては平浜八幡宮の東方微高地周辺や馬橋川流域の石台遺跡からかなりの縄文土器や石器が採集されている。

とりわけ石台遺跡では縄文時代前期・晩期の土器片があり，後者には籾痕のあるものが確認されている。

(2) 意宇川下流平野の旧河道

意宇川下流平野には幾列かの旧河道が認められる。これは前述した平野内における遺跡のあり方とも関連すると考えられるので若干記すことにしたい。

平野の中央で認められる旧河道には「(1)大草町から六所神社の裏を通って三軒家・船床に続く旧河道，(2)六所神社の東から，三軒家に向かう旧河道，(3)三軒家の北から大門に向かう旧河道が上げ



第4図　意宇平野の地形分類図　文献(1)による

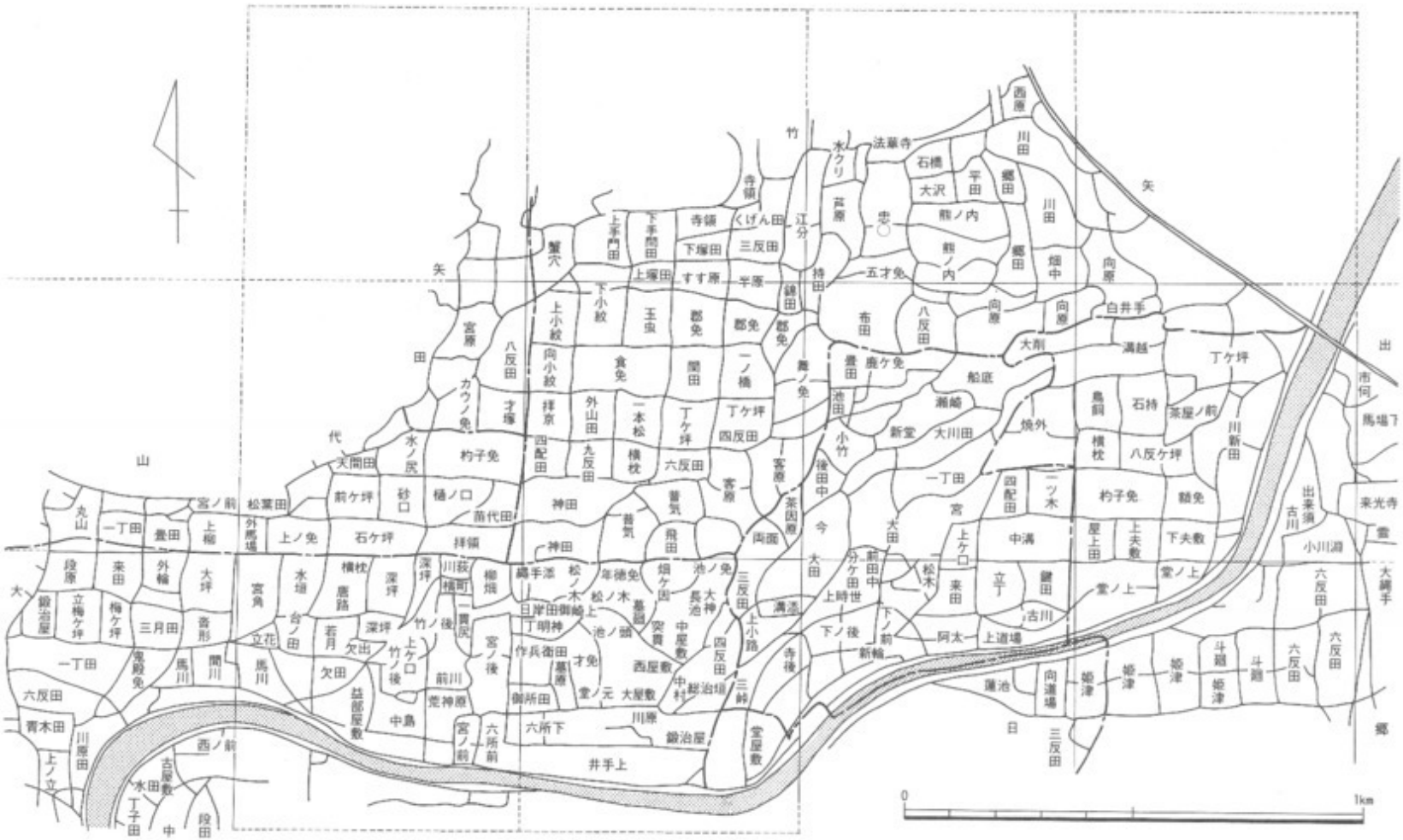
ることができ」旧河道相互の新旧は「(3)の三軒家の北を通る河道が最も古く，(2)の河道が新しいと考えられる。(1)」とされている。(1)は最も流れやすいコースとされ，現在でも東方に向かって末広がりの溝状落ち込みとして観察される。集中豪雨等で意宇川の流下能力が限界をこえたとき，水はこの旧河道を流下する。

地形分類図に示された各旧河道については今回調査を実施した神田遺跡を含む一帯に河原石、河砂等がかなりの厚さで堆積していることや，一種の湿地帯を示すと思われる「普気」の字名(2)があること，一方大屋敷遺跡・才台垣遺跡に河原石が多量に認められることなど調査結果とよく付合している。さらに(1)の旧河道が近時においても平野に大きな災害をもたらしたことは条里の乱れと一致する点からもうかがうことができよう(図5)。

当平野内の遺跡の在り方は上記した旧河道とかなり密接な関係を持ちながら今日に至っていると云えよう。今回調査を実施した遺跡群は大略以上のような歴史的環境の中に位置している。

注

(1)　『出雲国庁跡発掘調査概報』　松江市教育委員会　1970年
(2)　中沢四郎　「条里」『風土記の丘周辺の文化財』　島根県教育委員会　1975年



第5図　意宇平野地割図　　文献(2)による

間内遺跡・大平遺跡

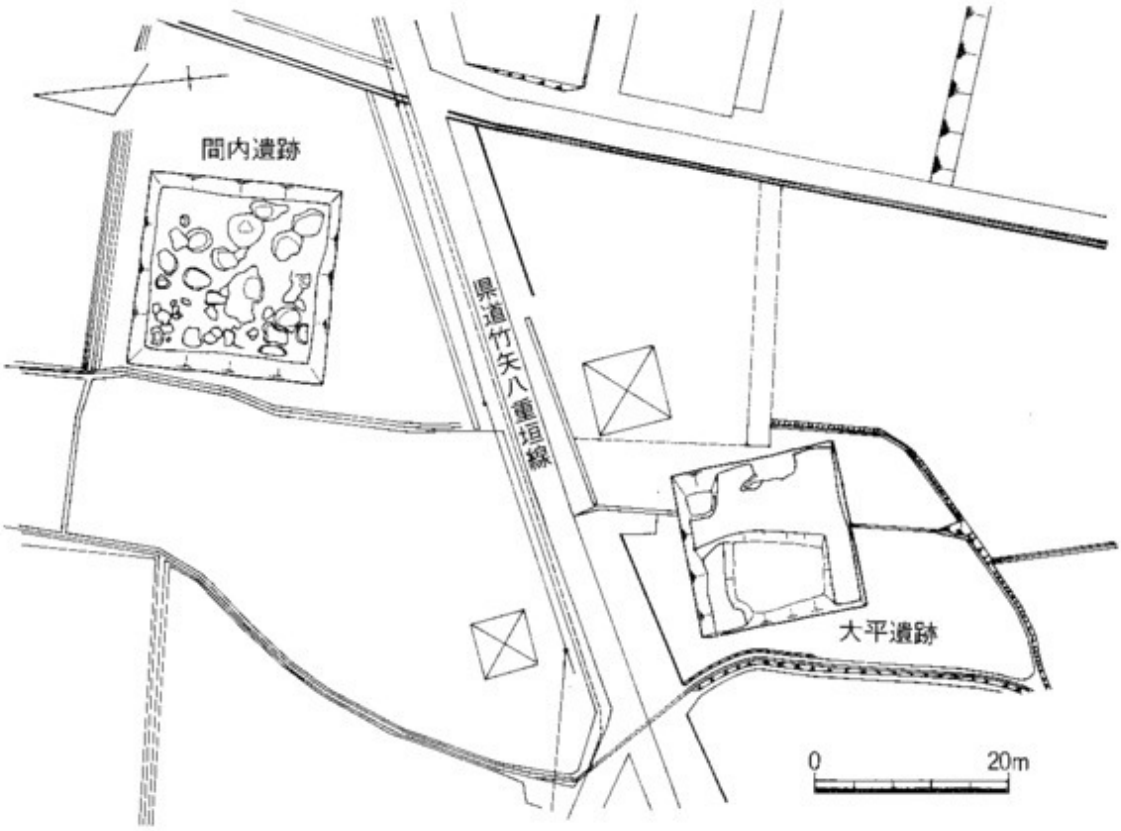
―松江市矢田町―

Ⅳ　間内（まない）遺跡・大平（たいへい）遺跡

遺跡の概要

12号鉄塔建設予定地内の遺跡は，北松江幹線内の間内遺跡と松江連絡線の大平遺跡である。これらは，意宇平野の北部の水田中に位置する。間内遺跡は松江市矢田町大字大平376－2に所在し，大平遺跡は松江市矢田町大字大平368－2，378－1に所在している。それぞれの調査区は，40mの間隔を置いて設定した。

標高は間内遺跡が8.4m，大平遺跡が8.1mとなっている。これは，間内遺跡が北側の丘陵に近いため，北側の丘陵部から南側の平野部へ向け緩やかに傾斜しているためである。両者とも灰白色の粘質土を基盤層とし，そこに遺構が掘り込まれている。間内遺跡では土壙が43基，大平遺跡では土壙が2基検出されている。灰白色の粘質土は，意宇平野の北側縁辺部にみられる土層である。これと同様の土層が存在するのは，意宇平野の北東部の中竹矢遺跡の水田部分である。ここでも弥生時代から古墳時代にかけての土壙が200mの範囲に189基検出されている。間内遺跡の周辺では，灰白



第6図　間内遺跡・大平遺跡調査区配置図

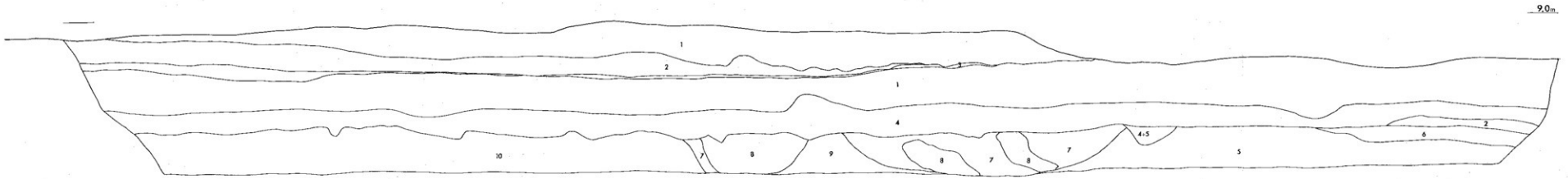
色土が瓦粘土に使うために採掘されていた。大平遺跡において，瓦礫が多く入っていた穴は，瓦粘土を採掘した痕である。従来から知られている間内遺跡は，瓦粘土採掘の際に遺物が確認されていることから，土壙等の遺構はかなり広い範囲に広がっているようである。

太平遺跡の東側畑中からも，耕作中に石器が２点出土している。この地点は小字から蟹穴遺跡と呼称することとした。

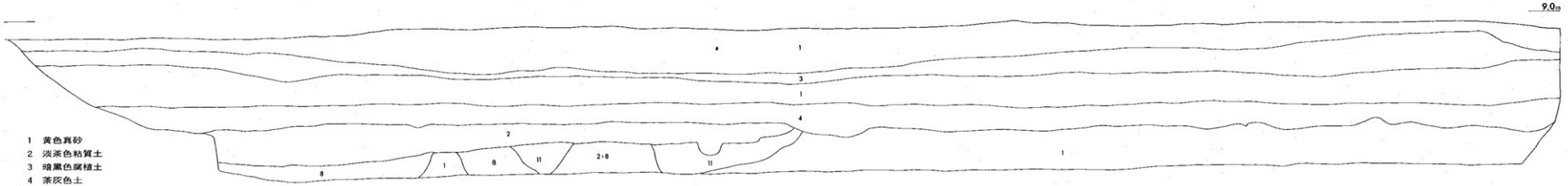
間内遺跡では，縄文時代晩期の土器も出土しているが，中心となるのは，弥生時代中期から後期にかけての時期である。

間　内　遺　跡

第７図　間内遺跡遺構配置図



北　壁

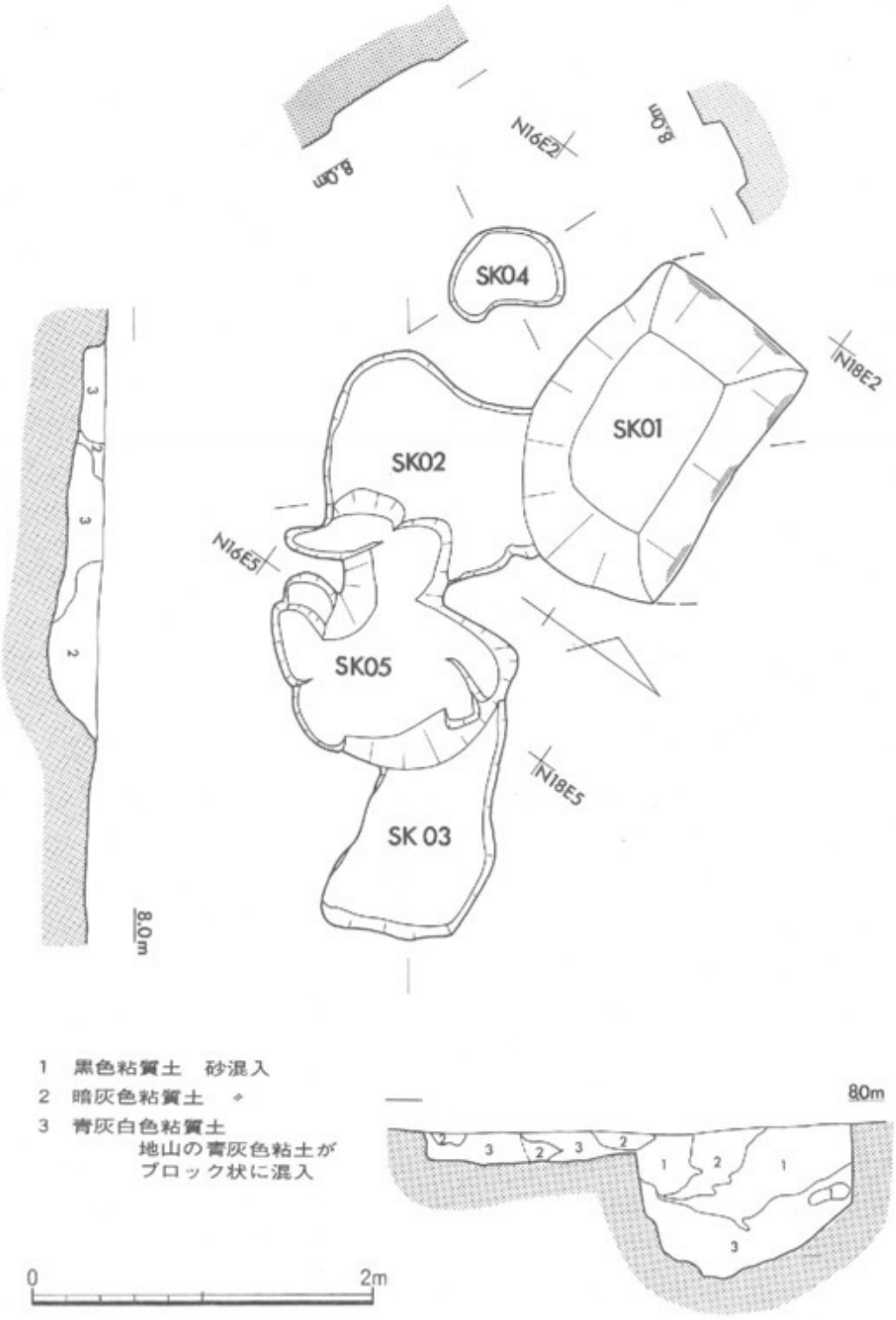


西　壁

1　黄色真砂
2　淡茶色粘質土
3　暗黒色腐植土
4　茶灰色土
5　灰色砂質土
6　灰黒色粘質土
7　暗黒色砂質土
8　明黄色粘質土がブロック状に混在する
9　明黄色粘質土
10　明黄色粘質土が西へいくほど明青灰色粘質土に序々に変化する
11　暗黒色粘質土

0　2m

第8図　間内遺跡調査区土層図



第9図 間内遺跡 SK－01、02、03、04、05 実測図

検出した遺構

土層は，黄色の真砂土が１ｍの厚さで客土されており，その下が茶灰色土で厚さは20～40㎝である。茶灰色土は，最近まで蓮根栽培が行われており，蓮根が土層中に部分的に含まれている。その下に明青灰色粘質土が続いており，1.6mの厚さがある。さらにその下はきめの細かい暗灰色砂となっており，水が湧き出して来る。各土壙は，明青灰色粘質土の上面にて確認している。

土壙は，調査区内にまんべんなく検出され，総数43基を数える。そのうち15基を除いては，切り合い関係にある。平面形は不整楕円形が24基と最も多く，次いで不整長方形10基，不整方形７基，不整形２基である。土壙の規模は，小さいものが土壙の長軸74㎝で同程度の大きさのものが７基検出されている。最も大きいものは，長軸が5.28mを測る。長軸1.5m前後，2.0m前後，3.0m前後の各規模でまとまりがあるようである。土壙の深さは，浅いもので4.0㎝，深いもので1.98mを測り，深いものは青灰白色粘質土を掘り抜いており，底面が暗灰色砂に致達しているものが４基ある。これらは，平面規模も大きいものである。底面は緩い傾斜を持ち中央が凹むものと，平坦なものがあるが，平坦なものの方が多いようである。壁面は，明青灰色粘質土で構成されており，かなりの急傾斜で立ち上がり，垂直に近いものもある。

出土遺物は，土器，石器，瓦，木片がある。遺物が出土する土壙は限られており，土器は縄文土器がSK－12，13，14から出土し，SK－13，14では弥生土器も出土している。弥生土器は，SK－13，14，15，21，28，29，34から出土している。瓦は，SK－41から出土している。

SK－01（第９図）　調査区の北西隅のため全形は不明である。平面形は不整長方形を呈している。現存長は，長軸1.86m，短軸1.21m，深さ0.86mを測る。下面は，長方形を呈し，現存長が長軸1.05m，短軸0.65mを測る。底面は中央に向け緩やかに傾斜しており，壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は，黒色粘質土，暗灰色粘質土，青灰白色粘質土が互層になっている。SK－02と切り合っているが新旧関係は不明である。

SK－02（第９図）　平面形は不整楕円形を呈する。現在長は，長軸1.46m，短軸1.32m以上，深さ0.19mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に近く立ち上る。埋土は，青灰白色土と灰色粘質土が互層になっている。SK－01，SK－05と切り合い関係にあるが，新旧関係は不明である。

SK－03（第９図）　平面形は不整長方形を呈する。現存長は，長軸1.45m以上，短軸0.82m，深さ0.04mを測る。SK－05と切り合い関係にあるが，新旧関係は不明である。底面は，ほぼ平坦である。

SK－04（第９図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸0.7m，短軸0.44m，深さ0.11mとかなり小形の土壙である。底面は，ほぼ平坦で，壁は緩やかに立ち上る。

SK－05（第９図）　平面形は，不整形を呈す。規模は，長軸1.7m，短軸1.3m，深さ0.28mを

測る。底面は東側へ向け徐々に傾斜しており，壁は緩やかに立ち上がる。埋め土は，暗灰色粘質土と青灰白色粘質土が互層となっている。SK－02，SK－03と切り合い関係にあるが，新旧関係は不明である。

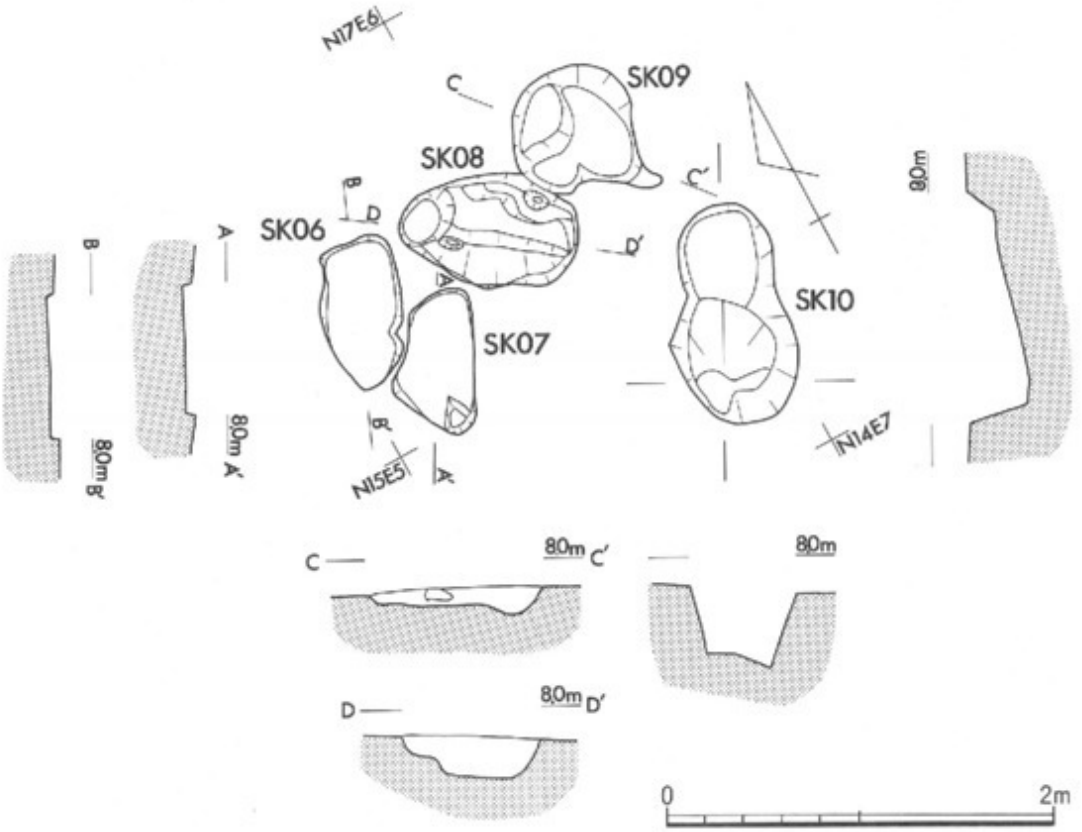
SK－06（第10図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸0.8m，短軸0.42m，深さ0.04mを測る小形の土壙である。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に近く立ち上る。

SK－07（第10図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸0.74m，短軸0.42m，深さ0.05mを測る小形の土壙である。底面は平坦で，壁は垂直に近く立ち上る。

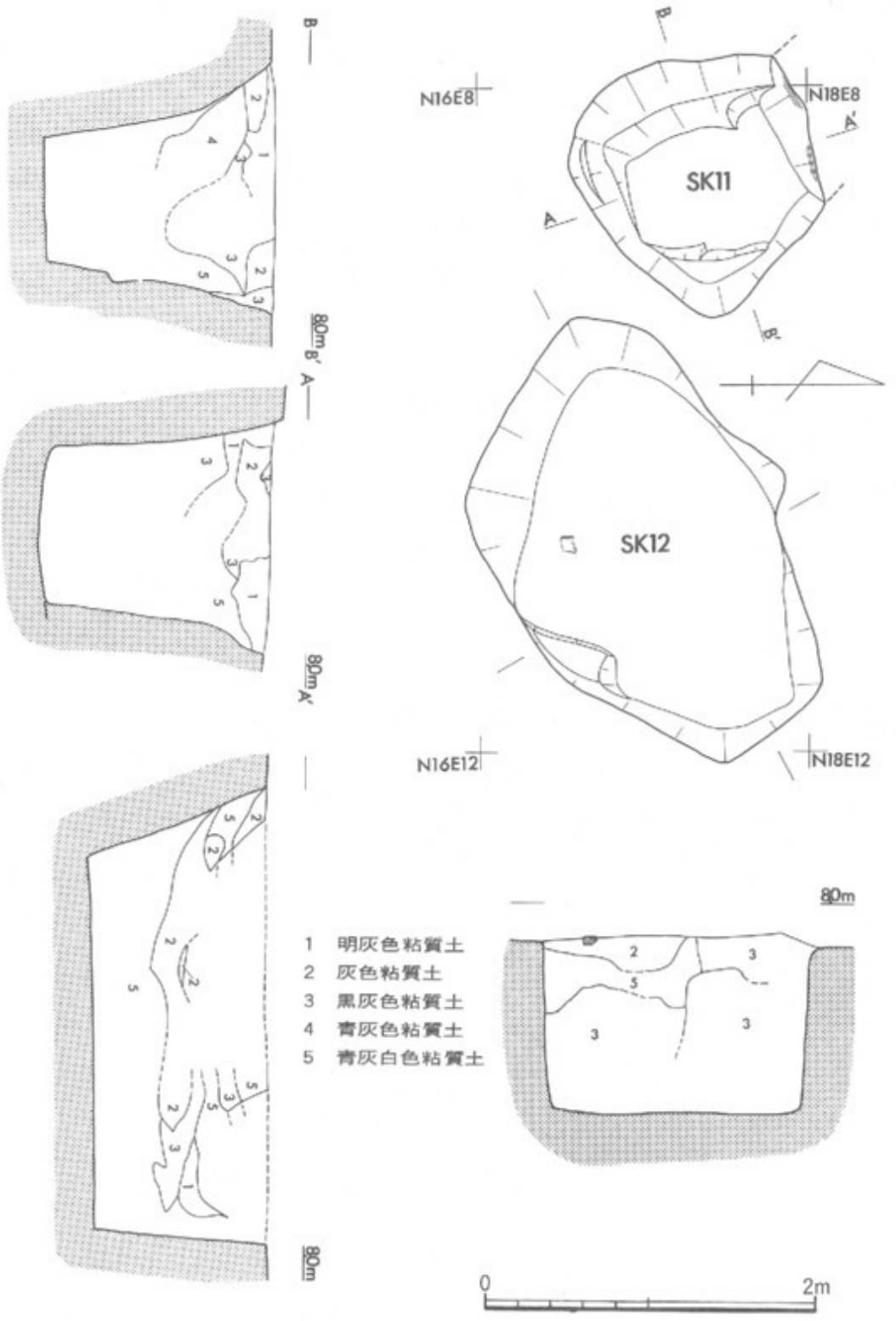
SK－08（第10図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸0.94m，短軸0.6m，深さ0.15mを測る小形の土壙である。底面は横断面が中央部に向け凹んでいる。壁は垂直に近く立ち上る。SK－09と切り合い関係にあるが，新旧関係は不明である。

SK－09（第10図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸0.86m，短軸0.68m，深さ0.2mを測る。底面は小さなテラス状の平坦面を持つ。壁は緩やかに立ち上る。

SK－10（第10図）　平面形は，中央がやや乱れた不整楕円形を呈している。規模は，長軸1.13m，短軸0.66m，深さ0.4mを測る。底面は高低2段になっており，上面は長さ1.06mを測るが，



第10図　間内遺跡 ＳＫ－06、07、08、09、10 実測図



第11図　間内遺跡 ＳＫ－11、12 実測図

下面は極めて狭くなっている。

SK－11（第11図）　調査区の北側に位置するため，全形は不明であるが，現状の平面形は不整方形を呈す。長軸1.42m以上，短軸1.5m，深さ1.4mを測る。底面は平坦で，南東コーナーに幅cmのテラスを持つ。壁は，垂直に近く立ち上がるが，西側では上部で変換しやや広がっている。埋め土は，明灰色粘質土，黒灰色粘質土が青灰白色粘質土が互層をなしている。

SK－12（第11図）　平面形は，不整長方形を呈する。規模は，長軸2.7m，短軸1.8m，深さ1.07mを測る。底は平坦で壁は垂直に近く立ち上る。遺物は，縄文土器の浅鉢（第25図1）が1点出土している。

SK－13（第12図）　平面形は，不整楕円形を呈する。規模は，長軸2.85m，短軸2.34m，深さ1.74mを測る。底は平坦で，壁は垂直よりやや開き気味に立ち上がる。埋め土は，灰色粘土，暗茶色砂，暗黒色粘土，淡茶色粘土が西壁へ向け傾斜して堆積している。底面はきめの細かい灰色砂である。遺物は，土壙の覆土上半から出土している。土壙内の出土遺物としては最も数が多く，縄文土器，弥生土器，石器（第25図2～13）が出土している。SK－14と切り合っているが，新旧関係は不明である。

SK－14（第12図）　平面形は，不整長方形を呈す。規模は，長軸2.22m，短軸1.76m，深さ1.34mを測る。底面は，南西コーナーに一段高いテラス状のものがあり，後は0.2～0.5mの幅で分かれている。壁は，垂直よりやや開き気味に立ち上がる。埋め土は，灰色砂，黒色砂質土，明灰色粘質土，灰色粘質土が堆積している。遺物は，縄文土器7点（第25図14～19）・（第26図21），弥生土器1点（第25図20）が出土している。

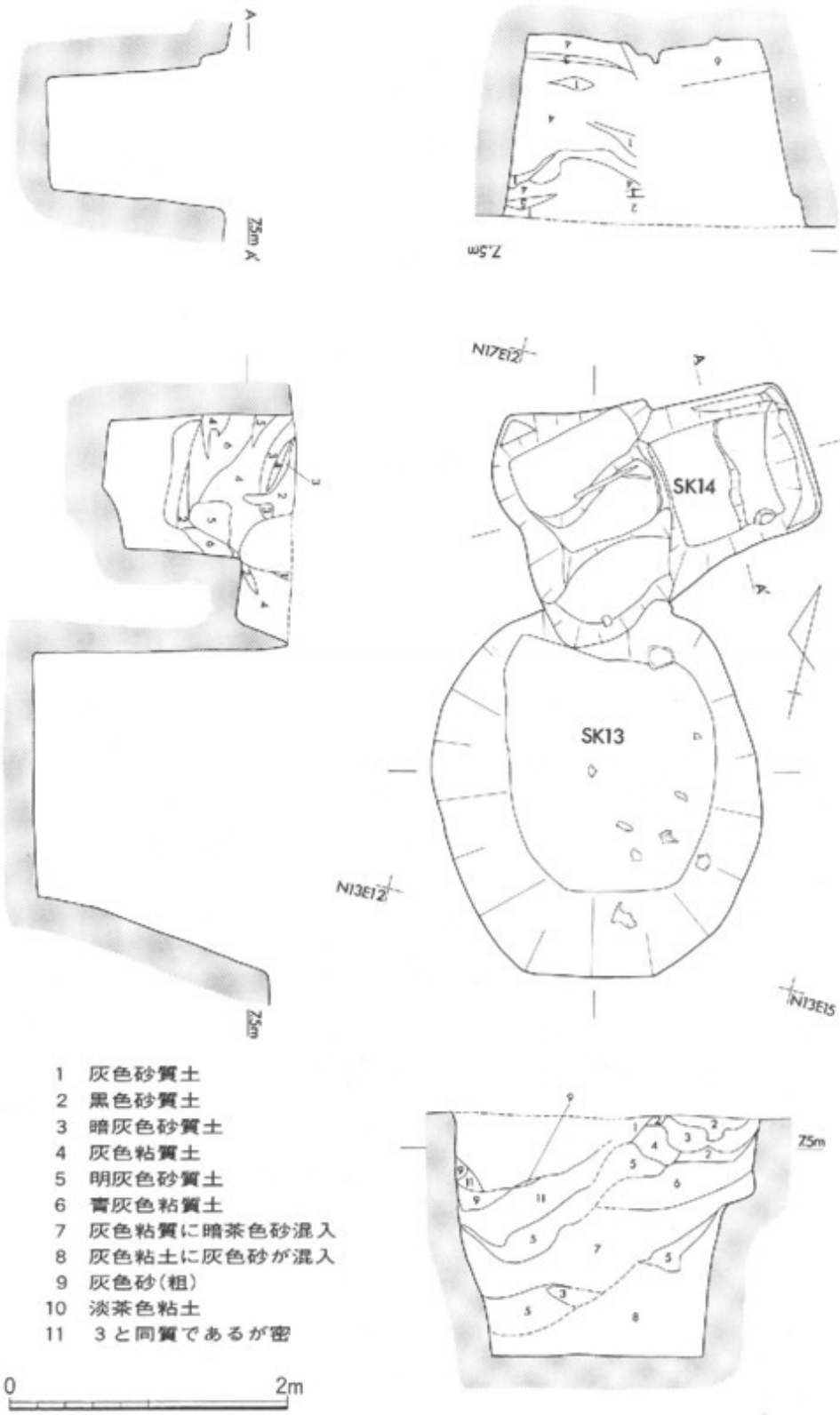
SK－15（第13図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸2.94m，短軸2.28m，深さ0.7mを測る。底面は，平面形が不整長方形を呈し，北東コーナーへ向け緩く傾斜している。壁は，緩やかに立ち上がる。埋め土は，青灰白色土，黒色砂質土，黒色粘質土，黒灰色粘質土が堆積している。遺物は，覆土中より弥生土器（第26図22）が1点出土している。

SK－16（第16図）　平面形は，不整形を呈している。規模は，長軸2.0m，短軸1.28m，深さ0.04mを測り，極めて浅い土壙である。底面はほぼ平坦で，壁は緩く立ち上がる。

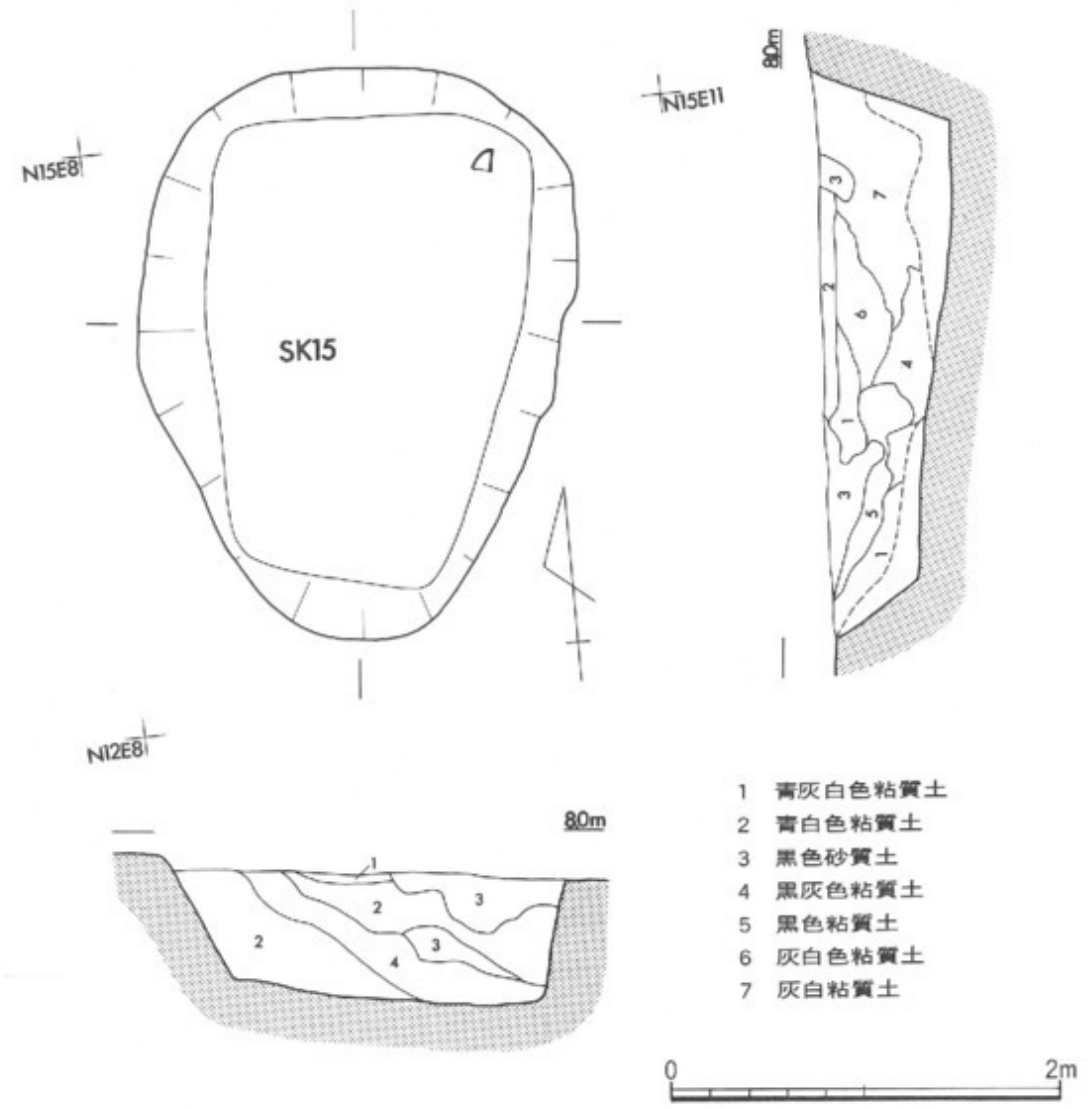
SK－17（第14図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸2.36m，短軸2.3m，深さ0.16mを測る。底面は東側へ向け緩く傾斜している。壁は垂直よりやや開き気味に立ち上がる。

SK－18（第14図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は長軸1.54m，短軸1.12m，深さ0.3mを測る。底面はやや凹凸があり，壁は垂直に近く立ち上がる。埋め土は灰色土である。SK－19と切り合っているが，新旧関係は不明である。

SK－19（第14図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸1.24m，短軸1.02m，深さ0.4



第12図　間内遺跡ＳＫ－13、14 実測図

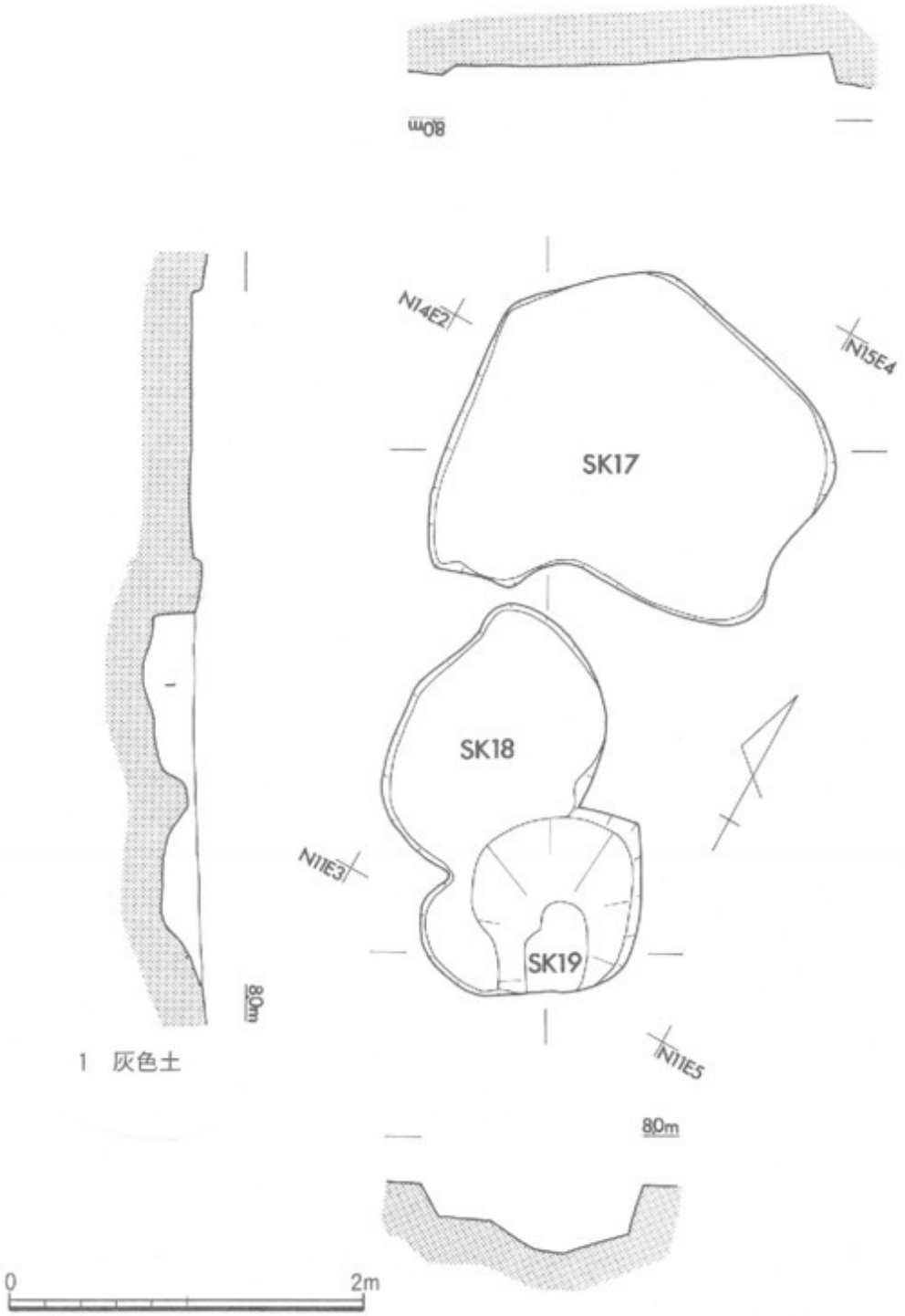


第13図　間内遺跡ＳＫ－15 実測図

mを測る。底面は，南西側にテラス状の平坦面がありもう一段落ち込んでいる。壁は垂直よりやや開いて立ち上がる。

SK－20（第15図）　平面形は，不整長方形を呈す。規模は，長軸1.83m，短軸0.62m，深さ0.26mを測る。底面はほぼ平坦で，径35cmのピット様の落ち込みがある。壁は，東側は緩やかに立ち上がり，他は垂直に近く立ち上がる。SK－21と一部で切り合っているが，新旧関係は不明である。

SK－21（第15図）　平面形は，不整形を呈すが，南側は残っていないため不明である。底面は，西側へ向け緩やかに傾斜している。壁は，ほぼ垂直に近く立ち上がる。遺物は，弥生土器（第26図23）が１点出土している。規模は，長軸2.58m，深さ0.18mを測る。

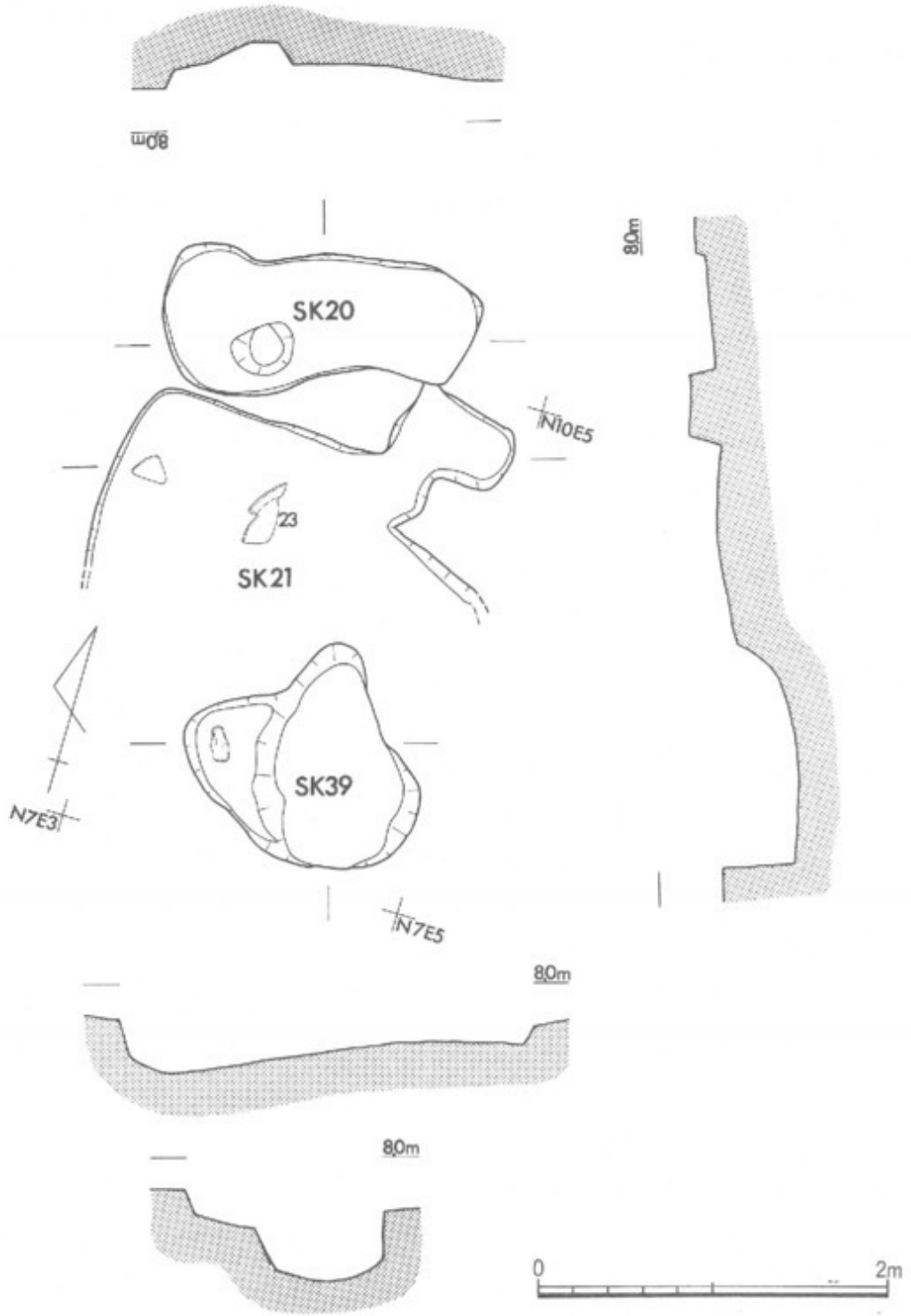


第14図　間内遺跡 ＳＫ－17、18、19 実測図

SK－22（第16図）　平面形は，不整形を呈す。規模は，長軸5.28m，短軸2.86m，深さ0.57mを測る。底面は，南側で一段低いテラス状の平坦面があるが，他はほぼ平坦である。SK－23，24，26，27と切り合っているが，新旧関係は不明である。SK－24とは，覆土の観察から両者に違いは

見られず，一体のものの可能性もある。

SK－23(第26図)　平面形は，不整長方形を呈す。規模は，長軸2.4m以上，短軸1.2m，深さ0.44



第15図　間内遺跡ＳＫ－20、21、39 実測図

mを測る。底面は，北側へ向け緩やかに傾斜している。壁は，垂直に近く立ち上がる。SK－25，26，22と切り合っているが，新旧関係は不明である。

SK－24（第16図）　平面形は，不整方形を呈す。規模は，長軸2.85m，短軸2.68m，深さ1.0mを測る。底面は，ほぼ平坦である。。壁は緩やかに立ち上がるが，北側は変換して立ち上がる。SK－22，27とは切り合っているが，新旧関係は不明である。

SK－25（第16図）　平面形は，不整長方形を呈す。規模は，長軸0.8m，短軸0.46m，深さ0.1mと浅い土壙である。底面は西側から東側へ向け傾斜して上がっていくため，壁がなくなっている。残る壁は垂直に近く立ち上がる。

SK－26（第16図）　平面形は，SK－23と22に挟まれており残存部が少ないが，不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に近く立ち上がる。規模は，長軸1.36m以上，短軸1.2m以上，深さ0.19mを測る。

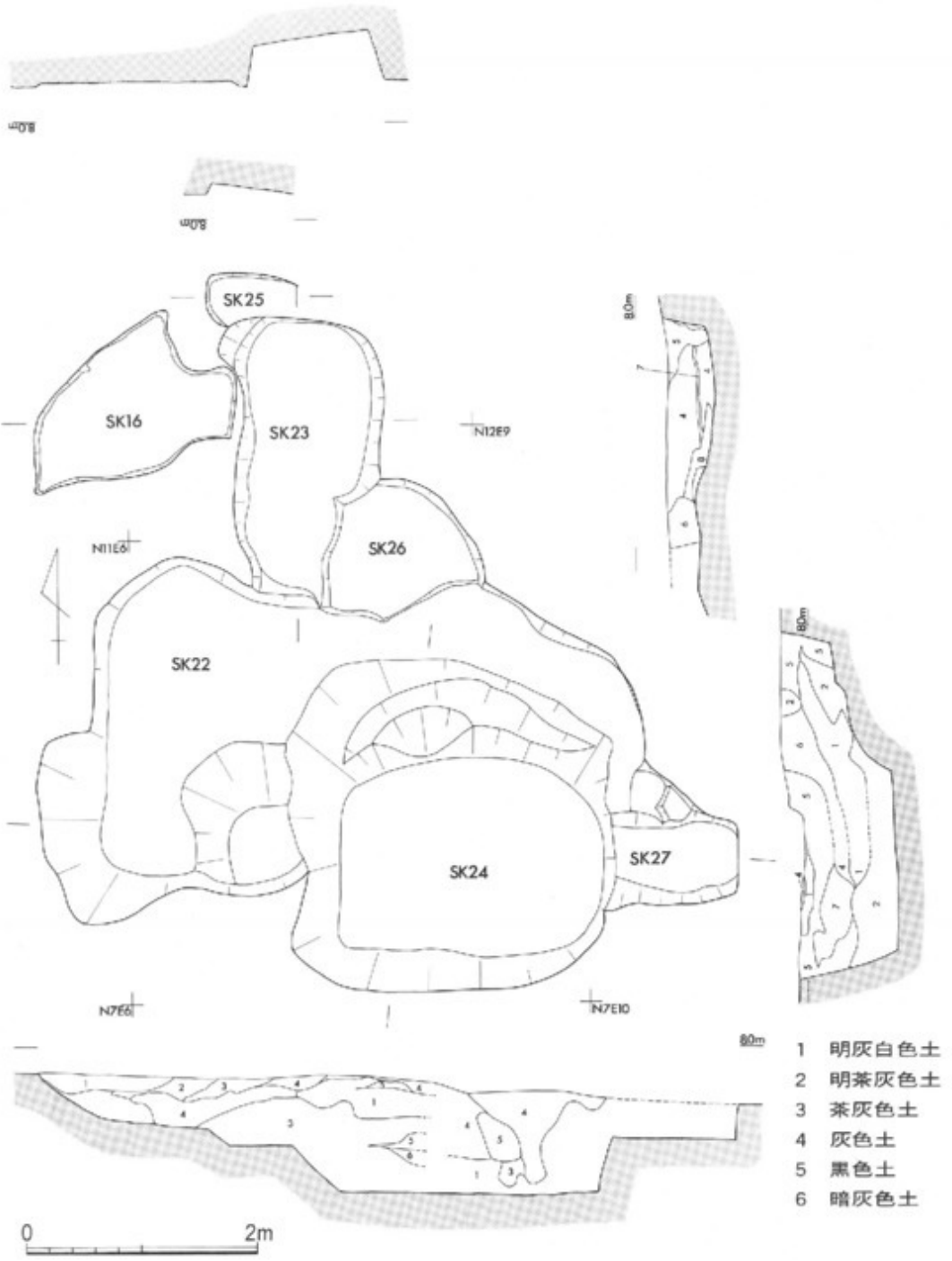
SK－27（第16図）　平面形は，不整長方形を呈する。規模は，長軸1.07m以上，短軸0.8m，深さ0.3mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がる。SK－24と切り合っているが新旧関係は不明である。

SK－28（第17図）　平面形は，不整方形を呈す。規模は，長軸1.10m，短軸1.12m，深さ1.22mを測る。底面は，中央に幅0.14mのベルト状の高まりがあり，それを境にして北側では斜めに，南側では平坦になっいてる。壁は，垂直に近く立ち上がり，東側の壁に幅0.16mのテラスを持つ。遺物は，弥生土器（第26図24）が１点出土している。

SK－29（第18図）　平面形は，不整楕円形を呈する。規模は，長軸3.8m，短軸3.22m，深さ1.98mを測る。底面の中央は，長軸1.8m，短軸1.7m，深さ0.55mの大きさで落ち込んでおり，最下面はほぼ平坦である。テラス状の平坦面は，西側へ向けて緩く傾斜している。壁は，東側が垂直に，他は垂直よりやや開いて立ち上がる。埋め土は，黒色粘質土と青白色粘質土が互層をなして堆積している。SK－30と切り合っているが新旧関係は不明である。遺物は，弥生土器（第26図25）が１点出土している。

SK－30（第19図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸1.66m以上，短軸1.12m，深さ0.36mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は垂直よりやや開き気味に立ち上がる。SK－31と切り合っているが新旧関係は不明である。

SK－31（第19図）　平面形は不整楕円形を呈す。規模は，長軸2.395m，短軸2.3m，深さ1.26mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は南東側が垂直に近く，北西側は緩やかに立ち上がる。東側に幅0.15m，長さ0.5mのテラス状の平坦部がある。SK－30と切り合っているが，新旧関係は不明である。

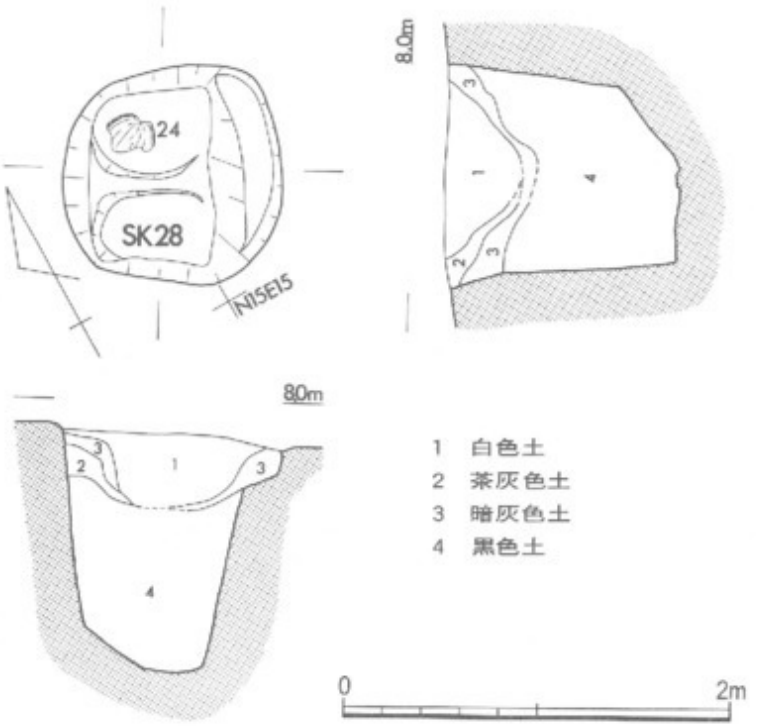


第16図　間内遺跡 ＳＫ－16、22、23、24、25、26、27 実測図

SK－32（第18図）　調査区の東端に位置しており，全形は不明であるが，上面は不整楕円形を呈し，下面は，長方形のプランを呈す。規模は，長軸4.0m，短軸1.76m以上，深さ1.2mを測る。底面は，南側にテラス状の平坦部を持ち，底面はやや丸味を持っている。SK－29と切り合っているが，新旧関係は不明である。

SK－33（第20図）

調査区の南東隅に位置する。平面形は，不整楕円形を呈する。規模は，長軸3.4m，短軸2.52m，深さ1.66mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は南側は垂直に立ち上がり，他はやや緩やかに立ち上がる。東側には，幅0.3m，長さ0.9mのテラス状の平坦面がある。SK－34とは，同じような規模を持ち，切り合っているが，新旧関係は不明である。



第17図　間内遺跡 ＳＫ－28 実測図

SK－34（第20図）　調査区の南東隅に位置するため，南側が調査区域外へ伸びている。平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸3.52m，短軸2.52m，深さ1.54mを測る。底面は東側が一段高くなっている。壁は，垂直よりやや開き気味に立ち上がる。遺物は，弥生土器（第26図26，27）と木片が出土している。

SK－35（第21図）　調査区の西寄りの南端に位置するため，区域外へ伸びている。現状の平面形は，不整長方形を呈す。規模は，長軸2.1m，短軸1.18m以上，深さ1.1mを測る。底面は，中央に向け緩やかに凹んでおり，壁は垂直よりやや開いて立ち上がる。

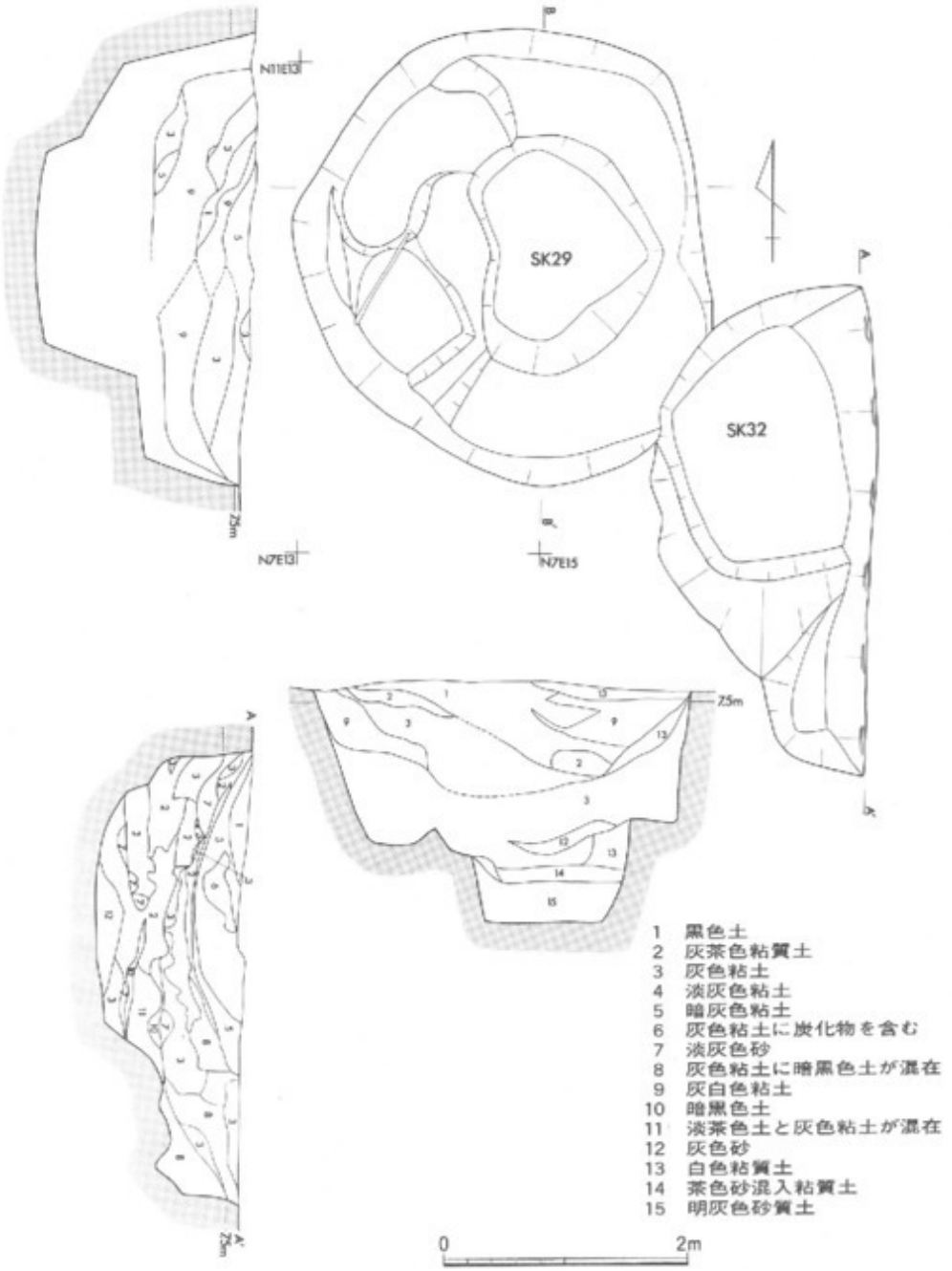
SK－36（第22図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸2.74m，短軸2.6m，深さ0.56mを測る。底面は，若干凹凸があり，壁は，北東部は緩やかに他は垂直に近く立ち上がる。

SK－37（第23図）　調査区南寄りの西端に位置し，一部区域外に含まれ全形は不明である。平面形は，やや細長い不整楕円形を呈す。規模は，長軸3.2m，短軸1.0m以上，深さ1.0mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がる部分や緩やかに立ち上る部分がある。遺物は上部より板状の木片が出土している。

SK－38（第23図）　平面形は，不整長方形を呈する。規模は，長軸2.4m，短軸1.54m，深さ0.86mを測る。底面は，西側へ向け緩く傾斜している。壁は，東壁は緩やかに立ち上がり，他は垂

直に近く立ち上がる。

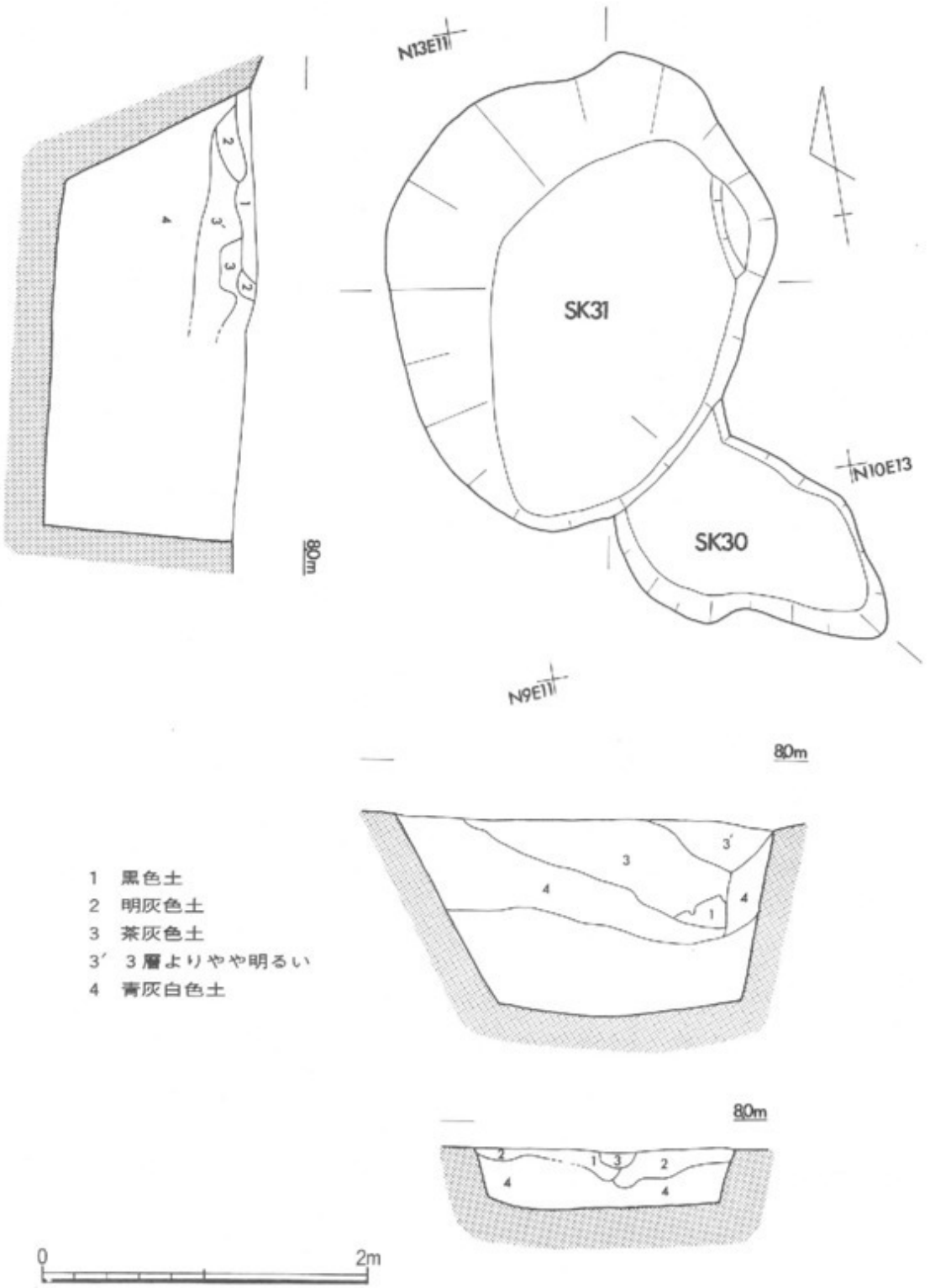
SK－39（第15図） 平面形は不整楕円形を呈する。規模は，長軸1.42m，短軸1.0m，深さ0.48mを測る。底面は，一段高い所に長さ0.8m，幅0.36mのテラスがあり，底面に丸味を持つ。壁は南側と東側の一部がほとんど垂直に立ち上がり，後は垂直よりやや開き気味に立ち上がる。遺物は石が一点出土している。



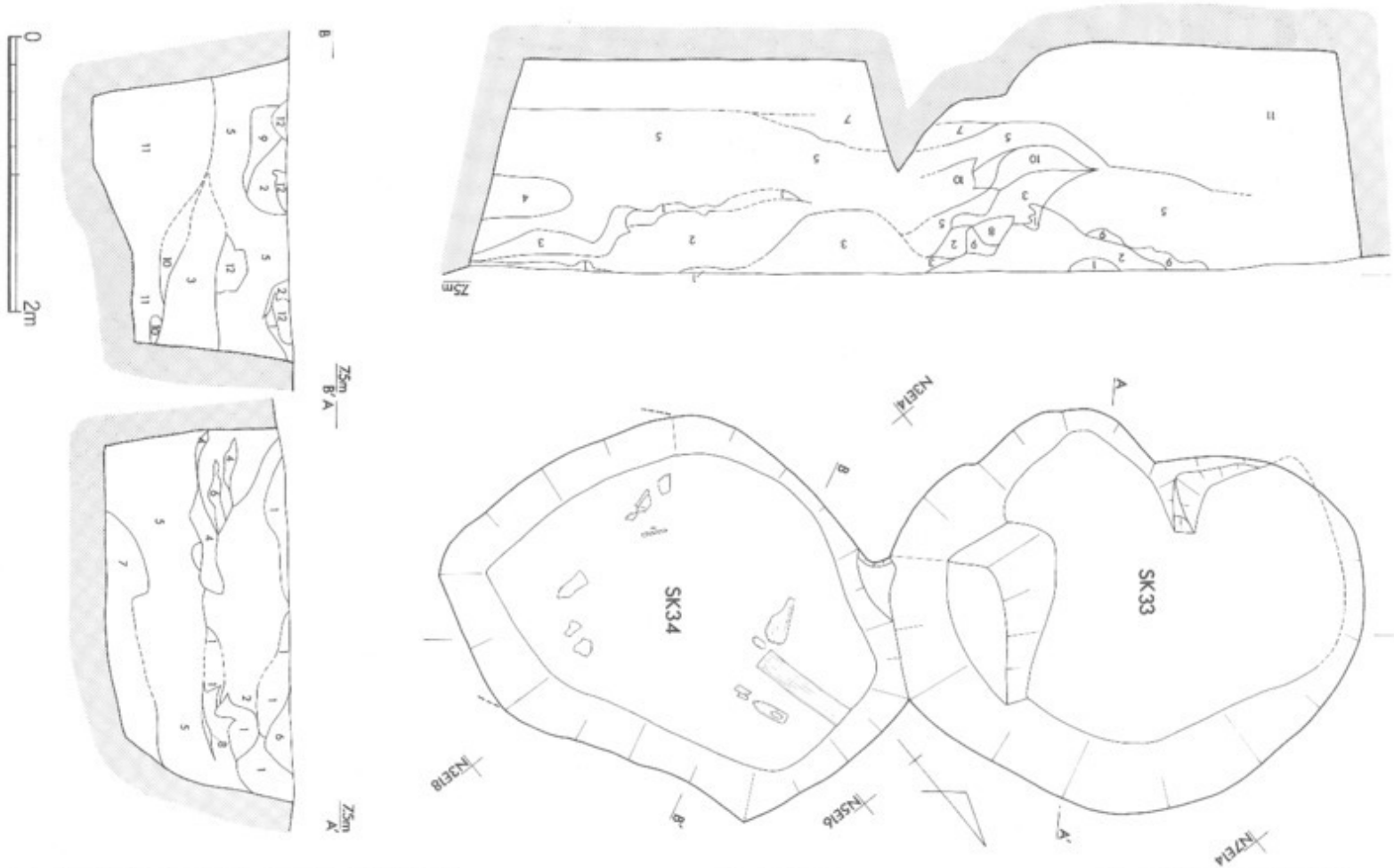
第18図 間内遺跡 ＳＫ－29、32 実測図

SK－40（第22図） 平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸1.56m，短軸1.24m，深さ0.3mを測る。底面はほぼ平坦で，壁は北西部が緩やかに立ち上がり，他は垂直に近く立ち上がる。

SK－41（第24図） 平面形は，不整形を呈する。規模は，長軸3.42m，短軸1.09m，深さ0.22mを測る。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は，覆土中より瓦（第26図28）が出土



第19図　間内遺跡 ＳＫ－30、31 実測図



第20図　調内遺跡 ＳＫ－33、34 実測図

1　暗黒色土に灰白色土がブロック状に混在
2　淡茶色土に灰白色粘土が混在(パサパサした感じ)
3　淡茶色土と暗黒色土と灰白色粘土が粒状になって混在(パサパサ)
4　3に灰色砂が少量混入
5　灰白色粘土
6　淡茶色土
7　茶色粘土
8　灰白砂
9　淡茶色粘土に淡灰色粘土が混在
10　白色粘土に暗黒色土が混在
11　5に似るがやや砂質
12　暗黒色土

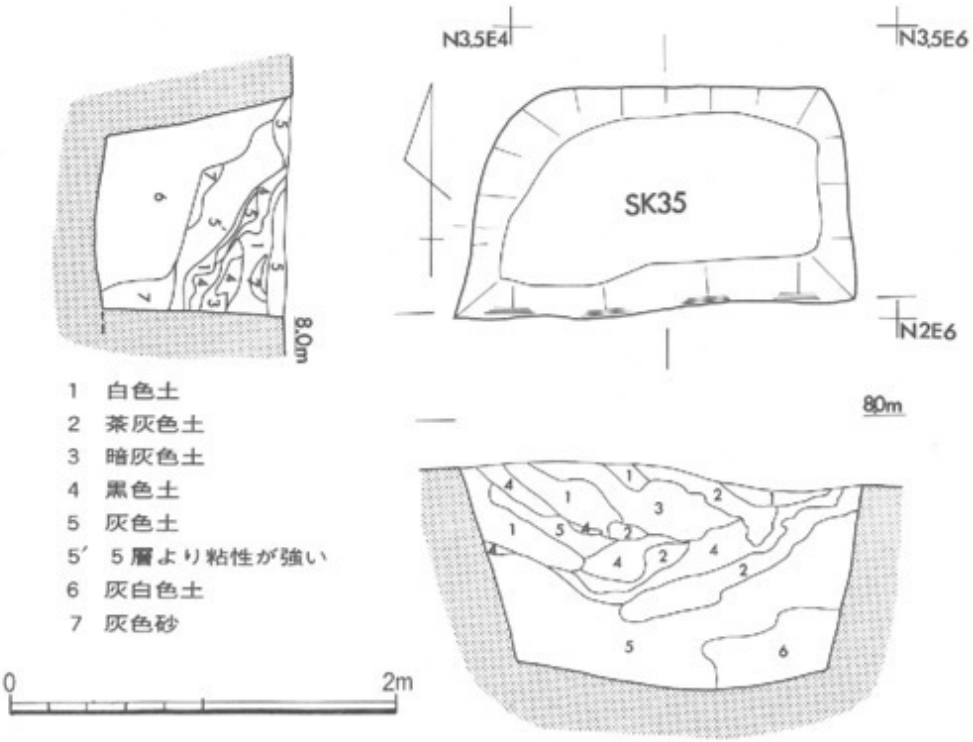
している。

SK－42（第24図）　平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸1.52m以上，短軸1.02m，深さ0.26mを測る。底面は，西側が擂鉢状に落ち込むが他は平坦である。壁は，落ち込んだ部分は緩やかで他は垂直近く立ち上がる。

SK－43（第24図）　平面形は，不整方形を呈する。規模は，長軸1.52m，短軸1.15m，深さ1.24mを測る。底面は，西側にテラス状の平坦面を持ち，底面は，0.6m×0.52mとかなり狭くなっている。各壁とも緩やかに立ち上る。

出土遺物（第25，26図）

今回の調査で出土した遺物は，SK－12，13，14，15，21，28，29，34，41，といった遺構に伴う



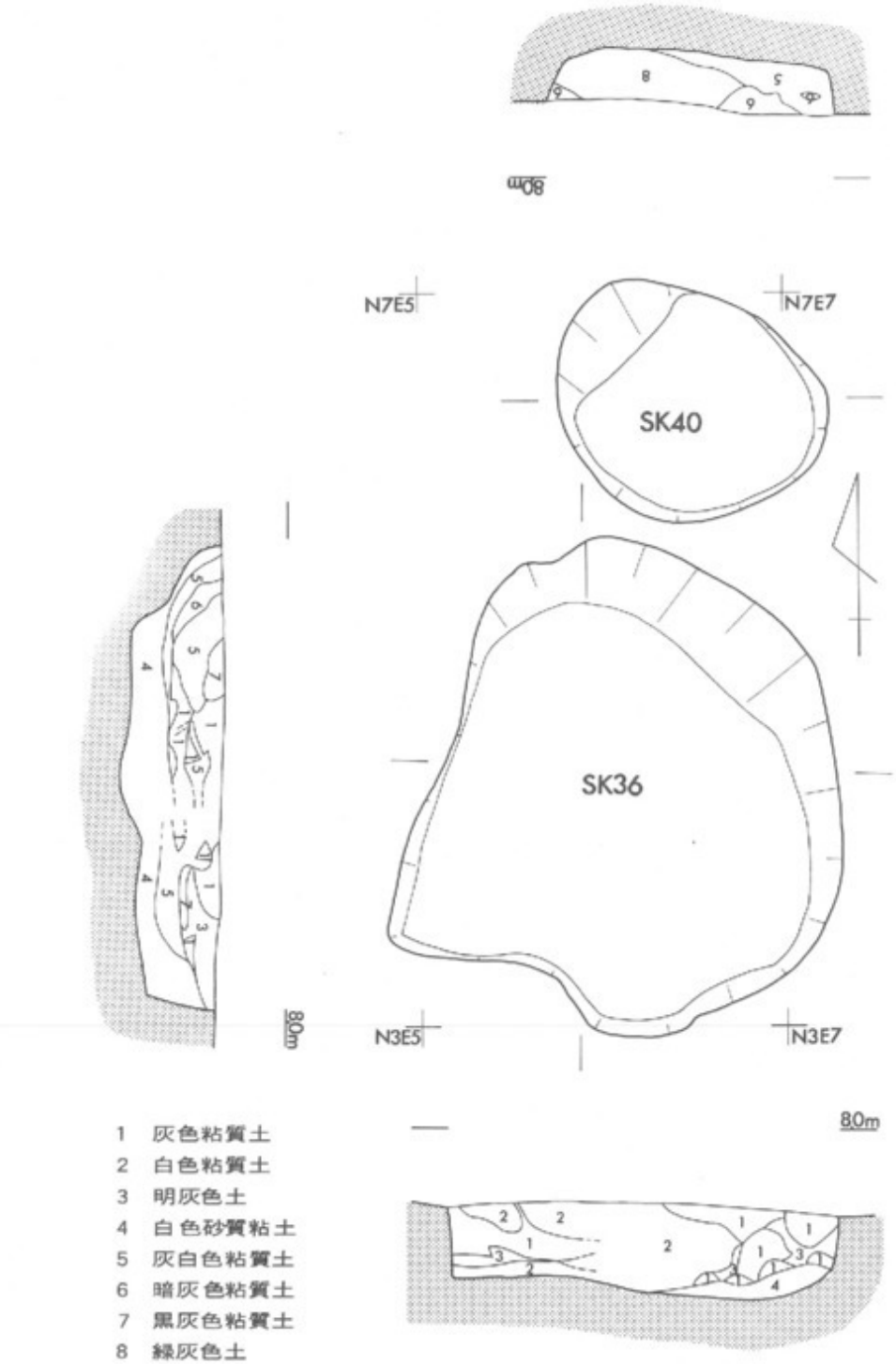
第21図　間内遺跡ＳＫ－35実測図

ものと遺構外出土の遺物の２点である。

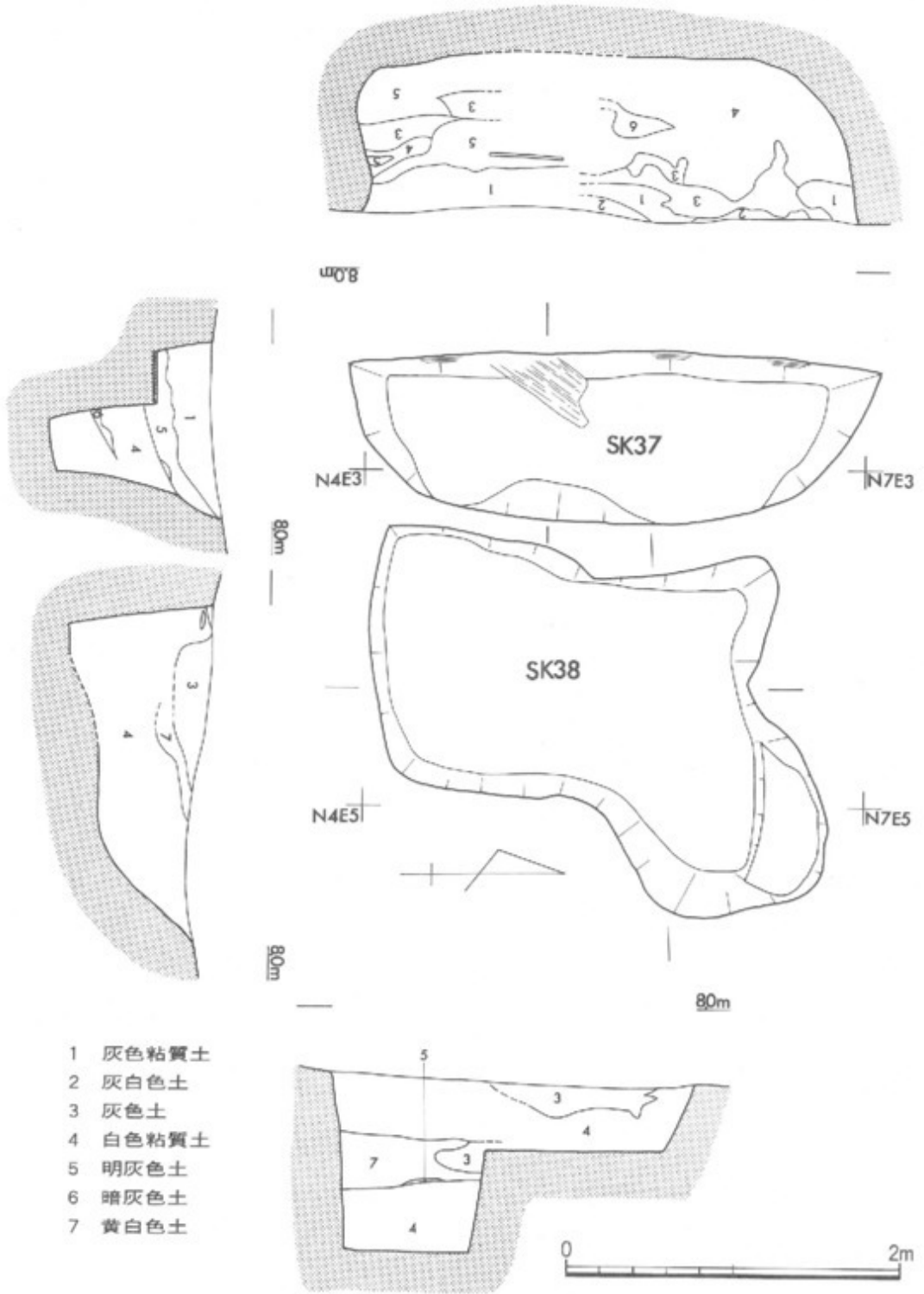
SK－12出土遺物（第25図１）　縄文土器の浅鉢と思われる。内外面ともに，やや粗い横方向のミガキが施されている。復元口径32.5cmを測る。この土器は，縄文時代晩期と思われる。

SK－13出土遺物（第25図２～13）　２～５は，縄文土器の深鉢の破片である。

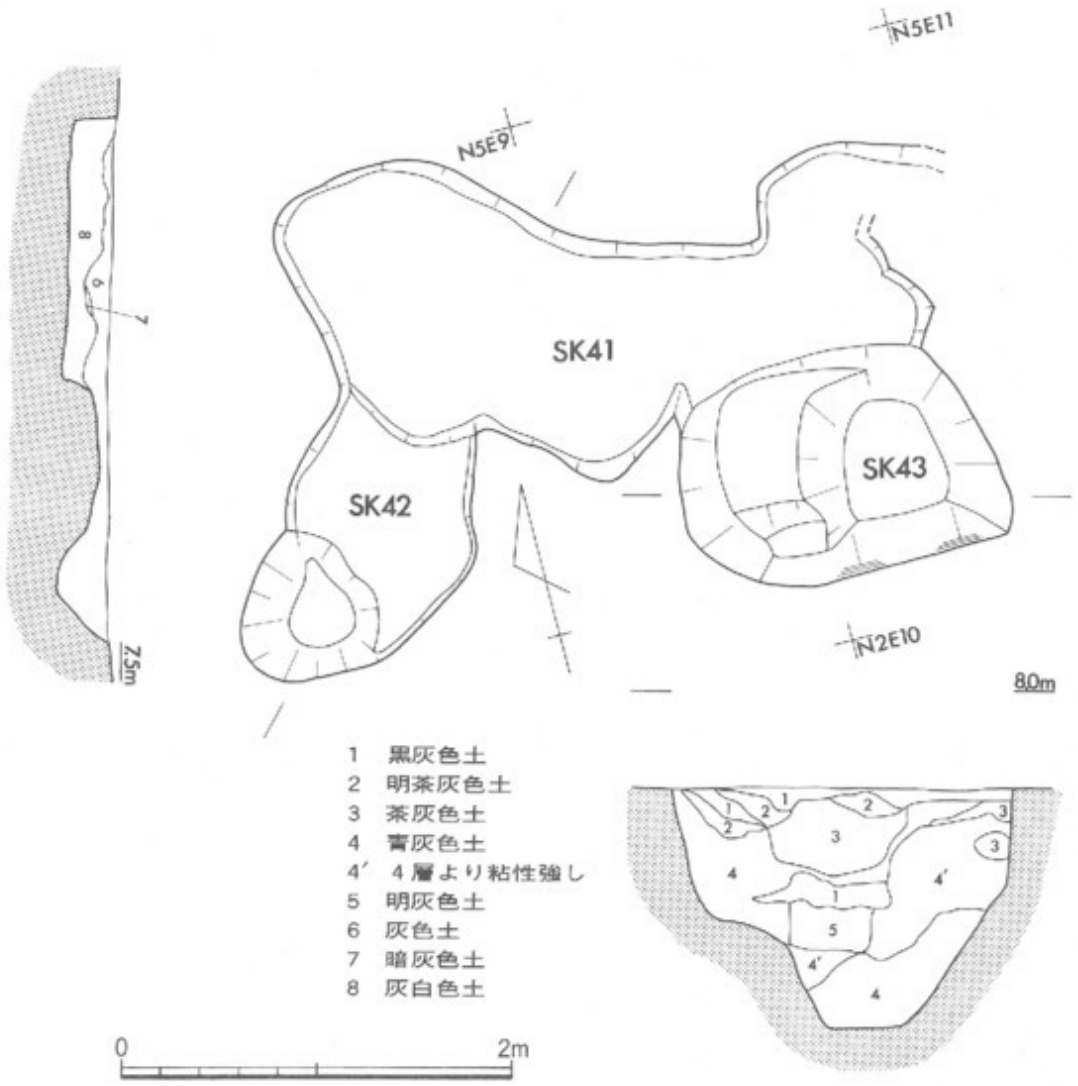
２，５はともに口縁部である。２は口縁部が直立気味に立ち上がり，外面の口縁よりやや下ったところに幅0.4cmの凸帯を貼り付け刻目を施している。５も口縁部でやや外反気味に立ち上がり，外面のやや下ったところに凸帯を貼り付け，刻めを施している。内外面ナデを施す。３，４は胴部



第22図　間内遺跡 ＳＫ－36、40 実測図



第23図　間内遺跡 ＳＫ－37、38 実測図



第24図　間内遺跡 ＳＫ－41、42、43 実測図

の破片である。3は外面に縦方向の擦痕，内面には条痕がみられる。4は内外面とも横方向の条痕が施される。6～10は，弥生土器である。6，7，8は甕の胴部である。6は外面にハケメの後刺突を施し，内面は，上半に斜目方向のハケメ，下半はヘラケズリを施している。7は外面にハケメの後，下半にヘラミガキを行い，肩部に刺突を入れている。内面の上半はハケメ，下半はヘラケズリを施す。8も7と同様で，内面は全体にヘラケズリを施している。9は甕である。口縁部がくの字状に屈曲し，上下にやや幅を持っている。頸部外面に凸帯をめぐらし，刻目を施す。10は壺である。やや長めの頸部を有し，口縁部は外反する。体部は肩がよく張り出している。口縁内面に波状文を施し，頸部内外面に，ハケメ，体部上半に櫛描の波状文と平行線文を交互に入れ，肩部に刺突，下半はハケメの後にヘラミガキを施す。内面頸部以下ヘラケズリを施す。6～8はヘラケズリを施しており，従来後期と考えられるものであるが，ヘラケズリが体部下半に施されることと外面にハ

ケメの後，刺突を入れたりすることより中期中葉と考えられる。10もケズリを施すが，口縁部はあまり上下に肥厚せず，凹線も入れず，櫛描文を入れている。内口外面にも櫛描文を入れ，刺突を入れることからこれも中期中葉と考えられる。11は河原石を磨石に使用したと考えられる。12も河原石を磨石に使用しており，片側が削られたようになっている。13は磨石でかなり面が磨滅しており，側面には敲打痕も残っており，敲石としても使われている。2～5は縄文時代晩期と思われる。

SK－14出土遺物（第25図14～20，26図21）　14～19は縄文土器である。14は浅鉢の口縁部でやや外反気味で，端部は鈍っている。内外面ともナデを施す。15は鉢の体部で外面に条痕，内面に擦痕を施す。16は浅鉢で外面にミガキ，内面に擦痕を施す。17は深鉢の口縁部で直立気味に立ち上がる。外面に擦痕，内面にナデを施している。18は底部付近の破片でやや丸味を持つ。外面は風化著しく調整不明，内面にナデを施す。19も底部で復元径10cmを測る。21は浅鉢で口縁部から体部にかけての破片である。体部途中で屈曲し，口縁部はやや外反気味に立ち上がる。内外面ミガキを施す。20は弥生土器，高杯の筒部である。外面ミガキの後に11条と3条の凹線を施している。14～19，21は縄文時代晩期，20は弥生時代中期後葉と思われる。

SK－15出土遺物（第26図22）　弥生土器の甕の体部である。外面にハケメを施し，下半部にはヘラミガキを施し，肩部に刺突を施す。内面下半部にはヘラケズリを施す。時期は中期後葉である。

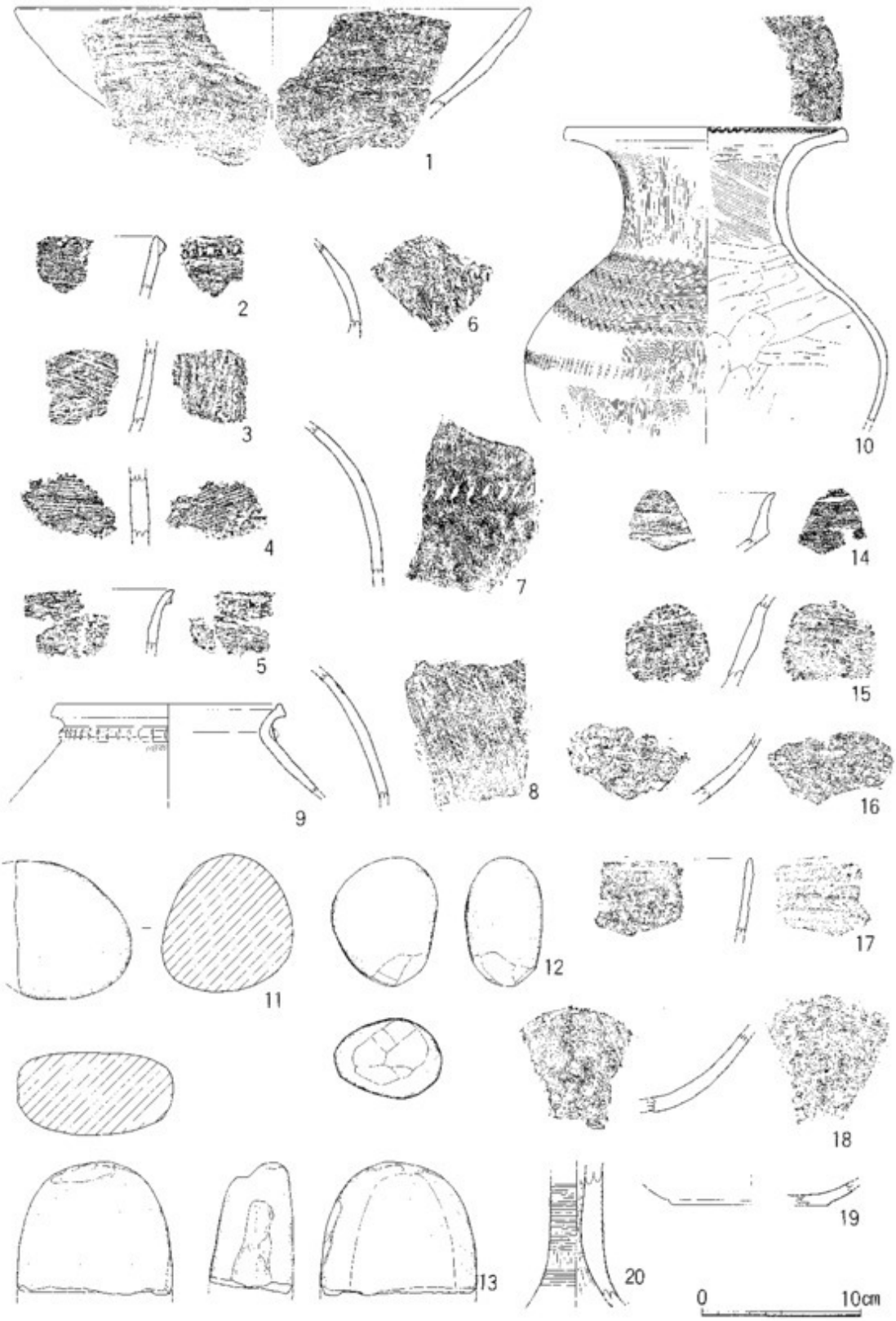
SK－21出土遺物（第26図23）　弥生土器，甕で口縁部が上下に肥厚し，外面に4条の凹線を施す。外面はハケメの後肩部に刺突を施す。内面はハケメを施す。時期は中期後葉と思われる。

SK－28出土遺物（第26図24）　弥生土器，甕で体部外面は，ハケメの後ヘラミガキ，底部外面ヘラミガキ，内面はヘラケズリを施す。

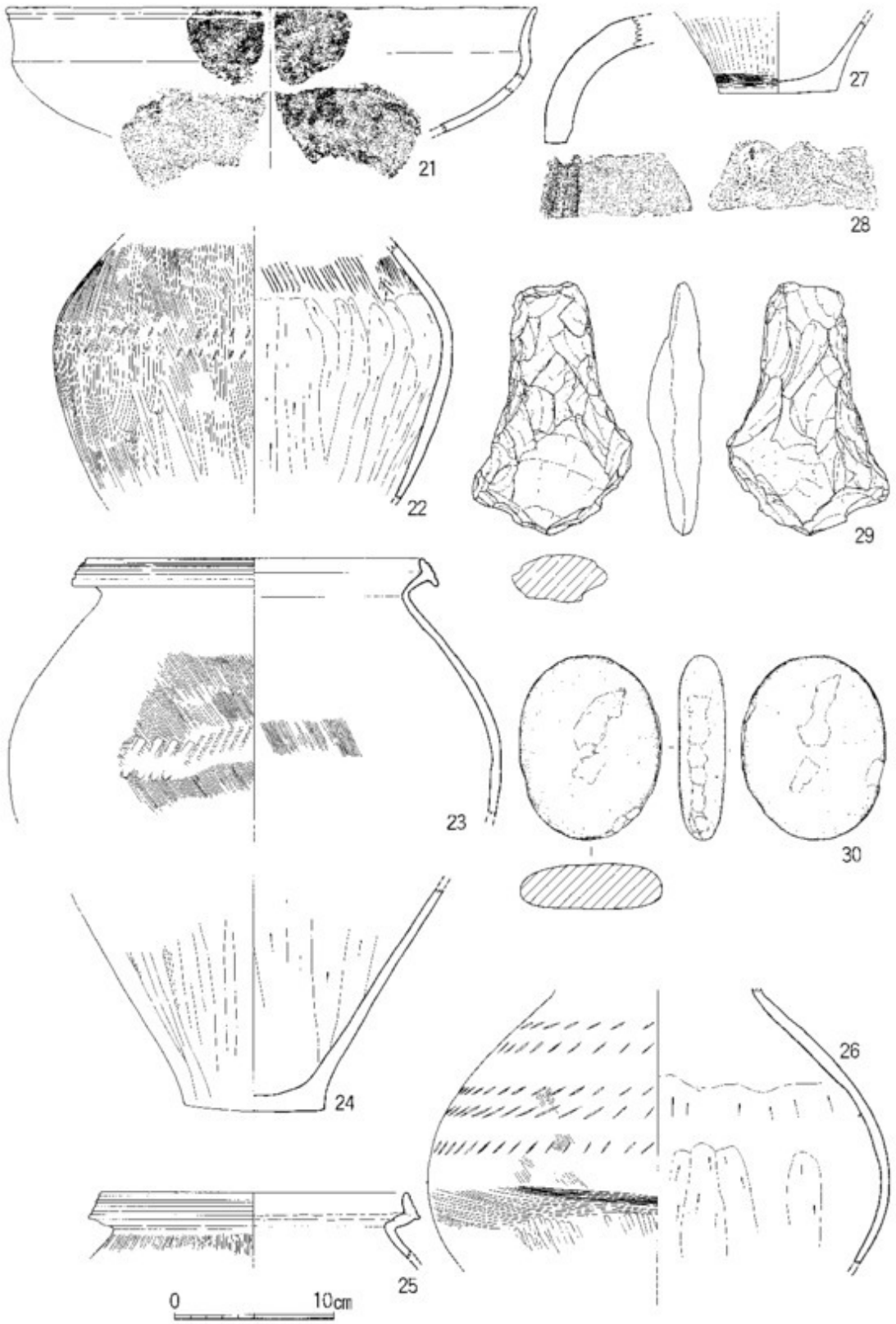
SK－29出土遺物（第26図25）　弥生土器，甕の口縁部で外面に3条の凹線を施す。外面にハケメ，内面にナデを施す。時期は中期後葉である。

SK－34出土遺物（第26図26，27）　26は壺で，外面上半はハケメの後に刺突文を5列施している。体部の最も張り出した部分は，横方向のハケメ，下半はヘラミガキを施す。内面の下半部はヘラケズリを施している。27は，弥生土器の底部で，外面にヘラミガキ，下半部はヨコナデを施す。

遺構外出土遺物（第26図29，30）　29は，打製石斧で体部の中程から刃部に向け広がっており，刃部の幅がかなり広い。幅は，中程が最も厚くなっている。長さ15.8cm，幅10.3cm，重さ420ｇを測る。30は，磨石で表裏ともよく使用されており，両面，側面を敲打に使用したと思われる。



第25図　間内遺跡出土遺物実測図(1)



第26図　間内遺跡出土遺物実測図(2)

第1表(1)　間内遺跡出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
25－1	縄文土器 浅鉢	32.5			体部はやや内湾ぎみに逆ハの字状に開き，口縁に至る。内外面とも横方向のヘラミガキ。	外－黒灰色 内－黒色	砂粒を多く含む。密。	良　好	
－2	縄文土器 鉢				口縁端部外面に突帯を貼り付け刻目を施す。内面は横方向の擦痕，外面は条痕と思われる。	外－明褐色 内－灰褐色	〃	〃	
－3	縄文土器				胴部片。外面は縦方向の擦痕，内面は斜方向の条痕。	外－明灰褐色 内－明褐色	細砂粒を多く含む。密。	〃	
－4	縄文土器				胴部片。外面は斜方向の条痕。内面は横方向の条痕。	外－茶褐色 内－明褐色	砂粒を含む。密。	〃	
－5	縄文土器 鉢				口縁部は外反し，端部近くの外面に突帯を貼り付け，刻目を施す。内外面ともナデ。	外－黒灰色 内－明褐色	砂粒を多く含む。粗。		
－6	弥生土器 甕				肩部片。外面は縦方向のハケメ，内面上半は斜方向のハケメ，下半はヘラケズリ。外面に2列の刺突文が残る。	外－暗灰色 内－黄白色	細砂粒を含む。密。	良　好	
－7	〃				肩部片。外面は縦方向のハケメ後，1列の刺突文を施し，それ以下はヘラミガキ。内面は縦方向のハケメ，一部ヘラケズリ。	外－明灰褐色 内－明灰白色	砂粒を含む。密。	〃	
－8	〃				肩部片。外面は斜方向のハケメ後，縦方向のハケメ。2列の刺突文を施し，それ以下は縦方向のヘラミガキ。内面は縦方向のヘラケズリ。	外－黒褐 内－暗褐色	〃	〃	
－9	〃	14.2			口縁部はくの字状を呈し，端部は上下にわずかに拡張する。頸部に刻目突帯を巡らし，肩部はハの字状に開く。口縁部外面から内面はヨコナデ。突帯下に縦方向のハケメを残す。	黄白色	〃	〃	
－10	弥生土器 壺	17.2			胴部から口縁部にかけてゆるやかなS字状を呈し，口縁端部は上下にわずかに拡張する。口縁内側に4条の櫛描き波状文，肩部に5条の櫛描き波状文を4段とその間に3段の平行沈線文を，その下方に同一工具による刺突文を1列施す。口縁部は内外面ともヨコナデ，頸部以下の外面は縦方向のハケメ後，胴部以下を縦方向のヘラミガキ，内面は斜方向のハケメ，肩部以下はヘラケズリを施す。	外－桃灰白色 内－黄白色	細砂粒を多く含む。	〃	
－14	縄文土器 浅鉢				体部は屈曲した後やや外反ぎみに立ち上がり口縁部となる。端部外面に1条の沈線を施す。内外面ともナデ。	外－褐色 内－暗褐色	砂粒を含む。密。	〃	
－15	縄文土器				体部片。外面は横方向の条痕，内面は擦痕後ナデと思われる。	外－明茶褐色 内－黒灰色	砂粒を多く含む。	〃	
－16	〃				体部片。外面はヘラミガキ，内面は削り状の擦痕	外－明褐色 内－暗褐色	砂粒を含む。密。		
－17	縄文土器 鉢				口縁部はほぼ直立する。外面は横方向の擦痕。内面はナデ。	明灰褐色	砂粒を多く含む。	〃	
－18	〃				底部付近の破片。内面はナデ，外面は調整不明。	外－灰褐色 内－黒褐色	〃	〃	
－19	縄文土器 浅鉢		10.0		円盤上の底部をもち，体部は大きく開く。内面はナデ。外面は調整不明。				
－20	弥生土器 高坏				細長い筒部がゆるやかに開き脚部となる。外面はタテ方向のヘラミガキ後，11条と5条の凹線を施す。内面はしぼり痕が残る。	黄白色	砂粒を含む。密。	良　好	脚部径：3.3cm

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
26−21	縄文土器 浅鉢	33.5			体部は内湾ぎみに開き，屈曲して外反ぎみに立ち上がる。口縁端部外面に1条の沈線を施す。内外面ともナデ。	外−暗褐色 内−明灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	
−22	〃 甕				ほぼ直線的に伸びる胴部はゆるやかにカーブしてハ字状の肩部をつくる。外面は縦方向のハケメ後，櫛状工具による2列の刺突文を，体部下半は縦方向のヘラミガキを施す。肩部内面は斜方向の粗いハケメ，以下は縦方向のヘラケズリ。	黄灰白色	砂粒を含む。密。	〃	胴部最大径：25cm
−23	〃	21.2			胴部はゆるやかにカーブしてハの字状の肩部となる。口縁部はくの字状に屈曲し，上下に伸びる口縁帯をつくり，そこに4条の沈線を廻らす。体部は内外面とも斜方向のハケメ，口縁部はヨコナデを施す。胴部外面に，櫛状工具とヘラ状工具による刺突文を施す。	外−暗灰色 内−黄白色	細砂粒を含む。密。	〃	胴部最大径：31.0cm
−24	弥生土器		9.0		平底。体部外面は縦方向のハケメ，内面は縦方向のヘラケズリ。底部外面は横方向のヘラミガキ，内面は，不定方向のヘラケズリ。	黄褐色 外面一部黒色	1〜2mmの砂粒を含む。	〃	
−25	弥生土器 甕	9.3			口縁部はくの字状に屈曲して内傾ぎみに立ち上がり，外面に3条の沈線を廻らす。肩部外面はタテ方向のハケメ，内面はナデ。	黄灰白色。断面は黒灰色。	石英・長石を多く含む。	〃	
−26	弥生土器 壺				胴部はゆるやかにカーブし，ハの字状の肩部となる。肩部外面は縦方向のハケメ後，ヘラ状工具による5段の刺突文を廻らす。胴部は横方向のハケメ後はナデ，下半を縦方向のヘラミガキ，肩部は上半はナデ。以下は縦方向のヘラケズリ。	外−黄白色 内−灰色	細砂粒を多く含む。密。	〃	胴部最大径：29.0cm
−27	弥生土器		7.4		平底。外面は縦方向のヘラミガキ後基部をヨコナデ。底部はナデ	外−黄白色 内−明灰色 断−黒灰色	1mm以下の石英・長石を多く含む。	〃	
−28	瓦				外面は丁寧なナデ仕上げ，内面は布目痕を残す。	青灰色	砂粒を多く含む。	〃	

第1表(2) 石器計測表

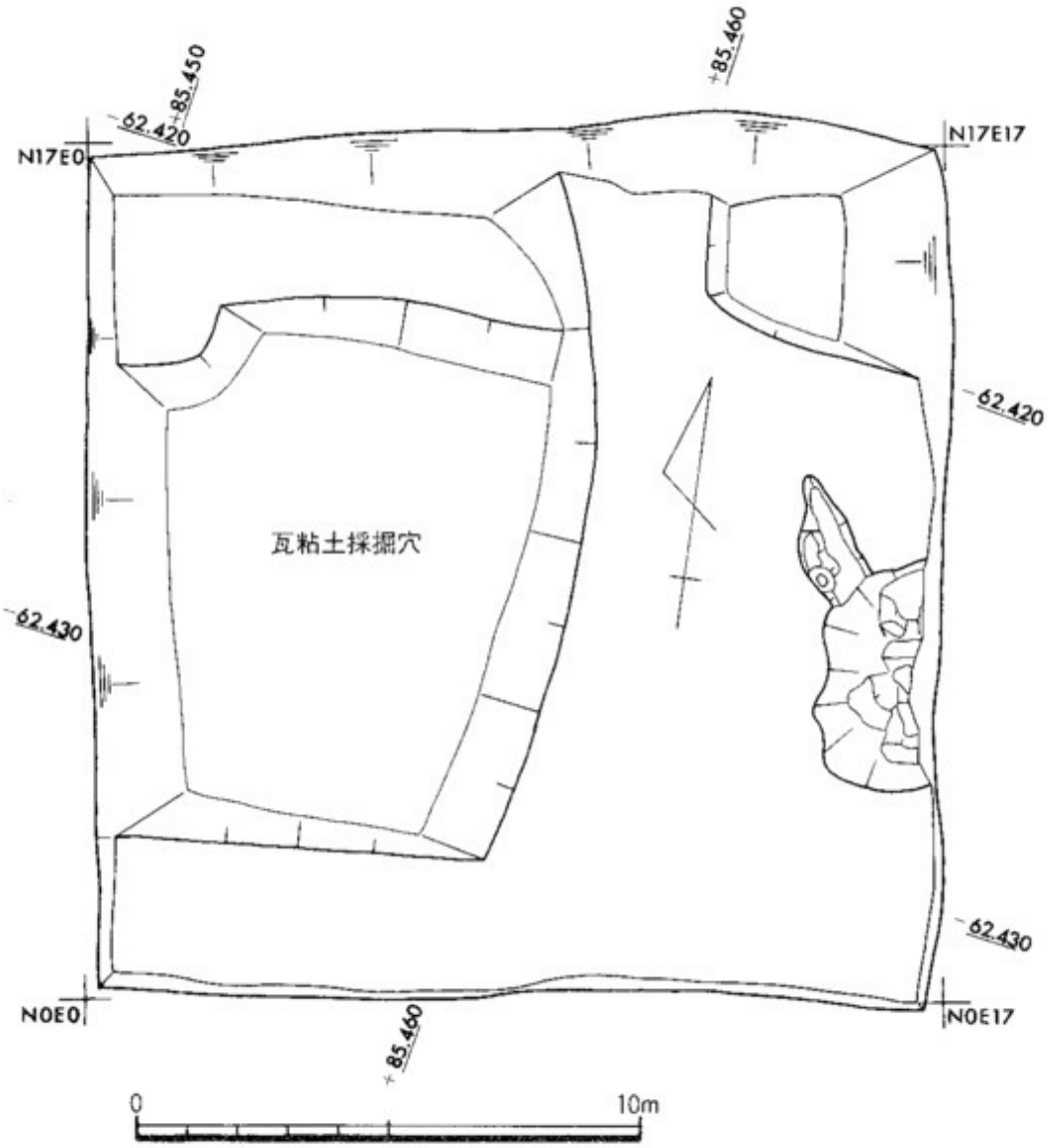
No	種類	長幅(cm)	短幅(cm)	厚さ(cm)	重量	備考
25−11	台石？		8.5	8.0	855	火気を受けたと思われ，一部黒く変色する。
−12	磨石	8.2	6.6	5.0	370	長径部の片側を使用。
−13	〃		10.0	5.1	650	側部に敲打痕。
26−29	打製石斧	15.8	10.3	3.3	420	全体に粗い剥離痕。側辺部は摩滅。
−30	磨石	11.5	9.0	2.9	455	側部と平坦部中央に敲打痕。

太 平 遺 跡

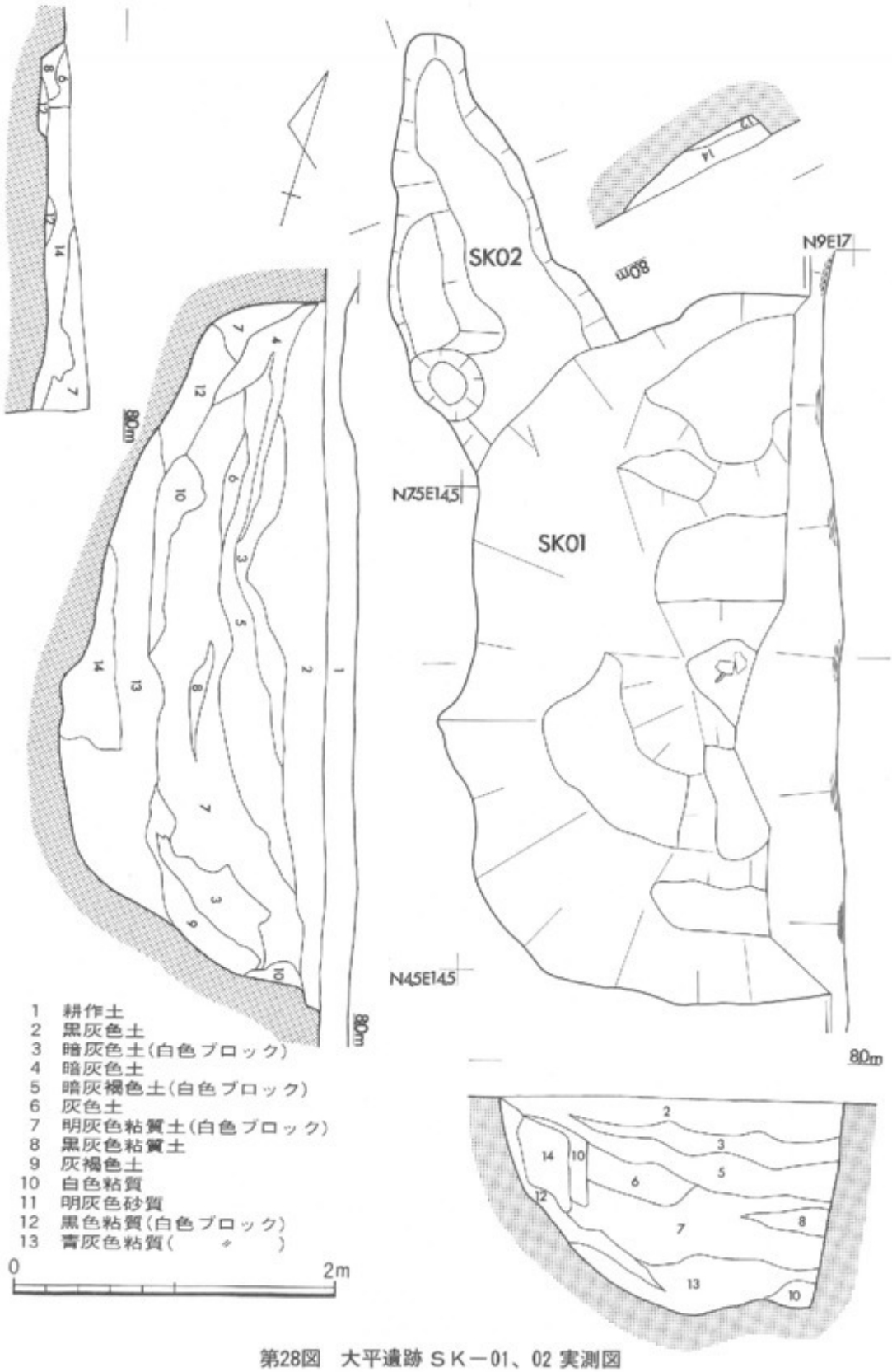
検出した遺構

調査区の東側は畑，西側は水田となっている。土層は，耕作土が厚さ20～40cmあり，その下は明灰白色土となっている。ここでは明灰白色土が厚さ2.0m以上あり，間内遺跡において確認されたものより厚い堆積を示している。また，間内遺跡においては灰白色土の下から灰色砂層が出ている部分もあったが，大平遺跡においては確認していない。

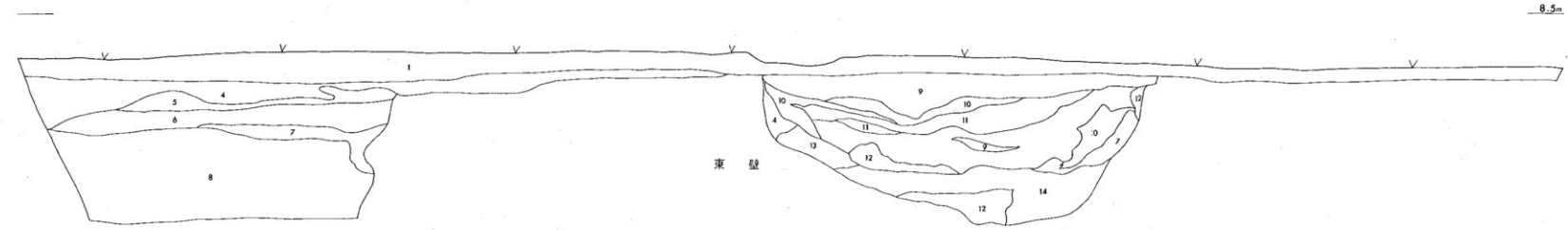
遺構は，土壙を4基検出している。内2基は，最近まで続いていた瓦粘土採掘の痕である。調査



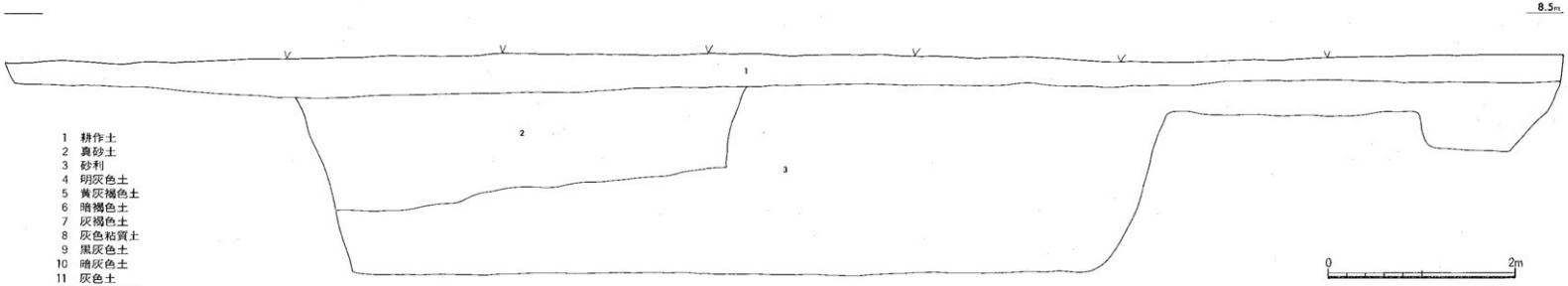
第27図　大平遺跡遺構配置図



第28図　大平遺跡 ＳＫ－01、02 実測図



東　壁

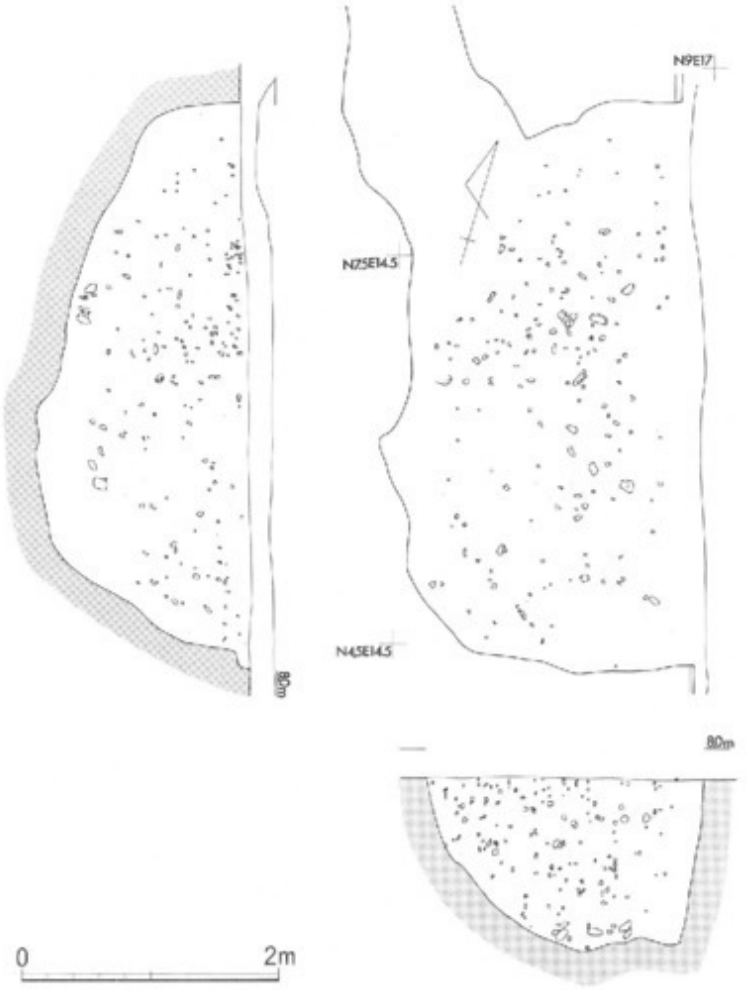


西　壁

1　耕作土
2　真砂土
3　砂利
4　明灰色土
5　黄灰褐色土
6　暗褐色土
7　灰褐色土
8　灰色粘質土
9　黒灰色土
10　暗灰色土
11　灰色土
12　白色粘質土
13　明灰色砂質
14　黒色粘質土

第29図　大平遺跡調査区土層図

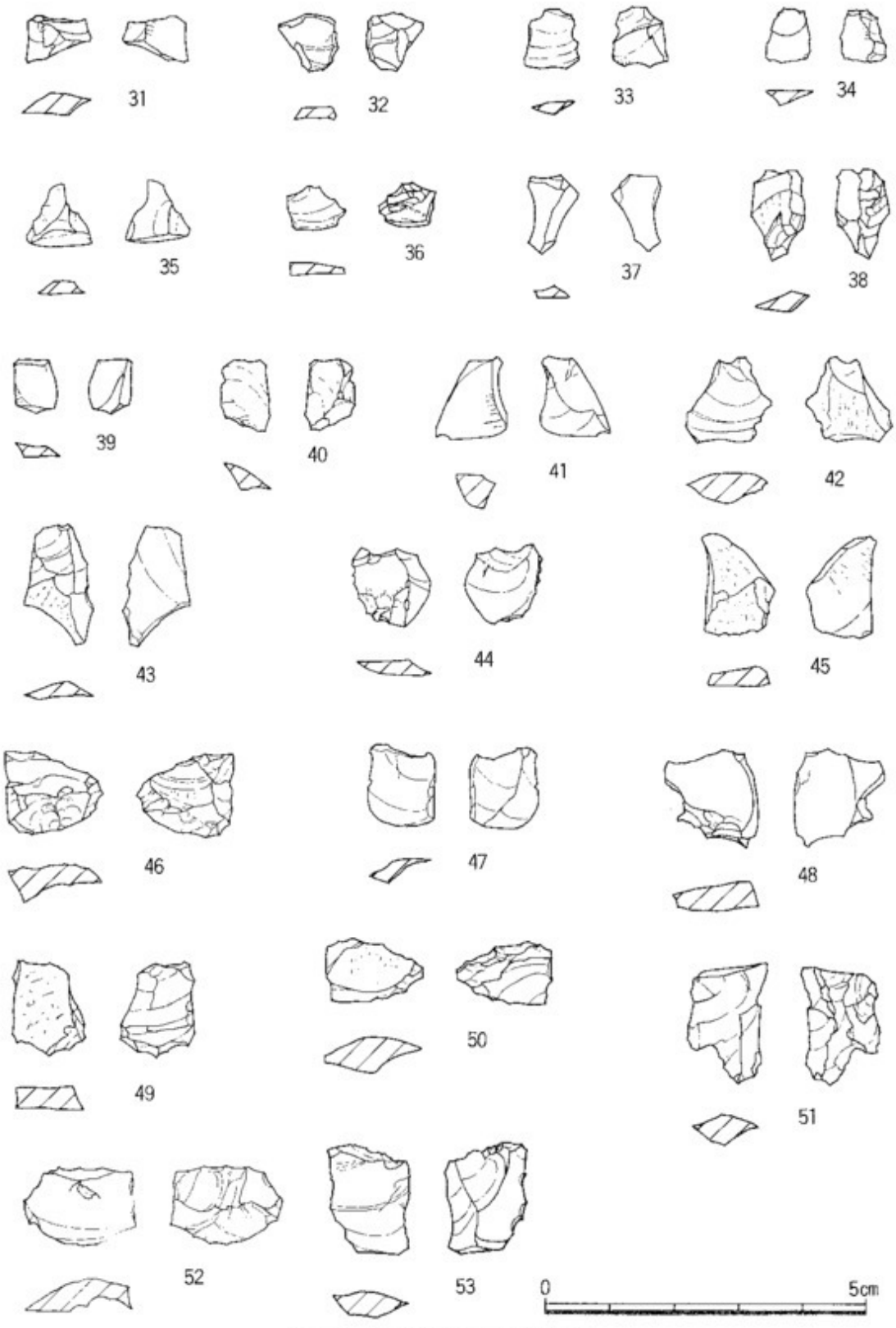
区西側の大きいほうは，10×14mの方形を呈しており，深さは2.0mを測る。この土壙には拳大の礫にガラス瓶等のがらくたを含んでおり，一部真砂土も入れて埋めている。調査区北東コーナーの土壙は，4×4.5m，深さ1.5mを測る。埋め土は，上から黄灰褐色土，暗褐色土，灰褐色土，灰色粘質土の順である。2つの土壙とも灰白色粘質土を瓦粘土に使用するために掘削している。SK－01，02も灰白色粘質土に掘り込まれている。埋め土は黒色粘質土等の土が入っており，瓦粘土採掘の土壙とは異っている。



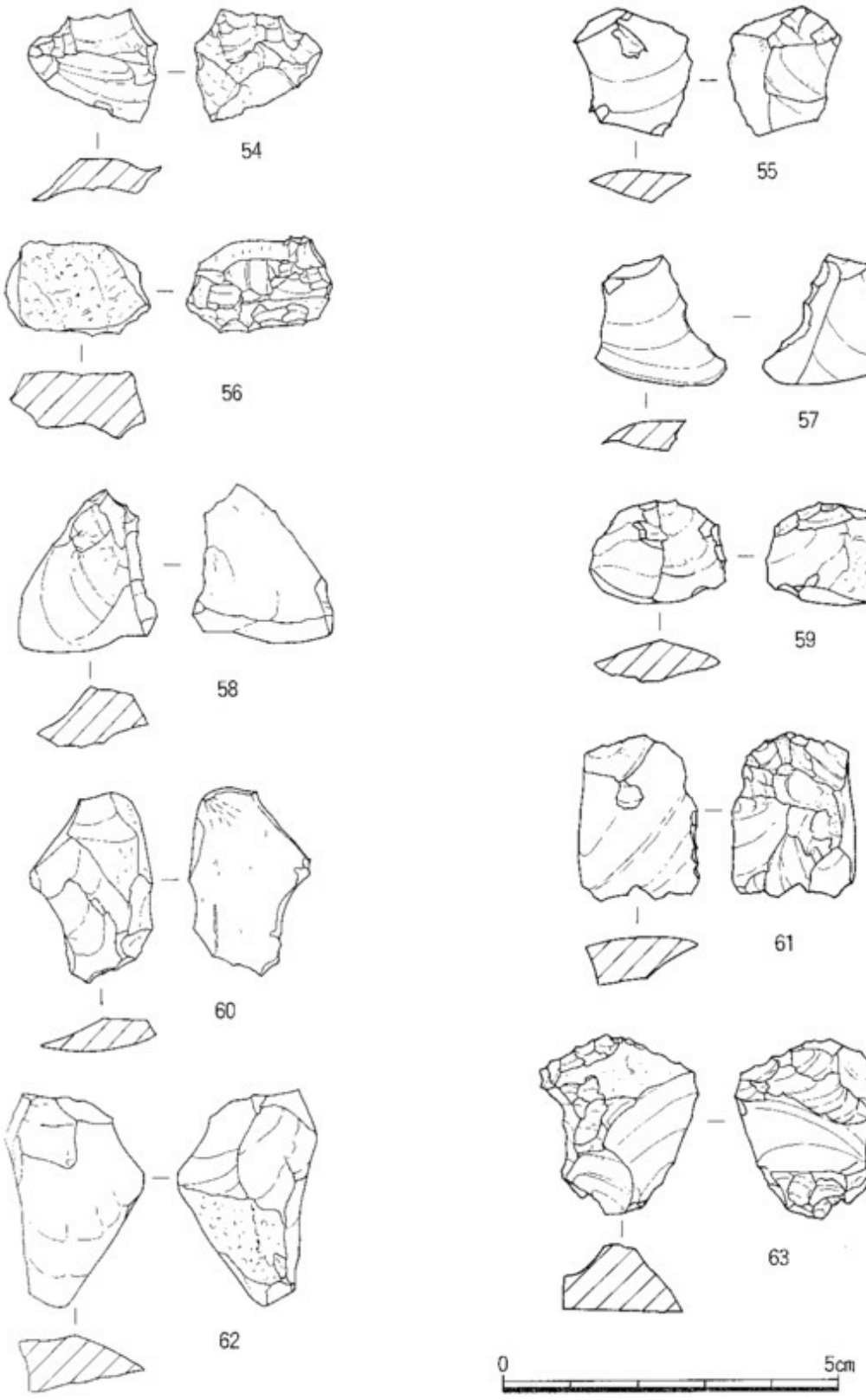
第30図　大平遺跡ＳＫ－01遺物出土状態

SK－01　調査区の東側に位置し，一部調査区域外にまで及んでいる。平面形は，不整楕円形を呈す。規模は，長軸4.2m，短軸2.0m以上，深さ1.7mを測る。底面と壁は，灰白色粘質土で構成されている。床面は，現状で長軸1.0m，短軸0.8mを測り，上面に比べてかなり小さくなっている。壁は，下面は緩やかで上面近くで急になっており，途中に幅0.5m～1.0mのテラス状の平坦面を持つ。埋め土は，上層から黒灰色土，暗灰色土，灰色土，明灰色粘質土，黒色粘質土，青灰白色粘質土が互層をなしている。北西部分でSK－02と切り合っているが，新旧関係は不明である。遺物は，碧玉のチップが65点と石が数点出土している。チップは水平分布をみると全面にあり，垂直分布も上から下まで一様に出土しており，石が下部に集中している。

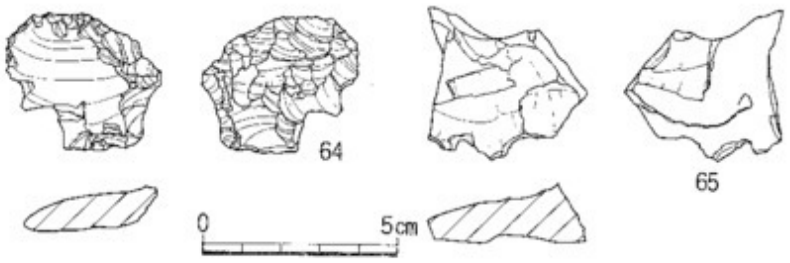
SK－02　平面形は，細長い不整楕円形を呈す。規模は，長軸2.2m以上，短軸1.28m，深さ0.35mを測る。床面は，北側が高く南側へ向け緩く傾斜している。壁は，垂直よりやや開き気味に立ち上がる。西側にテラス状の平坦面とピット状の落ち込みがある。埋め土は，明灰色粘質土，黒色粘



第31図　大平遺跡出土遺物実測図



第32図　大平遺跡出土遺物実測図

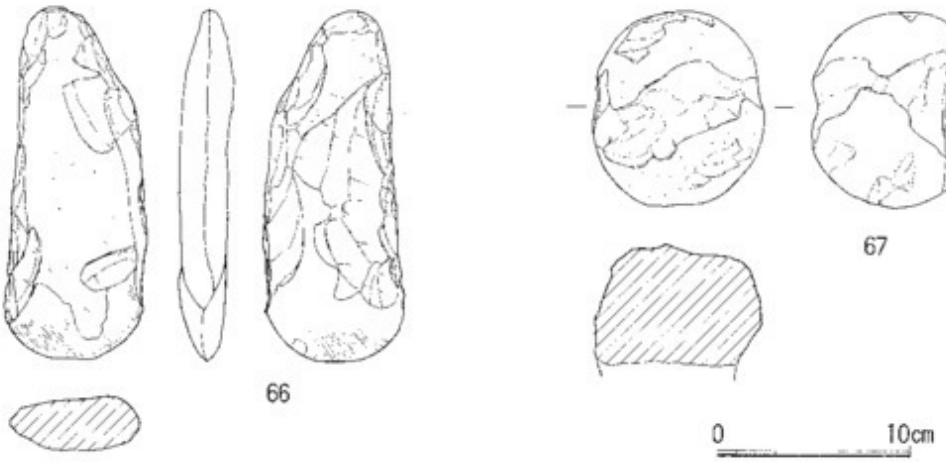


第33図　大平遺跡出土遺物実測図

質土，明灰色砂質土である。SK－01と切り合っているが，新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

出土遺物（第31，32，33図）

第31図33はSK－02から出土し，その他は全てSK－01から出土している。35，49，63，64は黒曜石で，65は明灰白色を呈する石である。他は碧玉のチップである。碧玉は未製品等は見られず，す



第34図　蟹穴遺跡出土遺物実測図

べてがチップである。かなりのチップが礫皮面を残している。碧玉のチップは玉作の製造過程で生じたものと思われる。

蟹　穴　遺　跡

蟹穴遺跡は，大平遺跡の南東30mの水田中に位置している。この水田は，ビニールハウスによって耕作が行われており，遺物はこの耕作中に出土した表採資料である。この他に土器片も出土しているが小片のため詳細は不明である。第34図66は，局部磨製の打製石斧である。頭部はやや細く中程から刃部にかけては同じ幅である。刃部はよく磨かれており，斜方向の擦痕が残る。67は，礫の周囲が使用により磨滅し，中央は帯状に剝離している。石錘もしくは磨石として使用したものと思われる。

ま　と　め

間内遺跡出土の弥生土器の甕22，24，26は，内面胴下半部にヘラケズリが施されている。石台遺跡出土[1]の甕も同様のものがあり，中期後葉とされており，同時期と考えたい。10の壺は，体部外面と口縁内面に櫛描文様が施されており，形態からも中期と考えられる。[2] しかし，内面の頸部以下には，ヘラケズリが施されている。従来内面頸部以下のヘラケズリは後期からとされる。この壺は，形態文様から中期後葉以降に下るとは考えにくいものであり，中期の範疇に含めたい。

間内遺跡では，土壙43基を検出している。土壙の形態は不整形で，かなりの土壙が切り合う。土壙は，不整方形７基，不整長方形10基，不整楕円形24基，その他２基である。これらの土壙は，平面形を意図して掘られたとは考えられず，結果的に不整形となったものであろう。

時期の決定出来る土壙は，SK－12～15，21，28，29，34，41である。SK－12からは縄文時代晩期の土器，13からは縄文時代晩期，弥生時代中期中葉，後葉の土器，14からは縄文時代晩期，弥生時代中期後葉，15から弥生時代中期中葉，21から弥生時代中期後葉，28から弥生時代中期中葉，29から中期後葉，34から中期中葉，41から布目瓦が出土している。この内，縄文時代晩期と弥生時代中期の遺物が出土したものは，弥生時代中期と考えられる。SK－12は縄文時代晩期のみ出土しているが，後世の流入と考えられる。SK－41は，極めて浅い土壙で瓦が出土したことから上限は奈良時代と考えられる。土壙は，切り合うものがあるが新旧関係は不明である。

同じ意宇平野の中竹矢遺跡[3]において同様の土壙が検出され，ここでは貯蔵穴，ごみ穴等の性格が考えられている。しかし，今回調査で検出した土壙からは，遺物が出土したものは限られること，土壙の断面が袋状になったり，床面にピット等はみられない。遺跡の周辺では最近まで瓦粘土の採掘が行われており，太平遺跡においてその痕跡を確認している。これらのことより，土壙が粘土採掘用のものの可能性があり，中竹矢遺跡ではⅡ区において灰白色土層が削り取られた部分がある。これらのことより，中竹矢Ⅰ区の土壙そのものは，弥生～古墳時代のものであるが，奈良時代には，瓦窯址があることより、粘土採集の可能性もある。窯址の近くで土壙を検出した例として、香川県西村遺跡[4]がある。大平遺跡において検出した土壙は，玉作関係のものと思われる。これらのことより，間内，大平遺跡の付近には，集落址等の遺構が存在するものと思われる。

注

1) 足立克己　「石台遺跡」
『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－Ｎ－』　島根県教育委員会　1983年
2) 島根県立八雲立つ風土記の丘史料館
『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ，弥生式土器集成』　1977年
3) 註１に同じ
4) 広瀬常雄　「日本考古学協会昭和58年度大会資料」(３－２)　香川県日本考古学協会　1983年

第2表　大平遺跡・蟹穴遺跡出土石器計測表

No	種　類	長　幅(cm)	短　幅(cm)	厚　さ(cm)	重　量(g)	材　質	備　考
31−31	剝　片	1.2	1.0	0.3	1.0	青メノウ	暗緑色
−32	〃	0.9	0.9	0.15	1.12	〃	暗緑色
−33	〃	0.9	0.8	0.2	0.03	〃	暗緑色
−34	〃	0.85	0.7	0.2	0.05	〃	暗緑色
−35	〃	1.0	1.0	0.2	0.05	黒曜石	黒　色
−36	〃	0.9	0.65	0.2	0.1	青メノウ	暗緑色
−37	〃	1.2	0.75	0.2	0.05	〃	灰黄緑色
−38	〃	1.4	0.8	0.3	0.3	〃	暗緑色
−39	〃	0.8	0.7	0.2	0.01	〃	暗緑色
−40	〃	1.1	0.8	0.3	0.1	〃	暗緑色
−41	〃	1.2	1.1	0.5	0.4	〃	暗緑色
−42	〃	1.4	1.2	0.5	0.45	〃	暗緑〜緑白色
−43	〃	1.8	1.0	0.2	0.3	〃	暗緑色
−44	〃	1.2	1.2	0.2	0.34	〃	暗緑〜明緑灰色
−45	〃	1.6	1.0	0.3	0.2	グリーン・タフ	灰黄緑色
−46	〃	1.5	1.2	0.5	0.8	青メノウ	暗緑色
−47	〃	1.3	1.0	0.3	0.23	〃	暗緑色
−48	剝　片	1.4	1.4	0.4	0.8	青メノウ	暗青緑〜薄緑色
−49	〃	1.5	1.1	0.3	0.6	黒曜石	黒　色
−50	〃	1.5	1.0	0.5	0.65	青メノウ	暗緑色
−51	〃	1.8	1.1	0.5	1.2	〃	暗緑色
−52	〃	1.7	1.2	0.4	0.75	〃	暗緑色
−53	〃	1.7	1.2	0.4	0.8	〃	暗緑色
32−54	〃	1.9	1.7	0.4	1.6	〃	暗緑灰〜暗緑色
−55	〃	1.8	1.7	0.4	1.3	〃	暗緑色
−56	〃	2.0	1.3	1.0	2.6	〃	暗緑色
−57	〃	1.9	1.9	0.4	1.52	〃	暗緑色
−58	〃	2.4	2.1	0.9	2.42	〃	白緑色
−59	〃	2.0	1.5	1.5	1.5	〃	暗緑〜灰黄緑色
−60	〃	2.8	1.8	0.5	3.4	玉髄？	赤錆色
−61	〃	2.4	1.8	0.6	3.2	青メノウ	暗緑色
−62	〃	3.2	1.9	0.8	4.12	〃	明緑灰色
−63	〃	2.6	2.3	0.95		黒曜石	二次調整がみられる。
33−64	〃	4.0	3.5	0.9		〃	片面に剝ぎ取りが施されている。
−65	〃	4.0	3.9	1.5	14.0	？	黄灰色
34−66	局部磨製石斧	18.1	7.0	0.2	500	？	側辺部は摩滅が著しい。
−67	石　錘	10.0	8.8	7.1	750	？	磨石の転用品か。

上小紋遺跡・向小紋遺跡

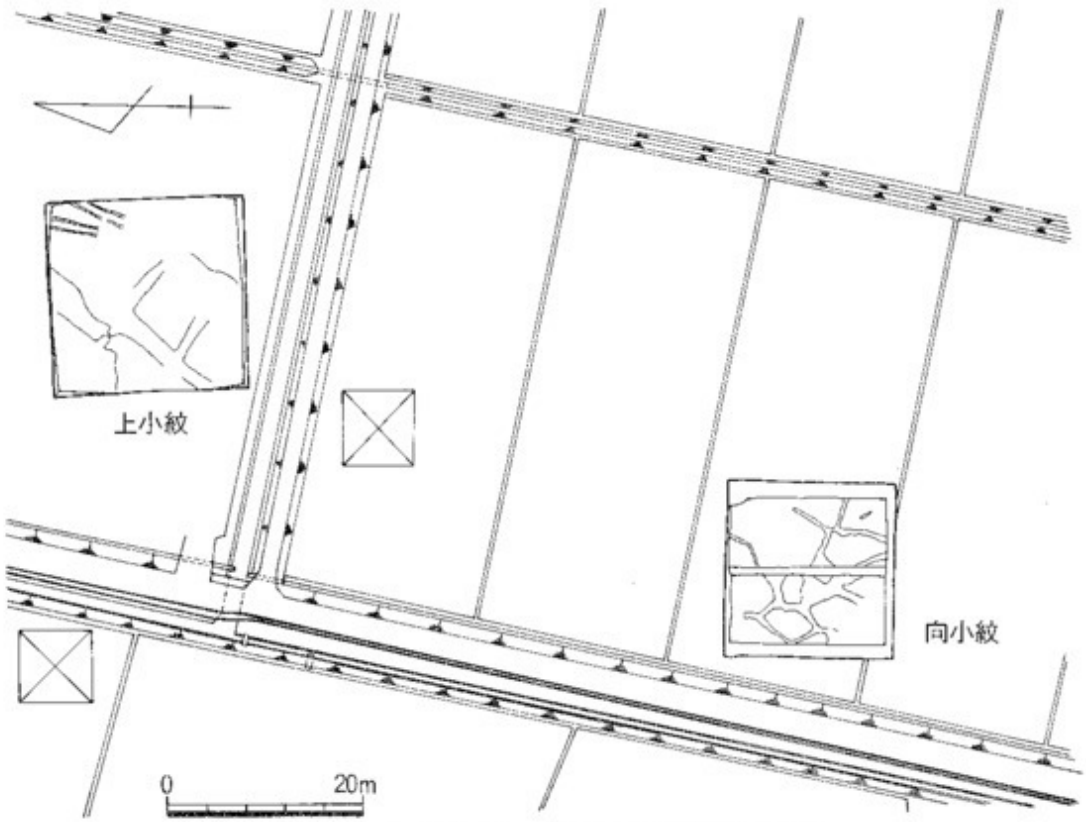
――松江市竹矢町――

V　上小紋遺跡・向小紋遺跡

遺跡の概要　上小紋遺跡の所在地籍は松江市竹矢町39－1で，向小紋遺跡は松江市竹矢町55－2，56－4となっており両者は約50m隔たっている。

両遺跡は意宇川下流平野の中央やや北よりの水田中に位置している。ここは地形からすると平野の北辺に東西に連なる丘陵の裾がゆるやかな傾斜をもって南方へ降下し，やがて平坦面を形成するところで，現在両遺跡のレベルはほぼ同じとなっている。

北側に位置する上小紋遺跡は昭和58年7月14日～同年12月25日にかけて20m×20mの調査区を設定して調査を実施した。検出した遺構は耕作土下約0.8mの層から水田跡7区画，その下層から8区画，その下層から2区画の計17区画がある。これらは後述するように形態も不整形で，面積も平均20m²～30m²とかなり狭いものであった。この他調査区東壁沿いでは長径13m，短径12m，深さ1.2mを測るSK01を検出した。このSK01は調査区北東隅及び南東隅から流下する水を貯水する施設であろうと判断された。これらの遺構とともに所謂ナスビ形着柄鍬，田下駄，天秤棒，木錏，石庖丁



第35図　上小紋遺跡・向小紋遺跡調査区配置図

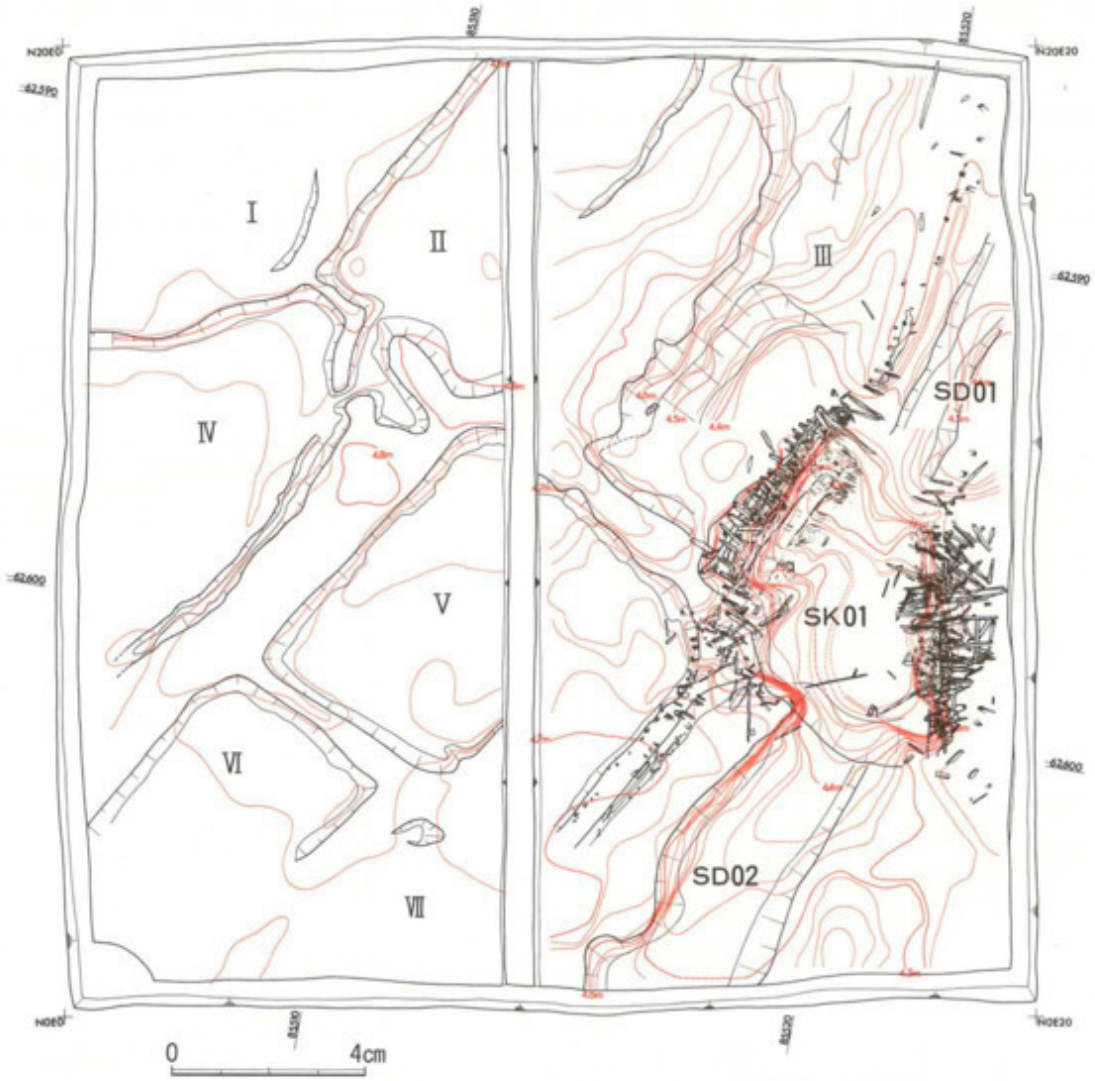
形木製品等が出土した。時期を明確に示す遺物は僅少であったが，木製品等の様相から弥生時代後期～古墳時代初頭の時期に属すものであろうと推定された。

上小紋遺跡

検出した遺構

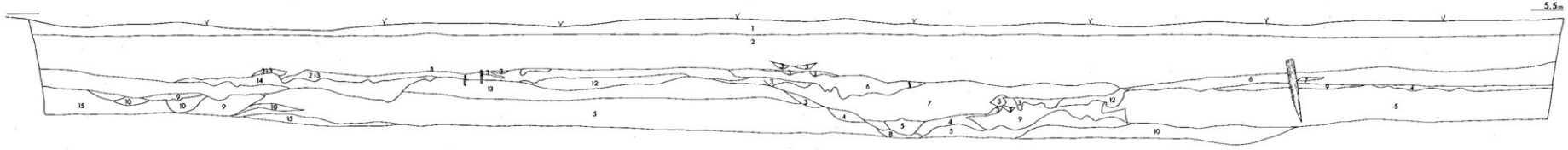
今回の調査で検出した遺構は水田跡17区画，SK01を構成するしがらみ状遺構２，溝状遺構２であった。水田跡は３層に分かれて検出されたので以下説明を加えるにあたっては上層・中層・下層の水田跡と呼称することにした。

各遺構の配置は調査区の東壁に接して溜枡状遺構SK01が設けられ，その西側は調査区内を斜に走

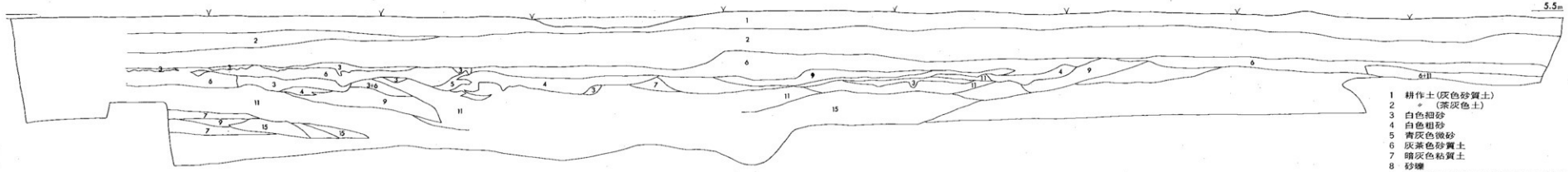


第36図　上小紋遺跡遺構配置図

東　壁

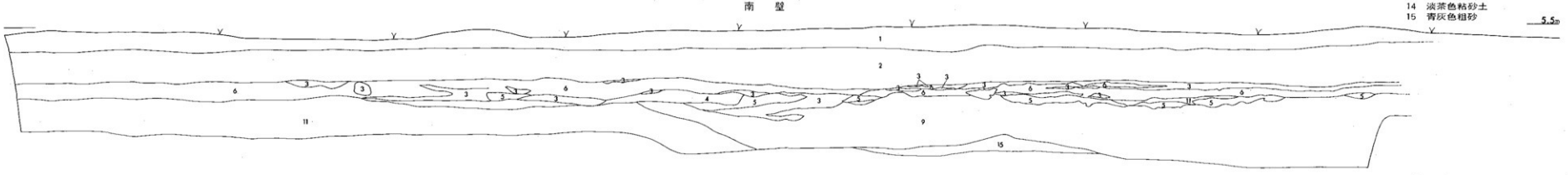


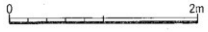
西　壁



1　耕作土(灰色砂質土)
2　〃　(黒灰色土)
3　白色細砂
4　白色粗砂
5　青灰色微砂
6　灰茶色砂質土
7　暗灰色粘質土
8　砂礫
9　暗灰色粘質土と明灰色粘質土が混在
10　青色細砂
11　灰色粘質土
12　淡茶色粘質土
13　灰白色粘質土
14　淡茶色粘砂土
15　青灰色粗砂

南　壁





第37図　上小紋遺跡調査区土層図

る畦によって大小の水田跡を構成している。先の溜枡状遺構には調査区北東隅から出る溝状遺構SD01と調査区南壁から走る溝状遺構SD02がそれぞれ注ぎ込んでいる。このSD01・SD02は調査区に対しいずれも斜の方向に走り，南北畦と略同方向となっている。

上層の水田跡

ここで云う上層とは現在の耕作土から80cm下の灰白色粘質土層を示す。この層の水田跡は計7区画あって，いずれも不整形な略方形を示すものである。

この水田跡面は微粒砂と泥炭土が混在する土層によって覆われており，その間に白色微粒砂が入り込んでいた。このため覆土と水田面とは剝離するかたちで容易に分離させることができた。

覆土を除去することによって検出された水田は幅20cm～40cmを測る畦に画されたものである。畦の断面はいずれも不整形なカマボコ形を呈し，隆起は顕著ではない。むしろ光線をすかしてみるとかすかに陰が帯状を成す程度であった。

ところで，先述したように白色微粒砂が上面を覆うことや，検出された畦の断面がきわめて低いことは洪水等によって冠水した可能性が考えられよう。

以下検出した水田跡について北西隅から順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…Ⅷと号数を付して表示し説明を加えることとする。

Ⅰ号水田跡　調査区北西隅の最も高い場所に位置している。Ⅱ・Ⅳ号水田跡とを画すわずかな落差が南北に一条の辺として認められるのみである。他の各辺は調査区外であるため全体の規模は明らかにしえないが，検出面積は約28m²を測る。この水田面は周辺の畦を検出した折には既に下層の礫層上面が露呈し，耕作土等は失われているものと判断された。本来はこの検出面に耕作土が乗り，畦もあったと考えられるから，現高よりも20cm以上は高いものであったと推定される。

Ⅱ号水田跡　Ⅰ号水田跡の東辺に接する形で位置するもので，畦は西辺，南辺及び東辺の一部が認められる。ただ北辺が調査区外となるため全体の規模は明らかにしえないが検出面積は約22m²を測る。南辺の畦に排水の施設が認められ，ここを通過した水は後述するⅣ号水田跡へ流下するかたちとなっている。水田面の土は砂の混在する茶灰色土となっており，多数の足跡が認められた。

Ⅲ号水田跡　Ⅱ号水田跡の東方に幅0.8～1.5mの畦状の平坦面を隔て位置するものである。東辺は溜枡状遺構SK01・SD01の西辺のしがらみと一致しており，南辺を通す畦はⅤ号水田跡と共有する形となっている。一方北辺は調査区外となっており，検出面積は約18.7m²を測る。

本水田跡の床面は西側から東へ約20度の傾斜をもって下降している。その東辺方向はSD01，SK01の西辺と同方向となっている。

Ⅳ号水田跡　Ⅰ号水田跡の南にあってⅡ・Ⅴ・Ⅵ号水田跡に取り囲まれる形で営まれている。西辺は調査区外になるため，全体の規模・形態は不明であるが検出面積は約15m²を測る。前述し

第38図　上小紋遺跡上層検出水田址実測図

たようにⅡ号水田跡から流下した水を受け入れる水口がある。ここでもⅡ号水田跡と同様多数の足跡が確認された。

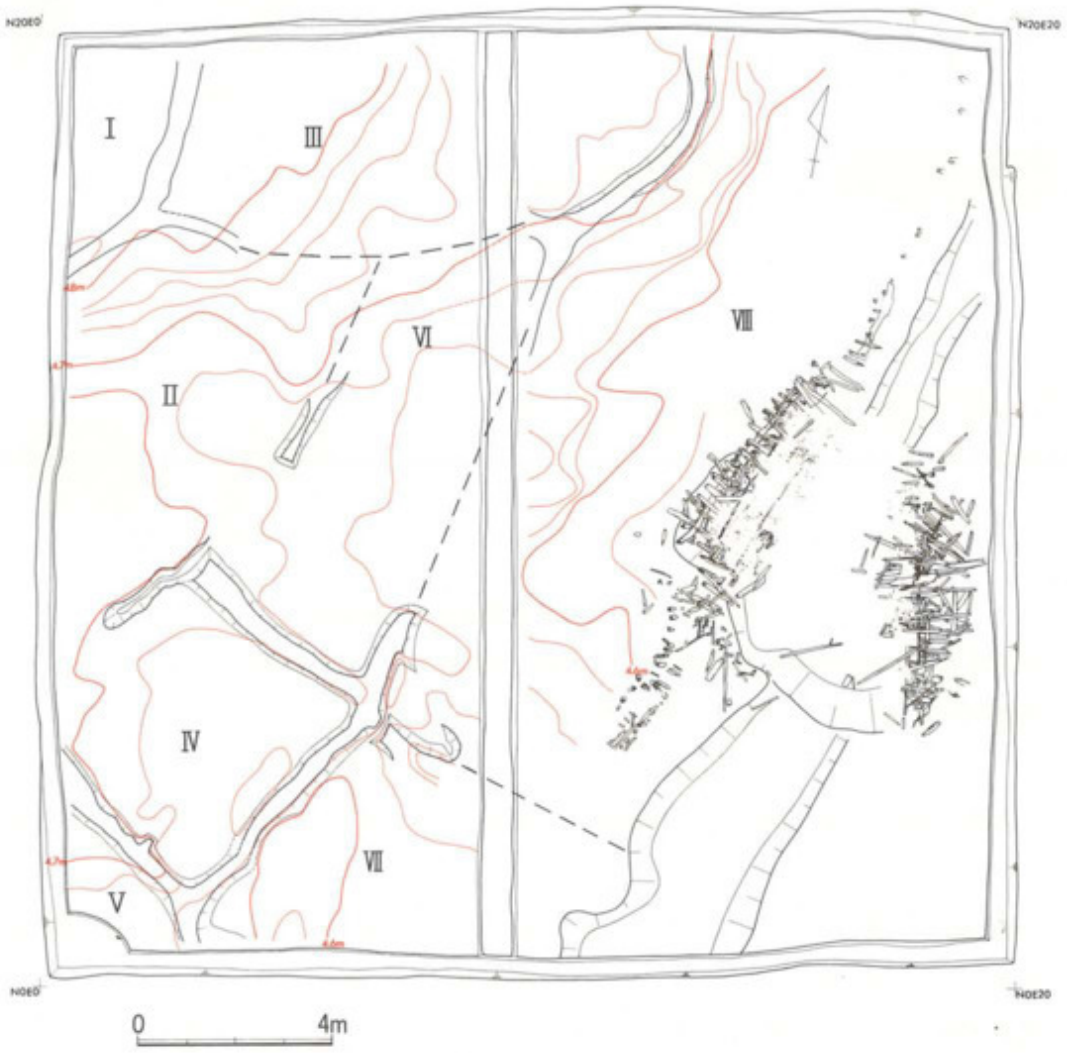
Ⅴ号水田跡　調査区中央で検出した全形の把握できる唯一の水田跡で，方形を呈し，面積は約30㎡を測る。Ⅳ号水田跡の水口の直前でこの水田跡に向いている水路の一端がある。

Ⅵ号水田跡　調査区南西隅に位置する長方形を呈すものである。南辺は調査区外となっているため全体規模は不明であるが検出面積は約16㎡を測る。

Ⅶ号水田跡　Ⅴ号水田跡の南に位置し，北西隅と推定される畦の一部が認められるのみである。

中層の水田跡

上層の水田跡精査の後，その下の中層についても精査を試みたところ，数条の畦を検出した。



第39図　上小紋遺跡中層検出水田址実測図

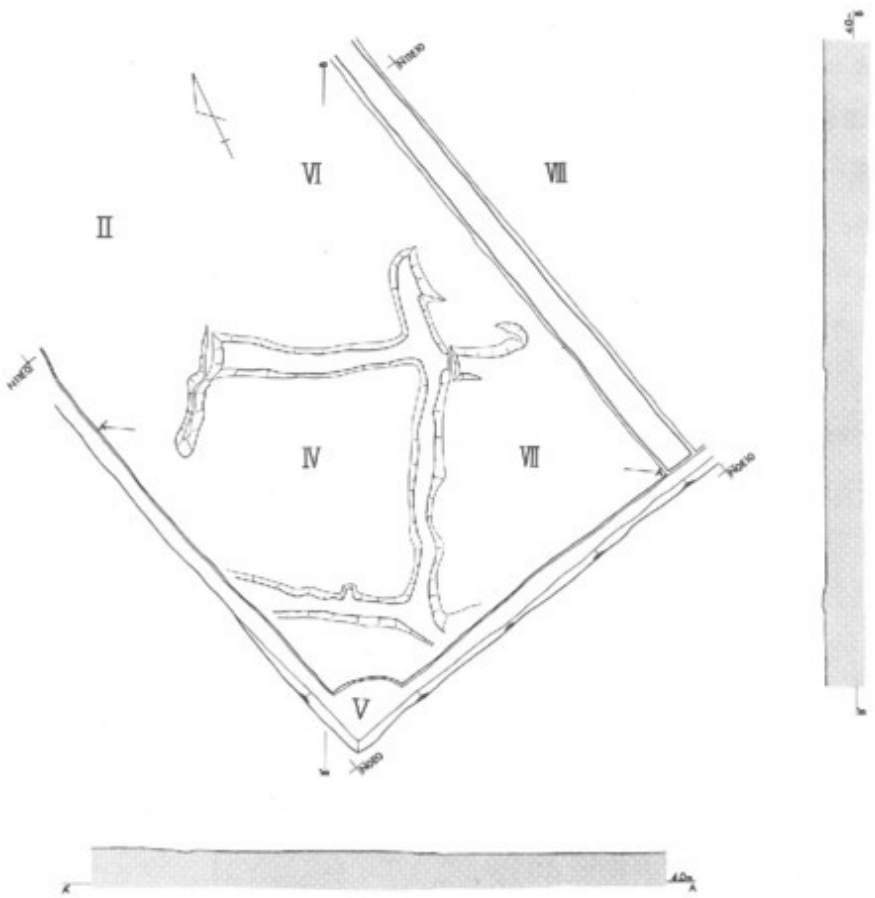
第40図　上小紋遺跡中層検出遺構実測図

ただし検出した水田跡は4辺が完結するものは1区画にすぎず他は小間切れの状態であった。なお，各畦がSK01・SD01・SD02とほぼ同方向，あるいは直行する方向を示すことは上層と同様であった。

以下中層で検出した水田跡について北西隅から順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…　と号数を付して表示し説明を加えることとする。

Ⅰ号水田跡　　調査区北西隅に位置する弧状の畦によって区画されるものである。北・西が調査区外にあるため全体の規模は不明であるが検出面積は約5.7m²を測る。

Ⅱ号水田跡　　Ⅰ号水田跡を画す畦は中央付近からY字状に分岐し，その端部は消滅しているがカーブの方向からすると浮島状にみえる調査区中央付近の畦の残存部分へ続くものと考えられる。



第41図　上小紋遺跡中層検出遺構(部分)実測図

Ⅱ号水田跡はそれら半円形に周る畦によって区画されるもので，西半部分は調査区外となっているため全体の規模は不明であるが検出面積は約31.6m²を測る。

Ⅱ号水田跡　本水田跡はⅠ号水田跡の東辺に接しているものである。この水田跡に関しては，先述したⅡ号水田跡の北限を画す畦が，本水田の南限を画す畦となり，東へ延びていた可能性も考えられる。また，Ⅱ号水田跡の東限を画していた畦の一部とみられる浮島状の隆起は，さらに北へ延びていた可能性も合わせ考える必要があろう。　これらの諸点からすると一区画の水田でない可能性が高い。

Ⅳ号水田跡　Ⅱ号水田跡としたものの南辺に接してある平面が正方形を呈するものである。西側の一隅が調査区外に出ているが，この層ではその全形をうかがうことができる唯一のものである。

検出面積は約30m²を測る。

Ⅴ号水田跡　Ⅳ号水田跡の南辺に接してあるもので，大部分は調査区外となっており検出面積は約4.8m²を測る。

Ⅵ号水田跡　調査区のほぼ中央に位置するもので，北・東の各畦をほとんど失っているが，南はⅣ号水田跡と共有する形となっている。北限はⅢ号水田跡の南東隅で畦が「Y」字形に分岐するあたりであろうと推定される。Ⅱ号水田跡の東を画す浮島状の畦の南端が途切れているのは，ここが水口になる可能性を示している。

Ⅶ号水田跡　調査区北辺中央に接してあるもので，東限を画す畦は弧状をえがいて南下し，調査区中央ベルト付近でY字状に分岐する。分岐した畦は一方はそのまま南下し，他方は北西方向にカーブする形となっている。北西方向へ向う畦が不明瞭であるため，検出面積等を算出することは不可能となっている。

Ⅷ号水田跡　本水田跡はⅦ号水田跡の北辺に接してある略長方形を呈すもので，南限はⅦ号水田跡の北限を示す畦を東へ延長した線にあたるものと考えられる。一方東限は北方から示すと，SD01・SK01・SD02の各西岸にあたり，北限区画を示す畦等は認められない。

先に西に隣接するⅢ号水田跡内も畦が失われている可能性があることについてふれたが，本水田跡も同様な傾向が指摘できる。つまり，SK01南西隅とⅢ号水田跡南東隅と推定した位置を結ぶ線上に畦があった可能性もあることなど一区画と判断し難い要素も含んでいる。

下層検出の水田跡

中層の水田跡を精査した後，その下について調査を進めたところ，上層・中層でみられたと同様な水田土質が認められた。そこで引き続き精査をしたところ調査区の中央やや南よりで畦らしい隆起帯一条を検出した。これは調査区東西辺に対し45度のかたむきをもち，長さ約7m，幅9.5～50cmを測るものである。この層では一条の畦しか検出しえなかったので，これを境に北側をⅠ号水田跡，南側をⅡ号水田跡と仮称しておくことにした。このように記すのは前述した中層Ⅲ号・Ⅷ号水田跡にみられるように，本来あった畦が洪水等によって失われた結果一条の畦しか検出しえなかったと云う可能性も十分考えられるからである。

Ⅰ号水田跡　調査区の北半を占めるもので，南限は前述した畦で，東限はSD01・SK01・SD02の各西岸にあたり，北限及び西限は調査区外となっている。検出面積は約170m²を測る。

Ⅱ号水田跡　調査区の南半を占めるもので，北限は前述した畦で，東限はSD02の西岸しがらみの延長線上であろうと考えられる。他方，西限・南限は調査区外となっている。検出面積は85.2m²を測る。

第42図　上小紋遺跡下層検出水田址実測図

上・中・下層の水田跡

これまで上小紋遺跡の水田跡を上・中・下層に分け，その概要を記してきた。以下SD01・02，SK01の概要を記すに先立ち，両者間の関係や傾向についてふれておくことにしたい。

上層及び中層で検出した水田跡の南北に走る各畦は大略SD01・SD02に沿っている点が特に注意され，下層で検出した一条の畦もSD01・SD02とは大略直交する角度となっている。またSK01の西

側しがらみの枕木状の丸太は下層水田検出面とほぼ同レベルとなっていること，さらに西側しがらみ列は南方へ延び，Ⅰ号水田跡とⅡ号水田跡を画す畦に継がっていくものと考えられる。このことからSD01・02，SK01は下層水田跡耕作時から設けられていたものと推定される。前述した西側しがらみ列から南北に延びる小しがらみも下層から中層を経て上層に至る各水田跡が共有する形となっている。これは洪水等の災害に合う都度水田面は嵩上げされ，杭のように地中に打ち込まれたものは冠水に耐えて残存したため，継続して使用されたものと解されよう。

SK01

SK01としたものは調査区東壁に沿って検出した貯水用施設と考えられるもので，西側しがらみと東側しがらみによって構成されている。西側しがらみは長さ10mにわたって集中的に杭が打ち込まれ，その並びは調査区中軸線より東へ約50度のかたむきを持っている。東側しがらみは長さ12mにわたって杭が打ち込まれ，調査区東壁とほぼ平行する並びとなっている。それぞれのしがらみによって構成される辺はいわゆるハの字形を呈し，西側しがらみ北端と東側しがらみ北端との距離は6m，両者の南端の距離は13mを測る。つまり外法北辺約6m，東辺約12m，南辺約13m，西辺約10mを測る不整方形区画が形成されており，北辺はSD01の，南辺はSD02の流水口となっている。SK01は最も深いところで検出面から1.2mを測る。

このSK01を構成する西・東側しがらみはそれぞれの構成材や打ち込み角度等若干のちがいをみせていた。以下その点について記しておくことにしたい。

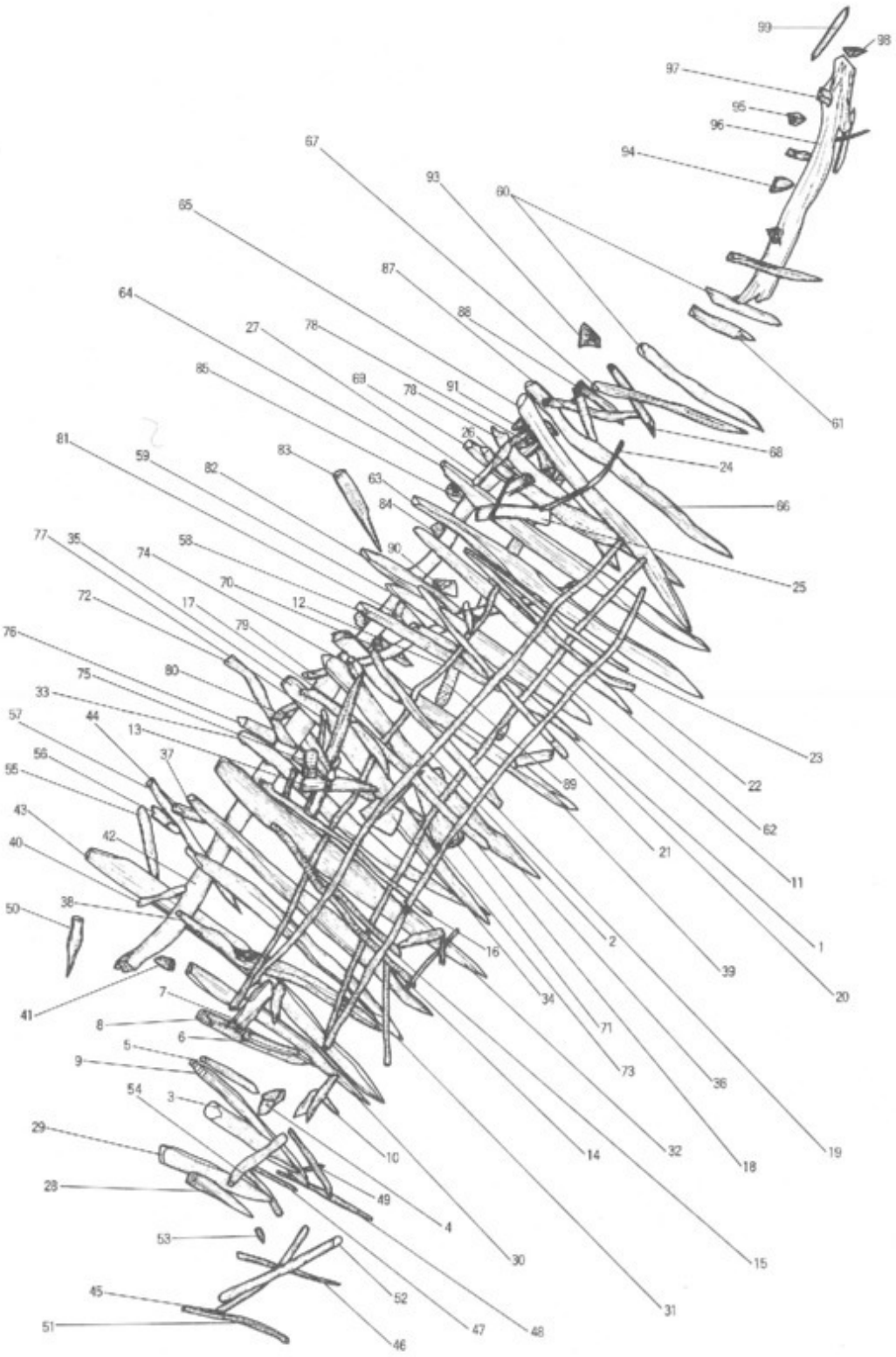
西側しがらみに使用された杭は総計99本あって，短いものは60cm，長いもので2mを測る。この列の杭の打ち込み方はまず①SK01西側掘方縁辺に約50cm間隔で長さ60cm～80cmを測る杭をほぼ垂直に打ち込む。②先に打ち込んだ杭の間に長さ2mを測る杭を西から東に約40～50度の角度をもって打ち込む。③それらの東側に沿わせ，径1.5cm，長さ8mを測る丸太を木元を南に向け置く。④先の丸太の東側に接して長さ1.2mを測る杭をほぼ垂直に打ち込み丸太を固定する。⑤長さ2～2.5mを測る杭を西から東に約40～60度の角度をもって打ち込み，杭の上端は先の丸太に接する形にする。⑥，⑤の段階で打ち込んだ杭に直交する形で径5cm・長さ6～8mを測る丸木材4本を固定する（第43図）。⑦約40～60度の傾斜をもつ杭の側面は真菰様の植物葉及び茎で覆う。⑧覆った植物が浮き上がらないように細長い小枝等で押さえると云う順で作業がなされたものと推定される。

⑦の段階で行われた植物をもって覆う行為は砂粒を水中に浮上させないための配慮であろうと判断される。

西側しがらみ構成材はその多くがシイ等の広葉樹でいずれもミカン割りにした長材がみられる点に特徴がある。

東側のしがらみはまず①列の縦軸線上に不等間隔に長さ60～80cmを測る杭約20本を打ち込む。②

第43図　上小紋遺跡ＳＫ－01実測図

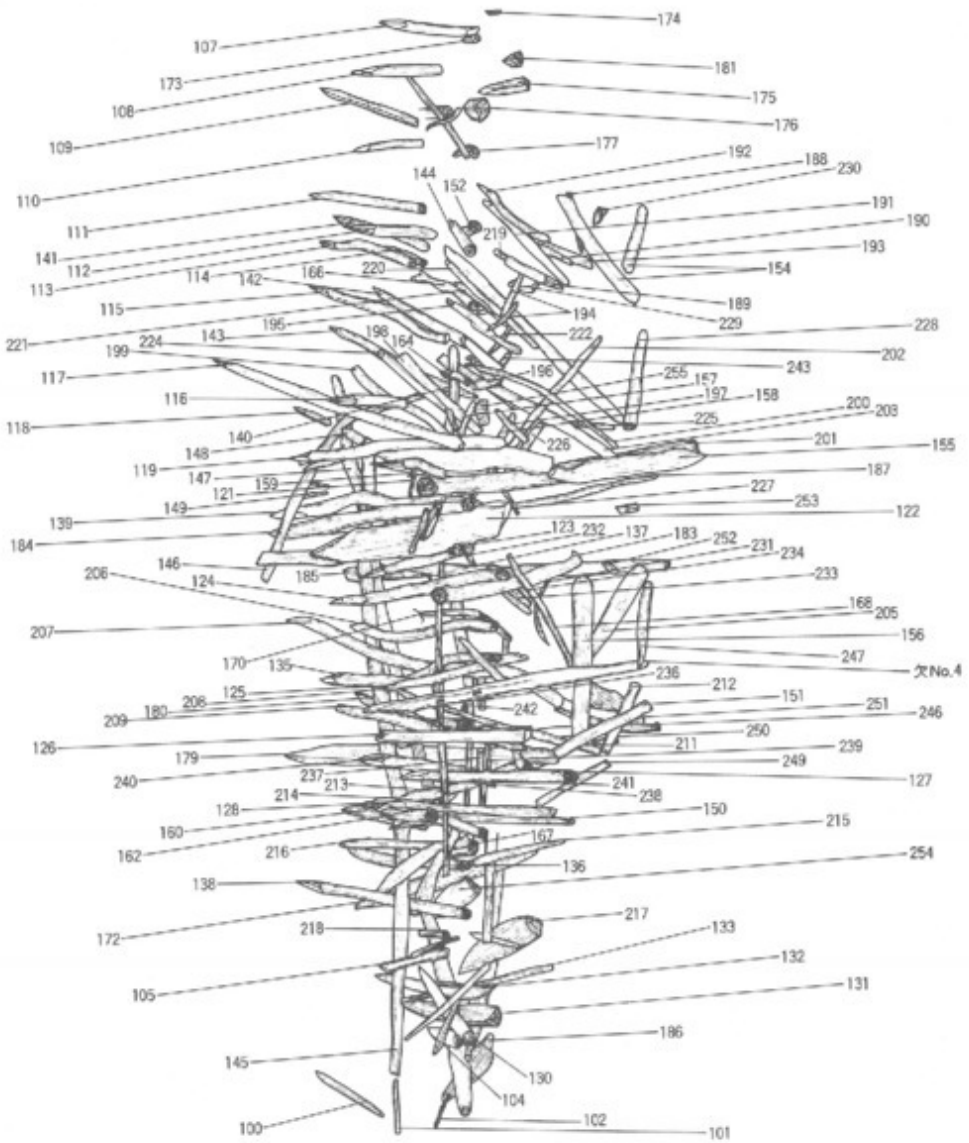


第44図　上小紋遺跡 ＳＫ－01 しがらみ（西側）実測図

第3表　しがらみ状遺構西列構成材樹種鑑定一覧表

備考（　）内数字は取り上げNo

No	樹種	備考	No	樹種	備考	No	樹種	備考
1	カシ	(135)	34		(176)	67	シイノキ	(216)
2	ユズリハ	(136)	35	シイノキ	(177)	68	エゴノキ（収縮）	(217)
3	シイノキ	(137)	36		(178)	69	シイノキ	(218)
4	ヤナギ	(138)	37		(179)	70		(219)
5	サカキ	(139)	38	シイノキ	(180)	71		(220)
6		(140)	39		(181)	72	シイノキ	(221)
7	広葉樹（収縮）	(141)	40	針葉樹（アテ材）	(183)	73	サカキ	(222)
8		(142)	41	シイノキ	(184)	74		(224)
9	シイノキ	(143)	42	シイノキ	(185)	75		(225)
10		(144)	43		(186)	76		(226)
11	カシ	(145)	44	シイノキ（収縮）	(187)	77		(227)
12	カシ	(146)	45	カシ	(188)	78	ヒノキ	(228)
13	シイノキ（収縮）	(147)	46	ヤナギ	(190)	79		(230)
14	シイノキ	(148)	47	シイノキ	(191)	80	シイノキ	(231)
15	シイノキ	(149)	48	ゴンズイ	(192)	81		(233)
16	シイノキ	(150)	49	ヒノキ	(193)	82		(234)
17		(151)	50	サカキ	(195)	83	ヒノキ	(235)
18	シイノキ	(152)	51	サカキ	(198)	84		(236)
19	シイノキ	(153)	52	ユズリハ	(199)	85	シイノキ	(237)
20	シイノキ	(154)	53	クヌギ	(201)	86	シイノキ	(238)
21	シイノキ	(155)	54	シイノキ	(202)	87	ユズリハ	(240)
22	カシ	(156)	55		(204)	88		(241)
23	シイノキ	(157)	56	カシ	(205)	89	サクラ類	(242)
24	クサギ	(158)	57	不明（広葉樹）	(206)	90	ユズリハ	(243)
25	シイノキ	(159)	58		(207)	91		(245)
26	ヒノキ	(160)	59		(208)	92	シイノキ	(246)
27	クスノキ科の一種（収縮）	(161)	60		(209)	93	シイノキ	(247)
28	シイノキ	(170)	61	シイノキ	(210)	94	シイノキ	(290)
29		(171)	62		(211)	95	シイノキ	(291)
30	シイノキ	(172)	63		(212)	96	樹皮	(293)
31	シイノキ	(173)	64		(213)	97	シイノキ	(294)
32	シイノキ	(174)	65		(214)	98	シイノキ	(295)
33	シイノキ	(175)	66	シイノキ	(215)	99	スギ	(296)



第45図　上小紋遺跡ＳＫ－01しがらみ(東側)実測図

第4表　しがらみ状遺構束列構成材樹種鑑定一覧表

備考（ ）内数字は取り上げNo

No	樹種	備考	No	樹種	備考	No	樹種	備考
100	針葉樹（アテ材）	（39）	138	リョウブ（ハイノキ科の一種）	（134）	176	ケヤキ	（322）
101	ヒノキ	（40）	139		（248）	177	ヤブツバキ	（323）
102	スギ類	（41）	140		（249）	178	ユズリハ	（324）
103	ヒノキ	（42）	141	タブノキ	（250）	179		（325）
104	サクラ類（収縮）	（43）	142	タブノキ（収縮）	（251）	180	タブノキ	（326）
105	ヤブツバキ	（44）	143		（252）	181	ケヤキ	（327）
106	スギ	（45）	144		（253）	182		（328）
107		（103）	145	カシ	（254）	183	シロダモ	（329）
108	ユズリハ	（104）	146	カシ	（255）	184		（330）
109	シイノキ	（105）	147	オニゲルミ	（256）	185	クリ	（331）
110	サカキ（収縮）	（106）	148	オニゲルミ	（257）	186		（332）
111	ユズリハ	（107）	149	ユズリハ	（258）	187		（333）
112	ユズリハ（収縮）	（108）	150		（259）	188	ヤブツバキ	（359）
113	ヤブツバキ	（109）	151		（260）	189	シイノキ	（360）
114	サカキ	（110）	152	サカキ	（261）	190	シイノキ	（361）
115	ヤブツバキ	（111）	153		（263）	191	クヌギ	（362）
116	シイノキ	（112）	154	カナメモチ	（299）	192	カナメモチ	（363）
117	ヤブニッケイ（シロダモ）	（113）	155	タブノキ（収縮）	（300）	193	ヒノキ	（391）
118	スギ	（114）	156	広葉樹（崩壊）	（301）	194	ヤマグワ	（392）
119	スギ	（115）	157	クリ	（302）	195		（393）
120	カシ	（116）	158	カナメモチ	（303）	196	シイノキ	（394）
121	シイノキ	（117）	159	シイノキ	（304）	197		（395）
122		（118）	160		（305）	198	ナラ類	（396）
123	サカキ	（119）	161		（306）	199	サカキ	（397）
124		（120）	162		（307）	200	カシ	（398）
125	サカキ	（121）	163	ユズリハ	（308）	201	シデ類	（399）
126		（122）	164		（309）	202		（400）
127		（123）	165	カシ	（310）	203		（401）
128	ヒノキ	（124）	166		（311）	204		（402）
129		（125）	167	カシ	（313）	205	クスの木科の一種	（403）
130	ヒノキ	（126）	168	シロダモ（収縮）	（314）	206	エゴノキ	（404）
131		（127）	169	シイノキ	（315）	207	シイノキ	（405）
132	クリ	（128）	170	シロダモ	（316）	208	カシ	（406）
133		（129）	171	スギ	（317）	209	ユズリハ	（407）
134	サカキ	（130）	172		（318）	210	針葉樹（崩壊）	（408）
135	シイノキ	（131）	173	シイノキ	（319）	211	ケヤキ	（409）
136	サカキ	（132）	174	ヤブツバキ	（320）	212	カシ	（410）
137	サクラ類	（133）	175	広葉樹（収縮）	（321）	213	ユズリハ	（438）

No	樹種	備考	No	樹種	備考	No	樹種	備考
214	ヤブツバキ	(439)	228		(455)	242	シデ類	(469)
215	アスナロ	(440)	229	ヒノキ	(456)	243	ヒノキ(崩壊)	(470)
216	クリ	(441)	230	ヒノキ	(457)	244	シキミ	(471)
217	シイノキ	(442)	231	ヒノキ(崩壊)	(458)	245		(472)
218	シイノキ	(443)	232		(459)	246		(473)
219	カナメモチ	(444)	233	ナラ類	(460)	247	クリ	(474)
220		(445)	234	サカキ	(461)	248	シデ類	(475)
221	カシ	(446)	235		(462)	249	スギ	(476)
222	ヒノキ	(414)	236	シロダモ	(463)	250	ケヤキ	(477)
223	ヒノキ	(448)	237	カシ	(464)	251		(478)
224		(449)	238	クサギ	(465)	252	シイイノキ	(479)
225	カシ	(451)	239	シキミ	(466)	253	シイノキ	(480)
226	シイノキ	(452)	240		(467)	254		(481)
227	ヤブツバキ	(453)	241	シイノキ	(468)	255		(482)

先の杭に沿わせ，東から西に約50～70度の角度をもって打ち込む。③，②で打ち込んだ杭と対称的に西から東に向け40～70度の角度をもって打ち込む。④，②で打ち込んだ杭上半部に直交する形で長さ８～９ｍを測る丸太材を４本横たえ固定する。⑤これらの上を真菰様の植物で覆う。⑥，⑤の上をさらに小枝杭等で浮き上がることを防止する。以上がSK01を構成するしがらみ状遺構の構築方法である。

ところで東側しがらみ構成材にはヒノキ，タブノキ，カシ等が知られる。これらの中には丸太材の他建築材の転用杭が混在していることから随時補充された可能性も考慮される。

SD01・SD02から流下した水は東側しがらみを上まわると東方（実際には調査区外）へ流下する形となる。調査区東壁の土層には，この時水が移動した痕跡が認められた（図版19）。

出土遺物

上小紋遺跡から出土した遺物には層位的に大別して３種がある。

その①は耕作土以下の茶灰色土層，白色細砂層中から出土した遺物群（第47図20～31）である。遺構を検出する過程で認められたもので，石鏃の他は，古墳時代末から奈良時代後半にかけての時期とみられる各種須恵器・瓦片が出土した。これらはいずれも完形に復しえるものはなく，伴う遺構も認められなかった。

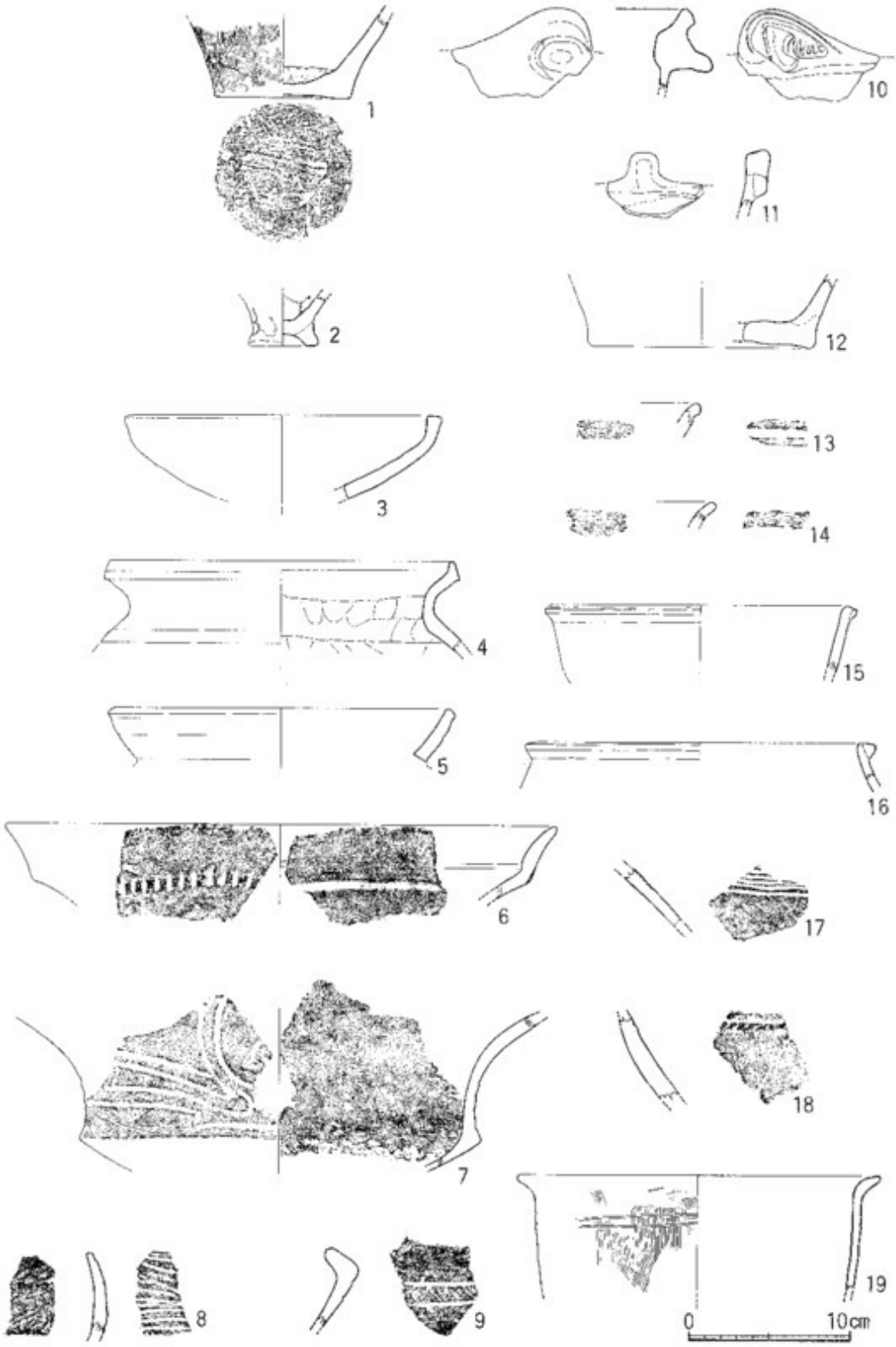
②は今回の調査で検出した各種遺構上面で認められたもので，弥生時代中期～古墳時代初頭に属すと考えられる土器類（第46図１～５），むしろ状遺物（第48図）の他，各種木製農耕具類（第50図～第56図），SK01の構成材内に転用されていた建築材（第56図～第72図）等がある。

土器類は完形に復しえるものはないとはいえ，遺構に伴う可能性もすてきれないものである。

③としたものは，この調査区の遺構に伴うものではなく，水田跡及びSK01の下層遺構の有無を確認するために設定したトレンチ内で認められたものである。これらは調査区東半部の水田跡及びSK01の下層に広がる粗砂・砂礫層中から出土した。

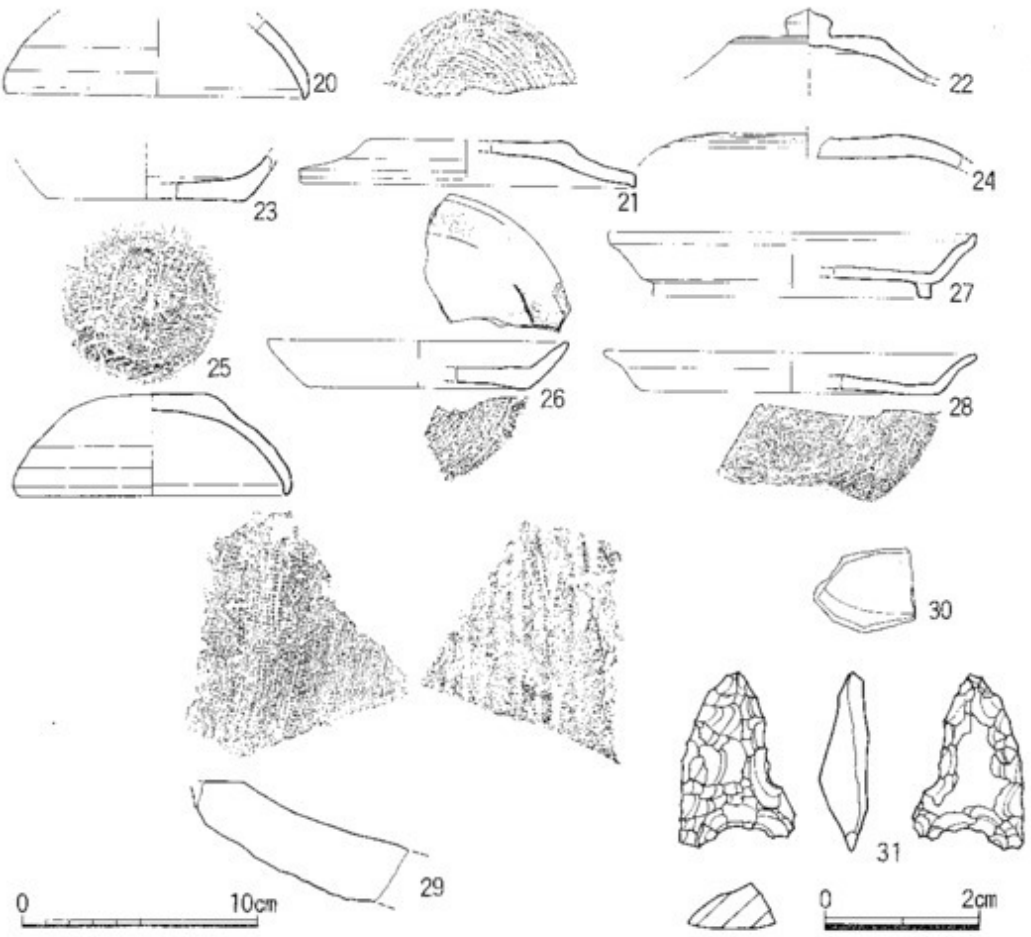
縄文時代後期，弥生時代中期に属す土器片で，いずれも破面に磨耗痕が著しいことから粗砂等が堆積する際に混入したものと考えられる。

（第46図１～５）　１は弥生土器の底部で，外底の中央に圧痕が残り，外面はハケメの後ナデ，内底はヘラケズリを施す。２は，台付甕の底部と思われ，内外面に指頭圧痕が残る。３は高坏の坏部で，体部の途中で屈曲し，口縁部が直立する。４は，甕で口縁部がやや開き気味で，端部は上方に引き上げられる。口縁内外面ヨコナデ頸部内面に指頭圧痕，内面頸部以下ヘラケズリを施す。５は，土師器の甕の口縁部である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり，端部に平坦面を持つ，内外面ヨコナデを施す。これらの土器の時期は，３が弥生時代中期中葉～後葉，１，４が後期前半，５が古墳時代中期と思われる。



第46図　上小紋遺跡出土遺物実測図

（第46図6～19）　6～16は，縄文土器，17～19は，弥生土器である。6は，精製の浅鉢である。推定口径34.4cmを測り，内外面とも研磨される。口縁外面と体部に刺突状のきざみが入る。7は，鉢であり，外面は風化しているが，磨り消し縄文が施されている。内面の調整は不明である。8は，鉢で体部が内湾し，口縁部に至る。外面には横方向に沈線が施されている。9は，深鉢で口縁部が波状を呈すると思われる。横方向の沈線を2本入れ，その間に縄文を施している。その他の部分は，丁寧なナデが施されている。10は，鉢の口縁部の突起部分である。裏面は，4cm×2.7cmの範囲が楕円形に隆起している。表面には粘土を盛り上げ沈線を入れて蛇様のものを表現している。11は深鉢の口縁部である。口縁が縁帯をなしている。12は，底部で底径13.4cmをはかる。13・14は，ともに鉢の口縁部で，13は，横方向に沈線が施されている。15・16は，甕の口縁部で外面に突帯を貼り付けている。これらの縄文土器の時期は，7～12が後期，6，13～16が晩期と思われる。17は，弥



第47図　上小紋遺跡出土遺物実測図

生土器，壺であり，外面にヘラ描沈線が5条以上施される。18は，壺で突帯に刻み目が施されている。19は，甕で外面に2条のヘラ描沈線を入れている。これらの時期は，弥生時代前期後半である。

（第47図20～31図）　20～28，30は須恵器である。20，25は，坏，蓋で全体に丸味を持ち，口縁は直立し，端部が鋭い。25の天井部はヘラ切りの後ナデている。21，22，24は，坏，蓋である。21は，天井部が回転糸切りにより離され，口縁部は内側に折り曲げられ，つまみを欠いている。22は，擬宝珠状のつまみが付き，天井周辺部にヘラケズリが残る。24は，つまみを欠くが蓋で，天井部に回転ヘラケズリが施されている。23は，坏，身で底部に回転糸切り痕がみられる。26は，皿で，器壁がやや厚く，底部に回転糸切り痕が残る。内面には墨と思われる黒色の付着物がみられる。内底がかなり磨滅しており，転用硯として使用された可能性もある。27は，高台付きの皿で，口縁部が屈曲し，端部が鋭っている。28は，皿で器高が低く口縁にかけて緩く外反する。端部は丸味をもつ。30は坏，身の底部で，内底に「皿」の墨書がみられる。29は平凡で，内面に布目痕，外面にタタキ目が残る。側面はヘラケズリが施されている。31は黒曜石製の石鏃で，長さ22㎜，幅15㎜，厚さ6㎜を測る。浅い凹基をなしている。これらの遺物の時期は，20，25が山陰の須恵器編年Ⅳ期[1]，23が国庁編年[2]の3形式，21～22が，4形式，24が3～4形式，26～28が5形式に含まれると思われる。30は，細片のため詳細は不明だが奈良時代に含まれるものと思われる。

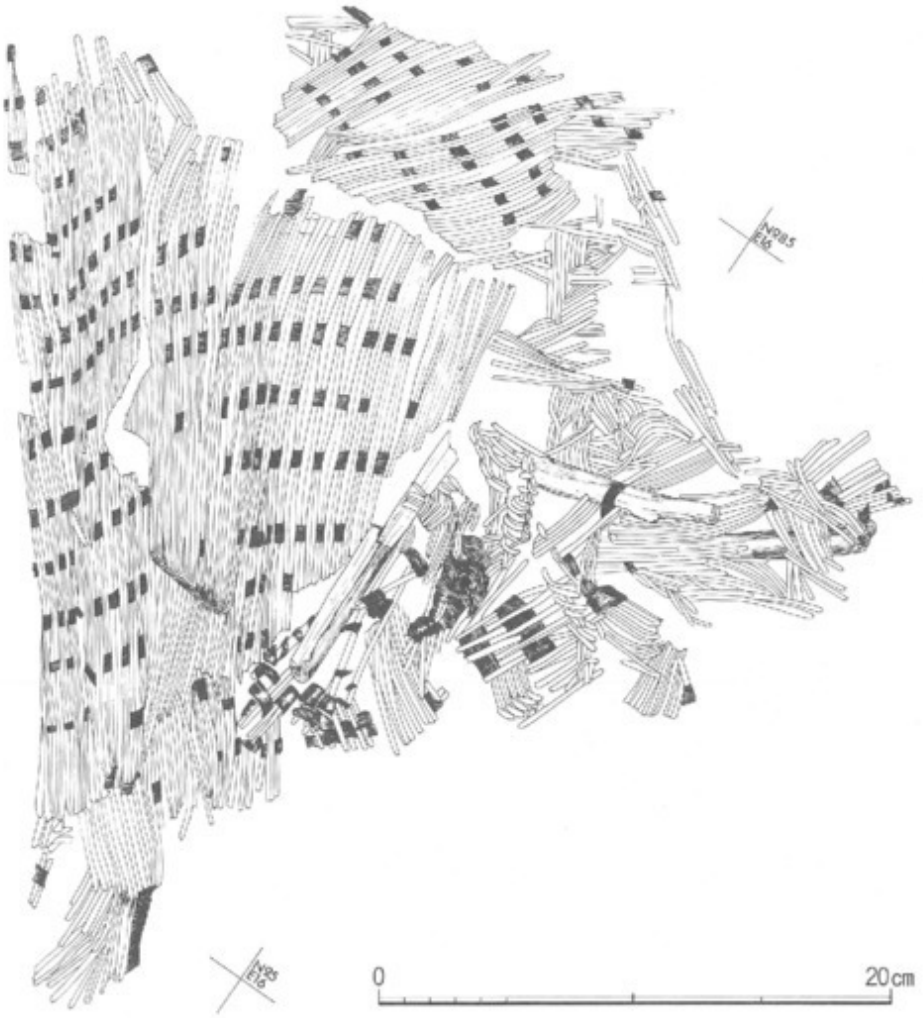
むしろ状遺物（第48，49図）　SK01の西側しがらみ列北端N9.5E16付近で出土したものである。層位的には上層水田面とほぼ同レベルであった。

本資料はSK01を覆う砂上になかば広がった状態で出土した。広がりの西側の1辺は残長約40cmを測り，一直線を呈す。中央は一旦，深く落ち込み，再び元の高さにもどるという断面波状を短い波長で繰り返す。

東半は土圧によってかなりの乱れが認められ，このむしろ状遺物を構成する植物繊維[3]も分断されるかたちとなっている。分断され，小間切れとなった植物繊維に混在して径1cmを測る小枝片が認められた。出土の折りには図にみられるように「ハ」の字状を呈していたが，これは元来1本の小枝であった可能性が大きい。また東端の植物繊維群の下にも同様な小枝の一端が見えるが前述したものと同一となるか否かは断定はし難い。

この資料の表裏は決定し難いが西側の整然と直線をなす現在上になっている面を仮に表面とした場合，小枝を供う植物繊維の乱れた部分は端部が捲れ上がり，裏面が出ているものと解される。この部分の破損が特に著しいことや，繊維の方向が不規則であることは埋没後砂中にあって局部的な力が加わったことをよく示している。

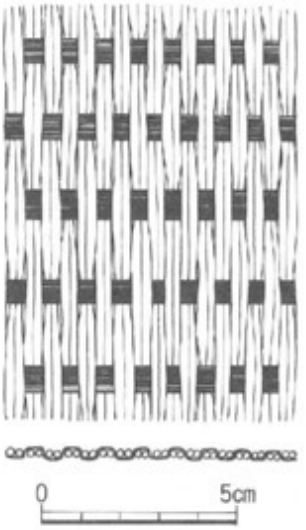
上記のような出土状態を示すむしろ状遺物は径0.2cmを測る藺と推定され植物を縦方向に密に並べ，これを径として，5.5cm間隔で幅1.2cm，厚さ0.1cmを測る桜皮を緯として編み込まれている。



第48図　上小紋遺跡むしろ状遺物出土状態

編み込みは径と緯を２本目毎に交互に通して行なう一種の四つ目編みである。緯は比較的残存状態の良好な西側の残存長約40cm中で16ヶ所を確認しえた。経の端部の処理は前述した小枝を編み込むことによって完結させている。小枝の一短に４本の経を巻き，その元を螺旋状に結んだ状態が認められる。

また，数本の茎を束ねそれを螺旋状に巻き込んだものも散見される。これらの諸点から縁の処理は竹籠の縁によく使用される「芯巻き縁」「千段当て縁」などと称されるものに類似した手法である。



第49図　むしろ状遺物模式図

木　製　品

上小紋遺跡から出土した木製品には木鍬や石庖丁形木製品の他

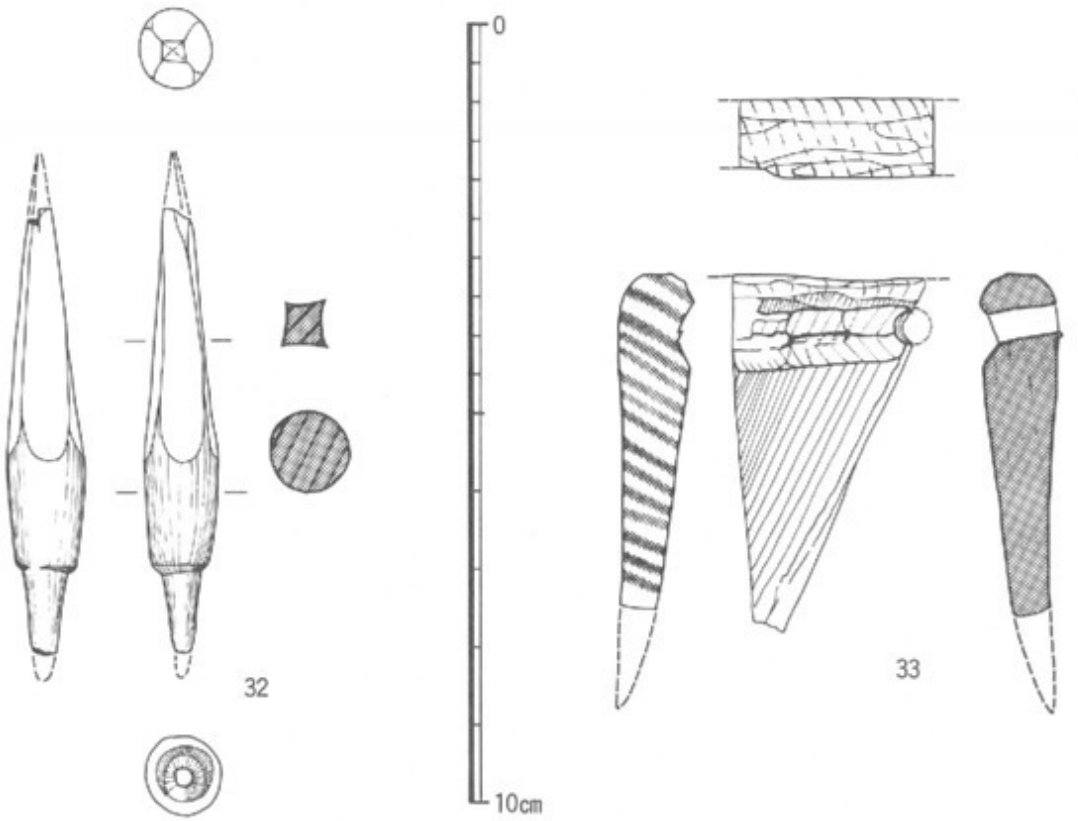
農耕具類がある。またSK01を構成するしがらみ状遺構中には各種建築材を縦割りにして杭とした転用例が多数認められた。

ここでは小型の製品・農耕具・建築材の順でその概要を記していくことにしたい。

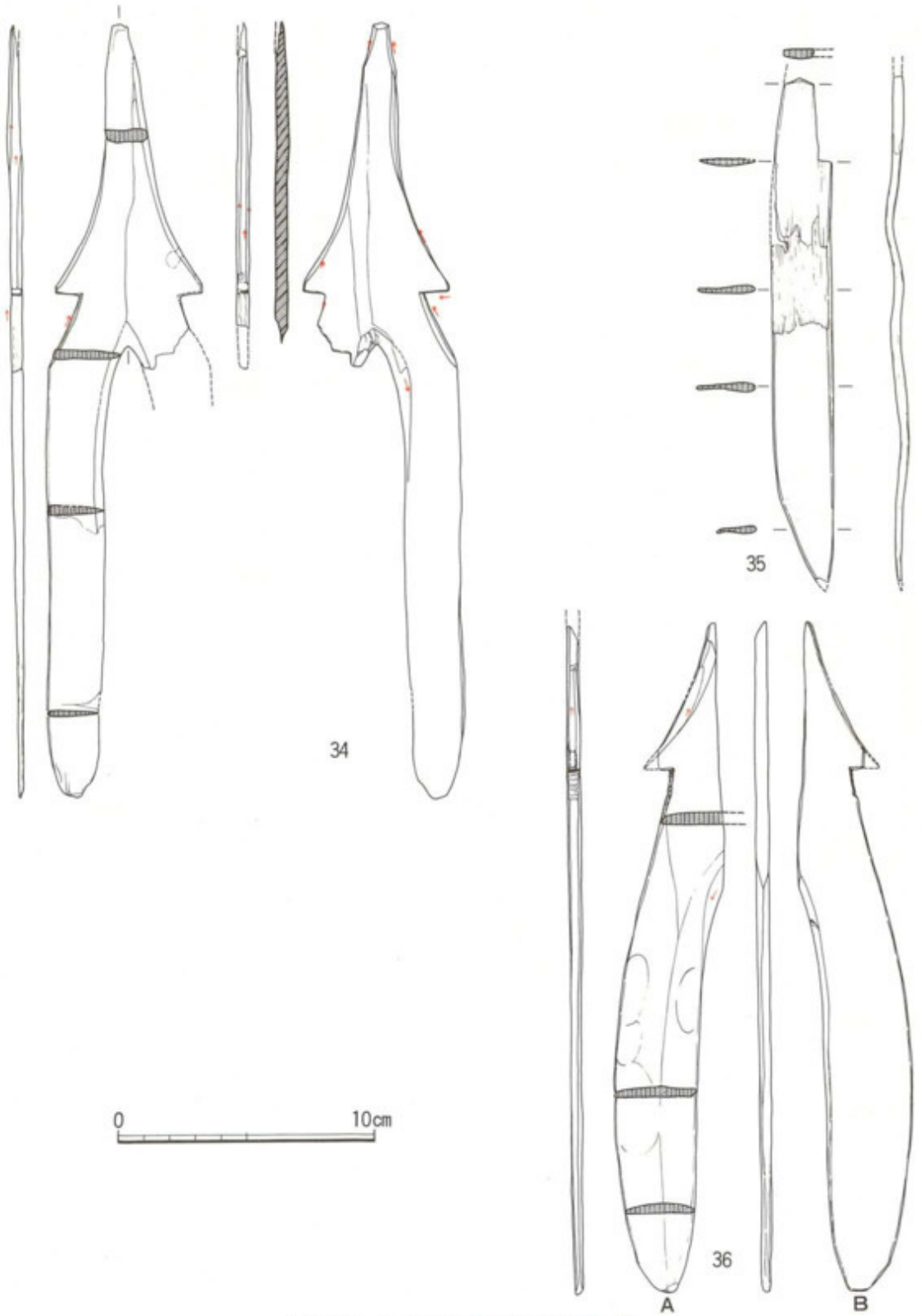
木　鏃（第50図－32）　これはSK01を構成する西側しがらみ状遺構の精査中，真菰様の植物の下から出土したものである。先端部・茎端部を若干欠損するものの残存長5.6cm，最大径5.6cmを測り，ほぼその全容を知ることができる。柾目取りで，身は円柱状の上半部を四角錐に削り出し，下半は円柱形のままとしている。茎は関部で段を付け，端部に向け先細りとなり，円錐形を呈す。

石庖丁形木製品（第50図－33）　調査区西壁灰色粘質土上面，表土下１ｍの位置にささる形で出土したものである。平面図の左端が直線的に切断された形になっているのは，土層観察のために西壁を移植ゴテで削り落とした際の傷であり，右端の破面は出土当初のものである。

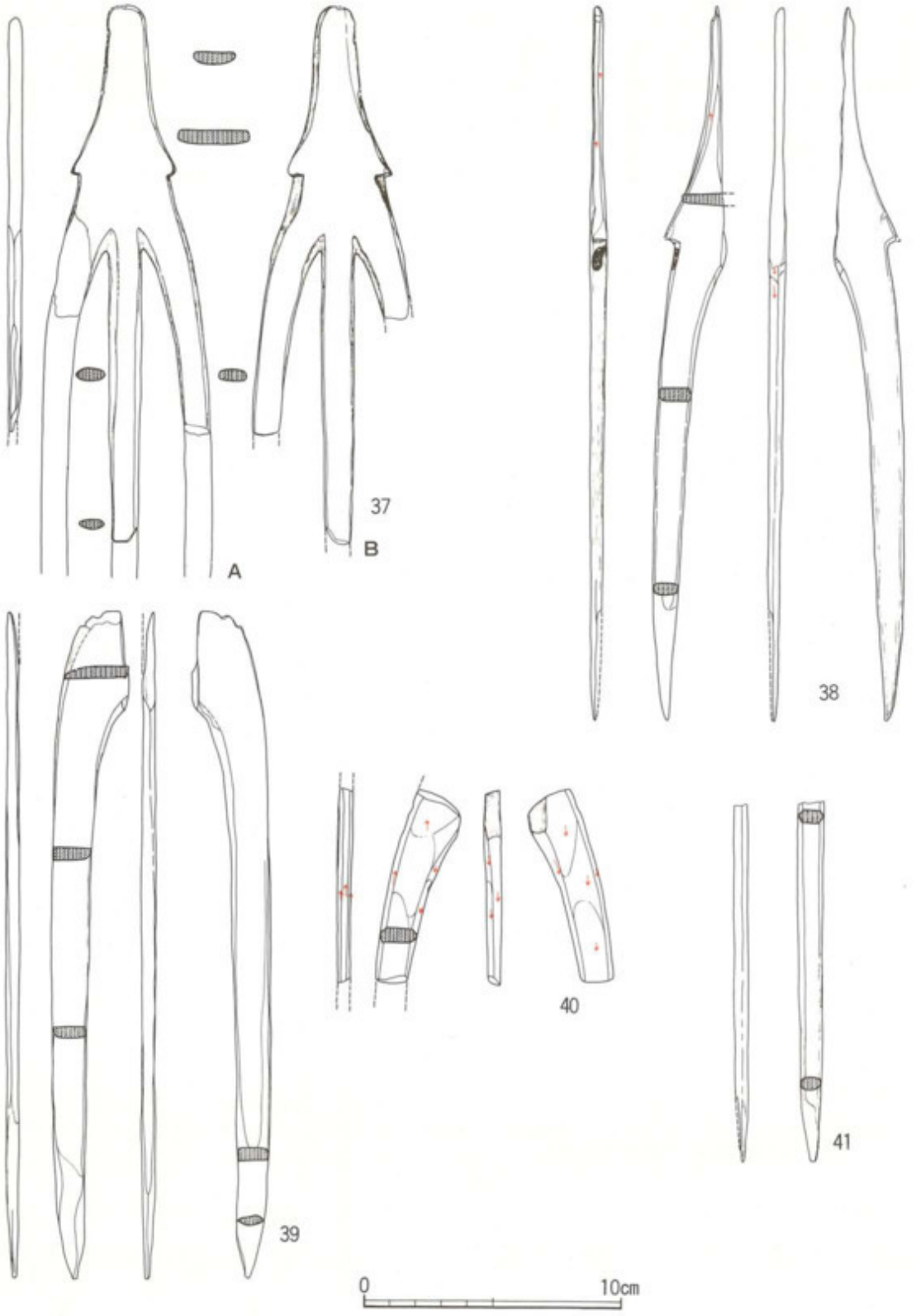
柾目板を加工したもので，背の線に対して，木理は斜め方向に走る特徴的な木取りとなっている。身は残存長2.5cm，残存幅4.6cm，背厚１cmを測る。刃部は欠損しており，残存する最端部の厚さは0.5cmとなっている。背と平行して横方向に断面「Ｖ」字形の溝が施されている。溝は幅0.8cm，深さ0.2cmを測る。溝の右端は現状では破面となっており，円孔の一部が認められる。この円孔は表か



第50図　上小紋遺跡出土木器実測図



第51図　上小紋遺跡出土木器実測図



第52図　上小紋遺跡出土木器実測図

ら裏へ同径で貫通していたとみられ，その径は約0.4cmと推定される。

木製鋤先　この調査区内から出土した木製鋤先と考えられるものにはナスビ形着柄鋤10点（第51図～第53図42・43）と方形着柄鋤１点（第53図44）とに大別でき，前者は二股のものと三股のものとに分けることができる。いずれもカシ材をミカン割りにした柾目材を加工したもので方形着柄鋤としたものを除き，薄手の作りであることが注意される。

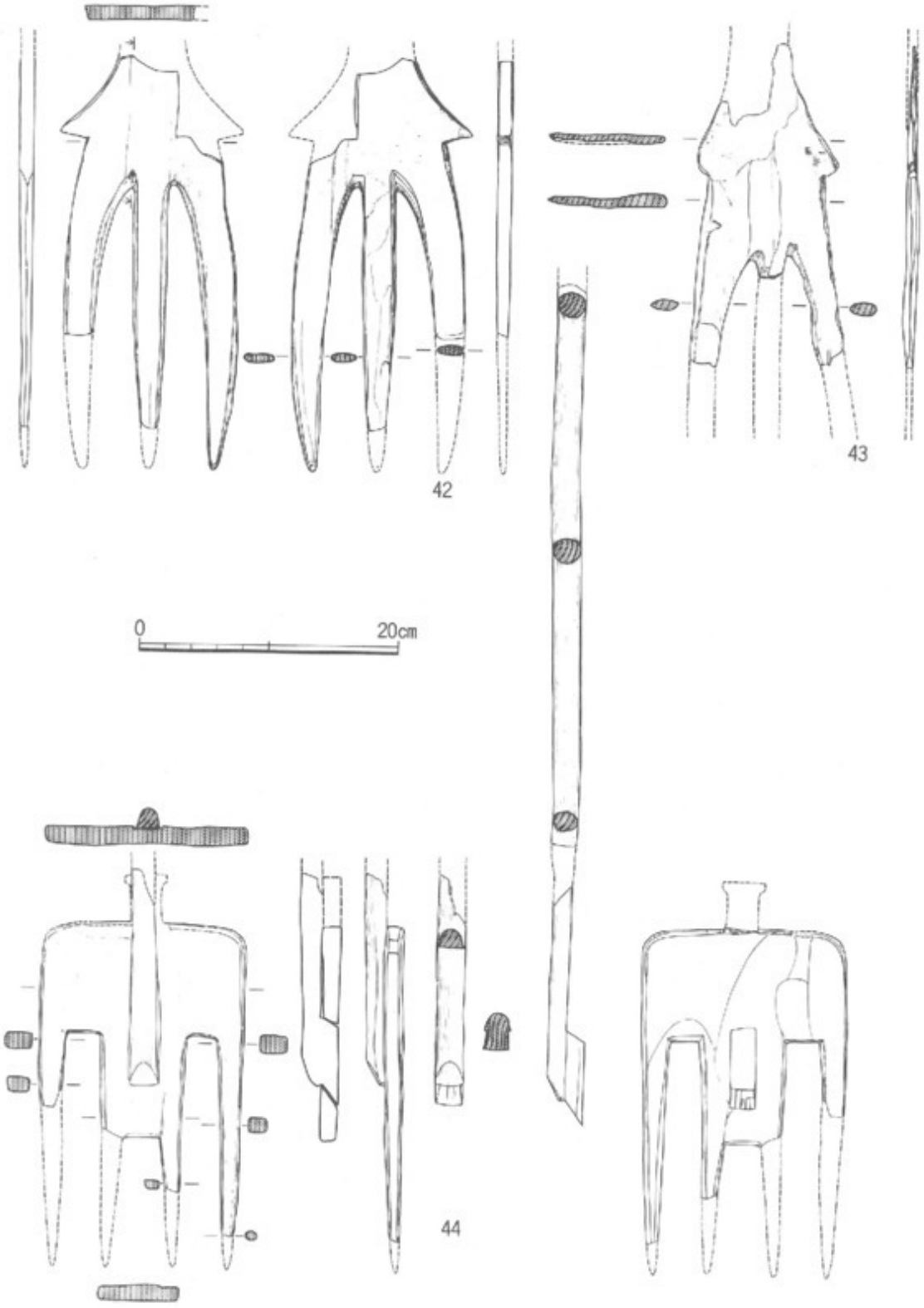
ナスビ形着柄鋤（第51図34）　N12.4E2.6の下層水田面から出土したもので，全長60cmを測る。基部は平面の上半を二度にわたって細く尖らせ，下半は裾広がりの傘状を呈す。刃部は一方を破損しているが，残存する一方は長さ39cmを測り，その全形を知ることができる。刃部の形態は二股の相対する内側の木端面を表裏面から面取りを施し，断面二等辺三角形を呈す。その幅は４cm，厚さは，0.8cmを測る。刃下端部の平面はやや丸くおさまり，磨滅している。

（第51図35）　SK01西側しがらみ内の植物層上面で出土したものである。残存長39cmを測る。基部等を欠損しているが前述した鋤先と同形の刃部であろうと推定される。縦断面は波状を呈すが，これはしがらみを構成する杭等による圧痕であって本来のものではない。内側木端線はほぼ直線を示すが，外側木端部は上部下部とも削り込まれ弧をえがく。最大幅4.5cm，最大厚0.7cmを測る。

（第51図36）　N９E15の下層水田面から出土したもので，ナスビ形着柄鋤先の中軸線に沿って割れたものの一方である。基部傘状先端を欠損するが左右折りかえせば，ほぼ原型を推すことができる。全長51.6cm，刃部最大幅6.8cm，最大厚0.9cmを測り，基部の平面形は正三角形に近いものであったと推測される。また（35）に比較すると基部傘状先端部より刃部の外形線が弧をえがいて張り出している。さらに刃部をみるとＡ面は左右から削り込まれ，やや甲高となり，結果中央縦方向に鎬が走る。これに対してＢ面は左側木端に軽い面取りが施されているものの平坦となっている。柄が沿えられるのはＢ面と考えられる。刃部は全体に磨滅痕が著しい。なお基部直下の「Ｖ」字形刻込みが施されている肩部には柄を緊縛した痕跡が認められる。

（第52図37）　N22E11の下層水田面から出土したもので，ナスビ形柄鋤先の三股になるものである。基部は比較的形をとどめるが，刃部はいずれも欠損し，現存長41.2cmを測る。基部上端部幅３cm，厚さ１cmをはかる。刃部の中央のものは遺存度が良く，長さ22,3cm，厚さ１cmを測り，断面は厚いレンズ状を呈す。基部直下の「Ｖ」字形刻込みが施されている肩部には柄を緊縛した痕跡が認められる。なお，基部はＡ面が比較的平坦となっており，柄が沿えられるのはこの面であろう。

（第52図38）　N15.5E３の下層水田面から出土したもので，前述鋤先と同形を呈すものと推定される。中軸線よりやや外よりで縦方向に割れたもので，全長55cmを測る。刃部最大幅2.6cm，厚さ１cmを測り，断面は板状を呈す。また刃端部は鋭く突がる。基部直下の「Ｌ」字形刻込みが施されている肩部には柄を緊縛した折りに生じたとみられる凹状のくぼみが認められる。



第53図　上小紋遺跡出土木器実測図

(39)　N15E 3の下層水田跡面から出土したもので，前述した鋤先と同形を呈すと推定される。基部等を欠損するが刃部は全長をとどめ51.5cm，最大幅3 cm，厚さ1 cmを測り断面は板状を呈す。刃端部はきわめて鋭く，よく磨滅している。

（第52図40）　N15E3.2の下層水田跡面から出土したもので，前述した鋤先と同形の基部直下の破片であろう。横断面は不正七角形を示す。

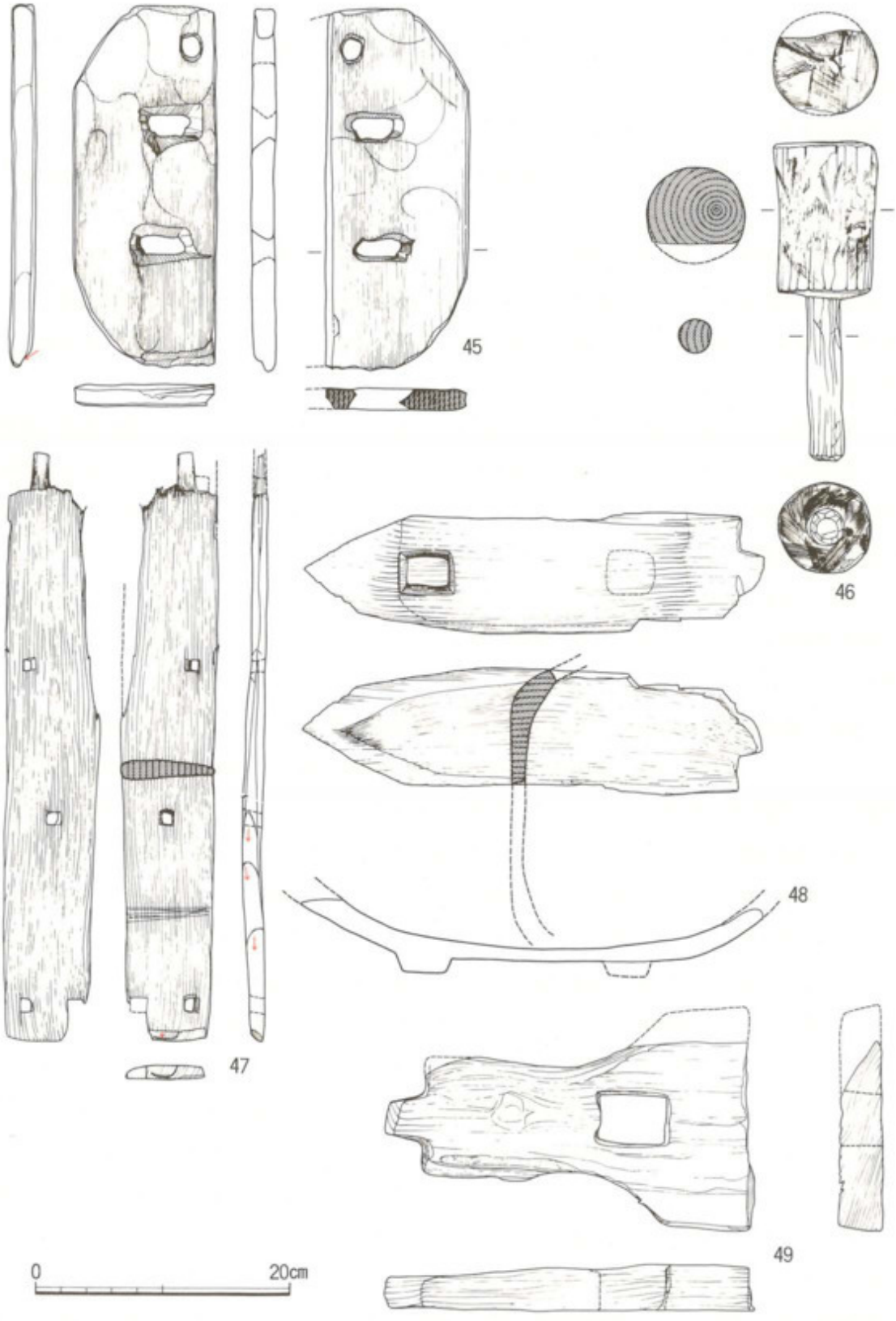
(41)　N15E 4の下層水田跡面から出土したもので，前述した鋤先と同形を呈すと推定される。これは現存長27cmをはかり，上部は幅2 cm，厚さ1 cmの断面不正六角形を先端部の断面は楕円形を呈す。先端はよく磨滅している。接点は認められないが，法量・材質・加工痕跡等から先の破片と同一個体となる可能性が大きい。

（第53図42）　SK01西側しがらみ列の南端N 8 E16付近から出土したもので，現存長32cmを測る。基部は上半部を欠くが，下半部は急激に広がり傘状を呈す。これまで記してきたものと比較するとやや短い造りとなっている。刃部最大幅は3.5cm，最大厚1 cm，断面はレンズ状を呈す。刃部先端はよく磨滅している。

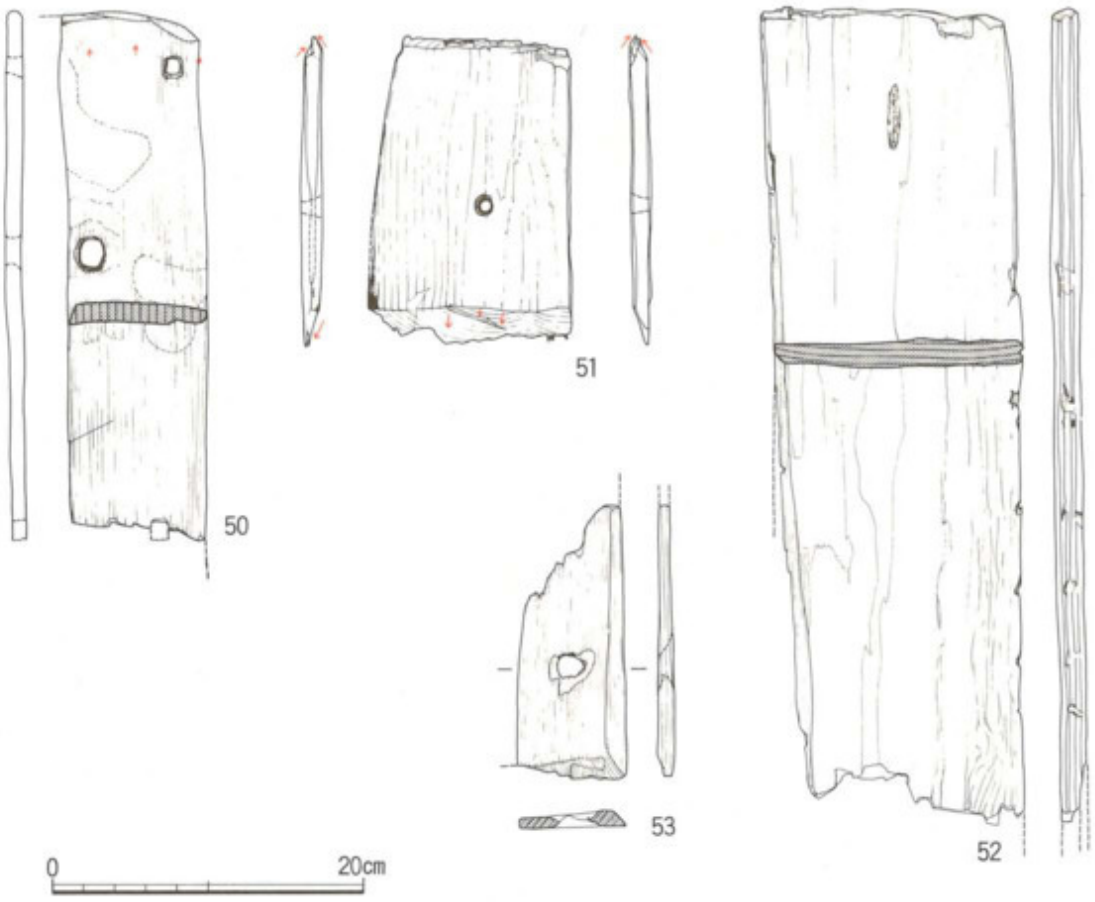
(43)　N15.5E3.2から出土したもので，前述した（42）とほぼ同様な法量と形態を示す部分上端及び刃部をそれぞれ欠損し，遺存状態は悪い。刃部の厚さは最大幅3.7cm，最大厚0.9cm測り，断面はレンズ状を呈す。

(44)　調査区南壁の中央やや東よりから，排水溝掘削作業中に出土したもので，柄が一部欠損しているのもそのためである。鋤先部は幅15.5cm，長さ26cm，厚さ1.5cmを測るカシの柾目木取りの板から，刃部を四股に削り出すもので，肩部は方形となっている。現在刃端部はいずれも欠損しているが刃部両側の形成に際し股上を「コ」の字状に深く削り込んでおり，その長さは18cm前後であったと推定される。これに対し中央の二股刃部股上は浅く，両側のものの1/2よりやや長いものであったと推定される。刃部の上方は2 ×1.5cmの方形，先端部は長径0.9cm・短形0.7cmを測る楕円形を呈す。着柄は中央に穿った幅2 cm，長さ5 cmを測る方形の貫通孔に柄先を挿入し，着柄されたものと推定される。柄挿入孔は下端の壁が表面から裏面に向って約40度の傾きをもって掘り込まれている。柄はカシ柾目材で，現存長61cm，最大径2 cm，現存する柄先に最も近い部分は長径2 cm，短径1.5cmとやや細くなっている。柄先端部は先に記した柄挿入孔下端部壁の傾きに一致するように鍬状に加工されている。この鍬状を呈す部分は今収縮変形しているが横断面は上面をカマボコ形にまた下の挿入孔におさまる部分は蟻枝形に加工されている。方形を呈す鋤先両肩中央に欠損個所が認められるが，この部分に着柄軸が共木で削り出されていたものと推定され，これによって鋤先と柄が固定されていたものであろう。

田下駄（第54図45）　N12.5E12の水田跡の上層から出土したもので，スギ材の柾目材を使用し



第54図　上小紋遺跡出土木器実測図



第55図　上小紋遺跡出土木器実測図

ている。長さ28.5cm，残存幅11.2cm，厚さ1.7cmを測る。上端部に長径1.8cm，短径1.5cm，その下に3.5cm，6.5cmを隔て，長径５cm，短径３cmの不整形な円孔を穿っている。いずれも表裏二方向から打ち込まれた痕跡が認められる。一方の面が炭化しているのは二次的なものであろうか。

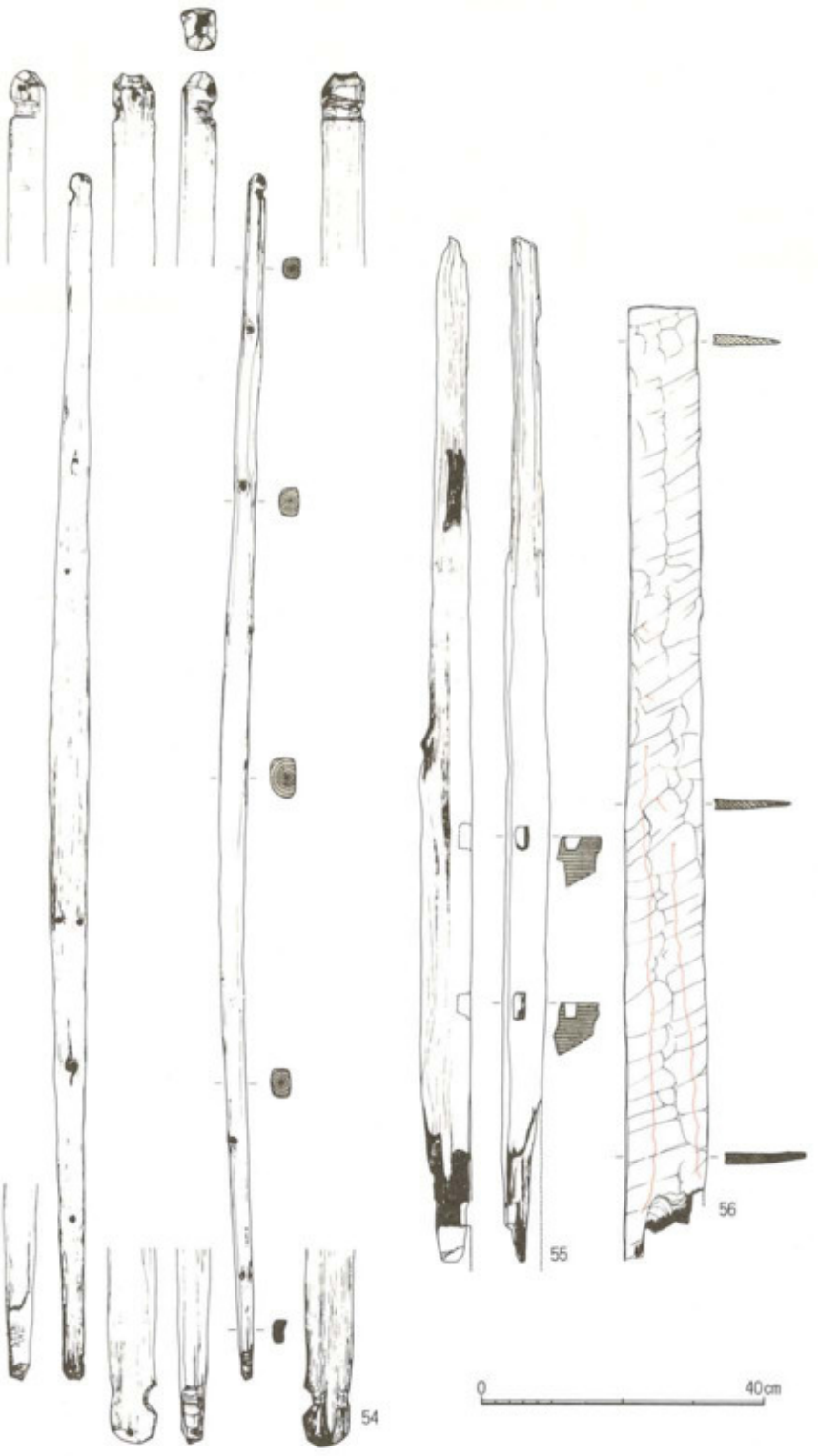
槌（46）　N16.5E16.5の上層水田跡から出土したもので，芯持材を使用している。

全長25cm，槌部の形は径８cm，長さ12cmを測る。全体に縦方向に入念な面取りが施されている。

槌部側面には使用にかかわる「ささくれ」が認められ，握りの中央部分は手ずれによって製作時の面取り痕が磨滅している。

盤（48）　N8.4E13付近の上層水田跡面から出土したもので，杉の柾目材を使用しており，底部付近の破片と考えられる。底部裏面には4.5×3.5cm，高さ1.5cmを測る方形台上の低い脚が削り出されている。これに対して12cm隔てて同様な形態の脚が剝離した痕跡が認められる。これから推すと底部裏の脚は四個配され，平面形は楕円形を呈するものと想像される。

用途不明木製品（47）　SK01とSD02の境付近から出土したもので，現存長46cm，幅7.5cm，厚さ1.5cmを測る。上端部及び下端部を欠損しているが，A面左側木端に沿って11cm間隔で１cm×１cm

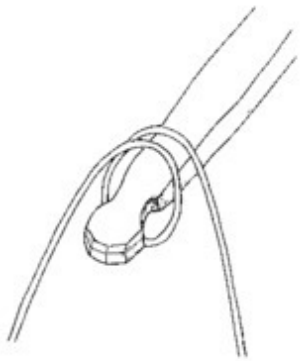


第56図　上小紋遺跡出土木器実測図

の方形孔が貫通している。下端部には横に同様な孔が2個並ぶ形となっている。

(49) もN14.5E4.4付近出土の用途不明の木器で長さ28.5cm，最大幅15cm，厚さ3.5cmを測るものである。バチ形に開き頂部は一種の柄形を呈し，中央に4cm×5cmを測る方形孔が貫通している。

(50) はSD02内で出土した現存長32.5cm，現存幅9cm，厚さ1.2cmを測る板状品である。左側木端よりに1.8cm×1.5cmを測る楕円孔が1個，さらに右側木端よりの上，下端部に1cm×0.8cmを測る方形孔1個が貫通している。



第57図　上小鍛遺跡出土天秤棒使用例

(51) はSD02内から出土した20cm×13cm，厚さ1.5cmを測る板状品で，中央に径1.5cmの円孔が貫通している。

(52) はSD02内から出土した現存長52cm，幅16cm，厚さ1.7cmを測る板状品で，右側木端部に断面V字状の溝が施されている。

(53) はSD02西岸付近から出土した方形板状品の隅とみられる破片で，厚さ1cmを測り，表裏両面から径1.5cmの不整形な貫通孔が穿たれている。

(第56図54) はSK01上層から出土した天秤棒で長さ170cmを測る芯持材を加工したものである。中央の最大長径5.5cm，短径3.5cmを測り，断面は隅丸台形を呈す。上面からみると中央が最も太く，両端に向って徐々に細く削り込まれている。頻繁に使用されたらしく，両端は弓なりに変形している。この資料で特に注意すべきは両端の荷をつるすひもかけの刻み込みが上面でなく，肩に天秤棒をのせた場合下向きになる位置にあることで，この様な形態は（第57図）に示したように，荷をつるすひもを一重させるためのものであろうと推定される。なお，（第56図）の図には天秤棒全体を縮尺1/10とし，両端部を1/5で表現した。

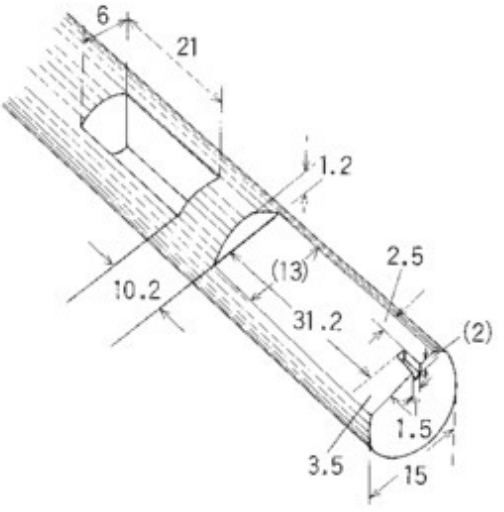
(第56図55)　SK01の東側しがらみ構成材の1本で，両端を欠損しており現存長145cm，幅7cm，厚さ6cmを測る。全体に傷みが著しく，現在断面不整三角形を呈すが，元来の形態はとどめていない。比較的平坦を保つ一面の下半には，中央やや左端寄りに幅1.5cm，長さ4cm，深さ2cmを測る方形孔が3ヶ所，20cm，25cmの間隔で穿たれている。

この資料には下端及び各所に炭化した部分が認められ，これは二次的なものであろう。

(第56図55)　N6.5E1.5から出土した柾木取りの板状木製品で，下端部を欠損しており，現存長134cm，幅11cm，最大厚1.5cmをはかる。断面は二等辺三角形を呈し，底辺をなす左木端面には断面「コ」の字の浅い溝が走る。表裏面とも木理に対し30～40度の角度で，4cm間隔，幅7cmの手斧

刃先痕が認められる。

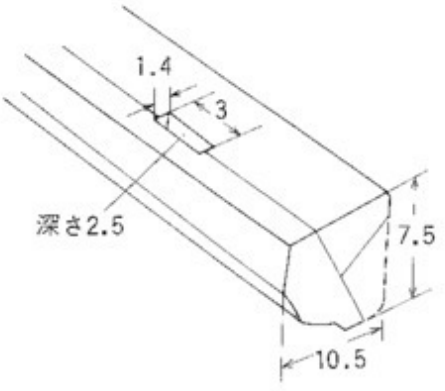
この板は断面が二等辺三角形を呈し，底辺に溝が走ること等からして，同様な板材を次々に矧ぐことによって何かを構成するといったものであったと推定される。つまり建物の羽目板の如きものであった可能性も考慮されよう。



第58図　建築材58模式図　(cm)

（第60図56）はSK01の東側しがらみ構成材のうち同一個体と考えられるものを選び出し接合した。結果は（第58図）の模式図に示したような加工が施されていたことが確認された。これは芯持材を多面柱状に加工するもので残存長120cm，径約15cmを測り，表面には木理に対し，10～30度の角度で，3 cm間隔，幅3 cmの手斧刃先痕が認められる。

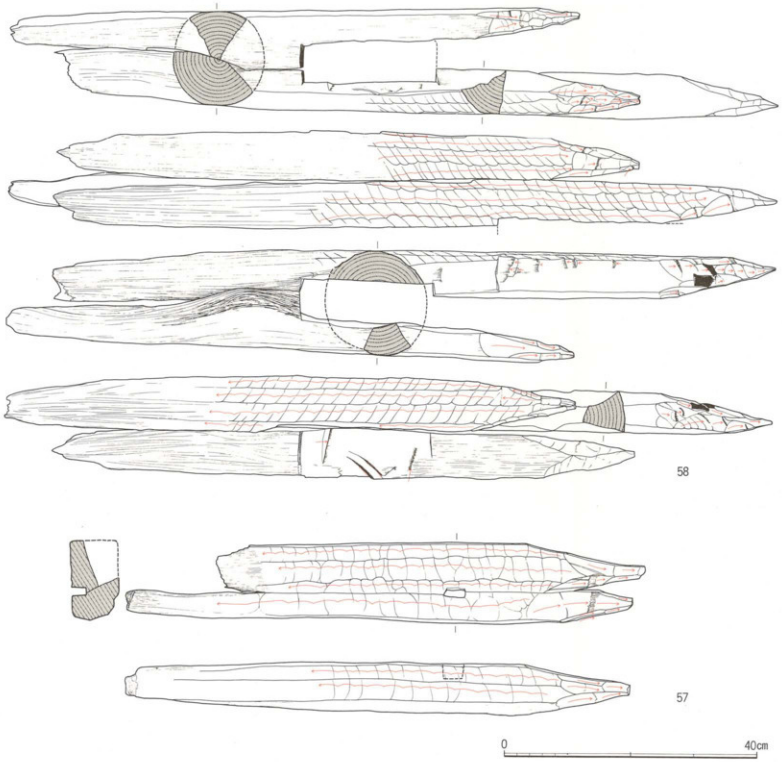
中央には木理に直交する方向から長さ21cm，幅6 cmを測る貫孔が穿たれている。この貫穴の一方の端から10.2cm隔てて，1.2cmの段差を設け，平坦面を作り出している。この平坦面の幅は短部をなす一方が欠損しているため，正確な値は究め難いが13cm前後であったと推測される。この面の先端に方形孔が穿たれているが，杭の下端として斫られているため全形は不明である。この孔は残存長3.5cm，幅1.5cmを測り，上縁部が斫られているため深さは計測不可能であるが、平坦を延長した面が掘り込み面と仮定すれば，2 cm前後であったと推定される。孔底は平坦とならず，ややささくれた状態となっている。なおこの小孔は平坦面幅の中央に位置するのでなく，やや一方へ偏っていることが注意される。



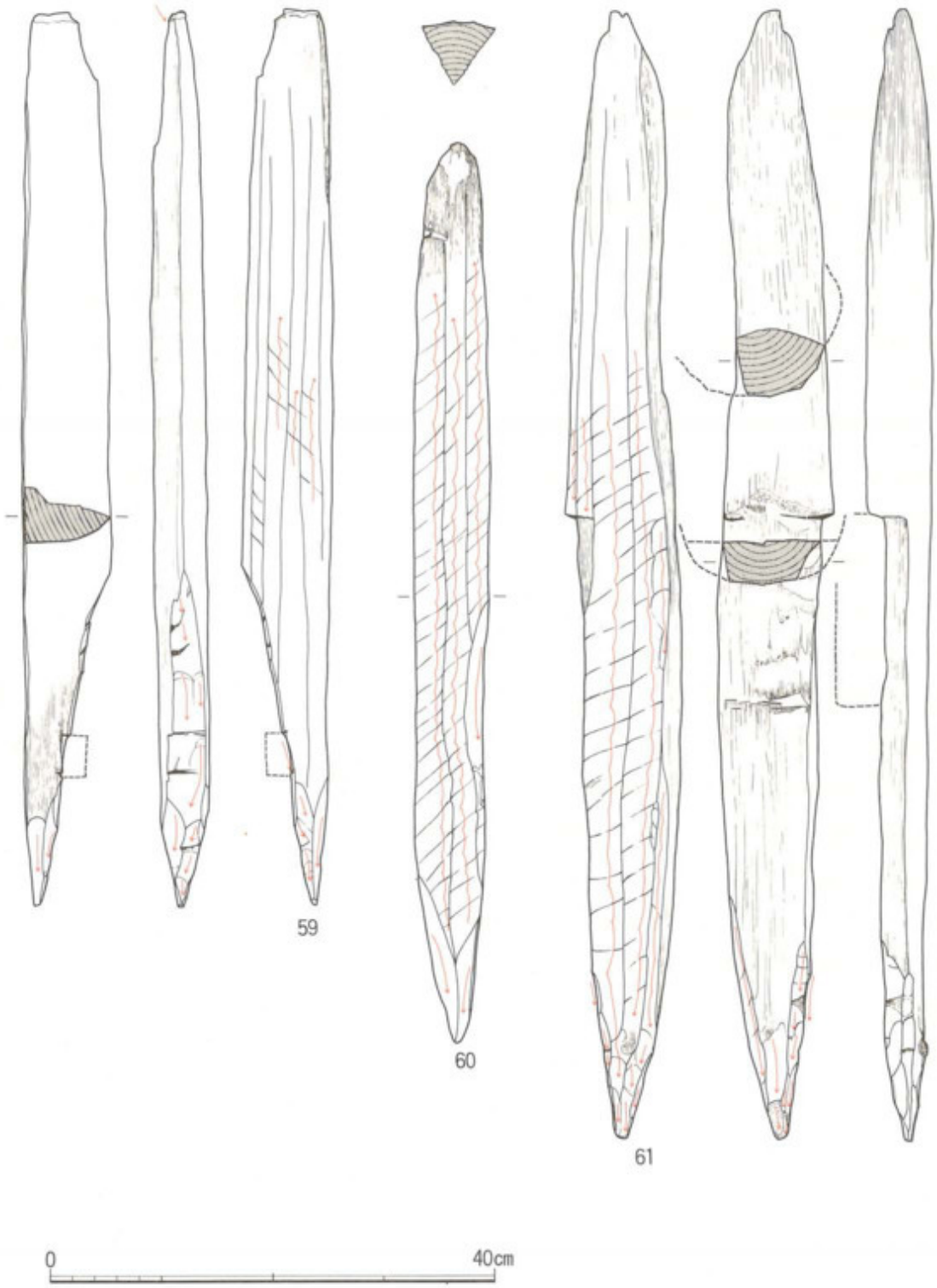
第59図　建築材57模式図　(cm)

（第60図57）　SK01の東しがらみ構成材中の接合資料で残存長80cm，幅10.5cm，厚さ7.5cmを測るの柾目材である。元来は接する二方の面が矩をなす形に加工されていたものとみられ，それを縦に二分割することで杭材としている（第59図）。

幅が広い一方の面には長さ3 cm，幅1.4cm，深さ2.5cmを測る方形孔が穿たれている。この孔がある面に接する2面には木理に対し，ほぼ直交する形で，2～4 cm間隔，幅3 cmの手斧刃先痕が認められる。孔が穿たれている面に接する一方の面は手斧痕が全面にはなく，前述した面に近いほうに



第60図　上小紋遺跡出土木器実測図

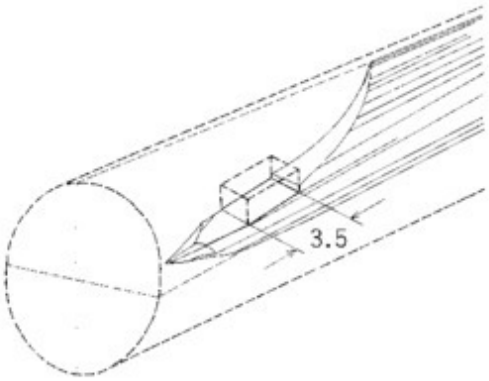


第61図　上小紋遺跡出土木器実測図

のみ認められる。手斧痕がない部分は匙面を取ったようにも，樹皮を剝ぎとったままの表面のようにも見え，いずれも決し難い。

（第61図58）　調査区東壁南寄りで検出されたもので，現存長81cmをはかるの柾目材である。

これは元来約15cmの円柱形を呈するものを縦に四分割としたものの一本であろうと考えられる。

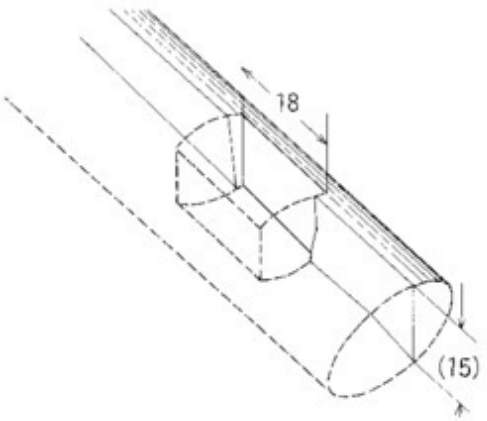


第62図　建築材59模式図（cm）

加工面には木理に対する方向から長さ3.5cmを測る方形孔が穿たれているが，杭に加工する折りに斫られ，幅，深さを確認することができない（第62図）。

（第61図60）　SK01の東側しがらみ構成材中の資料で現存長81cmを測る芯持材で元来は径15cm前後を測る円柱状を呈するものであったと解される。表面には木理に対して45度，3 cm間隔，幅3 cmを測る手斧刃先痕が認められる。

（第61図61）　SK01の東側しがらみ構成材中の資料で，現存長1 mを測るもので，元来は径15cm前後の円柱状の芯持材であったと解され，縦に二分割或いは四分割されたと推定される（第63図）。この資料には木理直交する方向から長さ18cmを測る貫穴と考えられる孔が穿たれている。穴幅は分割されたため不明である。

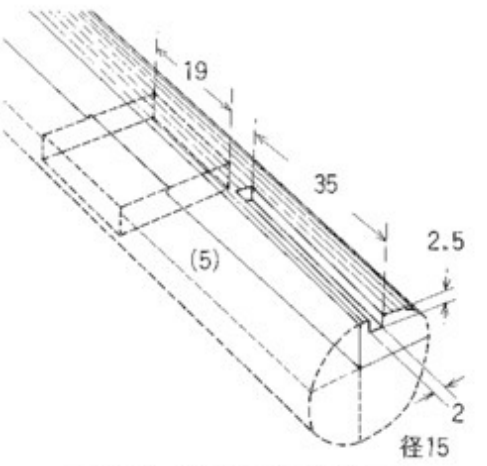


第63図　建築材61模式図（cm）

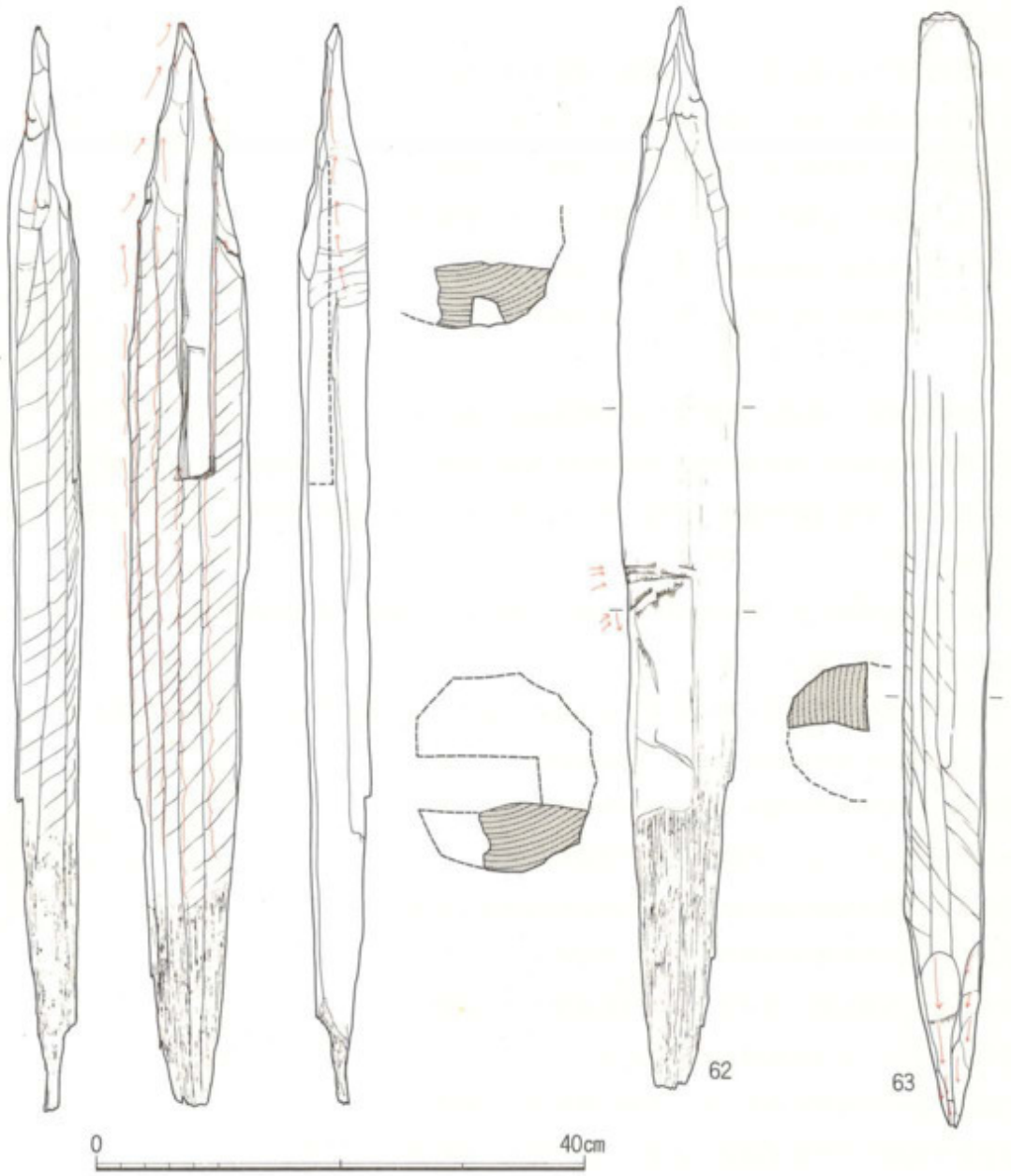
（第65図62）　SK01の東側しがらみ構成材中の資料で現存長87cmを測る芯持材で，元来は径15cm前後の円柱状を呈するものであったと解され，縦に四分割されたと推定される（第64図）。下端の表面中央には木理に沿って長さ35cm以上，幅2 cm，深さ2.5cmを測る溝が掘られている。一方これと直交する方向から長さ19cm，深さ6cm以上を測る方形孔が穿たれている。孔の幅は分割面となっているため不明である。

表面には木理に対して45度，3 cm間隔，幅3 cmを測る手斧刃先痕が認められる。

（第65図63）　SK01の東側しがらみ構成材中の資料で現存長82.8cmを測り，6 × 9 cmの角材となっている。



第64図　建築材62模式図（cm）

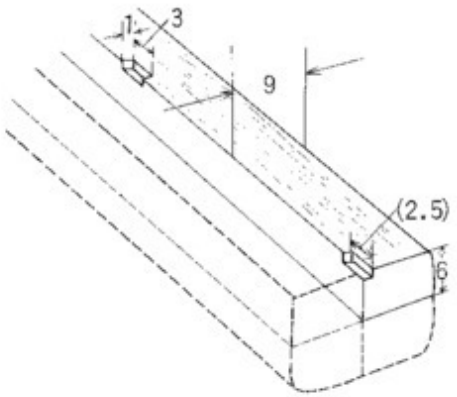


第65図　上小紋遺跡出土木器実測図

元来は18cm×12cm角程度のものであったと解され，それを縦に四分割したものであろう。

（第68図64）　手斧痕跡を残す面は幅の広い面と狭い面とがあって，広い面の分割木端辺に沿って，２個の方形孔が認められる。両孔は30cmを隔てて穿たれている。上方の孔は長さ３cm，残存幅１cm，分割面に現われた深さは1.8cmを測る。孔の両短辺壁はほぼ垂直となっているが，長辺の壁は約45度の傾斜をもって穿たれている。下方の孔は残存長2.5cm，残存幅1.5cm，深さ1.5cmとなっているが，幅を分割時に，長さを杭に加工するための手斧痕によって失われている。元来は前述したと同様規模の孔であったと想像される。

幅広の面には木理に対して０～20度，間隔４cm，幅６cm以上のかなり粗い手斧刃先痕が認められこれに比して幅の狭い側の面には木理に対しほぼ直交する角度で，間隔0.5～１cm，幅2.5cmを測る手斧刃先痕が認められる。相接する面で刃先痕の波長差が顕著であるのは見付き・見込み等によって使い分けがなされていたことを推測させるものがある。

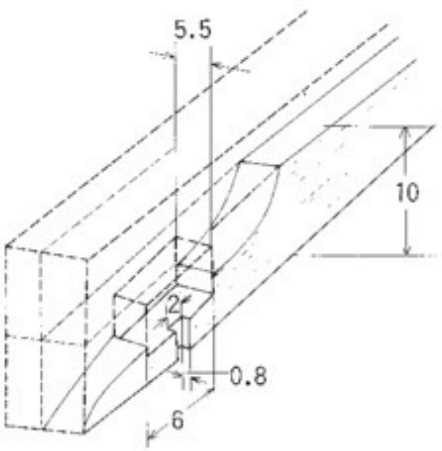


第66図　建築材64模式図（cm）

（第68図65）　SK01の東側しがらみ構成材中の資料で現存長87cmを測り，現存幅10cm，現存厚さ5.5cmの角材となっている。元来は20cm程度の角材であったと解され，それを縦に四分割したものであろう。柾目材である。

この資料も前述した（第68図64）と同様，分割される以前の，面を相接する形で残しており，幅の広い面と，狭い面とからなっている。

幅の広い面の下方には木理に直交する方向から長さ６cm，幅2.5cm以上の方形孔が穿たれている。この孔は貫穴と考えられるもので，幅は杭に加工するため分割面上方約30cmの位置から斜めに斫り取られることにより不明となっている。この幅広の面には木理に直交する形で幅２cm，深さ8cmを測る断面「コ」の字状の刻込みが施されている。これは先の貫穴と比較して底面もささくれており，かなり雑な感じがする。これは両者間の加工時期の差を示すものである可能性も考慮されよう。



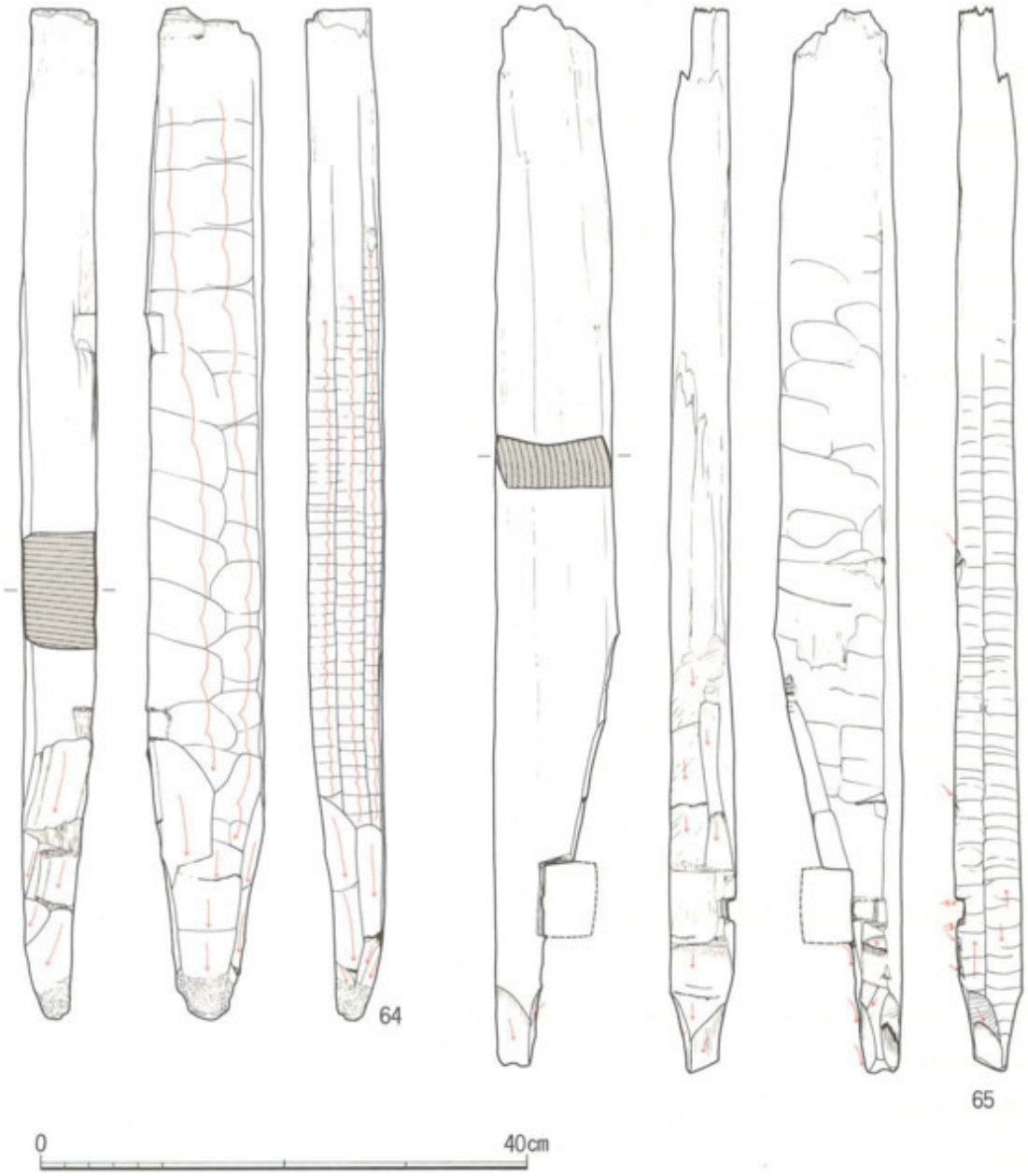
第67図　建築材65模式図（cm）

幅広の面には木理に対して０～５度，間隔３cm，幅３cm以上の不規則な手斧痕が認められる。これに比して幅の狭い側の面には木理に対してほぼ直交する形で，間隔1.2cm，幅2.5～３cmを測る手斧痕跡が認められる。相接する面で刃痕の波長差が顕著であるのは前述した（第68図63）と同様な理由によるものであろう。

（第71図66）　SK01の東側しがらみ構成材で横断面中，中央でほぼ垂直に最も深く打ち込まれていたものであった。

残存長116cm，幅9.5cmを測るものである。元来は径15cm前後の円柱状を呈す柾目材であったものを縦に二分割以上したうちの１本で，断面は蒲鉾状を呈す（第69図）。

上端木口の破面には幅1.8cmを測る方形の小孔の一端があるのでさらに長いものであったと推定さ



第68図　上小紋遺跡出土木器実測図

れる。

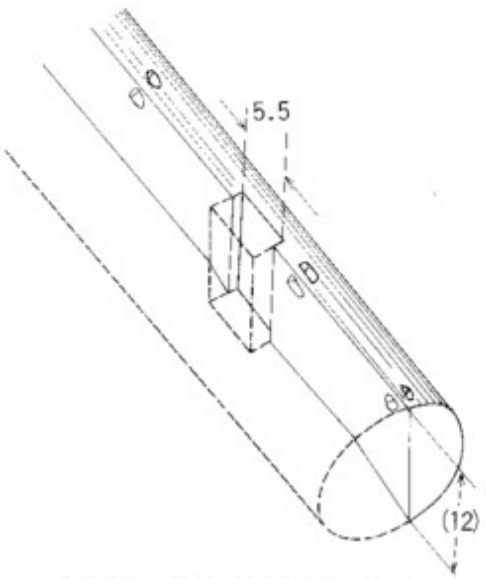
この資料の分割面には中央やや下方に木理に直交する形で，長さ5.5～6.5cmを測る貫穴と考えられる孔が穿たれている。この他に計４個の小孔があって，１個は前述した上端破面に，２個目は貫穴上方18cm，３個目は貫穴の下方６cm，４個目は下端部に位置しており，それぞれの間隔は上方から45cm，33cm，33cmとなっている。この小形穴のうち貫穴を挟んで位置する２個はいずれも１辺２cmを測る不整四角形を呈し，約70度の傾きをもって穿たれている。深さ4.8cmが穴底となるが，そ

のまま終らず，さらに水平方向に掘り進まれている。この穴は現状では断面「逆L字」状を呈す形にみえるが，目途穴のように断面「V」字状を呈す形に掘り込まれていた可能性が強い。

表面には木理に対して直交し，間隔1.8cm，幅3cmを測る手斧刃先痕が整然と認められる。

（第71図67）　SK01の東側しがらみ構成材中の資料で，現存長81cm，幅6.5cmを測るものである。元来は計13cm前後の円柱形を呈す芯持材であったものを縦に四分割以上したうちの1本であろうと解される（第70図）。

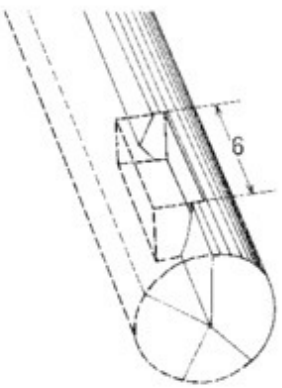
この資料下端には木理に直交する方向から長さ6cmを測る貫穴と考えられる穴が穿たれている。穴幅は分割されているため不明である。



第69図　建築材66模式図（cm）

表面には木理に対して直交し，間隔2cm，幅3cmを測る手斧刃先痕が整然と認められる。刃先痕の波長・幅等64・65・66・67は共通した特徴をもっている。

（第72図68）は調査区N4E1付近下層水田上面で検出したものである。全長102cm，幅15cm，厚さ1cmを測る柾目材で板状を呈し，長方形の一隅の角が認められ，弧を描く。弧を描く側の木口及び側面は滑らかに仕上げられているが，他方の側の仕上げの有無は不明である。



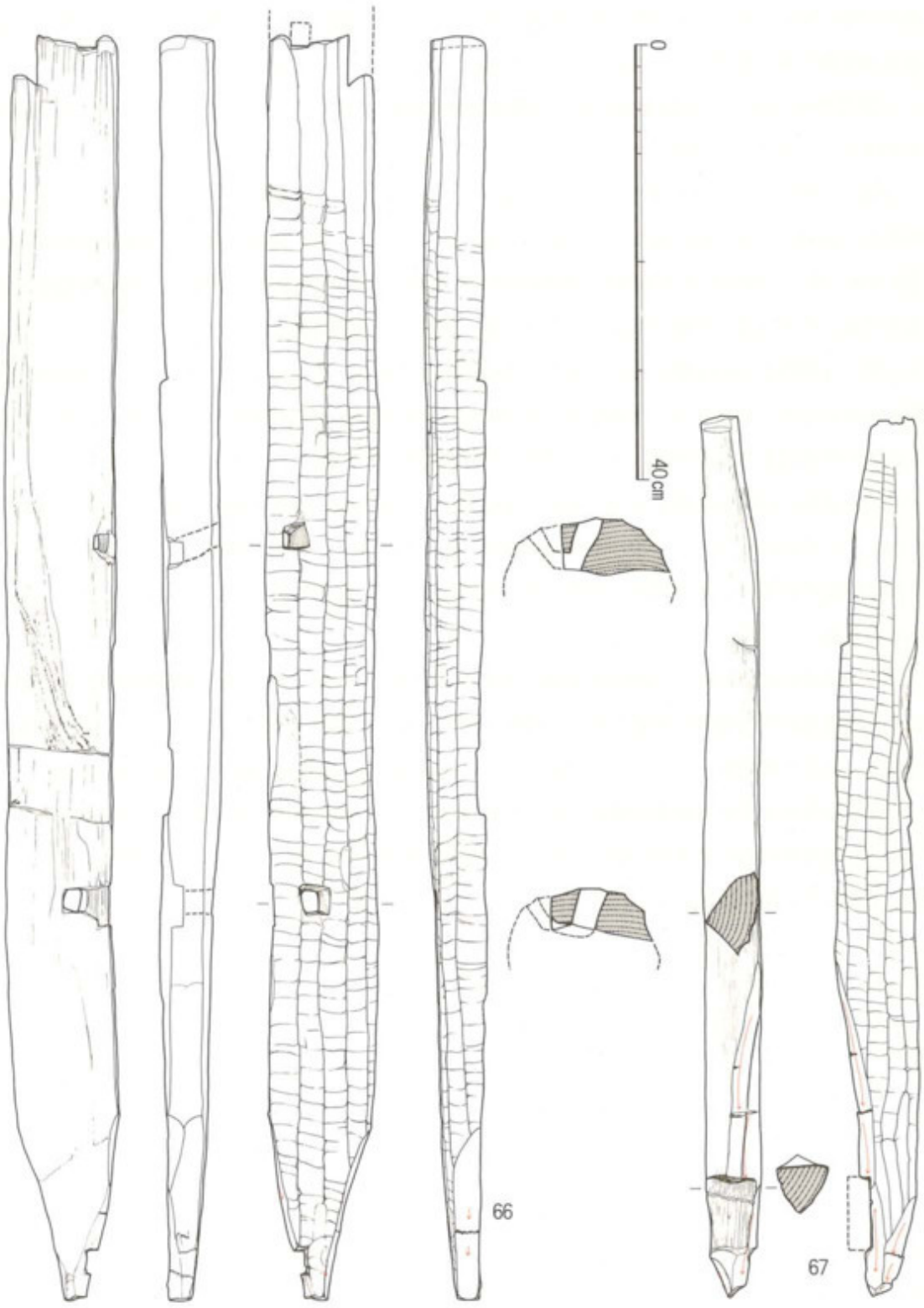
第70図　建築材67模式図（cm）

この資料の図示した面には木理に対して0～20度傾きをもち，間隔2.5～4cm，幅5cmを測る手斧刃先痕が認められる。一方この裏面は手斧等刃物による加工は認められず，割り柾の肌となっている。

横一文字を示す下端の木口付近には木理に対して直交する幅3.5cmを測る刃痕が認められる。この刃痕は手斧で仕上げられた表面のみにあって，ほぼ垂直に打ち込まれている。刃物を打ち込んだ後折り取られたものとみられ，木口はささくれた状態で，その後の仕上げはされていない。この部分を折りとることなどは二次的なもので，元来はさらに長いものであったことを想像させる。

（第72図72）　SK01東側しがらみ構成材中の資料である。全長48cm，幅8cm，厚さ4cmを測る柾目材である。元来は断面略台形を呈す角柱状のものであったと推測される。表面とした面には顕著な加工痕はないが，ほぼ垂直から打ち込まれた手斧刃先痕が3条認められる。

刃先痕は幅3cmを測り，両端が反りかえる形となっている。この面の元来の表面と考えられる木



第71図　上小紋遺跡出土木器実測図

端には幅2.5cm，深さ1cmの浅い段欠き面が認められる。下端付近には木理に直交する方向から長さ6cmを測る貫穴様の穴が穿たれている。穴幅は分割されているため不明である。

（第72図69～73）　SK01東側しがらみ構成材中の資料である。いずれも径5～6cmを測る樹皮を剝ぎとったままの芯持材である。

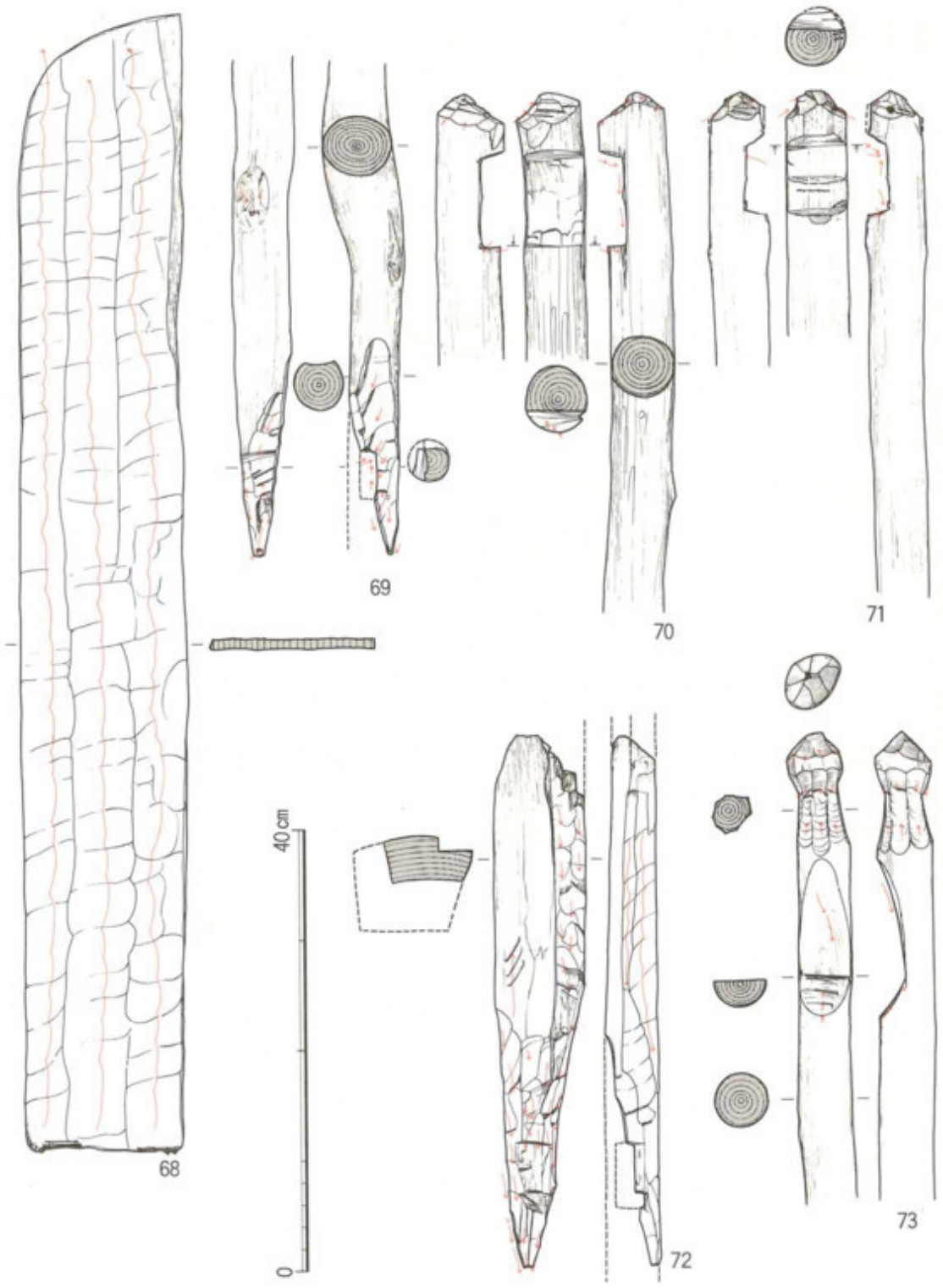
（68）は残存長1.35cmを測り，木元は欠損している。杭とし二次的に加工されているのは木末にあたる。表面には10ヶ所にわたって，節を入念に削り落とした痕が認められる。木末の部分には長さ4.5cm，深さ2cmの欠き込み加工の痕跡が認められる。これは後述する70•71と同様な形態を示すものであったかあるいは枘穴のような加工があったものと推定される。

（70）は残存長74cmを測るものである。後述する加工が施されているのは木元で，一方の端は欠損し木口はささくれている。上端付近に長さ8.5cm・深さ約2cmの欠き込み加工が認められる。欠き込みの角度は木口側が75度，それに対する面は垂直に近い角度となっている。

（71）は残存長64cmを測るものである。上端付近に長さ7cm，深さ2cmの欠き込み加工が認められる。この資料は先述した（70）と同様な樹幹を使用しており，加工刃物痕からみた刃物の使用方向など類似点が多い。両者は共木である可能性が大きいが，共木でなければ同一工人による加工と考えられる。

（72）はSK01西側しがらみ構成材の横方向に使用されていたもので，全長185cmを測る。下端となる部分は木元で約40度の角度をもって切断されている。上端部は図示したようにコケシの頭状に加工し，さらに縦断面「V」字形になるように長さ14cm，深さ2.5cmの刳込みが施されている。

刳込み角度は上方から10度の傾きをもって切り込まれ，これに対する面は約40度の傾きとなっている。この資料の幹に数本の小枝が出ていたとみられるが69～71のように枝の付根周囲を入念に削り，平滑にする等の配慮はみられない。



第72図　上小紋遺跡出土木器実測図

第5表　上小紋遺跡出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
46-1	弥生土器		8.6		やや上げ底状の底部。体部外面は縦方向のハケメ後ナデ，内面はナデ。底部外面中央は未調整，内面はケズリ。	黄白～黒灰色	1㎜前後の石英・長石を含む。	良　好	
−2	弥生土器台付甕		4.6		ハの字状に開く高台をもつ。外面は指頭圧痕，内面はナデ。	茶灰白色	石英・長石を含む。密。	〃	内面に炭化物付着。
−3	弥生土器鉢　杯	19.9			体部は逆ハの字状に開き，口縁付近で屈曲して立ち上がる。口縁端部は水平となり面をつくる。体部外面はナデ。内面はヘラミガキ。口縁部にヨコナデ	灰白色	1㎜台の砂粒を多く含む。	〃	
−4	弥生土器甕	21.4			短い頸部は屈曲して逆ハの字状に開く口縁部となる。端部は内傾ぎみに立ち上がり，面をつくる。口縁部は内外面ともヨコナデ，頸部内面は指頭圧痕，以下はヘラケズリ。外面は調整不明。	淡褐色	1～3㎜大の砂粒を多く含む。	やや良好	
−5	土師器甕	20.6			口縁部は逆ハの字状に開き，端部は平坦となる。内外面ともヨコナデ。	外−黒色 内−明灰褐色	砂粒を含む。	良　好	
−6	縄文土器精製浅鉢	34.4			体部は逆ハの字状に大きく開き，口縁付近で屈曲した後，外反ぎみに立ち上がり口縁となる。口縁部内面はやや肥厚する。内外面ともミガキ。屈曲部と口縁端部に棒状工具による刺突文の刻目を施す。	こげ茶色	3㎜以下の砂粒を多く含む。	良好でかたい。	
−7	縄文土器精製鉢				体部に屈曲した後，大きく外反する。内外面とも研磨されていると思われる。沈線で区画された縄文を施こされていると思われる。摩滅が著しい。	暗褐色	1㎜前後の砂粒を大量に含む。	〃	屈曲部径：25.0cm
−8	縄文土器				ゆるやかに内湾する口縁部をもつ。外面に平行線を主とする沈線文を施す。内面は条痕後ナデと思われる。	外−茶褐色 内−灰褐色	2㎜以下の小砂粒を多く含む。	やや良好でかたい。	
−9	縄文土器精製皿鉢				波状口縁で，口縁部は屈曲し，内傾する。外面に2条の沈線で区画された縄文をもつ。他は研磨あるいはナデと思われる。	こげ茶色	大小の砂粒を多く含む。	〃	
−10	縄文土器鉢				口縁部に耳形の把手をもつ。内外面ともナデ。把手の内に沈線文を施す。	明灰褐色	砂粒を多く含む。	良　好	
−11	〃				口縁部は縁帯をもち，上端に方形の突起をつける。内外面ともナデと思われるが，内面は一枚貝条痕の可能性もある。	縁帯は暗褐色，他はこげ茶色。	1㎜以下の小砂粒を多く含む。	やや悪く，少しもろい。	
−12	縄文土器		14.0		わずかに上げ底状を呈す。内面はナデ。外面は摩滅のため調整不明。	外−明灰褐色 内−暗褐色	砂粒を多く含む。密。	良　好	
−13	〃				口縁部は外反するものと思われ，端部外面に，断面三角の沈線を施らす。内外面ともナデ。	暗茶褐色	2㎜以下の小砂粒を多く含む。	良好でかたい。	
−14	〃				口縁部は外反する。内外面ともナデ。	暗茶褐色	1㎜以下の微砂粒を多く含む。	〃	
−15	縄文土器壺	19.4			口縁部は外傾して立ち上がり，端部外面に突帯を貼りつける。摩滅しているため調整不明。	こげ茶色	2㎜以下の小砂粒を多く含む。	やや良好でかたい。	
−16	縄文土器	21.8			口縁部は内傾し，端部外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。内外面ともナデ。	淡灰褐色	1㎜前後の砂粒を多く含む。	良好でかたい。	
17	縄文土器壺				逆ハの字状の肩部片。外面に5条のヘラ描き平行沈線が残る。内外面ともヘラミガキと思われる。	明灰褐色	石英・長石を少量含む。	良　好	

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
46−18	縄文土器 壺				肩部の破片と思われる。外面に突帯を貼り付け，有軸羽状文を施す。外面はナデ，内面はヘラミガキ。	外一黄白色 内一暗灰色	1～2㎜の石英・長石を含む。	良 好	
−19	弥生土器 甕	22.6			胴部は外傾ぎみに立ち上がり，張りをもたず，口縁部は外反する。口縁下に2条のヘラ描き沈線を廻らす。胴部外面は縦方向のハケメ，口縁部はヨコナデ。内面は調整不明。	灰白色	1㎜前後の石英・長石を含む。	〃	
47−20	須恵器 蓋	12.8			体部はゆるやかに内湾し，口縁端部はやや内傾する。内外面とも回転ナデ。	灰 色	石英・長石を少量含む。	〃	
−21	〃	14.5			天井部は平坦で体部は外反して大きく開く。口縁端部は下方にわずかに伸び，傾面つくる。内外面とも回転ナデ，天井部外面は回転糸切り，内面はナデ。つまみがつくと思われる。	明灰色	砂粒をわずかに含む。密。	〃	
−22	〃				宝珠状つまみをもち，天井部は平坦で体部は逆ハの字状に開く。天井部は外面はヘラケズリ後ヨコナデ，内面はナデ。体部は内外面ともヨコナデ	青灰色	石英・長石を含む。密。	〃	
−23	須恵器 坏		8.6		底部外面は糸切り，内面はナデ。体部は内外面とも回転ナデ。	明灰色	石英・長石を多く含む。	〃	
−24	須恵器 蓋				天井部はやや落ち込み，体部はやや内湾ぎみに開く。天井部外面は回転糸切り後回転ナデ。内面はナデ。体部外面はヘラケズリで下半は回転ナデ，内面は回転ナデ。	淡紫灰色	石英・長石を含む。	〃	
−25	〃	11.9		4.4	天井部から体部にかけてゆるやかに内湾し，口縁端部はやや内傾する。天井部外面はヘラ切り，内面はナデ。他は内外面とも回転ナデ。	青灰色	〃	〃	
−26	須恵器 皿	13.0	9.6	2.0	底部は上げ底ぎみで体部は逆ハの字状に短く開く。底部外面は回転糸切り，内面はナデ。他は回転ナデ。	〃	石英・長石を含む。	〃	内側に墨付着
−27	須恵器	16.0	12.0	2.7	高台をもち，口縁端部は屈曲して立ち上がる。底部調整は不明。体部は内外面とも回転ナデ。	外一明灰色 内一黄白色	砂粒をわずかに含む。密。やや不良。軟質		
−28	須恵器 皿	16.1	12.8	1.7	口縁部は外反する。底部は回転糸切り後ナデと思われる。体部は内外面とも回転ナデ。	明灰色	石英・長石をわずかに含む。	良 好	
−29	瓦				外面はタタキ痕，内面は布目痕を残す。	灰 色 断一灰白色	砂粒を含む。	〃	
−30	須恵器 坏				底部外面は回転糸切り痕を残す。	青灰色	〃	〃	内面見込みに墨書。

向小紋遺跡

検出した遺構

今回調査で検出した遺構は水田跡10区画，小規模な土壙SK01・02であった。

これらの各遺構は表土下約80cmを測る位置にあって，耕作土及び，床土を除去すると明瞭に畦が確認できた。これらは調査区南北線に対して約45度の傾きをもって走るものである。だだ畦の断面はいずれも顕著な隆起を見ないことは前述した上小紋遺跡検出例と同様である。

以上検出した水田跡について北西隅から順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…Ⅹと号数を付して表示し説明を加えることとする。

Ⅰ号水田跡　調査区北西隅で検出したもので，東限はⅡ・Ⅲ号水田跡を区画する畦と共有する形となっている。西側は調査区外までに及んでいるため，全体の規模等を明らかにしえないが，検出面積は9㎡を測る。

Ⅱ号水田跡　調査区北辺にあって先述したⅠ号水田跡の東に位置している。北側は調査区外に及んでいるため全体の規模を明らかにしえないが検出面積13.7㎡を測る。この水田跡の東を区す畦にはＳＫ02が掘り込まれており，Ⅱ号水田跡（古）→SK02（新）という関係が明らかである。

Ⅲ号水田跡　Ⅰ・Ⅱ号水田跡の南側に接して位置し，本調査区において全形が確認できた唯一のものである。東側の一隅が変形しているが元来は隅丸長方形を呈するものであった可能性がある。現状での面積は9.5㎡を測る。

Ⅳ号水田跡　Ⅲ号水田跡の南西に接して位置するもので，大半が調査区外にあるため形態等を明らかにしえないが検出面積1.65㎡を測る。

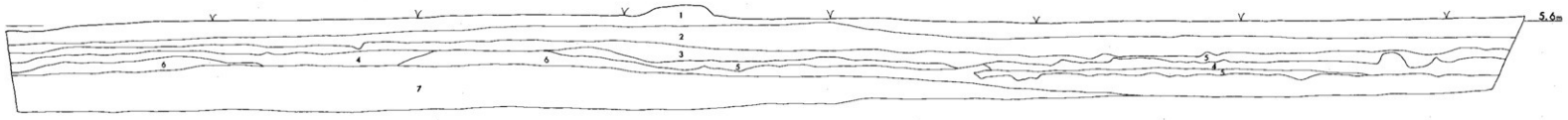
Ⅴ号水田跡　Ⅲ・Ⅳ号水田跡の南に位置するもので，西辺と東辺をなす畦が南方へ行くほど不鮮明となっている。両辺の畦がそのまま延びているとすれば，検出面積は21.55㎡を測る。

Ⅵ号水田跡　Ⅴ号水田跡の南東に位置するもので，南半は調査区外となっており全形は確認しえないが，検出面積は8.5㎡を測る。

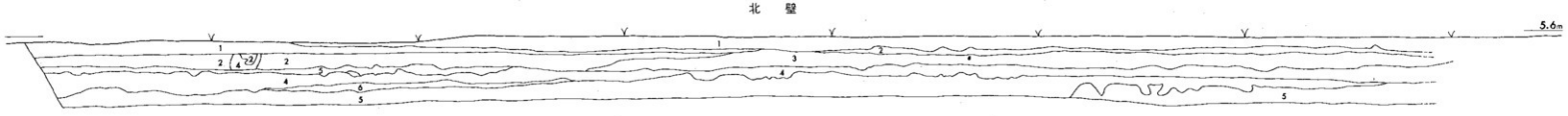
Ⅶ号水田跡　Ⅱ号水田跡の東南に接してあるもので，北限は調査区外に及ぶため全形を確認しえない。現状では検出面積は30.85㎡を測るが，Ⅱ号水田跡の東辺を区す畦が途中で屈曲しており，ここから東へ分岐する畦があった可能性も考慮されよう。なおⅡ号水田跡の項においてもふれておいたように本水田跡にもSK02が掘り込まれており，Ⅶ号水田跡（古）→SK02（新）という関係が明らかである。

Ⅷ号水田跡　Ⅵ号水田跡の東側に接してあるもので，東側は調査区外に及んでいるため全形を確認しえない。現状での検出面積は11.35㎡を測る。

南　壁

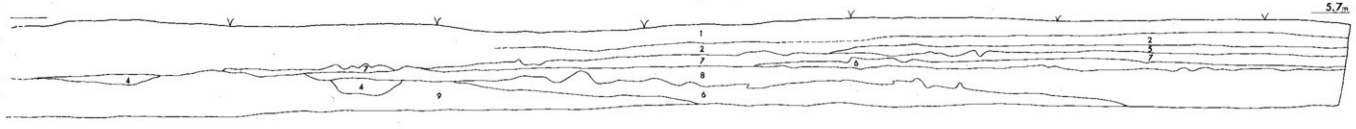


北　壁

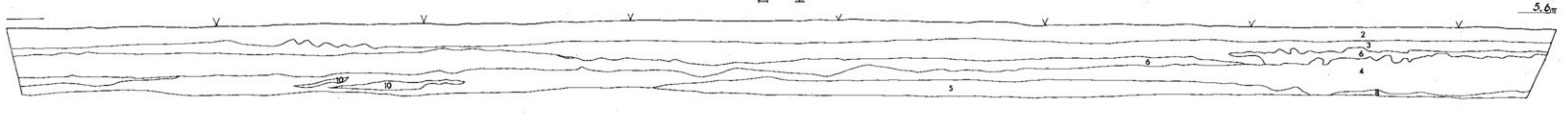


1　耕作土
2　灰色粘質土
3　灰白色粘質土
4　灰色粘質土
5　明灰色粘質土
6　灰色砂質土
7　暗灰色砂質土
8　青灰色粘質土
9　砂礫
10　白色砂

東　壁



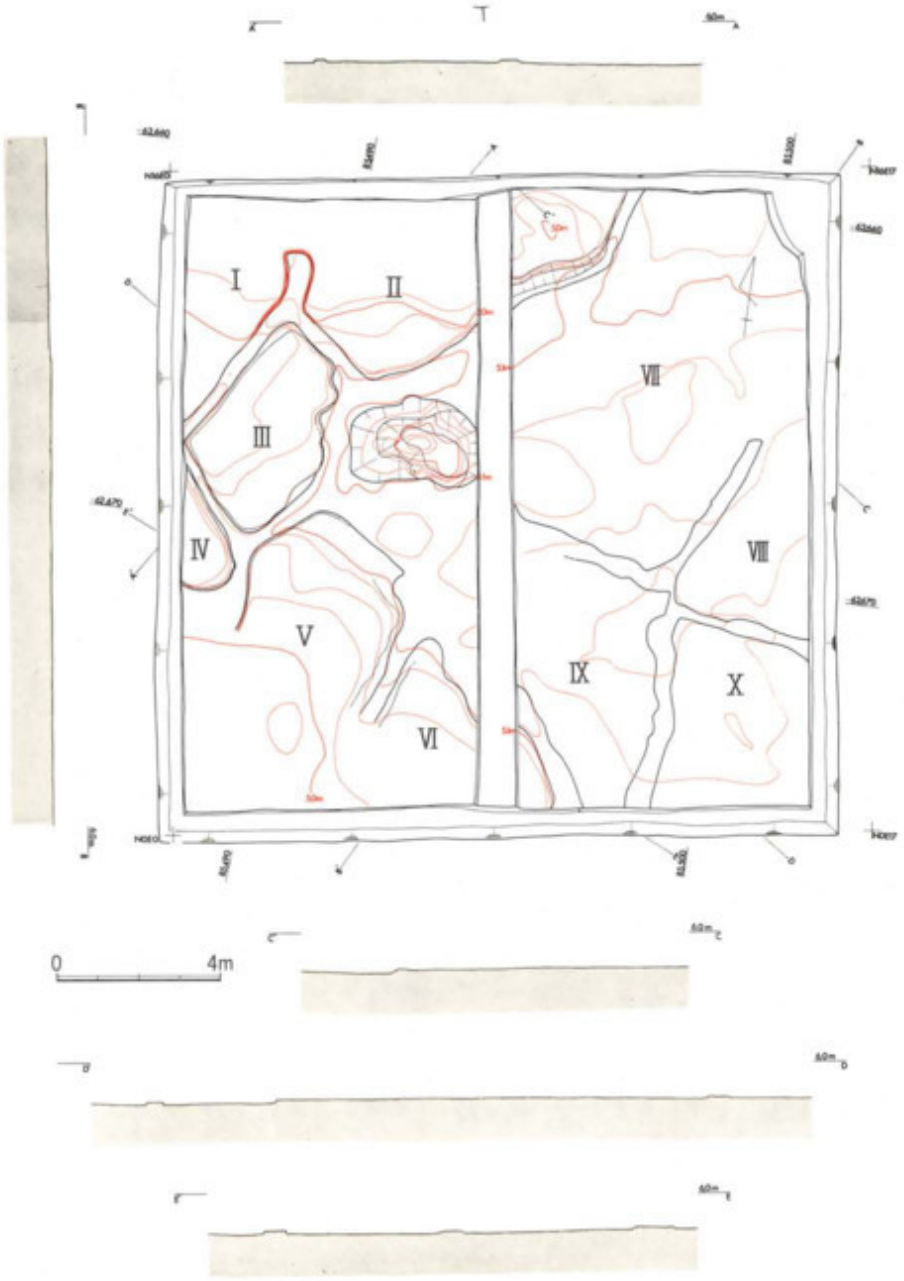
西　壁



第73図　向小紋遺跡調査区土層図

Ⅸ号水田跡　Ⅶ号水田跡の南側に接してあるもので，南端の一部が調査区外に及んでいる。検出面積は13.5m²を測る。

Ⅹ号水田跡　Ⅷ号水田跡の南側に接してあるもので，東辺及び南辺が調査区外にあるため，全



第74図　向小紋遺跡遺構配置図

体の規模や形態の確認がしえない。検出面積は12.75m²を測る。

SK01　調査区中央やや西寄りで検出した平面楕円形を呈す土壙で，東をⅦ号水田跡・西をⅢ

号水田跡・南をⅤ号水田跡・北をⅡ号水田跡にそれぞれ囲まれる形となっている。この土壙は東西方向に長軸をもち，長径３ｍ，短径２ｍ，深さ15㎝を測るきわめて浅いもので，断面は皿状を呈し，南東隅が最も深くなっている。この深くなっている位置からえぶりの身の一部等が出土した。

ところでSK01がきわめて浅く，現状では機能をはたしえない。しかし，周辺水田跡の畦も検出時は隆起がほとんど認められず，土色と土質で掘り進めるほかはない状態であったことなどを考えあわせると，上部がかなり削平されている可能性が大きい。SK01の縁辺には畦に比較すればやや広い平坦面が認められるが，ここに隆起帯を回ぐらせれば，溜枡として十分機能すると考えられる。

SK02　Ⅱ号水田跡とⅦ号水田跡とを画す畦に直交する形で，掘り込まれている細長い土壙である。長さ２ｍ，北西側幅55㎝，南東側幅65㎝を測るもので，底面は北西方向，Ⅱ号水田跡へ約47度の傾きをもって降下し，北西土壙壁面は約15度の角度をもって立ちあがっている。Ⅱ号水田跡及びⅦ号水田跡とSK02とは重複しており，Ⅱ号水田跡・Ⅶ号水田跡（古い）→SK02（新）という新旧関係が認められた。土壙内の南隅で弥生時代後期の甕片が折り重なる状態で出土した。この付近から17粒の炭化米が認められた。また出土した土壙中央の上面で同時期に属すとみられる土器片が散在する形で出土した。このSK02の性格については不明である。

出土遺物

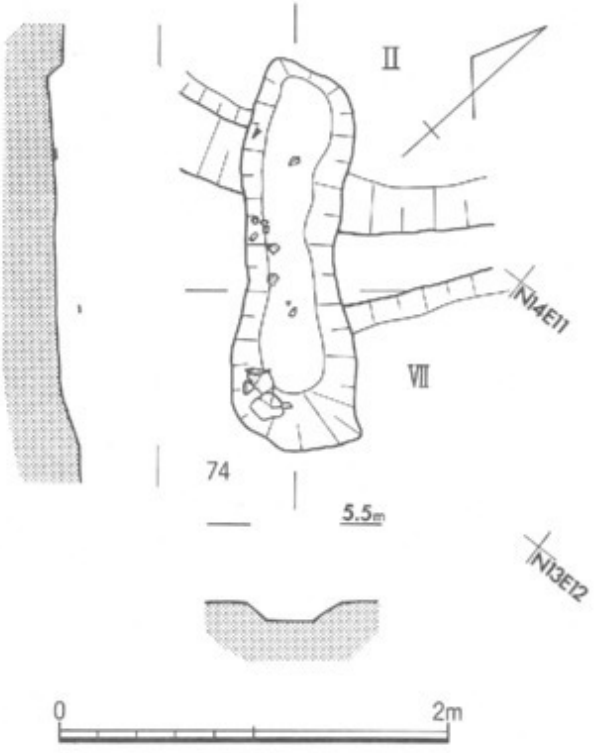
向小紋遺跡から出土した遺物には層位的に大別して３種がある。その①は耕作土等を除去作業中に出土したもので，須恵器片，磁器片，漆器片等がある。いずれも小片で，破面は摩滅しており，図示しえるものは僅少であった。

②は今回の調査で検出した遺構に伴う形で認められたもので，SK01・SK02から出土した遺物等がある（第76図74～78）（第77・78図）。

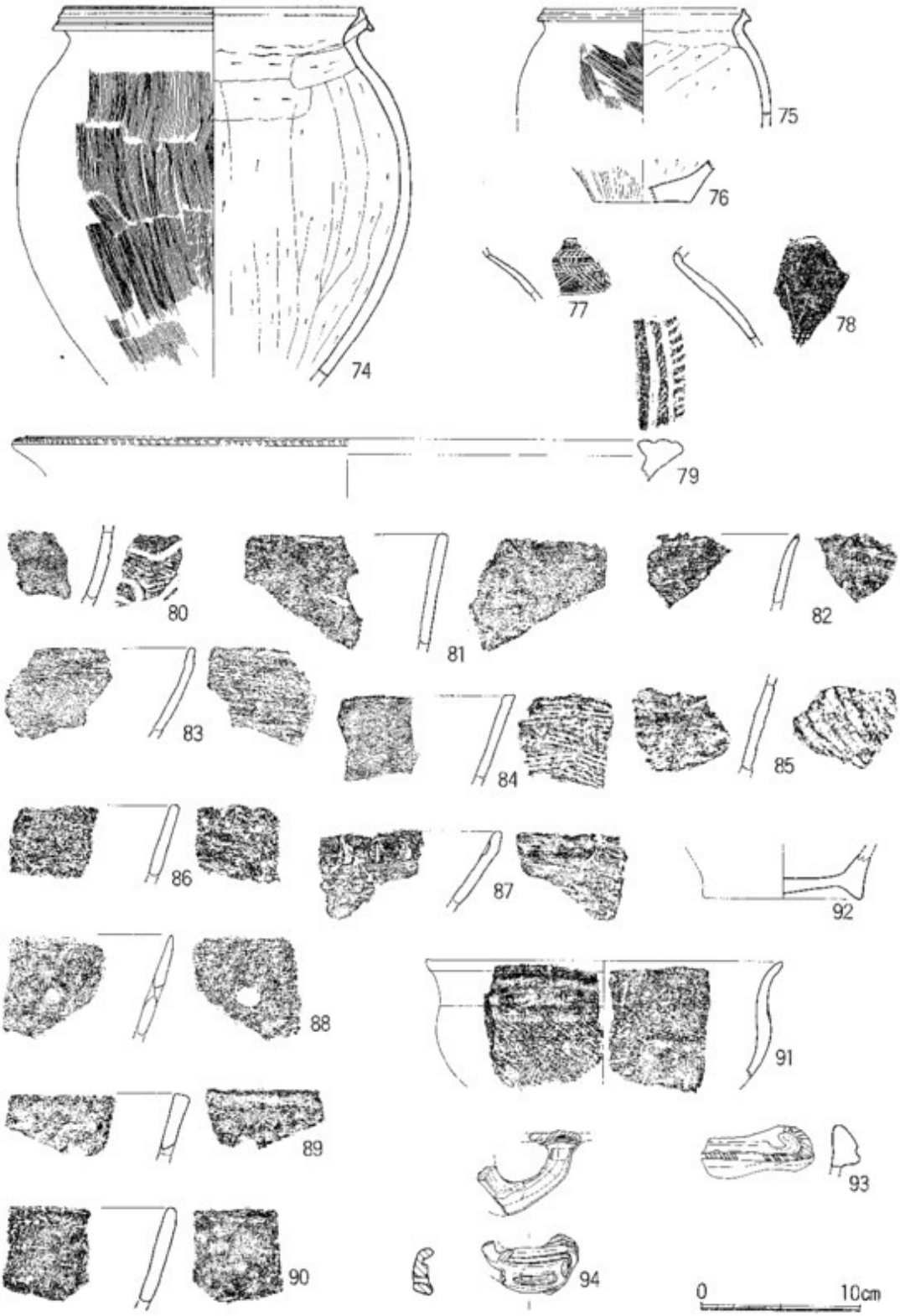
③はこの調査区の遺構に伴うものではなく，水田跡下層の礫層内に混入していたもので，縄文時代後期～晩期の土器片（第76図79～94）がある。いずれも破片は摩滅が著しい。

弥生土器（第76図74～78）

これらはいずれもSK02に伴うと判断された弥生時代後期に属するもので，（74）は口径19㎝，残存高23㎝を測るものでくり上げ口縁を呈し外面



第75図　向小紋遺跡ＳＫ－02 実測図



第76図　向小紋遺跡出土遺物実測図

に凹線を施し，胴部外面は縦方向のハケ目，胴部内面は縦方向ヘラケズリとなっており，器肉は比較的厚い。（75）もほぼ同様な形態を呈するもので，口径13cm，残存高７cmを測り，胴部内面は斜め方向ヘラケズリとなっている。（76）は弥生土器の底部片で，底径６cmを測る。内面にヘラ削り痕が認められたので後期に属するものであろう。（77）壺の肩部の破片で，外面には横方向に配した３本の平行沈線の空間をヘラ先で斜線・垂線で飾るものである。（78）壺の肩部の破片で外面にはヘラ描沈線による粗いピッチの波状文が施され，その下の方には櫛状工具による刺突文がめぐらされている。これら２点は内面ヘラ削りとなっているので弥生時代後期あるいは古墳時代初頭のものである可能性もあろう。

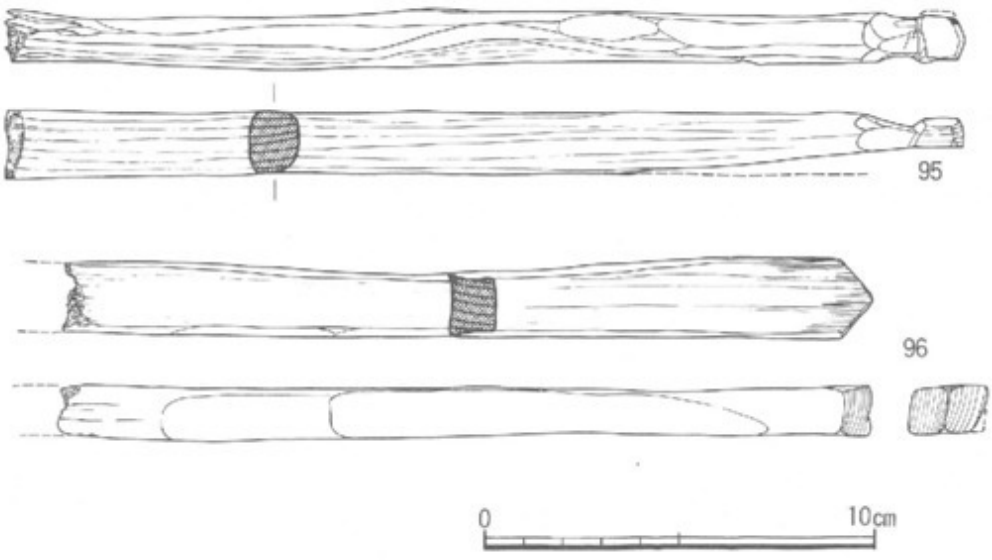
縄文土器

これらはいずれも水田跡下層砂礫層から出土したものである。

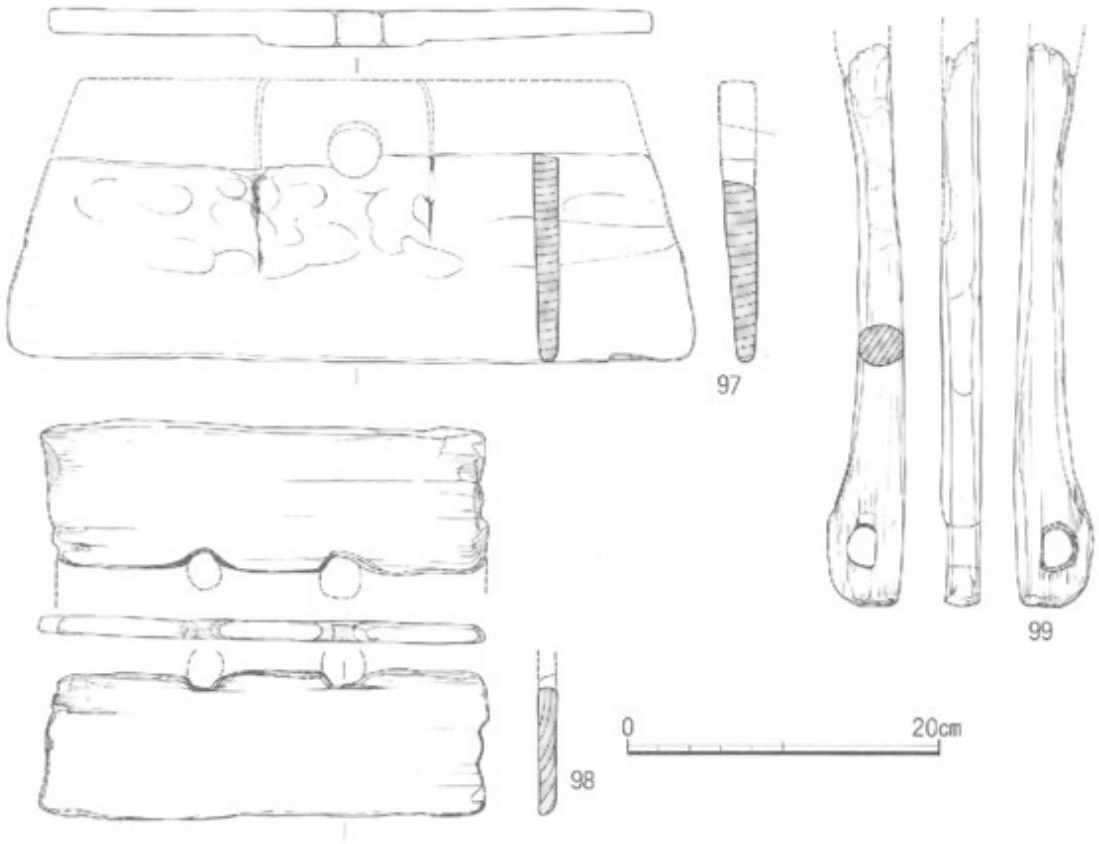
（79）口径43cmを測る，口縁を肥厚させ，沈線文と刻み目で飾る深鉢型土器である。擦消縄文を施すもの（80），内外面に条痕文を施すもの（83・84・86・87）があるが，他の破片は摩滅が著しい。（92）は底部の破片である。上げ底の形態をもち，全体に摩滅が著しい。（88・89）は口縁部よりやや下に円孔を穿つものである。（91）は外面に縄文を施す鉢で，内面は摩滅のため調整は不明である。（94）は環状の把手で一端に器壁が残存する。（93）は縁帯文土器の口縁部分である。

木製品

（第77図95・96・第78図97）はSK01内から出土したものである。（95）は柾目材で，残存長24.5cmを測り，一端をコケシの頭状に加工する。（96）残存長21cm，断面方形を呈す，柾目材の一端を二方向から削り突らす。（97）上半部は欠損しているが櫂の柾目材を加工するえぶりの身と推定さ



第77図　向小紋遺跡出土木器実測図



第78図　向小紋遺跡出土木器実測図

れるものである。現存幅13.2cm，長さ45cm，厚さ2cmを測る。破損面の中央には柄挿入孔の一部が認められる。裏面には孔の両側をわずかに削り出し，隆起させる。元来は平面台形を呈するものであったと推定される。

(98) は板目材を使用する田下駄と推定されるものである。残存幅９cm，長さ29cm，厚さ１cmを測る。一方の破面は両木口からそれぞれ８cmの位置に径2.5cmを測る不整形な円孔の一部が残っている。

(99) は柾目材で，残存長37cmを測る。一方の木端は直線を，他方は中央がやや細くなるように削り込み，木口端部は丸く加工されている。この部分に略半円形の孔が穿たれている。他方の端部を欠損するが残存する木端の加工曲線から推すと，残存部分を折り返した左右対称的な形であったものと判断される。

ま　と　め

上小紋遺跡では水田跡17区画，溜枡状遺構SK－01，溝状遺構SD－01，02を，向小紋遺跡では水

田跡10区画，溜枡状遺構SK－01，土壙SK－02の遺構を検出した。

この調査で特筆すべきは，昭和55年９号線バイパス建設に関連する調査時に，夫敷遺跡[4]で弥生時代後期の水田跡を検出したのに続いて，同平野内で水田跡の検出例を加えたことであろう。しかも小規模ながら，灌漑施設とみられる上小紋遺跡SK－01，向小紋遺跡SK－01を伴っていたこともあげる必要があろう。前者，上小紋遺跡SK－01は調査区東よりで検出されたもので，南流するSD－01と北流するSD－02がそれぞれSK－01に注ぎ込むかたちとなっている。このSK－01の東は調査区東壁となっており，その土層に「Ｖ」字形に流路の痕跡が認められた。つまり前記した２条の溝から用水が流れ込みSK－01内が満水となった時点で東側しがらみを乗り越えて，東流する仕組となっており，西側しがらみ列は護岸用のもので，東側しがらみ列は堰の役をはたしたものと判断された。

この西側には水田跡が上層７区画，中層８区画，下層２区画あり，中層及び下層のものは畦畔が流失している可能性があって，実際はさらに小区画に分離されていたとも考えられる状況であった。

向小紋遺跡で検出した水田跡もこれと同様に小区画であることが注意される。

ところで，丘陵裾に近い一帯は現在も小区画の水田が営まれているが，平野中央部に位置する水田の一区画がかなり広いのとは対照的である。このように面積比の大きな差が生じるのは小区画水田が営まれている場所が平野中央に向って傾斜しているため，広い水平面を確保することが困難であることに起因するものと解される。また，各水田跡における用水の確保が徹底しない場合，その面積も自ら限定されるのであろう。上小紋遺跡・向小紋遺跡におけるSK－01の設置は，このあたり一帯の用水確保の重要な手段であったとすることができよう。

上小紋遺跡の調査区の東方は未調査であるが，SK－01はその未調査部分に広がる水田跡に用水を供給するためのものでもあったと推定される。

上小紋遺跡のSK－01については上記した機能の他に，西と東西しがらみ列構成材の相違が認められる点が特に注意される。つまり，西側しがらみ列構成材は広葉樹62点，針葉樹４点となっており，その主なものは杭を作製するにあたり，長さ２ｍ以上，径30cmを測る丸太材をミカン割りの方法をとっているのに対し，東側しがらみ列構成材は広葉樹92点，針葉樹16点となっているが，西列のように長いものはなく，内には建築部材を杭に転用したもの30点が打ち込まれているという状態であった。

この転用された建築部材は近くの集落から移動されたものと考えられ，往時の建築構造を知る重要な手掛かりを提供したものと言える。

この他の出土遺物としてはむしろ木製品，ナスビ形着柄鍬先等が出土している。前者は県下での出土例はないが奈良県唐古遺跡[5]第10号地点等から出土し，建築用材の一部と推定されるものに似

ることは注意すべきことと言えよう。

後者のナスビ形着柄鍬先は調査区が狭かったにもかかわらず11点も出土し，二股，三股に加工されたものが共存することを確認しえたことは，当時の木製農耕具の組成を考える一助になろう。

最後に上小紋遺跡・向小紋遺跡で検出した各遺構の属す時期に関して若干記しておくことにしたい。

両遺跡とも時期を明確にする遺物は僅少であるが，上小紋遺跡ではナスビ形着柄鍬先が出土しており，これは弥生時代後期から古墳時代前半に汎日本的に分布するとされている。[6] また向小紋遺跡ではⅡ号水田跡とⅦ号水田跡を画す畦とSK－02とが重複しており，畦（古）→SK－02（新）と言う関係が認められている。SK－02内からは弥生時代後期前半の土器片が認められるので，検出した各遺構もほぼその頃の時期として大過はないと考えられる。

註

1) 山本　清　「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収　1971年
2) 坪井清足・町田　章　「奈良時代の遺物」
『出雲国府跡発掘調査概法』　松江市教育委員会　1970年
3) この植物については松村先生より麹の可能性があるとの教示を得た。
4) 広江耕史　「夫敷遺跡」
『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』－Ⅳ－　島根県教育委員会　1983年
5) 末永雅雄，小林行雄，藤岡謙二郎
『大和唐古弥生式遺跡の研究』
京都帝国大学文学部考古学研究報告　第16冊
京都帝国大学文学部考古学教室　1943年
6) 黒崎　直　「古墳時代の農耕具 －ナスビ形着柄鍬を中心として－」
『研究論集』Ⅱ　奈良国立文化財研究所学報　第28冊　1976年

第6表(1)　向小紋遺跡出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
76−74	弥生土器 甕	18.8			体部は卵形を呈し，胴部最大径にやや上方にある。口縁部は上下に拡張し，面をつくり，3条の沈線を廻らした後ヨコナデ。体部外面は縦方向のハケメ後，口縁部下までヨコナデ。口縁部はヨコナデ。内面上方は横方向のヘラケズリ，以下は縦方向のヘラケズリ	淡褐色 下半は黒色	0.05～0.2㎜の砂粒を多く含む。	良　好	
−75	〃	12.5			体部は卵形を呈すと思われる。口縁部は上下に拡張し面をつくり，2条の沈線を廻らした後ヨコナデ。体部外面に斜方向のハケメ，内面は斜方向のヘラケズリ。口縁部から頸部は内外面ともヨコナデ。	暗褐色	1㎜程度の砂粒を若干含む。	〃	表面に炭化物が付着
−76	〃		6.0		底部片，体部外面は縦方向のヘラミガキ。底部外面にハケメ，内面はヘラケズリ。	〃	〃	〃	74と同一個体
−77	弥生土器 壺				肩部片，2本沈線間に刻目状に沈線を入れ，これを2段廻らす。この間に3条の縦方向の沈線，下方に3条のハ字形沈線を施す。内面はヘラケズリ。	外−黒色 内−明灰褐色	砂粒をわずかに含む。	〃	
−78	弥生土器 甕				肩部片。外面にヘラ状工具による連続山形沈線文と連続刺突文を施す。内面はヘラケズリ。	茶灰色	砂粒を多く含む。密。	〃	
−79	縄文土器	42.0			口縁端部は内面に突出して水平な平坦面をつくり，そこに2条の沈線で区画された縄文を施し，外側にヘラ状工具による刻目状の刺突文を廻らす。	外−明褐色 内−黄褐色	砂粒を多く含む。		
−80	〃				外面に磨消し縄文を施す。内面はナデ。	茶灰色	砂粒を多く含む。密。	〃	
−81	〃				口縁部にやや外傾し，端部にやや平坦ぎみ。内外面ともナデ。	外−明褐色 内−灰褐色	砂粒（黒色粒）を多く含む。	〃	
−82	〃				口縁部は外傾し，端部にやや薄くなり，刻目状の刺突文を施す。外面はナデ，内面に横方向の条痕後ナデ。	外−明褐色 内−黒色	細砂粒を多く含む。密。	〃	
−83	〃				体部は外傾し，口縁部は直立する。口縁部にナデ。体部外面は横方向の条痕，内面は条痕後ナデ	外−黄灰色（一部黒色） 内−茶灰色	砂粒を多く含む。密。	〃	
−84	〃				口縁部は外傾し，端部に平坦面をつくる。外面は二枚貝腹縁による横方向の条痕，内面にナデ。	茶灰白色	細砂粒を多く含む。密。	〃	
−85	〃				体部片。外面は斜方向のケズリ状のナデ。内面はナデ。	外−黄灰白色 内−明灰褐色	大きめの砂粒を多く含む。粗。	〃	
−86	〃				口縁部は外傾し，端部にやや平坦となる。内外面ともナデ。	黒～黄白色	砂粒を多く含む。密。	〃	
−87	〃				口縁部はわずかに内湾し，端部に丸くなる。口縁部は内面に指頭による連続押圧文を施す。外面は横方向の条痕，内面はナデ。	外−暗褐色 内−明褐色	〃	〃	
−88	〃				口縁部は外傾し，端部は鋭い。小孔を穿たれている。内外面とも調整不明。	明灰褐色	砂粒を多く含む。	〃	
−89	〃				口縁部は外傾し，端部は平坦面をつくる。小孔を穿たれている。内外面とも調整不明。	暗い褐色	〃	〃	

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
76-90	縄文土器				口縁部はわずかに内湾し，端部は丸くなる。内外面ともナデと思われる。	暗い灰色 外面一部黒色	砂粒を多く含む。粗。	良好	
−91	〃				胴部から口縁部にかけてゆるやかなS字形を呈す。口縁端部は外側にやや肥厚する。口縁部から頸部外面はヨコナデ，胴部外面は縄文。内面は調整不明。	外−暗茶褐色 内−明茶褐色	1㎜程度の砂粒を少し含む。	〃	
−92	〃		9.8		上げ底状の底部。調整不明。				
−93	〃				口縁端部の縁帯に沈線文を施し，山形の突起をもつ。外面はミガキ，内面にナデ。	明灰褐色	砂粒を多く含む。密。	良好	
−94	縄文土器 把手				半環状の把手。2条の沈線と，透し状の孔をもつ。	暗灰色	〃	〃	

第6表(2) 石器計測表

No	種類	長幅(cm)	短幅(cm)	厚さ(cm)	重量	備考
47-31	石鏃	2.2	1.2	0.6		黒曜石

四　配　田　遺　跡

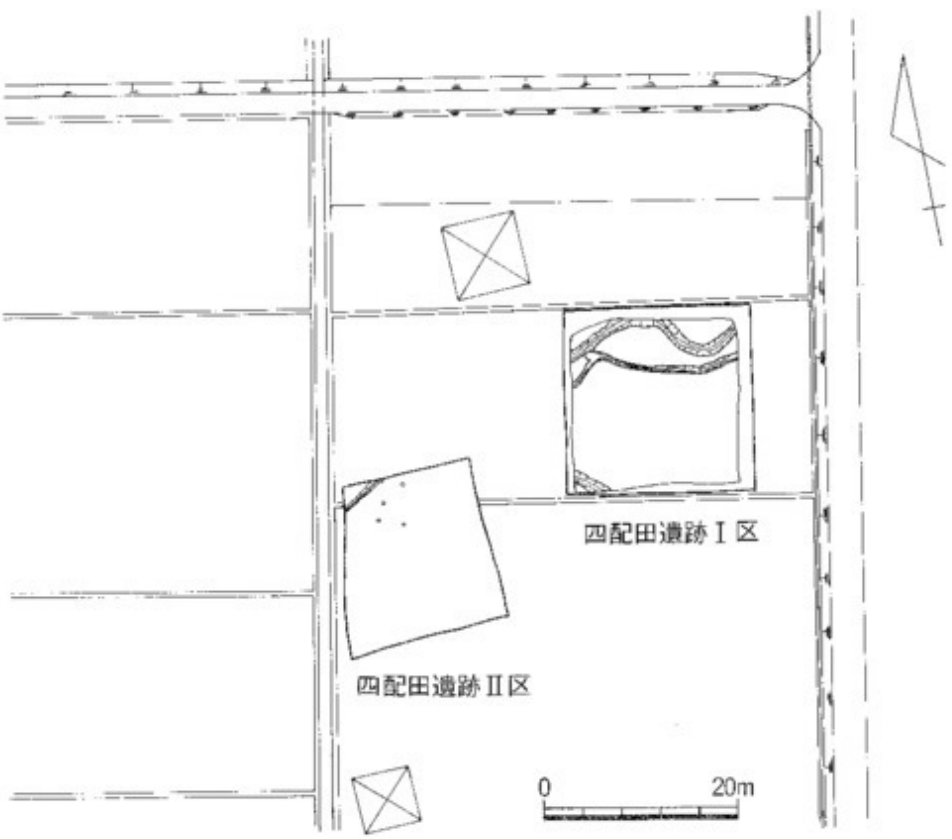
―松江市竹矢町―

Ⅵ　四配田遺跡

遺跡の概要

14号鉄塔建設予定地内の遺跡は，北松江幹線，松江連絡線ともに四配田遺跡である。北松江幹線内の四配田遺跡Ⅰ区は，松江市竹矢町76－1に所在する。松江連絡線内の四配田遺跡Ⅱ区は，松江市竹矢町77－2，81－2に所在する。

現在はともに水田になっており，標高6.3mを測る。14号鉄塔予定地は意宇平野の中央部に位置し，北側へは同じ標高で続いているが，南側では水田が一段下り，15号鉄塔予定地に向けて傾斜している。14号鉄塔予定地周辺では，耕作土の下が黄褐色粘質土でそこに遺構が掘り込まれていた。北松江幹線予定地内の四配田遺跡では東西に走る溝状遺構が検出され，松江連絡線予定地内の四配田遺跡では溝状遺構1と掘立建物址1が検出された。この遺構が掘り込まれている黄褐色粘質土は意宇平野の南側，16号鉄塔予定地近くにもみられる。



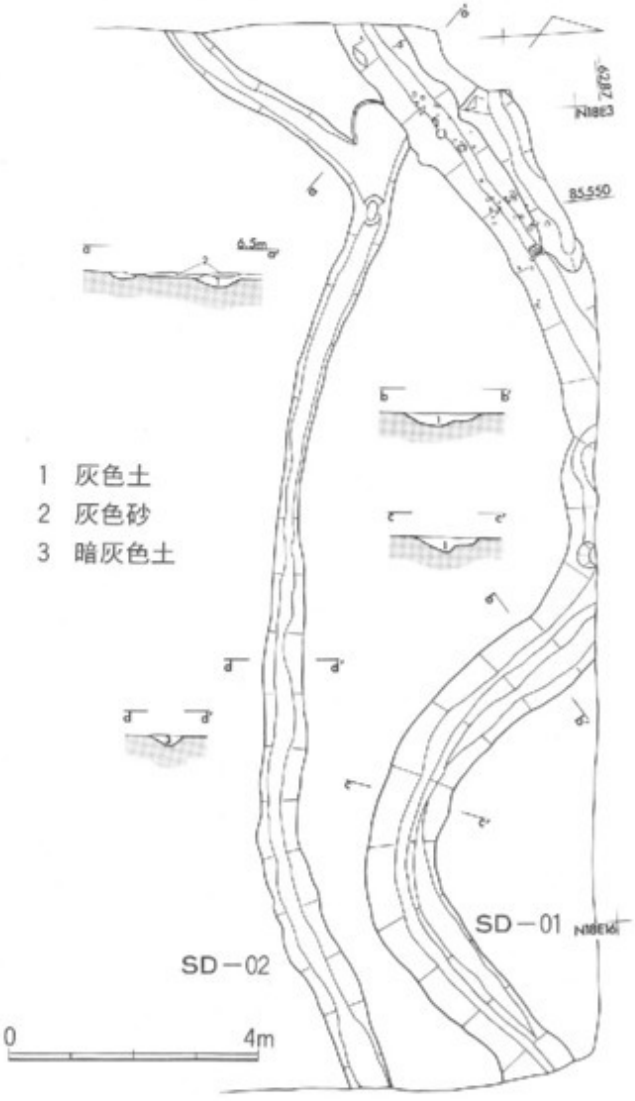
第79図　四配田遺跡調査区配置図

四配田遺跡－Ⅰ区

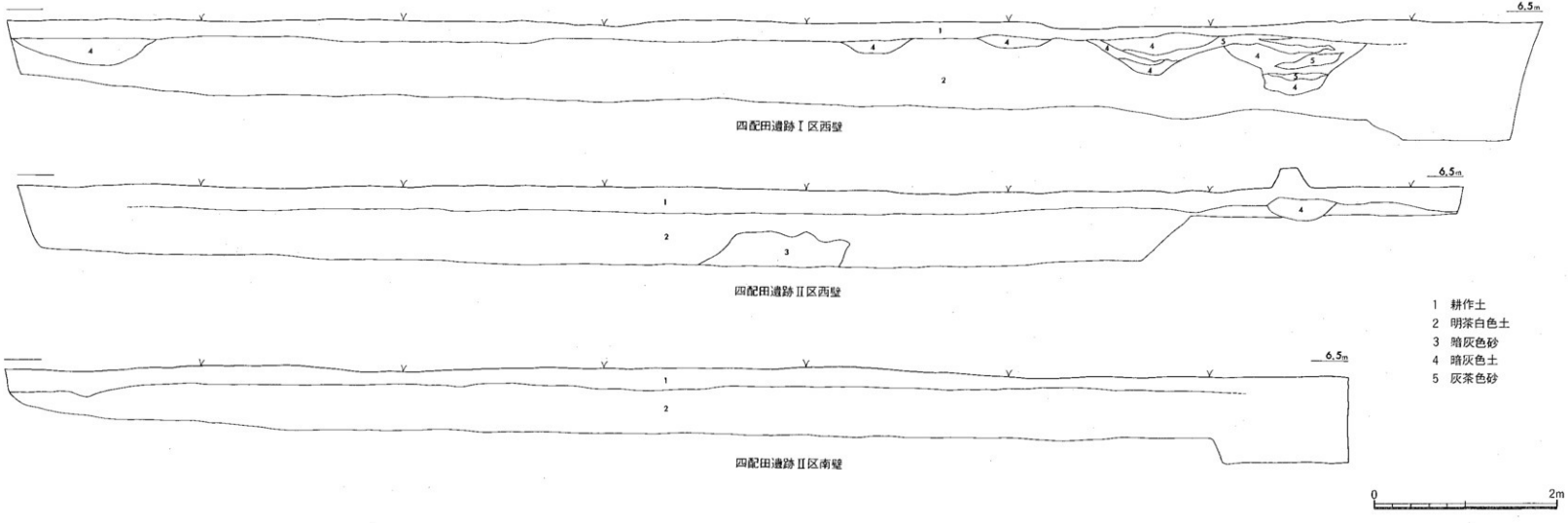
検出した遺構　SD－01は調査区の北側で東西に向いて位置する。平面形は蛇行しているために一部調査区域外となっており，東西両端でも調査区域外へ続いている。現在長は，17.2m，幅1.05～1.8m，深さ0.3mを測る。東西両端の比高差はみられず，中央からやや西側の部分が最も深くなっている。溝の断面は緩い「Ｖ」字形を呈しており，覆土は灰色土に一部灰色砂が混入している。東側の西半分ではテラス状の平坦面を持ち，西側では一段と深く掘り込まれている。遺物は西側から大部分が床面より0.2m浮いた状態で出土している。遺物は，土師器で器形の判るもの5，その他破片多数，石器1が出土している。SD－02と北側で切り合っているが，新旧関係は不明である。

SD－02はSD－01の南側に並行している。平面形は，緩い弧状を呈し北側でやや屈曲している。東西両端は調査区域外へ続いている。現在長は18m，幅は0.3m～0.8m，深さ0.2mを測る。東西両端の比高差は，西側より東側の方が10cm深くなっている。北側の屈曲する部分で底にピット状の落ち込みがみられる。溝の断面は緩い「Ｖ」字形を呈し，覆土は暗灰色土である。遺物は出土していない。

SD－03は調査区の南西コーナーに位置している。西端は調査区域外へと続いており，全形は不明である。現在長は2.15m，幅0.54～0.6m，深さ0.08mを測る。東西両端の比高差は認められない。覆土は，灰色土，灰色砂の順に堆積している。出土遺物は，黒曜石1，石7，土器片1で



第80図　四配田遺跡Ⅰ区ＳＤ－01、02実測図

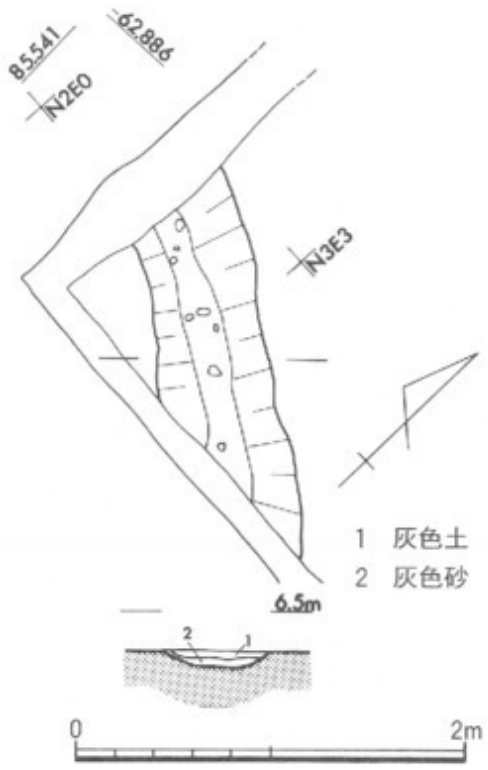


第81図　四配田遺跡調査区土層図

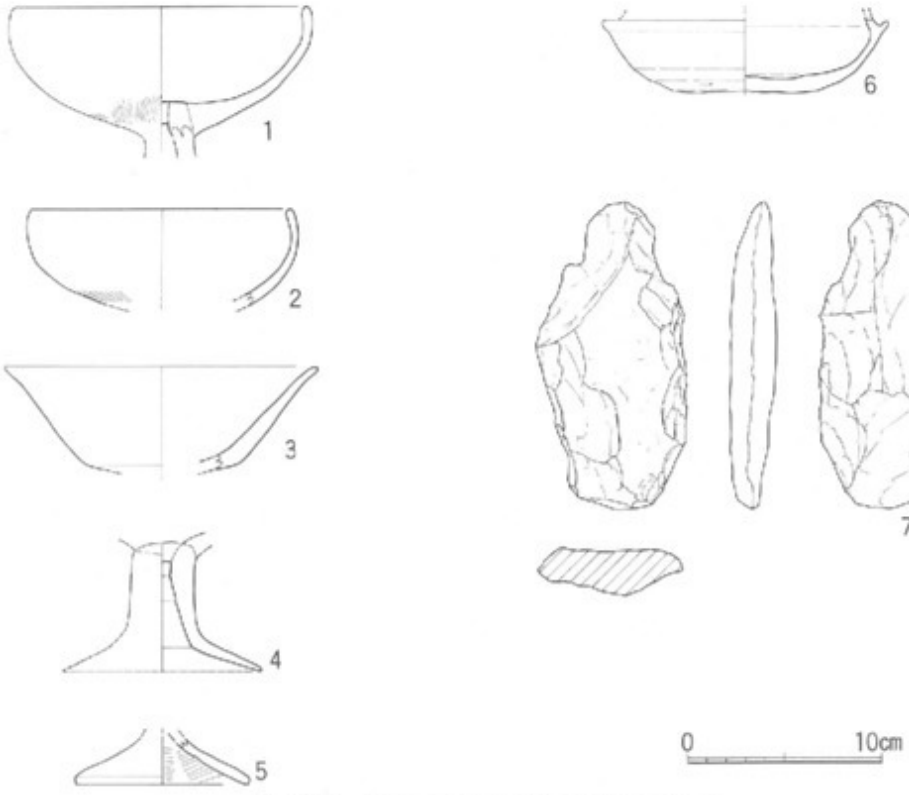
ある。

出土遺物（第83図）

（1～5，7）はSD－01から出土している。（1～5）は，土師器高杯である。（1），（2）は坏部で，体部に丸味を持ちやや内湾して口縁部に至る。口縁内外面ヨコナデ，外面下部にハケメを施す。（3）は坏部で，体部途中で屈曲し，斜め外方へ向け直線的に立ち上がる。（4）は高坏脚部で筒部から裾部へ屈曲して広がる。（5）も高坏脚部で裾部のみの破片である。外面へラミガキ，内面ハケメを施す。これらの高坏と同一形態のものは，山陰須恵器編年のⅠ期の須恵器と共伴して出土した例[1]があり，ほぼ同時期と考えられる。（6）は須恵器の坏身で口唇端部を欠いている。坏部にやや深さを持ち，



第82図　四配田遺跡Ⅰ区ＳＤ－03 実測図



第83図　四配田遺跡Ⅰ区出土遺物実測図

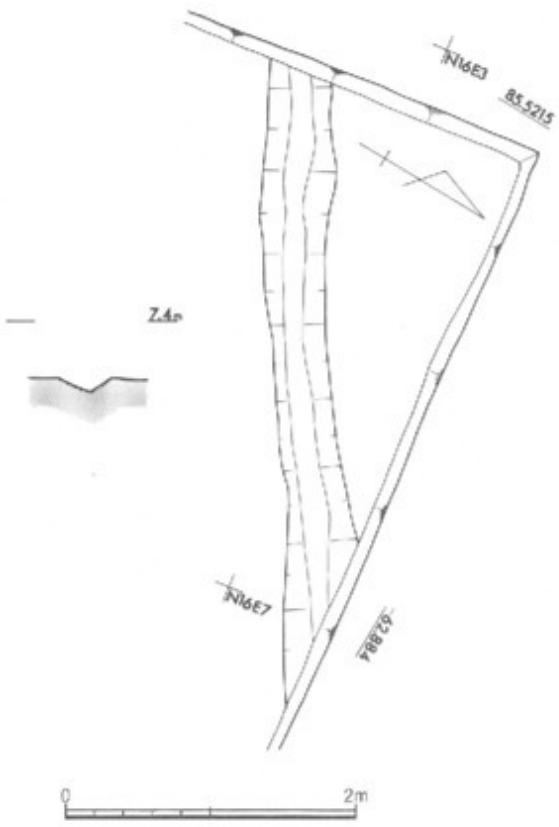
受部は斜め外方へ向け直線的に立ち上がる。体部外面の中央から下に回転ヘラケズリが施されている。時期は山陰須恵器編年のⅡ期[1]と思われる。（7）は打製石斧の未成品と思われる。片面には，自然面も残し剥離され，もう一方の面は，大きな剥離が施されのみである。全長15.8cm，幅7.6cm，厚さ2.3cmを測る。

四配田遺跡―Ⅱ区

検出した遺構

SD－01，調査区の北西部に位置し，東西方向に向いており，東西両端とも調査区域外へ伸びている。平面形は，ほぼ直線である。現存長4.48m，幅0.39～0.52m，深さ0.08cmを測る。断面は，「V」字形からやや開いた感じである。溝は，黄灰色土に掘り込まれており，検出面は標高7.2mを測る。覆土は灰色土が入っている。遺物は検出していない。四配田遺跡Ⅰ区においても溝状遺構を検出しており，位置，規模等からSD－02に近く同一の溝の可能性がある。

SB－01，調査区の北西部，SD－01と接するように位置している。1間×2間の掘立柱建物で，桁行，3.8m，梁間，2.3mを測り，東側桁行の中間ピットを欠いている。ピットは，径0.26m～0.3m，深さ0.2mを測り，黄灰色土に掘り込まれている。ピット内の覆土は，灰色土である。ピット間の距離は1.7m～2.3mを測る極めて小さな建物である。建物の周囲及びピット内からは遺物が出土しておらず時期は不明である。

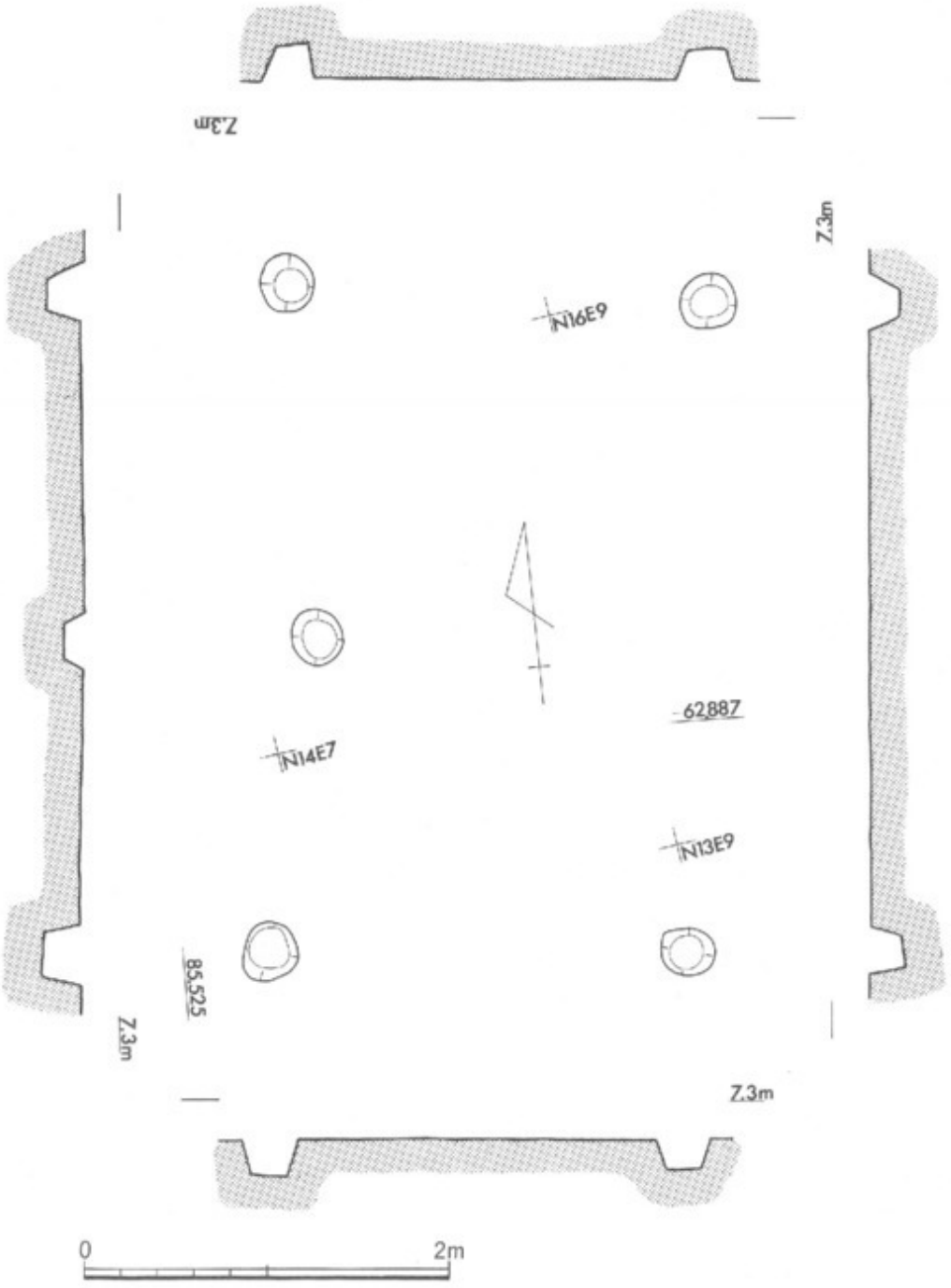


第84図　四配田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01実測図

ま　と　め

今回の調査では，溝状遺構3，掘立柱建物1を検出した。溝状遺構は2つの調査区に渡って検出され，東西に向って伸びている。溝の中でSD－01からは土師器が出土しており，時期は古墳時代中期から一部後期にかかる頃のものである。この遺跡の南側は意宇川の旧河道と思われ，後述の神田遺跡の調査区内において幅5.5mの溝を検出している。この溝は古墳時代中期と思われ，旧河道との関連が

考えられる。四配田遺跡は，自然堤防状になったやや高い場所に位置している。ここから北へ向けて，前述の土小紋，向小紋遺跡では後背湿地で水田耕作が行われている。四配田遺跡では掘立柱建



第85図　四配田遺跡Ⅱ区ＳＢ－01実測図

物を検出したが時期は不明である。今後は，この東西に伸びる自然堤防上に集落の存在する可能性があり，注意すべきである。

注1　鹿島町教育委員会　「奥才古墳群」 1985年
　2　山本　清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収 1971年）

神田遺跡 I区・神田遺跡 II区

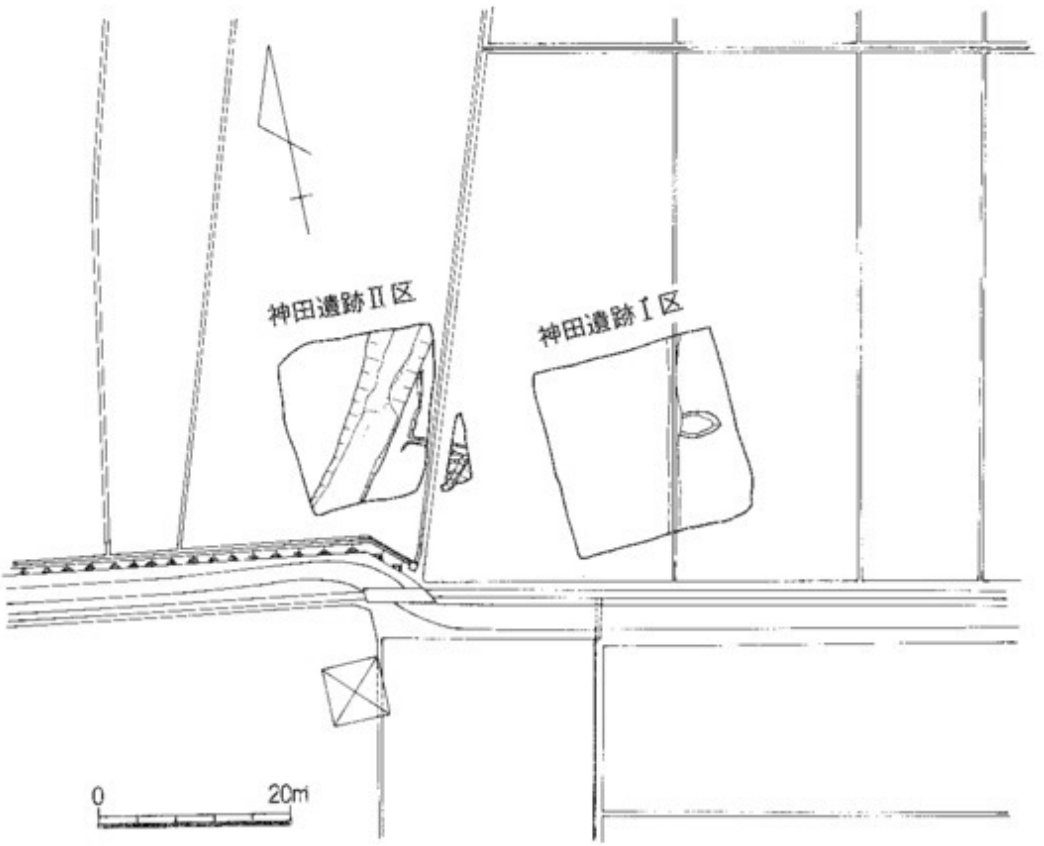
――松江市竹矢町――

Ⅶ 神田遺跡

遺跡の概要

神田遺跡の所在地籍は松江市竹矢町650－2・652－1，3他で，東に向って扇状に広がる意宇平野のほぼ中心にあたる。さらにここは数条ある旧河道のうち最も大きな旧河道①の中央でもある。(1)

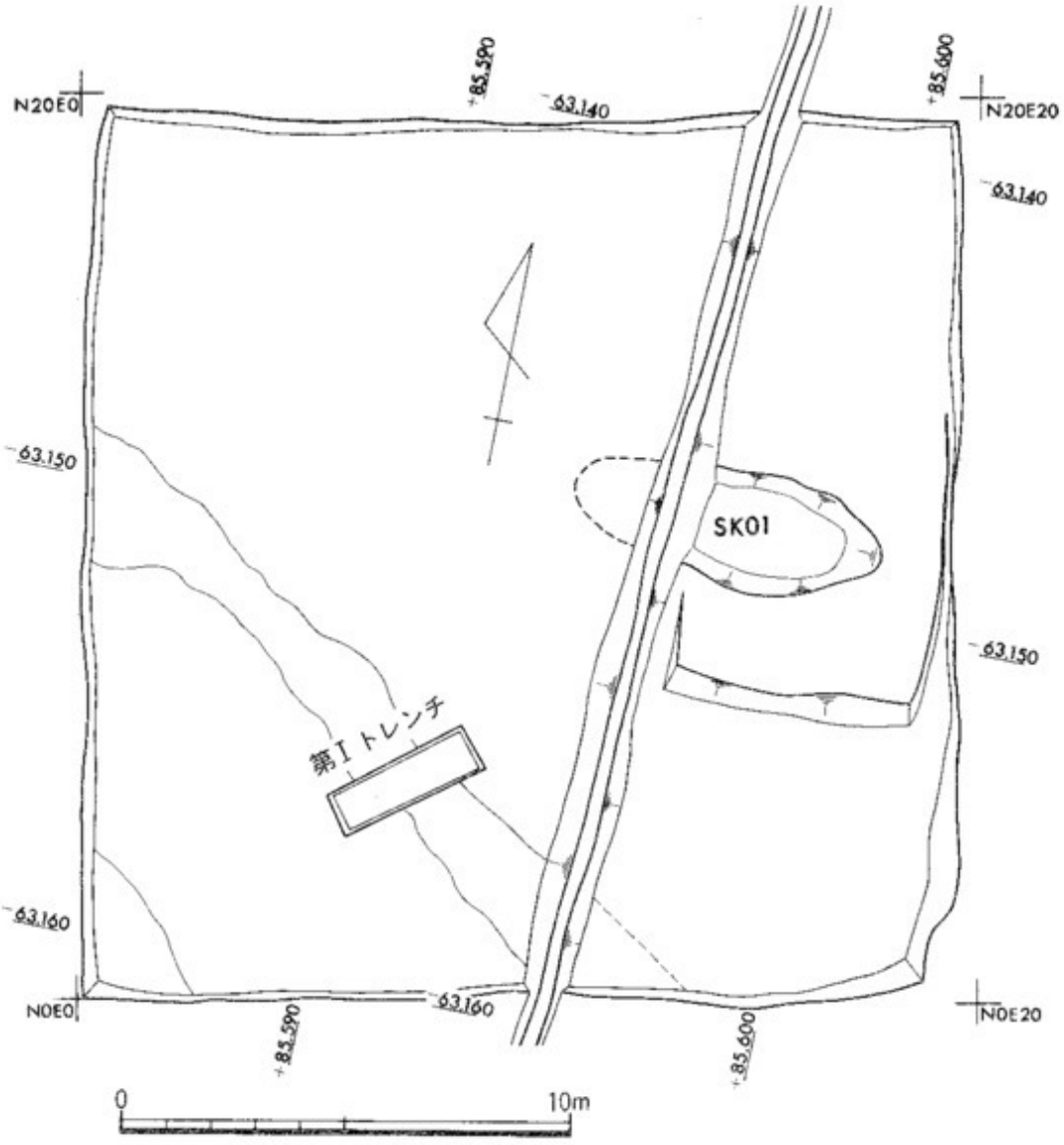
昭和55年に松江市教育委員会が発行した『松江市の埋蔵文化財』によれば，神田玉作跡として記載されている。事実，これまで玉作に関る砥石・水晶等の原石が多数採集されてきたところであった。調査は昭和58年度と同59年度に分け，前者は20m×20m，後者は17m×17mの調査区を設定して実施した。便宜上初年度の調査区を神田遺跡Ⅰ区，次年度の調査区を神田遺跡Ⅱ区と称して以下概要を記すこととする。



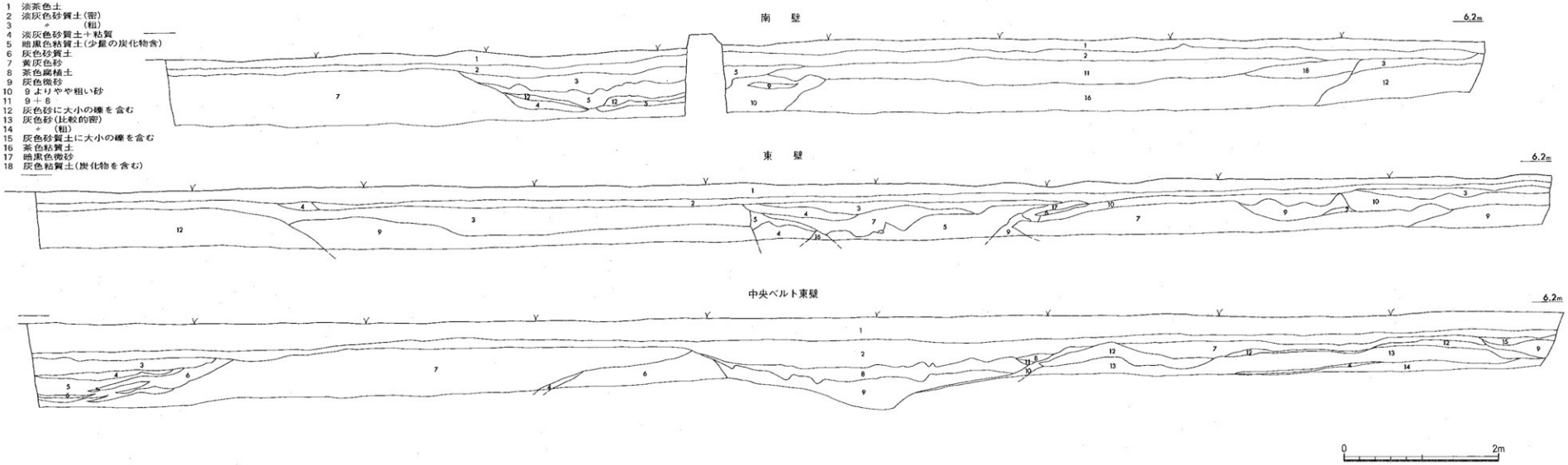
第86図　神田遺跡調査区配置図

神田遺跡Ⅰ区

この調査区は今回調査を行なったうちの東側のものである。昭和58年６月２日～29日にかけて調査を行なった。約30cmを測る水田の耕作土を除去すると下は淡黄色の砂層となっており，調査区西壁中央から南壁中央にかけて暗黒色の粘質土がベルト状に走っていた。また調査区南西隅では拳大



第87図　神田遺跡Ⅰ区遺構配置図



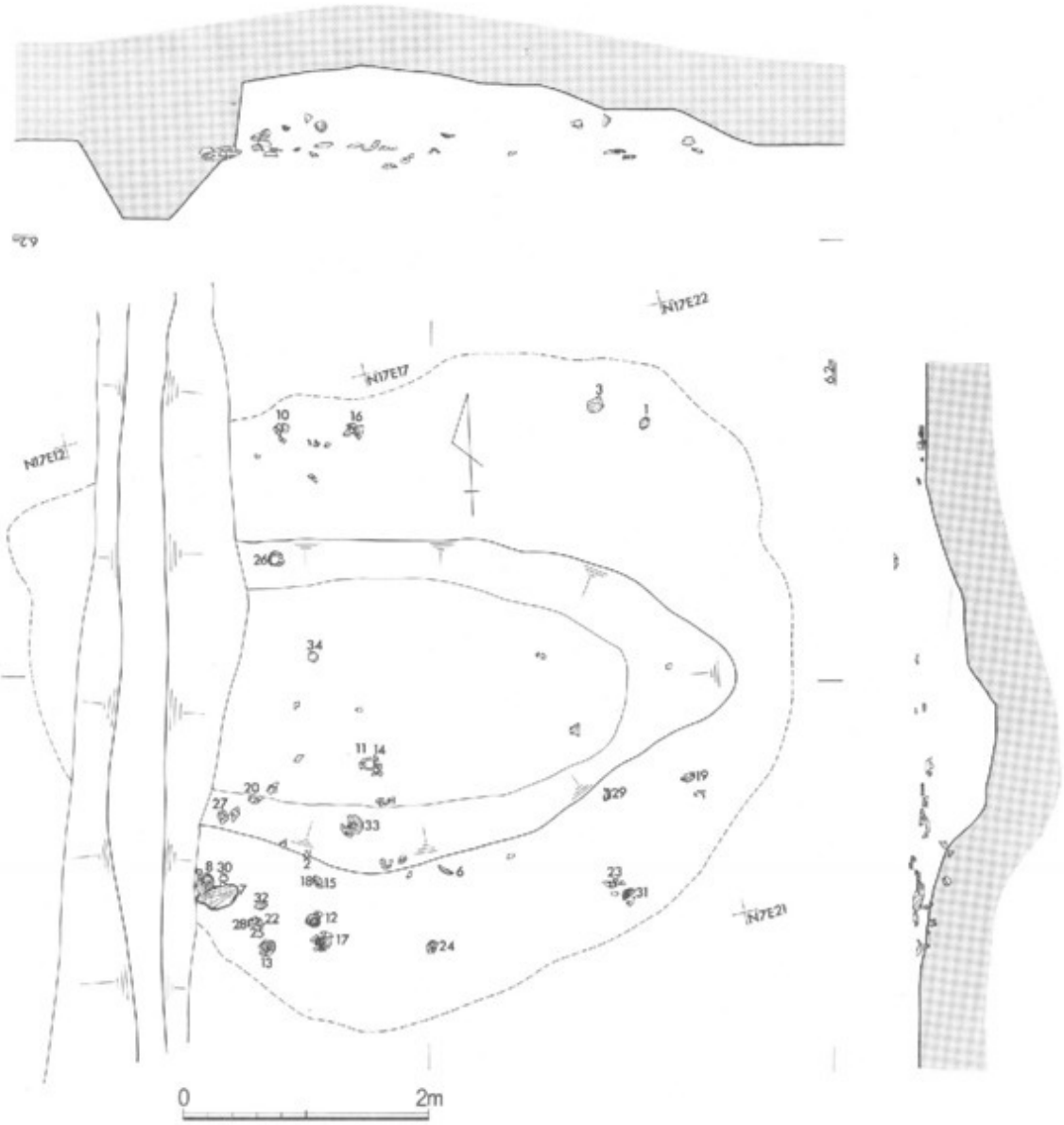
第88図　神田遺跡Ⅰ区調査区土層図

の川原石の層の一端が認められた。さらに調査区東半では北へ行くほど礫層のレベルが高く，南へ向うほど低くなっており，調査区南隅を重機で約２ｍ掘り下げたが人頭大～拳大の川原石と川砂のみで，旧河道特有の複雑な土層の堆積状態を示していた。

この調査区では中央やや東寄りで，東西に長軸をもつ浅い落ち込みSK01を検出した。この中からは玉砥石の他，須恵器坏等がかなりまとまって出土した。

検出した遺構

この調査区で検出した遺構は長軸を東西方向にもつ，長径５ｍ，短径4.5m，深さ0.6mを測る楕



第89図　神田遺跡Ｉ区ＳＫ－01遺物出土状態

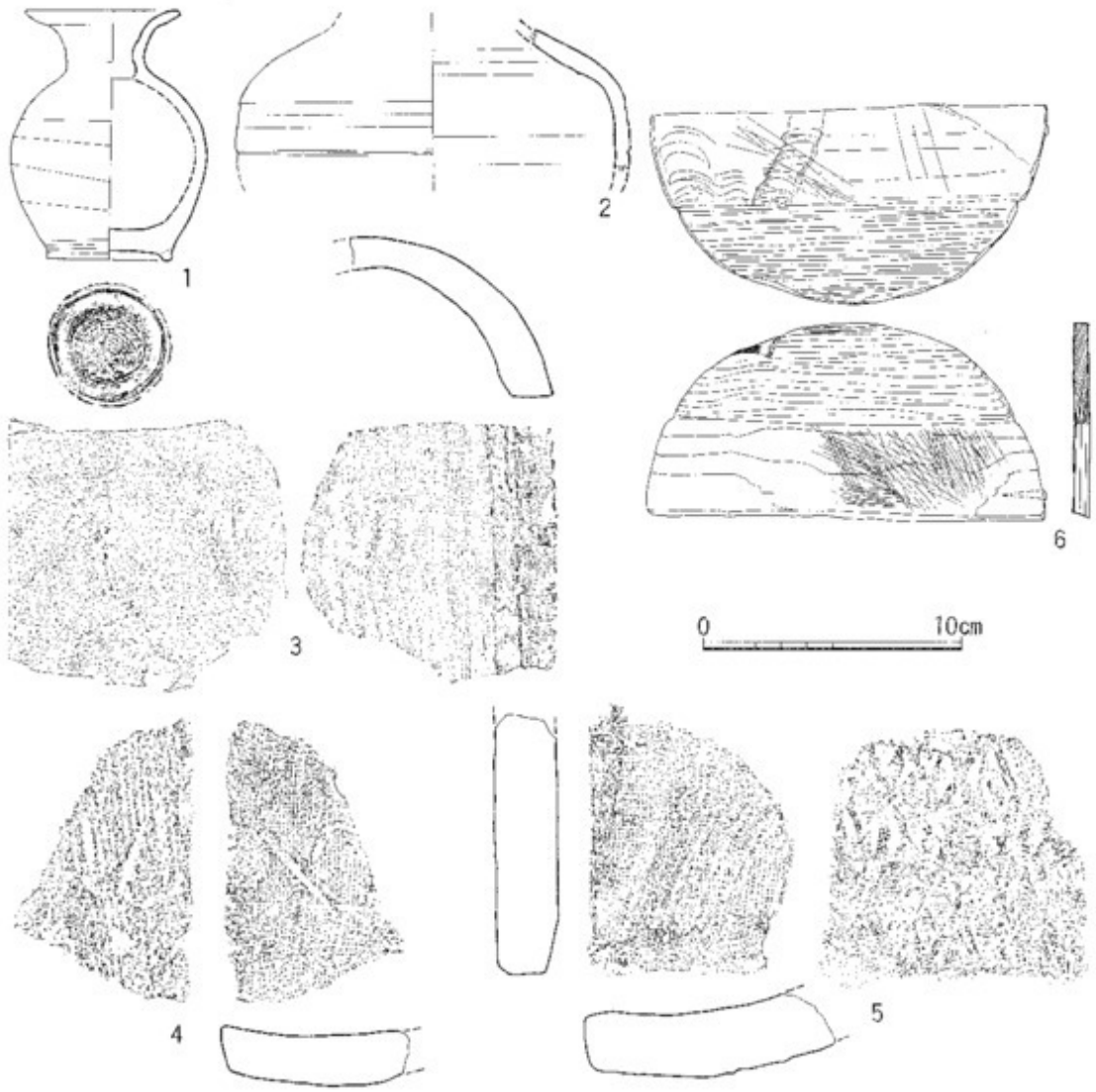
円形プランをもつ落ち込みSK01のみであった。このSK01は周辺が砂礫であるのに対し，水田耕作土除去当初から有機質を含む茶色土がSK01を覆う形で広がっていた。

ところでSK01が人工的なものであるか否かであるが，調査区内の上層堆積状態等を考えあわせると旧河道流路脇にあったくぼみに増水時水が溜り，その後，水位が下がっても一種の淀を形成し，有機質を浮べるなどしていたものと想像され，SK01自体は人工的なものでないと判断された。

出土遺物

SK01出土遺物　SK01内からは，須恵器壺２点，布目瓦３点，木器１点，玉砥石１点，須恵器坏27点以上が出土した。

須恵器小壺（第90図１）は高さ9.5cmを測り，逆「ハ」の字状に開く口縁に球形の胴部をもつもの



第90図　神田遺跡Ⅰ区ＳＫ－01出土遺物実測図

である。底部は糸切りの後に輪状の高台を付けている。（2）は須恵器壺片で胴部最大径15cmを測るものである。瓦は3点（3・4・5）がある。

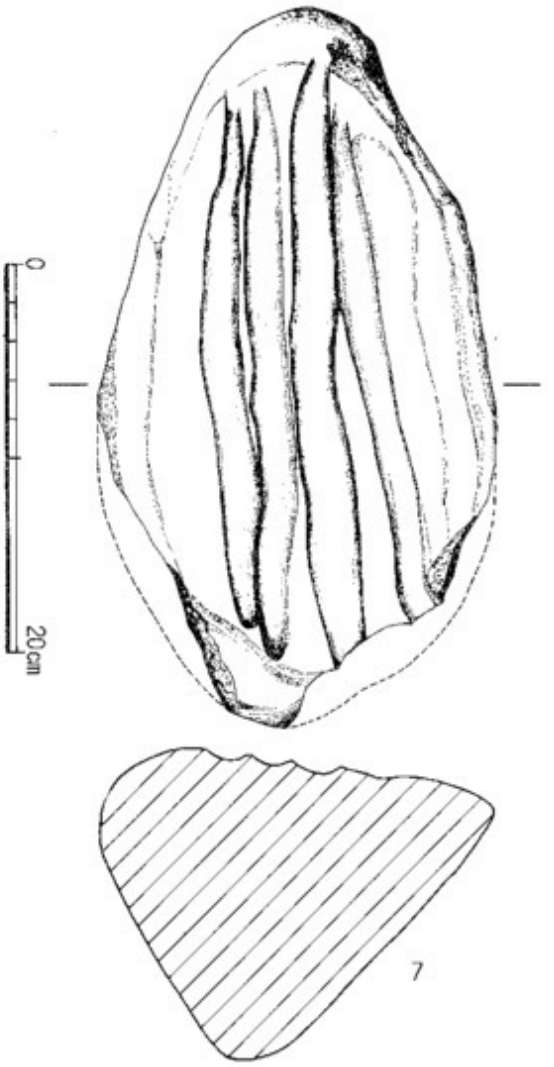
1点は丸瓦で，他の2点は，平瓦である。

木器（6）は曲物の底で現在約1/2を欠損し，径15.4cmを測る半円形を呈す。2枚の板材を矧ぎ合わせており，一方は柾目材で，他方は板目材となっている。木口には1ケ所に木釘が，1ケ所に釘穴が認められる。

玉砥石（第91図）　上面の長径37cm，短径20cmを測る花崗質砂岩製の筋砥で，断面三角形を呈す。上面には縦方向に長さ28cm，幅2cm，深さ0.4cmを測る5条の溝が並列されている。

須恵器坏　図示可能なものは27点あって個体数としてはこれをやや上まわるものと考えられる（第92図・93図）。

これらは完形に復しえるものが多く，しかも摩滅はさほど認められない。また出土時に2個体が入れ子の状態であったこと等を考えあわせるとSK01内の遺物は遠方から流れ込んだものとは考え難く，特にこれ等須恵器坏については一時期に意図的に納入されたと想像される。



第91図　神田遺跡Ⅰ区
SK－01出土遺物実測図

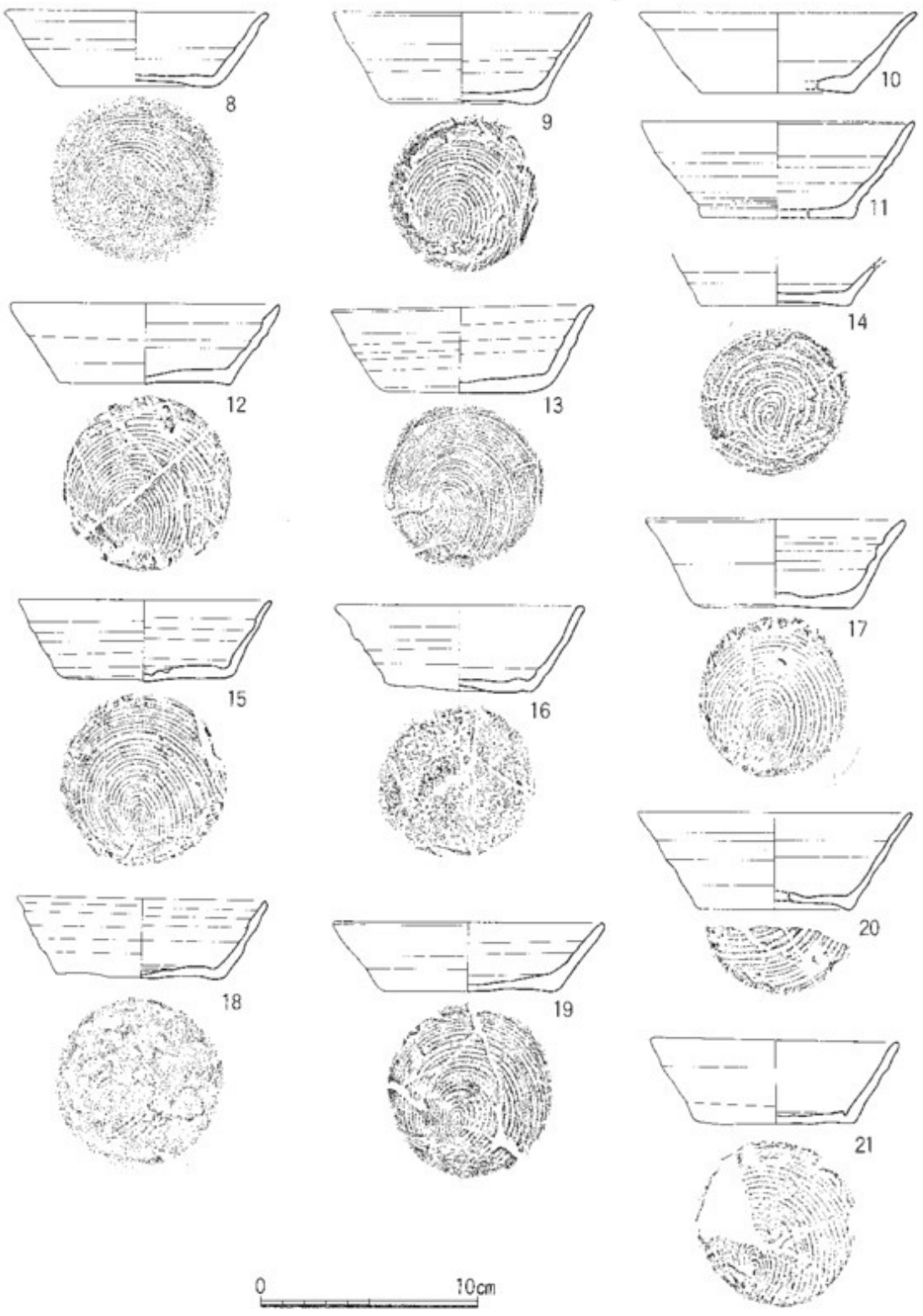
これらはいずれも逆「ハ」の字状を呈す体部をもち，底部は糸切りによって切り離されている。器形から少なくとも4種類に大別される。

A類　最も多い器形で22個あって，口径12cm，高さ8cmにおさまるものである（第92図8～21・第93図22～29）。

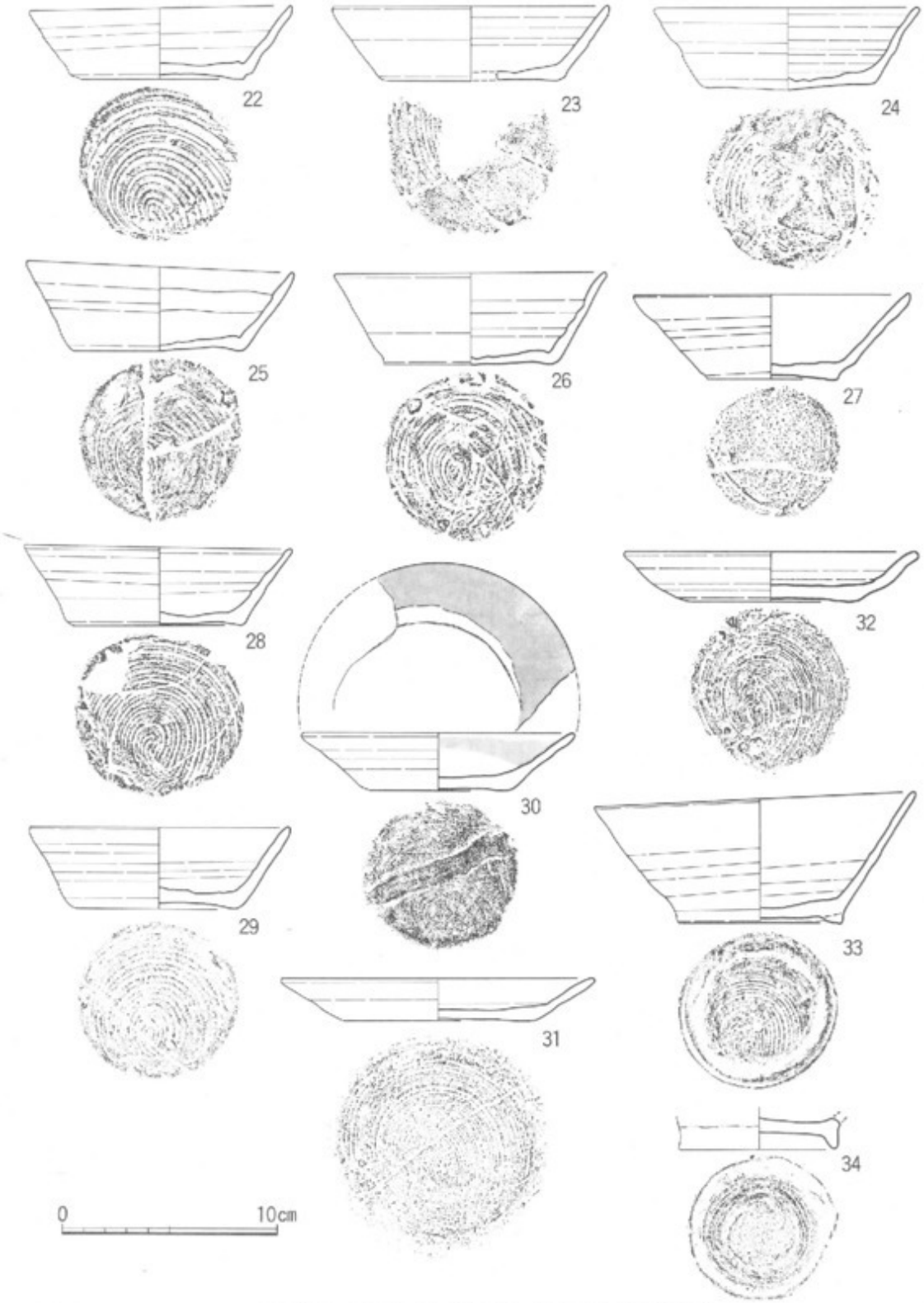
B類　口径13cm，高さ3cm以内，底径7cmを測り，A類よりは体部の傾きはゆるやかになり後述するC類との中間的な形態を示す。内面は体部立ち上がり付近から口縁部にかけて黒色を示す。これは，焼成時に炭素が付着したものであろう（第93図30）。

C類　口径15～14cm，高さ2cm，底径9～8cmを測るもので皿状を呈す（31・32）。

D類　口径15cm，高さ6cm，底径8cm内におさまるもので，鉢形を呈す。底部の端に粘土ひもを輪状にめぐらし，高台としている。高台は断面三角形を呈す（33・34）。



第92図　神田遺跡Ⅰ区ＳＫ－01出土遺物実測図

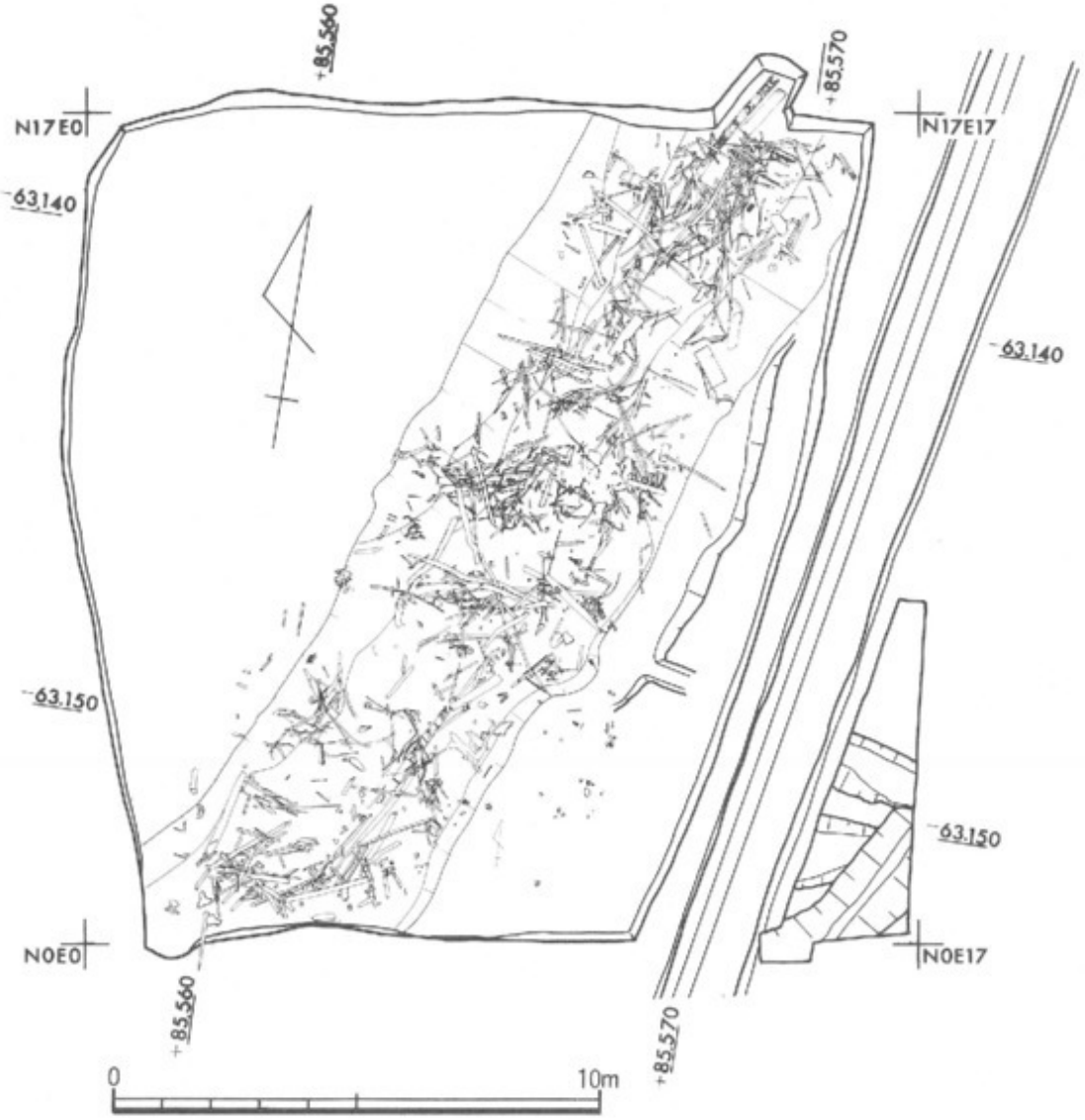


第93図　神田遺跡Ⅰ区ＳＫ－01出土遺物実測図

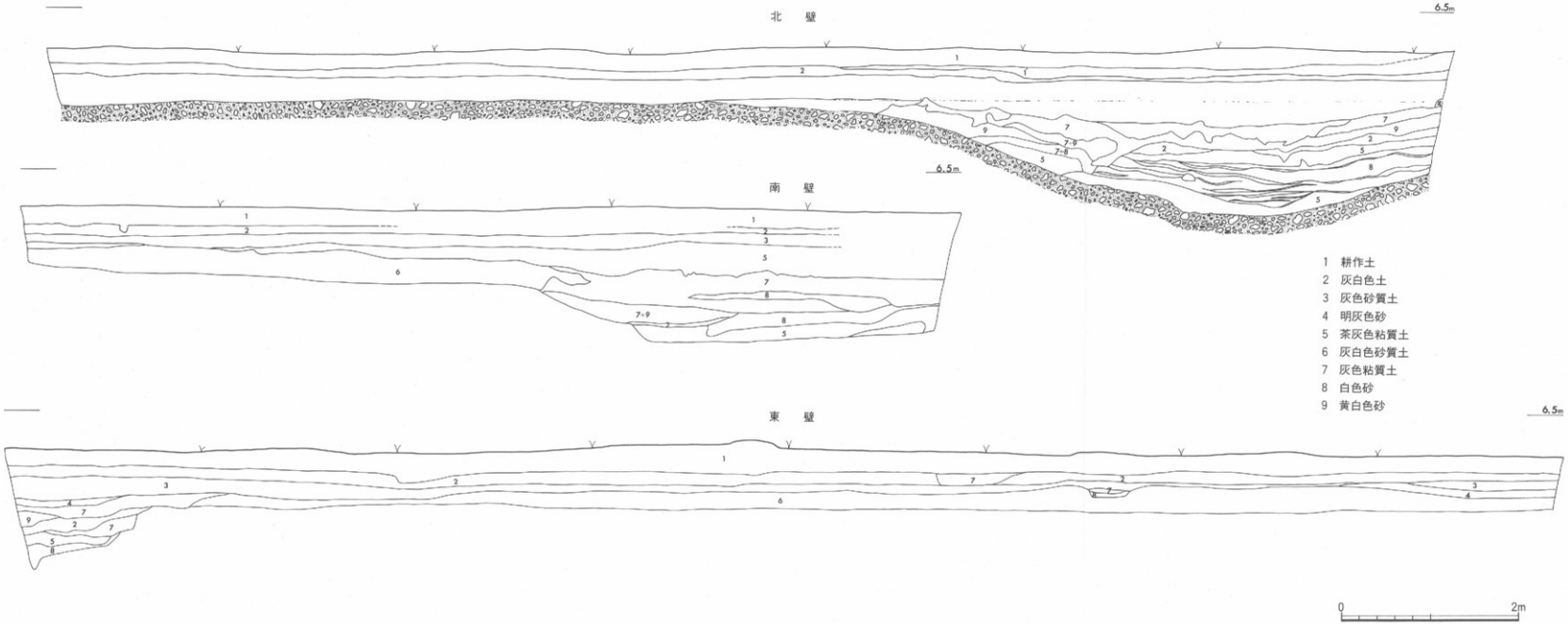
神田遺跡Ⅱ区

神田遺跡Ⅱ区としたものは昭和58年度に調査を実施した位置から西方に約８ｍ隔てて設定した調査区のことである。調査は昭和59年６月21日～10月４日にかけて実施した。

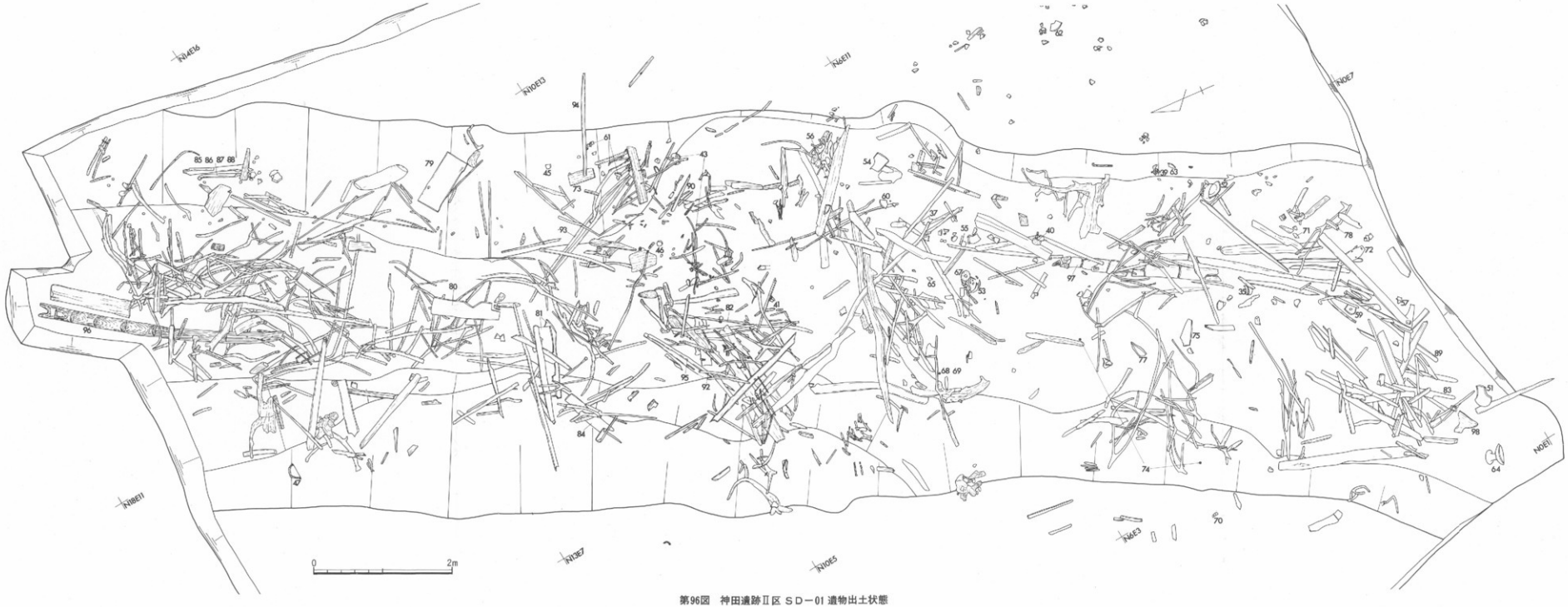
約25㎝を測る水田の耕作土を除去すると下は灰白色土，灰色砂質土となっており，この中から土



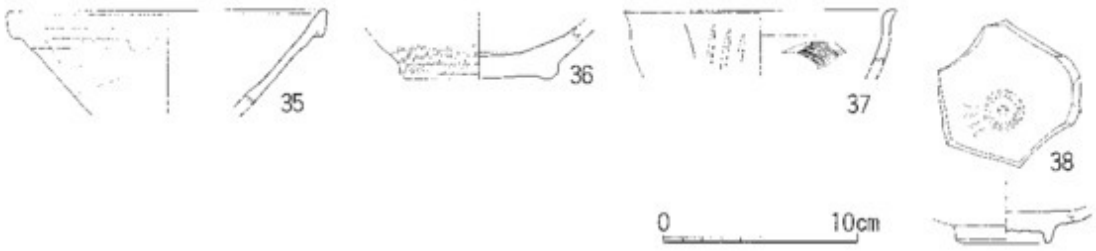
第94図　神田遺跡Ⅱ区調査区全体図



第95図　神田遺跡Ⅱ区調査区土層図



第96図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01遺物出土状態



第97図　神田遺跡Ⅱ区上層出土遺物実測図

師質土器片・須恵器片・磁器片等が出土した。遺物が出土した層は前年度調査を実施した神田遺跡Ⅰ区が耕作土を除去すると即砂層あるいは礫層であったのに対し堅緻であることが注意された。

この面で遺物が散見されたことから精査を試みたが，遺構等は認められなかった。

上層出土遺物

図示しえる遺物はきわめて少なく，輸入磁器片が若干ある程度であった（第97図）。

(35)　白磁椀で体部が逆「ハ」の字状に開くものである。内外面とも乳白色の釉がかかる。

(36)　白磁椀の底部で，削り出し高台となっている。高台及びその上方には飛鉋の刃先痕が認められる。内面には乳白色の釉がかかる。

(37)　青磁椀の口縁部で，外面には縦に３条のヘラ描き文，内面は猫描文が配されている。内外とも淡緑色の釉がかかる。

(38)　青磁椀の底部で，削り出し高台をもち，見込みに印花文が認められ，全体に淡緑灰色の釉がかかるものである。

これらはいずれも原位置を保つものではなかった。

検出した遺構

上記の中世磁器を包含する土層をさらに掘り下げると，調査区東西隅から，北東方向に走る上縁幅5.6m，深さ１mを測り，断面逆「ハ」の字を呈するSD01を検出した。このSD01が人工的ものか否かは即断の限りではないが，SD01の西側は拳大の礫が広がり，河川敷を思わせる状態にあるのに対し，東側は青灰色砂質土で，礫等の全く混在しない土質であった。つまりSD01は２つの全く異なる土層の境に沿って流下する形となっている。このことから不整形ながらも断面が左右対称を呈す状態から推すと旧河道の流路に多少手を加えたものであろうと想像される。SD01内では夥しい量の流木に混って土師器，木製品等が認められた。出土した土師器は，小形丸底坩・高坏・甕類であった。土師器類のうち甕・高坏は一部に若干の破損があるものの完形に復しえるものがあり，著しい摩滅も認められなかった。

このことから土師器に関しては遠方から流されて来たものではないと判断された。この他木製品は用途不明のものが大半を占めるが，農耕具・建築部材と推定されるもの等も散見された。これら

とともに認められた流木はかなりの摩滅が認められるものもあった。

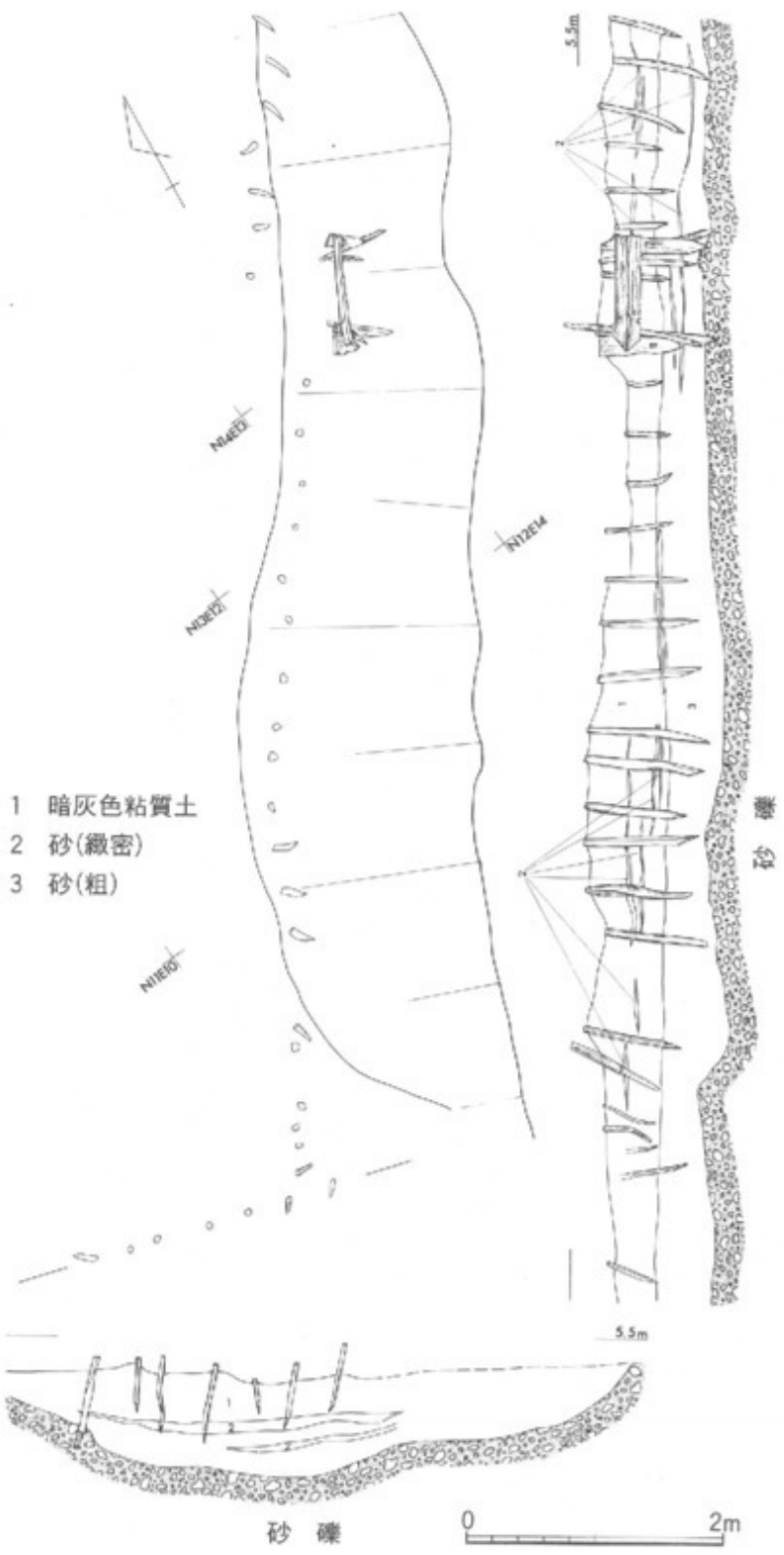
SD01内杭列

SD01内に設置された施設としては顕著なものは少ないが，調査区北壁に近い岸付近に打ち込まれた杭列がある。

これはSD01の東岸付近にあって，溝の下端辺に沿う形で，南方へほぼ直線で10m続き，約80度の角度をもって西へ「L」字状に屈曲し，SD01を横断している。

列を構成する杭材は計33本あって，溝下端辺に沿うもの26，横断するもの7本となっている。

溝の下端辺に沿う杭列に平行して，建築転材を組合わせた鳥居形の施設が認められた（第98図）。これはSD01の東岸斜面に打ち込まれているものであるが用途や杭列との関係は不明である。これら杭先端部はSD01の底部をなす礫層にはあまり深く達しておらず，やや



第98図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01内杭列実測図

浮いた形となっている。このことから，杭が打ち込まれたのはSD01内最下層の灰色粗砂が堆積した後ということができよう。

一方SD01を横断する形で打ち込まれている杭列には径約20cmを測る丸太材や，板状材を横木として堰状を呈していた。ここには上流から流れて来た流木が折り重なる状態で堆積していた。

SD01出土遺物

土　　器

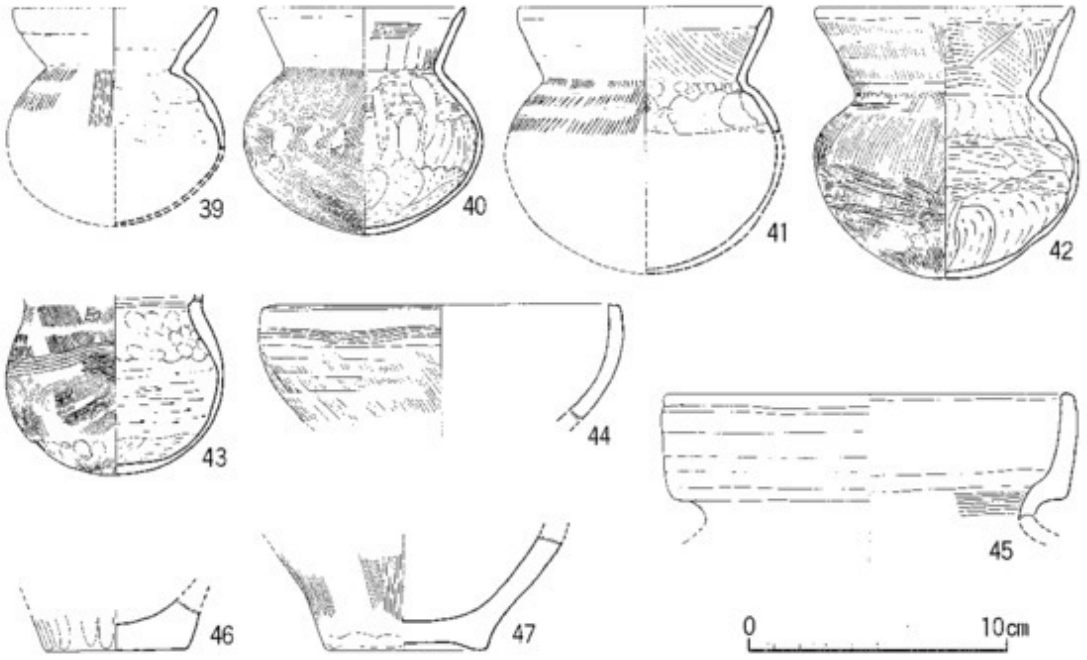
SD01内から出土した遺物には古墳時代中期ごろのものとみられる土師器丸底坩（第99図39～43）・同甕（第100図48～55），同高坏（第101図56～67）があり，この他弥生時代中期～後期のものとみられる破片（第99図45～47）がある。前者三種の土器は一応時期的なまとまりがみられるが，後者との間には著しい時期的隔りがあり，後者は流入したものであろうと判断された。

（第99図39～43）はいずれも丸底坩で逆「ハ」の字状に開く口縁部と球形の同部からなっている。外面には粗い刷毛目，内面は指頭圧痕・ヘラ削り痕が認められ，器肉は薄い。

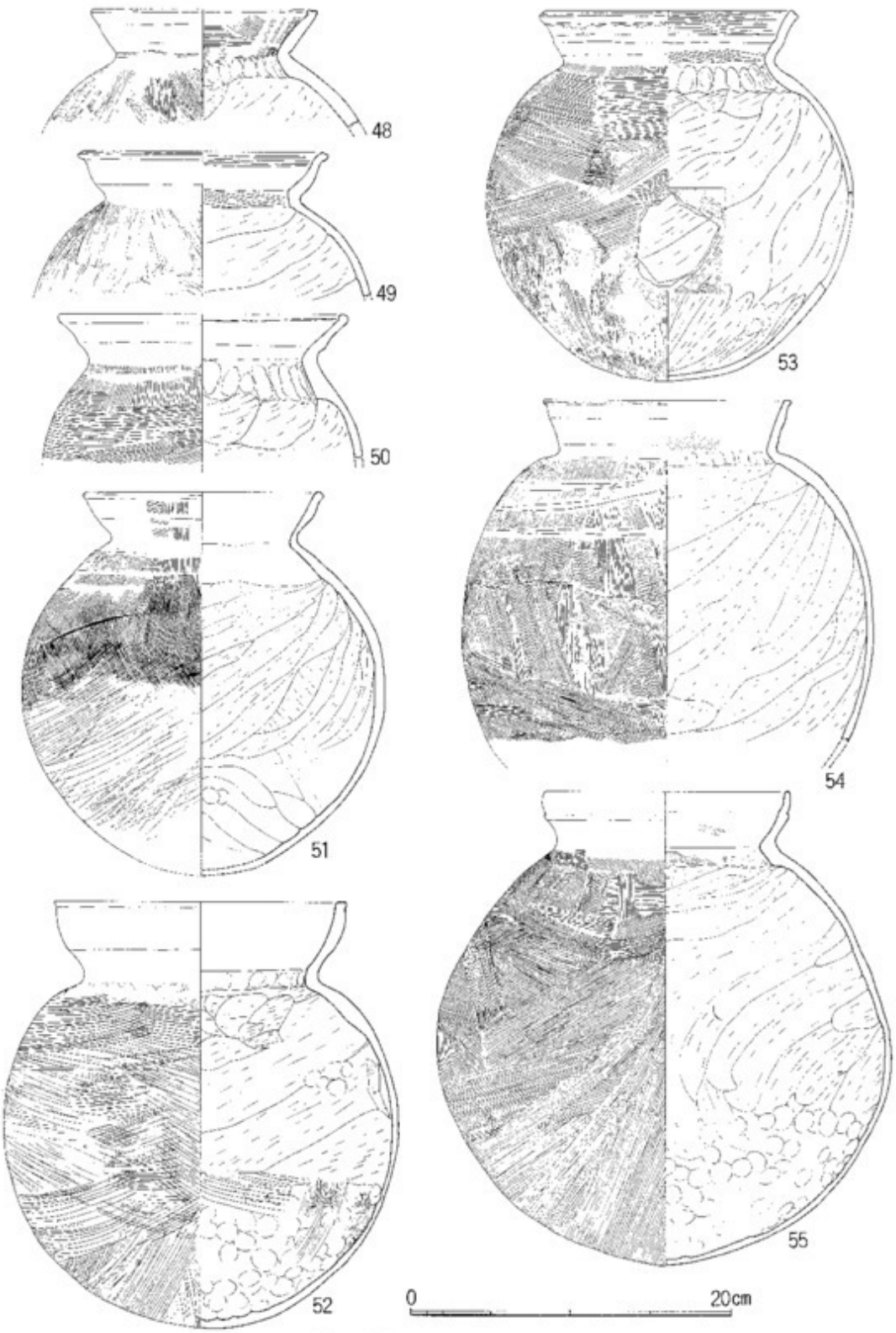
（44）は口径14cmを測る椀と考えられる破片である。

（46～47）は弥生土器の底部で，（45）は口縁部である。いずれも全体に摩滅が著しい。

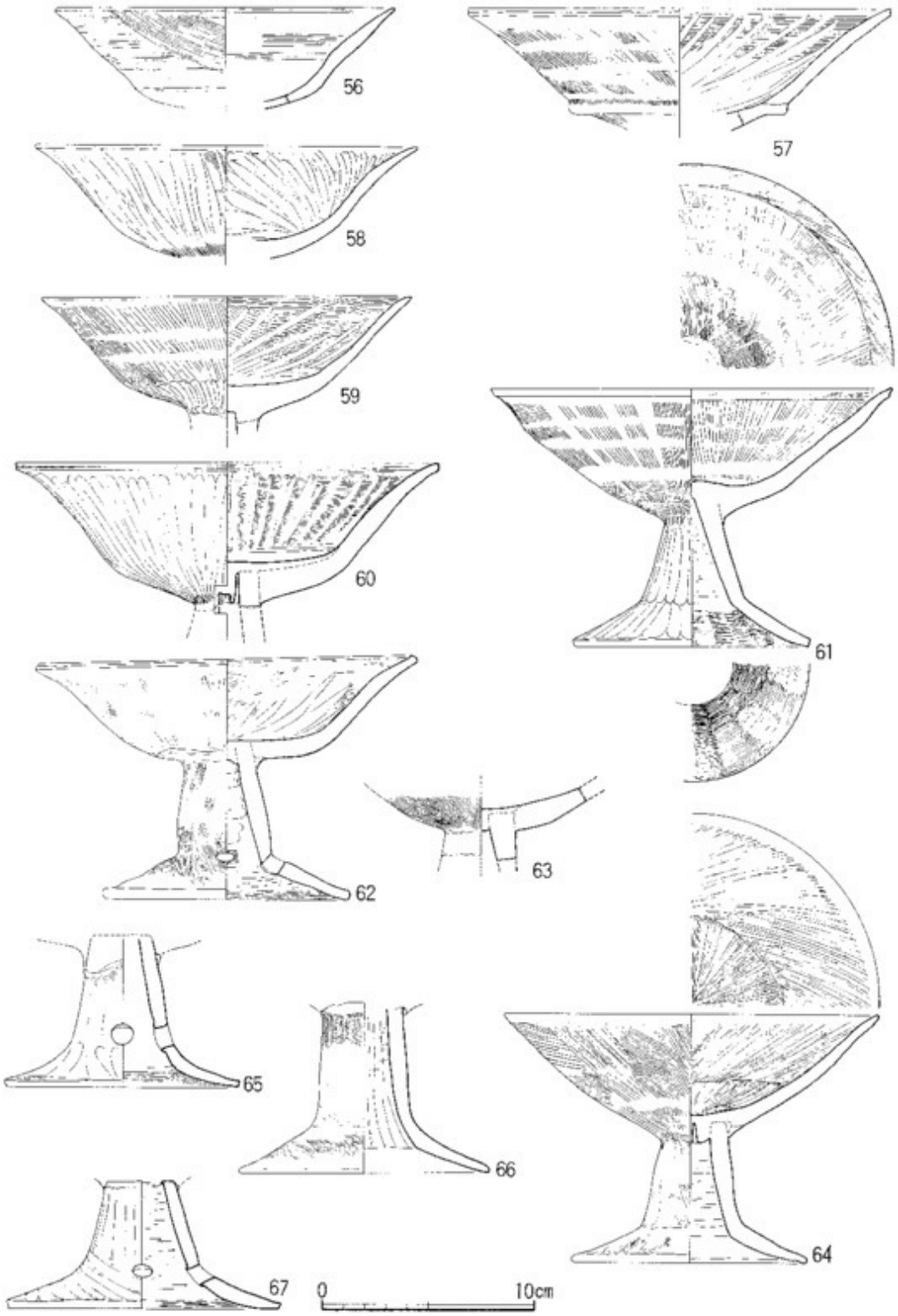
（第100図）は土師器甕形土器で，口縁部の形態から逆「ハ」の字状に開くもの（48～53），口縁部が，ほぼ直立する形のもの（54），複合口縁のなごりを思わせる形のものに大別される。胴部はいずれも球形を呈し，外面は密な刷毛目，内面は斜め方向に走るヘラ削り痕が認められ，器肉は薄



第99図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01内出土遺物実測図



第100図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01内出土遺物実測図



第101図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01内出土遺物実測図

い。内面底部には著しい指頭圧痕がみられるものと，それをヘラ削りで抹消したもの（52・53）がある。

（53）は胴部に径2.3cmを測る不整形な孔が認められる。これは焼成後，意図的な外面方向から力が加わったことによった結果であろうと判断された。摩滅等は認められない。

（第101図）は土師器高坏で，坏部が逆「ハ」の字状に直線的に開くもの（61・64），大略は前者と同形であるが，坏部下半に屈曲部をもち，外反しながら立ち上がるもの（56•58•59•60•62），逆「ハ」の字状に開くもので，坏部下半に突帯がめぐるもの（57）の三種がある。

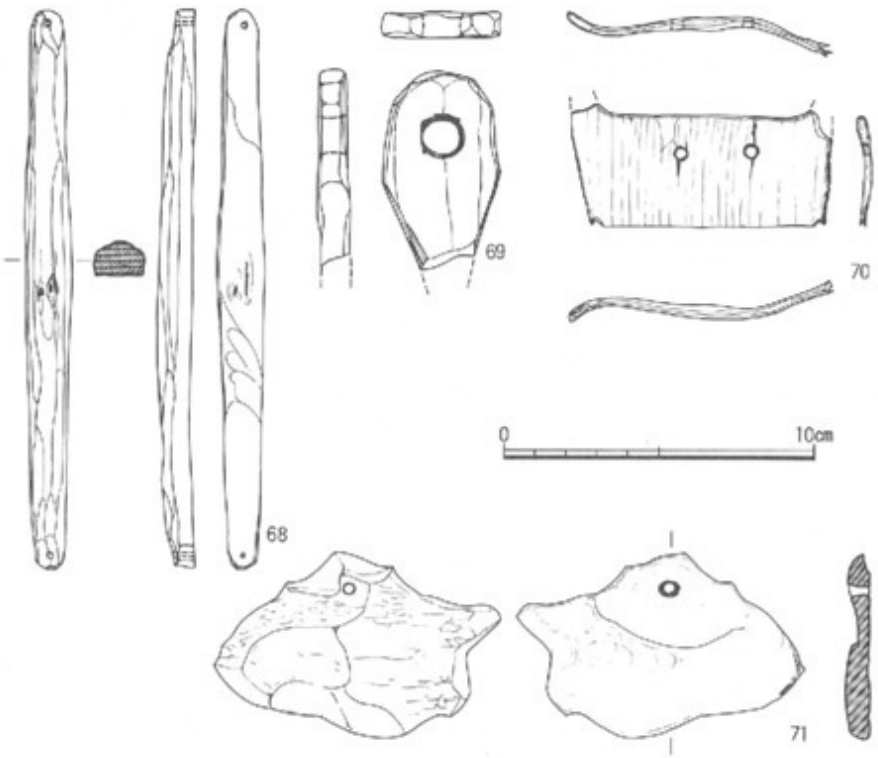
脚部は上細りの円筒形を呈し，下半は外へ向って大きく屈曲する形となっている。坏部・脚部とも，刷毛目の上にヘラ磨きを施す。坏部内面には放射線状の暗文様の手法がみられる。摩滅等は認められない。

木　製　品

SD01内は伏流水の水路となっていたため，各種木製品や流木が良好な保存状態で認められた。

（第102図68）は長さ18cm，幅1.5cm，厚さ1.1cmを測るものである。両端の角を取り，断面は蒲鉾形を呈し，両端部には径２㎜を測る小円孔が穿たれている。全体に入念な面取りが行われている。

（69）は幅3.8cm，厚さ1.0cmを測る狭い板の端部を丸く加工するもので，下方の両側辺は斜め方



第102図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01内出土遺物実測図

向から細く削り込まれている。上方中央には径1cmの貫通孔が穿たれている。

(70) は長さ8.1cm，幅3.5cm，厚さ0.4cmを測る板状を呈すものである。両上端部は欠損しているが本来は角状に突出していたものであろうと推定される。中央やや上半には横方向に1.8cmを隔てて，0.3cmの円孔があけられている。下辺の両隅には「U」字形の刳込みが認められる。

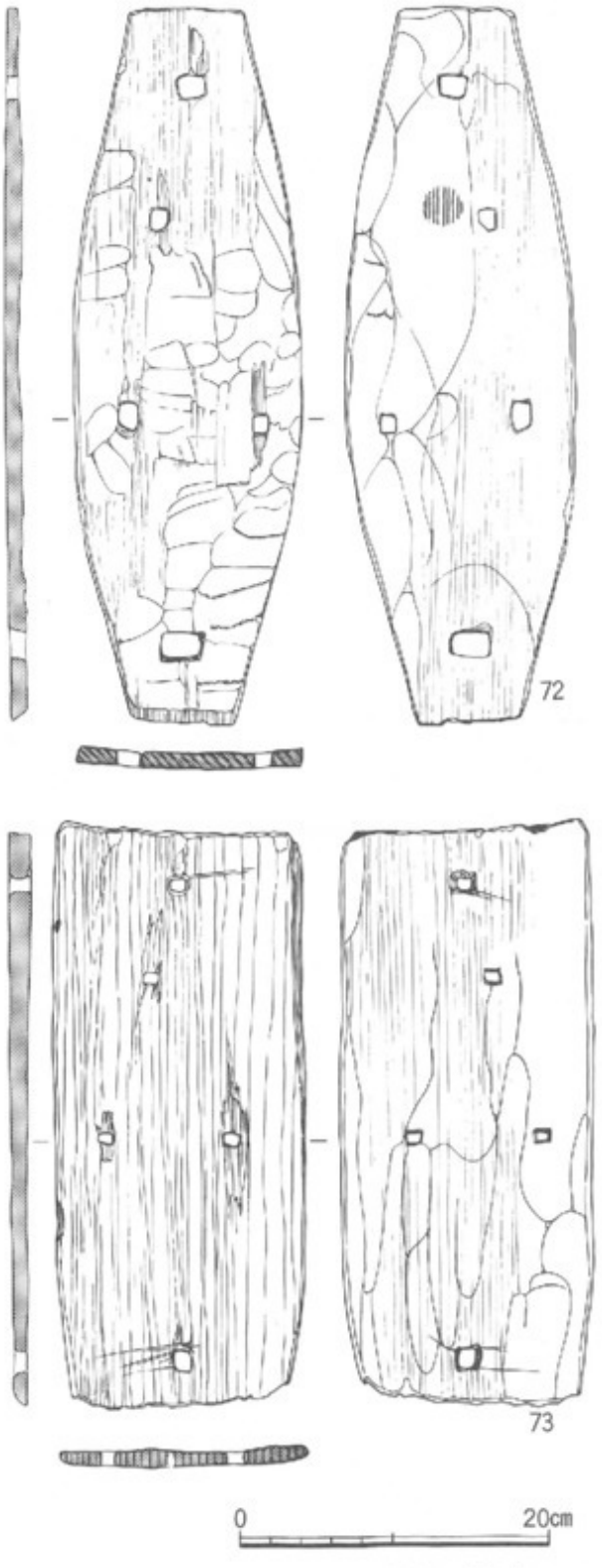
(71) は樹皮の破片とみられるが上部に小円孔が認められた。孔は形態から人工的なものであろうと判断された。他に加工は認められない。

(第103図72・73) は田下駄で，いずれも縦長方形を呈すもので計5個の方形貫通孔が穿たれている。

(72) は長さ46cm，最大幅14.8cm，厚さ1.0cmを測り，上下幅がやや狭くなるものである。手斧痕が広い範囲で残存する面が上面であろう。このことから本資料は右足用と判断される。なお裏面中央やや上方に，径2.8cmの炭化した部分が認められる。これは二次的なものであろう。

(73) は長さ37cm，幅16cm，厚さ1.2cmを測るもので，長方形を呈す。手斧痕の広がりから左足用と判断される。

両者とも形は異なるが，上下端部に方形孔が認められる点は共通しており，枠が付く可能性も考えられよう。



第103図　神田遺跡Ⅱ区ＳＤ－01内出土遺物実測図